

人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター 紀要

第4号 2013年度



MOMOFUKU
ANDO
CENTER

安藤百福記念
自然体験活動指導者養成センター

目 次

巻頭鼎談

若者よ 常識を突き破れ	渡辺元×安藤宏基×岡島成行	4
-------------	---------------	---

特別インタビュー【第3回】

挑戦を忘れた日本人へ	海洋冒険家 堀江謙一	18
------------	------------	----

特集

特集1 第1回ロングトレイルシンポジウム		26
----------------------	--	----

主催者挨拶	節田重節	26
-------	------	----

共催者挨拶	安藤宏基	28
-------	------	----

来賓ご挨拶	阿部守一	30
-------	------	----

記念講演「フットパスに見る英国ウォーキング事情」	市村操一	31
--------------------------	------	----

報 告「ロングトレイルに期待するもの」	八木和広	39
---------------------	------	----

パネルディスカッション

パネリスト：磯野剛太、木村宏、前川正彦、節田重節、田中正人		45
-------------------------------	--	----

コーディネーター：中村達

まとめ：岡島成行

特集2 自然体験活動指導者の課題		59
------------------	--	----

自然体験活動指導者の役割	岡島成行	59
--------------	------	----

ロングトレイルの現況	中村 達	65
------------	------	----

スキー指導員の現況とカリキュラム	平川仁彦	72
------------------	------	----

自然体験活動指導者（NEAL）認定制度について	太田原康志	74
-------------------------	-------	----

自然体験活動の品質保証

自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会		79
--------------------------	--	----

投稿論文

報告 学校環境教育における当事者意識の育成に関する研究 ——石巻市雄勝地区船越小学校での実践を事例として	石山雄貴	101
---	------	-----

安藤百福センター・トレイル	荒金善一	110
---------------	------	-----

小諸ツリーハウスプロジェクト	〃	111
----------------	---	-----

事業報告

第4回環境思想シンポジウム		113
講演1「ゲーリー・スナイダーの環境思想・日本との関連で」		
	山里勝己	114
講演2「〈串刺し考〉——〈残酷さ〉の歴史的構築過程」	北條勝貴	125
全体ディスカッション		134
報告者：結城正美、福永真弓		
コーディネーター：岡島成行		
第3回浅間大学院生セミナー		141
学生の発表要旨		143
アメリカ短期留学報告	石山雄貴	159
	田開貫太郎	163
第14期自然学校指導者養成講座		168
CONE トレーナー養成会・認定会		195
自然ガイドステージⅠ 登山ガイドステージⅡ 安全管理技術研修		197
安全管理技術積雪期スキー研修		210
第4回環境公開講座		212
第1回キラキラハイキング		214
第2回キラキラハイキング		217
第1回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座		220

巻末資料

安藤百福センター運営組織		223
2013年度主催等事業・講座		224
2013年度上級指導者研修会利用状況		225
2013年度利用状況		227
投稿論文規程		230
あとがき		231

巻頭鼎談 渡辺元 × 安藤宏基 × 岡島成行

若者よ 常識を突き破れ



左：安藤宏基（安藤スポーツ・食文化振興財団理事長、日清食品ホールディングス株式会社代表取締役社長・CEO）

中央：渡辺元（渡辺パイプ株式会社代表取締役社長）

右：岡島成行（安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センターセンター長、学校法人青森山田学園理事長）

アメリカの思い出

岡島 前号で CEO に子どものころの話を伺ったんですけども、今回は CEO が大学からアメリカに行ったころの話をさせていただいて、それから渡辺社長にも若いころの話、スキー部とか、いろいろ好きなことをされて家を継いでくる。そのへんの、大学生から新人サラリーマンぐらいのときの思い出話をまずしていただきたいと思っています。その次は、最近の若者について。渡辺社長も従業員をたくさん抱えていて、そのあたりのお話をいただいきたい。どうしたら鍛えられるのかについて、お考えを聞かせていただく。そして最後に、安藤百福センター、ロングトレイル、スキー場、ゴルフ場という施設が揃っている小諸を、アウトドアのセンターにできたらいいんだろうな、というお話をさせていただければと思います。

岡島 安藤 CEO の若いころのお話ですが、慶應を出られてアメリカに行かれたのはいつごろですか。卒業されてからですか？

安藤 あれは何年かな、1971 年、70 年か。



岡島 日本車なんてまだあまりないころですね。

安藤 僕はおやじさんのことを学ぶにはまだ早いから、自分なりに勉強したいと思って、いろいろあらゆるところを見るんだと言って、大学のゼミの先生に紹介してもらってアメリカに行くことにしたんですよ。渡米して大学に行くまでの間の半年間ぐらいは、実に面白かったな。

岡島 準備期間ですか？

安藤 4月から9月かな、アメリカを全部知ろうということで片っ端から走り回って、ルート66とか……。

岡島 ルート66、ありましたね、テレビ映画がね。

安藤 あれをボロのレンタカーで走った。それからヨセミテ公園、そしてスプリング、温泉ですね、でっかい温泉がありますな。

岡島 イエローストーンですか。

安藤 イエローストーン・ナショナルパーク。自然体験で遊んでいたわけ。それはすごく楽しかった。

岡島 そうでしょう。

安藤 ニューヨークへ行くんだと言って、ロッキーマウンテンを横切って、ずっと、モンタナ州から行きましたね。ボロい車で。最初はレンタカーだったけど、高いから、ボロい車を買って走った。

岡島 横断したんですね。

安藤 うん。シカゴまで行って、シカゴからは疲れちゃってね。そこから飛行機で行きましたけれども。その当時、金も十分でないときでしたが、アメリカを片っ端から見て回ったというのは良かったですね。もともと子どものころからいろいろ自然体験が大好きで、大阪の池田の猪名川が遊び場でした。兵庫県と大阪府の間を流れている川なんですけれども、能勢の山奥で遊んでいましたから、ずっと。そういうのが役立った。

岡島 役立つんでしょうね、そのうちに。

安藤 それがなぜ良かったのか。あるいはなぜ今の若いのが駄目なのかというのは、やはり自然体験の不足です。いくら金があっても何があったとしても、もし裸になって全てなくなったときに、どうやって生きていくかという、この自信がないと一番駄目なんだと思う。

岡島 そうだと思います。

安藤 だから若いときに、1人で世界中を旅行してこいとか、あまり金を持たずに行ってこいとか、何でもいから生き延びて這いずり回って、とかいうことをいっぱいやらせた方がいいんだ。

岡島 そうですね。留学のとき、CEO はロン毛して、ヒッピーみたいなことをやっていたという話を聞いたんだけど（笑）。

安藤 いや、ヒッピーはわれわれの時代じゃ、ごくごく当たり前で……。髪の毛を散髪せんでもいいし、コートの長いのを着ていてもいいし、汚いのを着ていてもいいし、要はズボラですよ。

岡島 それで何年ぐらいいいたんですか、アメリカには。

安藤 71 年から 2 年半行ったんですよ。もともとロサンジェルスにいまして、それからニューヨークへ行って、心地良くニューヨークでやっていたんですよ。そうしたら創業者がロサンジェルスに工場を建てると言うんです、ラーメンの。それでロスに帰ってこいと言われた。しかし、創業者は僕のやっていることを散々けなすんですよ。マーケティングというのは実質学であって理論ではないと、僕がやっていることをけなすんですよ。

岡島 けなすんですか（笑）。

安藤 実質学があって、そのあと論理体系したものがマーケティングだと言うんです。

岡島 確かに。

安藤 マーケティングという学問はアメリカで生まれて、消費者志向から発生した学問で論理体系はできとるけれども、やはり実業というものが全て先行していて、その中の経験値から生まれているものなんだ。おまえは実業もやらんで、そんな論理を重ねてビジネスが成功するわけがない、と言うわけです。おまえ、そんなのはまず先に体験して、体験してから論理を後で組み上げても遅くないと。

岡島 巧みな誘導に……。 （笑）。

安藤 それでロサンジェルスで工場を建てることに決めたと言うわけです。「いや、建てるのはいいけれども、販売はどうなっているんですか」と言ったら、「販売は日本から輸出している」と言うわけだ。数量を聞いてみたら生産能力の 10 分の 1 ですよ。それで建てるというわけです。「どうするんですか」と言ったら、「その間の販売数量はおまえが輸入して上げろ」と言うわけです。上げろと言うけど、輸出でちょろちょろ売っているぐらいで、日系人にしか売っていないわけですよ。それをアメリカ人に売れと言うわけです。「俺は売れると思う。対面販売したらすごくいい反応だったし、栄養があるし、すぐできるし、安いし、ヌードルスープとしてもいいから、これはアメリカ人に絶対に根付くぞ」と言う。オフィスはここに作るから、工場はここに作るからと言って、販売数量もないのに決めちゃってね、創業者が。

岡島 最初のころは、アメリカで売れたんですか？

安藤 全然、だってアメリカにはドンブリがないんですよ。



岡島 スープ皿。

安藤 それしかない。スープ皿しかない。できたやつをスープ皿に入れるんですけれども、薄っぺらい。それに、多すぎるといって 2 人で分けて食べるんですよ。それをずっと見ていて、1 つのラーメンで、当時 20 円だったんですけれども、20 円を 2 人で割って食べるから、ヌードルスープが 10 円、10 セントだとピンときた。スープも塩濃度が高くて大変なんですけど、2 人で分けると薄まってちょうどいいんです。「ラーメン」という名前を付けながらも、食っとるのはアメリカ人のヌードルスープなんですよ。それしかしょうがなかったんです。だってラーメンをドンブリに入れて見せたら、「こんなに麺が多くてスープが多いのを食べたら、飯が食えんじゃないか」と言われた。「これが飯ですよ。日本人の飯だ」と言うと、「えっ、こればかり食っているのか」と驚く。そんなことで対面販売を 1 週間、20 名のおばちゃんを集めてやった。ソースパンを 20 名に渡して、1 人頭 20 ケース、バンに載付けて何回もスーパーに運んで、おばちゃんに対面販売をしてもらった。「20 ケースが売れたら、スーパーに置いてやる」と言うんです。そういうのを重ね重ねて全部で 700 店ぐらいやったかな。

岡島 それをさせたかったんじゃないですか、お父様は。

安藤 させたかったのか。今、考えたらそうかもしれないな。

岡島 本当に地べたでやってみると、そういうことだったのかも分かりませんね。

安藤 でもひどいですよ。金が足らなくなった。要するにたくさん製品は作るんだけど、売れませんか在庫ばかり増えて、小麦粉の金を払えと請求が来るわけです。金がないので、銀行へ行って、それも日系銀行だったら日清食品は取引があるから、一生懸命こっちから圧力を掛けて貸してくれと言っているのに、担保は現地でやれと言ってくる。担保は見ないということで担保元を切りよるわけだな（笑）。しょうがないから、向こうの在庫に全部担保を付けてもらって、借金、借金でどうしようもなくなっているところに、創業者がふらふら来て、「おまえ、こんなの売れもせんやつを製造するな」と（笑）、止めろと言うわけです。こっちはちょうど日本人街の真ん中にあるので、製造を止めたら、この社長が間抜けだから日本から出た企業が 3 カ月で製造停止になったとかと言われたくないもんだから、一生懸命動かしているわけです。でも売れないから在庫ばかりたまって、しまいにはばんばんになっちゃうわけです。創業者が見て、もうやめろと、おまえはメンツのために仕事をするな、とかと言うわけだね。みんな格好悪いから草むしりばかりやって、毎日（笑）。

岡島 お話を聞いていて、それをさせたんだと思いますね。そうさせないと 2 代目で駄目になっちゃうと思って、地べたを歩かせたんだと思います。面白いですね、そのご経験は……。

安藤 言いよったもんね。「売れて初めて、おまえ、製造するもんだ」と。創業者が作

れって言ったじゃないか、工場を建てろと言ったのは誰だ、と言いたいんだけど、マーケティングとはこういうものだ（笑）。

岡島 なるほど辻褄が合っている。初めから考えていらしたみたいですね。

安藤 ありがたい試練ですね。



大学時代は競技スキーに熱中

岡島 渡辺社長は、武蔵大学に入ってスキーばかりやっていたんですか。

渡辺 僕はもともと高校のときに山岳部に入っていて、自然体験の原体験というのは高校の山岳部で、神奈川にある丹沢という山、そこに石を積めて歩荷（ぼっか）訓練とかやっていましたね。そして夏合宿に行つて。高校2年のときかな、北アルプスの黒部川をさかのぼって剣岳に行つて、僕はその原風景が忘れられなくて。

岡島 内蔵助平（くらのすけだいら）のところから行ったんですか？

渡辺 いやいや、樺平（けやきだいら）からずっと登って行って、さらに剣沢の崖を登って。初めての体験でしたね。この世にこれほど素晴らしいところがあるのか、と感動しました。ただし、きつかったですね。石をリュックに詰めての歩荷訓練が。

岡島 石を詰めて（笑）。

渡辺 よく山の上で経路に積んでいますね、ケルンです。みんな下から運び上げて石をこう……。

安藤 それはリュックに入れていくわけですか？

渡辺 リュックに入れて、夏合宿向けにこんな大きなキスリングを背負わされて……。

岡島 昔は横に長い、キスリング・ザックで、幅が2尺4寸ありました。

安藤 相当重い？

渡辺 30キロぐらい。

安藤 30キロ？

岡島 高校生だったら30キロぐらいですが、大学生は60キロ、80キロ（笑）。

渡辺 みんなやらされましたね。当時は日本ではマナスル初登頂。アメリカではジョン・デンバーのバックパッキングとか、登山ブームだったですね。登山、スキーブームで若者があこがれましたね。でも、あまりにきつかったの、大学に入ってからスキー部に入ったんです。

岡島 競技スキーをやると部活はけっこう厳しいですか、夏も走って。

渡辺 夏は走りっぱなしで、体力がつかしました。今も体力はあるような気がします。

岡島 そうですね。若いときにやっておくと、後が続きますよね。

渡辺 自然体験を通して、感受性みたいなものがすごく自分に具わったような気がします。非常に感動するというか、いいもの、美しいものを見て感動するという感性ですか。

岡島 競技でも感じますか。

渡辺 競技は山を見ながらやる。当時はリフトも乗れなくて踏み足で登って、登るのに 30 分、滑るのは 2 分とか、そういう感じでした。

岡島 そうですね。昔は練習するときにリフトに乗らないで、自分で歩いて。

渡辺 リフトなんかぜいたくで根性がないと言われていました。練習は、つぼ足で踏み上がらなきゃ駄目みたいな、そんな時代だったですね。

安藤 まだスキーがこんなに長いときですね。

渡辺 そうですね。

安藤 今は短いでしょう。

岡島 僕も今使っているスキーは 160 センチです。

安藤 何であんなに短くなったんですか。

岡島 短くても滑るということに気が付いたんじゃないですか（笑）。

渡辺 そうですね。何で長かったのか。それに切れ込みがなかったですね、昔は。

岡島 切れ込みを入れると回りやすくなるというのは、誰が見つけたんですかね。真っすぐの板だと回りにくいんだけど、真ん中細くすると簡単に曲がるんですよ。「カービング・スキー」と言って真ん中が細くなって。易くなりましたね、スキーは。

渡辺 そうですね。

岡島 CEO、スキーはどうですか（笑）。

安藤 スキーはあまりいい思い出が……。僕は赤倉でやっていたんですよ。妙高高原の一番てっぺん、オリンピックコースがあるんですよ。

渡辺 いいところですね。

安藤 僕の妹たちはものすごくスキーがうまいんですよ。僕は下手くそなんです。「女同士で 5 人も行ったら危ないから、おまえ、付いていけ」と言われて。保護者で……。

岡島 一番危なかったりして（笑）。

安藤 一番下手なんだ。みんな一番てっぺんまで行っちゃうわけです。「ケガしたらいかんからおまえ、付いていけ」と言うけれども、付いていくやつの方が危ない（笑）。一番てっぺんまで上げられて、あれは死ぬ思いをしたね。45 度ぐらいの傾斜で。

岡島 急なところはおっかないですからね。

安藤 みんな、さっさ、さっさと飛んでいつているのに、こっちだけが 30 分ぐらいか

かって下りる（笑）。大恥かきましたわ。

岡島 渡辺社長は卒業して、即……。

渡辺 父の会社に入りましたね。

岡島 よそで修行しないで？

渡辺 しなかったです。本当は留学でもしたかったんですが、それは許さなかったです、うちの父は。「すぐにやれ」と言うもので、現場に入れられました。

岡島 どこかよその会社に行ってこい、ではなくて。

渡辺 いきなり支店に入れられました。

岡島 いきなりシゴかれる。

渡辺 そうですね。

岡島 そのころから比べると、会社はずいぶん大きくなっているんですね。

渡辺 当時 500～600 億だったんですが、今は 2,300 億までいっていますから。

岡島 だから 5 倍近くに伸ばしたんですね。

安藤 すごいね。すごいですよ。

渡辺 もともと水道用のパイプを扱ってしまして、上下水道のパイプ、それから住宅用のパイプとか。

安藤 パイプの種類だっていっぱいあるんですね、金属系から……。

渡辺 塩ビからありますね。

安藤 本社は両国に構えているわけですね。

渡辺 はい。でも今は築地に移っています。地震でちょっと、古いビルだったのでヒビが入ったので、今は築地で、市場の隣です。

安藤 もともとは長野ですか？

渡辺 いやいや、全然関係ありません。私は両国、本所。私の父は淡路島のかまぼこ屋の 4 代目なんです。

岡島 そうですか。かまぼこ屋さんが何でまたこれを？

渡辺 どういうわけか知らんけれども、パイプを始めたんですね。スキー場は、昭和 52 年ぐらいですか、ちょうどスキーズームの最中に雪不足があって、その経営がおかしくなって、ある銀行の紹介でうちが資金を貸して。

岡島 今のアサマ 2000 ですか。

渡辺 そうですね。それでスキー場を始めたということです。当時は年間 6 万人ぐらいスキーヤーが来て、本当にもうかった。猪谷千春さんのお父さん、六合雄さんと言いましたね、その方が最初に戦後に開いたスキー場です。リフトは、今は電気ですが、昔はエンジンで回していました。ブレーキが掛からなくて、大変で、そんなリフトだったんですね。当時は上野から銀嶺号という専用の列車が出ているぐらい、スキーズームの走りですね。

岡島 本業は商社なんですね。

渡辺 流通の……。

岡島 専門商社。

渡辺 そうですね。パイプからの応用でビニールハウスの骨を始めまして、温室のビジネスに展開して、農業用のビニールハウスとか……。

安藤 農業用の需要も大きかったですか。

渡辺 そうですね。

岡島 それで今は農業にも進出しています。

渡辺 農業も歴史があるんです。

安藤 それもやはりパイプでしょう、農業の。そっちもだし、配管の方も、散水とかそういうのも全部じゃないですか。

渡辺 それは全部あります。水耕設備とか……。

安藤 水耕、いいね。水耕をもっと安くしてほしいな。ラーメンの具材を作るのに、洗わなくてもいい野菜を作ってくれるとありがたい。

渡辺 養液栽培ですから土は使いませんが、それをそのままカット野菜が使えると一番いいですね。

安藤 だからカット野菜、それはまだ高いでしょう？

渡辺 そうですね。まだ……。

安藤 それが安くなったらいい。ラーメンなんて洗わなきゃいかんとか、農薬使わなきゃいかんとか、課題がいっぱい。そんなのはできるだけやめて、水耕で行きたいんです。

渡辺 乾燥させるわけですか。

安藤 ええ。乾燥もいろいろ、フリーズドライもあれば熱風もありますけれども、そのままレトルトに使う野菜もありますね。野菜関係で、農薬を使わずに洗わなくて使える野菜があると一番いいな、と思っています。

渡辺 なるほど。

安藤 洗わなくていい。こういう野菜を……。

渡辺 葉物ですね。

安藤 葉物。有機とかどうのこうのといっぱい見ますけれども、水耕というやつのコストが一番高い。水耕の中で今、オゾンで殺菌するのにオゾンをバブル状にして、水泡状にして、霧状にして殺菌するという製法をやっておられる方がいます。出来上がったものをそのまま摘んで、そのまま袋に入れて、そのまま食べるというタイプ。あれはいいなと思いますけれども、そういうのを研究してくださいよ。

渡辺 噴霧で？

安藤 噴霧で、きめ細かい霧で、要するにオゾンを霧状にして、後は蒸発してしまうと何も関係ない。

渡辺 オゾンというのは今、噴霧する装置があるんですけども、これはどちらかというと冷却に使うんですね。夏の温室の中が高音になりますから、噴霧で温度を下げる。

安藤 スプレーするのにオゾンを入れたり、あるいはオゾンの水で洗うときにバブルで……。水の中にバブルを発生させて、オゾンを突っ込むのかな。そこに出来上がった野菜を入れて出せば、完全に殺菌になっていっているわけです。だから洗剤も何も使わなくて殺菌力が高い。

渡辺 いいお話を聞いた（笑）。

常識を壊せる力がほしい

岡島 渡辺社長は若いとき、ものすごくシゴかれていましたよね。パイプを担いだだけじゃなくて、いろいろ……。

渡辺 いろいろ思い出はありますけれども、厳しかったですね、父は。うちの父は昔の台北帝大、台湾の大学だったんですね。そこから引き揚げたから、幹部は全部軍人上がりの戦友でして、軍隊みたいな会社だったですね。社長だけは会社の社章に目がダイヤモンドのマークを付けて、歌うのは軍歌しか歌わないし。でも、みんなからよく教えていただきました。

岡島 われわれの世代は大学生のころ物がなかったし、自分で工夫しなきゃいけなかったし、お二人とも 2 代目でお父さんがすごく厳しくて、修行されたんですけども、今の若い社員は何か足りない。何となく感じるんですよ。CEO の書かれた本に「TOEIC750 以上じゃないと駄目だ」とか、「アフリカに単身切り込んでいけ」と書いてある。

安藤 今のものがゼロになってもいい、というぐらいの発想のやつがおらんのですよね。やはり下が怖いんだと思うな、下がるのが。今の給料も要らんというぐらいの腹のあるやつは、「上司が何を言っても関係ない。私はこう思います」と言うんだけど、やはりみんな生活が懸かっているから、上司が言ったら「そうです」とすぐ迎合するんですよ。自らの生活がゼロになってもいい、というぐらいの骨のあるやつがおらんのです。

岡島 簡単に言うと、会社をやめたって死にはしない。もう 1 回よその会社に行けばいいというぐらい根性があれば、社長でも何でもぶつかり合うというのが出てこなくっちゃね。

安藤 ぶつけるときに、やはり今の自分の生活がどうなるんだろうとか、自分だけじゃない、嫁さんの生活はとか、そういう因子でがんじがらめになっているんですな。だから自分の思うことが言えなくなっている。

岡島 そうですね。

安藤 素っ裸で自然体験しておって、そんなのは関係ねえ、俺は裸でも生きていける

んだと思うやつ、この根性があるやつ、これが欲しいんだ。

岡島 戦争帰りの人は結構ありましたよね。平岩外四さんが、2,000 人のニューギニア部隊で 7 人生き残ったうちの 1 人だったんです。「私らは死んだのも同然なんだから、偉くなろうがならないが勝手だ」と言っていました。

安藤 無人島経験もその支えなのかも分かんけれども、金がなくても生きられるんだという自信をどうやって付けるか。これが問題です。

岡島 今、文化庁長官をしている青柳先生が、ギリシャ、ローマの時代から「子どもの教育はサバイバルだ。どうしたら 1 人で生きていけるのかというのが原点だ」と言っています。だから古今東西、子どもの教育は 1 人になっても生きていけるための教育なんです。

安藤 経営幹部の中で、ブランド・マネジャーというのが大変重要なんですよね。ブランド・マネジャーの資質について、私の本にいくつか示しているんですけども、興味深い人間でないとまず務まらんです。それから常識にこだわっている人間は、駄目なんです。

岡島 教わって、それを覚えて、というのはすごく小さいときからやらされている。勉強も暗記物が多いでしょう。答えのないものを考えるトレーニングができていないです。

安藤 ない。教えられたことは正しいと思っとるから。だから、これはクリエイトの話なんですけれども、コンセプトとかデザインというのをやらなきゃいかんのですけれども、これのセンスが……、これをどうやって養ったらいいか、と……。

岡島 小さいときじゃないですかね。

安藤 これは、やはり勉強ばかりしていて塾に通い詰めとる者は駄目だね。

岡島 そうですね。良き労働者にはなるかもしれませんが、引っ張っていく人にはなりにくいですね。

安藤 だから、そういうのは若いときからあらゆるものを見て、肌で触れて、手で触ってみて、それで感じて、どういうことなんだということをずっと興味を持って触っている人間とかは、商品のコンセプトを組ませるときなんかのセンスに一発に出るんですよ。

岡島 今、お二人とも膨大な社員を抱えて、そういう人間が必要なわけじゃないですか。どうやってピックアップしたり、鍛えようとされているのでしょうか。

安藤 会社において上司が鍛えると、変なことしか教えんということもあるんです。海外に放り出して、自分がいかに無能だということを感じさせるのが重要です。海外に放り出したら、こんなことをしているのかと小馬鹿にされるんですよ。それはそうだ、何も勉強してないんだから、会社に入って何の勉強もしていない。そのときに、こういうノウハウを自分が持たないと通用しないということ

を感じる。これは挫折ですよ。帰ってきて初めて、そこで自分は何を学ばなければいかんかというのが分かってくる。

渡辺 僕も全く同感でして、覇気がないとか欲がないとか感じますね。社会が、周りが育てるといえるのか、何らかの仕組みが欲しい。当社もナショナル社員、エリア社員、ホーム社員と3つに分けています。しかし、多くは土着希望なんで、土着化するんですね。欲がないですね。そんな社員ばかりだと会社は伸びないなと思う。欲がないといえるのか、好奇心がないといえるのか、向上心がないみたいな感じですよ。もっと給料が欲しい、ボーナスが欲しいと頑張っているのは、少ないですね。本部に行って役員になるんだ、という社員が本当に少ないです。みんながみんな、それでは困るけれども。

岡島 そういう人は、どうやって育てればいいんでしょう。

渡辺 今、一応5年ルールというので転勤をさせるようにしています。それに、土着なのかナショナルなのか、踏み絵を踏ませるような仕組みにはなっています。全部が全部じゃなくても全社の本当に数%、がんばる社員がいれば、会社は成長できるんだと思うんですね。

小諸をアウトドアのメッカに

岡島 ところで、小諸には安藤百福センターがあり、ロングトレイルがあり、上にスキー場があり、ゴルフ場がある。ロングトレイルもこれから自然体験の大きな柱になると思うんですけども、このへん一帯を、有機的にうまくつなげれば結構面白いところになると思うんですが、渡辺さんの方で、こうあったらいいなというお考えはありますか。

渡辺 私どもはもともとスキーを事業としてやっていました。しかし、スキー事業が駄目になった。ピークで日本全国に650カ所ぐらいスキー場があったが、今は半減しましたね。どこも経営が赤字です。振り返って見たら、実はスキー場というのはいい自然があるわけですね。それで自然学校をやろうという発想が生まれたんです。しかしながら、自然に対するマネジャーがいない。日本には指導者が本当に不足していると思いますので、そういう意味では、安藤百福センターに指導者を育成していただき、修了者がフィールドで活躍してもらわんといけないんだけど、まだまだ不足している感じがしますね。

岡島 指導者もいないし、客も少ないんですよ。

渡辺 日本ではアウトドアに対して生活に密着する感じがしませんね。アウトドアが文化として成熟していない。やはり廃りでみたいな話です。もっと生活と自然が密着するようなことをやらなければいけない。特に欧米なんかは、本当に自然が生活の中に入っていますよね。フロンティア・スピリッツなんて、国の歴史そのものみたいな話があるんです。日本の場合はどうも、山も信仰の対象で

あつたりしますが、スポーツとかアウトドアの感覚が非常に弱い感じがします。

岡島 欧米にあって日本にないマーケットは、自然体験のマーケットですよ。これはアメリカの3分の1以下のマーケットですか。珍しい業界ですよ。日本のマーケットは小さいし、日本のメーカーがとても弱いというのは、珍しいマーケットなんです。このマーケットが自立すれば、かなり新しい大きなマーケットになるはずだと思うんですけれども。

安藤 浅間のロングトレイル、あれを渡辺さんに完成してほしいんですよ。これは金が掛かるかも分かんけれども、200キロを1日10キロ、20キロと歩いて、例えば20キロ歩いたとして、10日間かかるわけですね。拠点、拠点に道標も要るけれども、そこには休憩できるようなシャワーだけでも欲しいし、寝袋で寝られる所も欲しい。10日間かけて回るというのが楽しいトレイルになるような、そういう企画がないかなあ。

岡島 そうですね、この辺りには八ヶ岳トレイルもあるし、安藤百福センターの20キロトレイルもあるし、渡辺さんの周りがあるし、それらを繋げてモデルコースみたいなを作ったら面白いですね。

安藤 そういうのを実行していく上において、財団としても協力してサポートしていきますよ。ロングトレイルも、1つのポイントになるところに投資することによって、ほかの人たちが多く参加してくるような、そういうキーポイントになるところには協力したいですね。

渡辺 価値観は変わってきていますから、スキー場でホテルに泊まってということではなくて、オールシーズン楽しめるように、遊び方のスタイルを変えなきゃいけないんだけど、まだ発想が貧しい。

岡島 むしろ、欧米人を呼ぶ方が早いかもしれない。在京の欧米人にぜひ自然体験をしていただきたい。東京だけで70万人の外国人がいるんですよ。大使館の職員とか大企業の幹部とか、その人たちの子どもだけでもいいし、その人の家族、それを招待する。彼らは行きたいんだけど、行かない。最初は20~30人でいいから、アメリカ大使館の人に、みんな来なさいと誘ったらいい。3年赴任している間に、子どもたちが今年は北海道に行き、浅間に行って自然体験をする。そんな体験を楽しんで、本国に帰ればみんな日本の国が好きになると思うんだけど、日光、鎌倉、箱根ぐらいしか行けないわけです。日本人よりもっと自然を散策したりするのが好きな人は多いんですけれども、この人たちが悶々としているわけです。だから彼らに動線を作ってあげたらいい。

安藤 いいね。

岡島 それを財団の研究でやろうと思うんですけれども、事業として浅間山麓国際自然学校と一緒にやればいいと思う。夏は日本有数の高山植物が咲き、冬だって雪がある。アフリカ人とか東南アジアの人たちは雪遊びができる。

渡辺 要するに浅間という火山に対して周遊の 200 キロ・ロングトレイルを作り、周辺 5 市、5 町村かな、軽井沢から御代田、全部入れる。面で捉えたい。

岡島 そんなに難しくないことなんですよ。われわれの業界の人たちが、彼らを連れて行ってあげれば、それで済むわけなんですよ。

安藤 日本を楽しもうというんですね。

岡島 そうですね。

安藤 カップヌードルはそういうテーマでやっている。「SAMURAI,FUJIYAMA,CUPNOODLE」というテーマでやっています。

岡島 そこにプラス、ロングトレイル。

渡辺 いいですね。

安藤 日本を楽しめ、というのを外国の人にね。浅間トレイルでいいじゃないですか。

岡島 結論が出ましたね。浅間、そして日本を楽しもうというのでね。取り急ぎ在日大使館、東京にいる大使館とか大企業の子どもたちとか家族に 1 回泊まってもらって。

安藤 1 回招待してみようか。うちの安藤百福センターにはツリーハウスもあるから。

渡辺 そういう文化がないから、欧米人が来ることが、日本に新しい文化を作るきっかけになるような気がしますね。

岡島 それで今年の夏あたりを目指してやりましょう。この一帯で日本文化の新しい試みをどんどん発信したい。ツリーハウスもそうだし、ロングトレイルもそうだと思うんですね。

渡辺 日本のアウトドアの発信地みたいになる。東京とも近いし。

岡島 CEO が言ったように、新しい考え方でぼんぼん打ち出さないと。前にやっていたようなことの焼き直しみたいなことで何回やっても意味がない。全く新しいイノベーションに近いものを次から次に打ち出す。ツリーハウスもそうだと思いますよ。誰も考えないもの、あそこにツリーハウスを作ろうなんて。いい発想ですよ。

渡辺 そうですね。

安藤 トレイルの道しるべを、絶対に GPS でやれと言っているんです。

岡島 それからデザインもきれいな方がいい。

安藤 スマホで道順が分かるとか、あと何キロ行ったらどこに出る、ということが分かるように。

岡島 鬼押出しとか、いろいろな歴史があるから、歴史も GPS に入ってくるようにして、見ながらそうかと学習しながら歩くとか、いろいろ楽しみがある。

渡辺 毎年夏、8 月の第 3 土曜日にスター・クロス・ウォーキングをしています。夜中に歩くんですけども、去年は 1,100 人参加しました……。

安藤 すごいね。

渡辺 夜通し歩くんですよ、そのときは。
安藤 どこまで行くんですか。
渡辺 うちの山頂まで行って、孀恋村へ降りるんです。
安藤 どのくらい？
渡辺 31 キロ。皆さん、歩き通す人は 800 人ぐらいかな。
岡島 夜中に歩くという、月と星を見ながら。
安藤 肝試しじゃないか（笑）、肝試し。
渡辺 今年で 10 回目です。10 年続いています。
岡島 一晩で 1,000 人集まって、大したもんですね。
安藤 面白いな、今年 1 回行ってみようかな。
渡辺 はい。ただ歩いて降りるだけなんです。標高差 800 メートル、小諸の駅前から歩いてアサマ 2000 まで。そこでハーフで。残りは孀恋村まで降りてくる。お土産がキャベツ。明け方のキャベツ畑がきらきら光るのを見ながら降りるんですね。それは素晴らしい。夜は星空の下で、それはもう……。
安藤 満天の星の下、いいね。
渡辺 皆さん、家族連れで夏の思い出でやるんですね。
岡島 山越えコースもあれば、回るコースもあって。
渡辺 そうです。選べるようになっています。
安藤 山越えの方が面白いな。
渡辺 それは厳しいですね。
岡島 楽しい話が続きましたが、時間が来ましたので今回はこれで終わります。ありがとうございました。

(2014 年 5 月 東京にて)

特別インタビュー【第3回】 海洋冒険家 堀江 謙一



挑戦を忘れた日本人へ



海洋冒険家。1938 年大阪市生まれ。関西大学第一高等学校でヨット部入部。1962 年、全長 5.8m のヨット＜マーメイド号＞で世界初の単独無寄港太平洋横断（西宮よりサンフランシスコ）に成功。その後、小型ヨットによる西回り単独無寄 世界一周や 4 年間にわたる挑戦の末、初の縦回り世界一周などに成功。著書『太平洋ひとりぼっち』で第 10 回菊池寛賞受賞、イタリア・サンレモ市より「海の勇者」賞受賞。100 歳まで冒険を続けると宣言している。

——1962 年の『太平洋ひとりぼっち』の時に、アメリカからの反応と日本側の反応の違いがあったと伺っているのですが。

やはり国が違いますから発想も違いますよね。到着するときに、どうなるかという心配はあったんですけど、密出国とはいえ死刑にはならんだろう、何でも罰は受けますよ、という気持ちです。サンフランシスコに到着したときに、海の上でヨットに会うわけです。僕がヨットに黄色い旗を揚げていたんで、これは外国から来たという印だったんで、最初に寄ってきたヨットに日本から来たということと、続けてパスポートを持っていないと言ったら、「OK」と言って、これで決まりですよ。会う人が全員、好意的なんです。

「OK！付いてこい」とね。それから 10 分か 15 分、コーストガードの船に迎えに来てもらうわけですけど、それも僕らぐらいの年齢なんですよ、働いている人が。みんな好意的なの。みんな友達みたい。だから何の心配も感じなかったですね。到着したのが日曜日だったんです。だから最初に会ったのはヨットに乗っている家族連れなんですよ。僕はできれば土日に着きたかったんです。役所の人よりも最初は民間人に会いたかったんや。うまいこと日曜日に着けたから良かった。「付いてこい」と言われてヨットでずっと付いていくわけですけど、コーストガードにそのヨットから直接連絡を入れていたみたい。10 分、15 分でコーストガードが迎えに来て、コーストガードの指示で帆を全部下ろして引っ張ってもらって、あるところへ留まるわけです。

「何日かかった？」と問われ、「90 何日かかった」そして「何月に出た？」、「5 月 10 に出た」。彼らが計算して、「大体合うたな」と、こういう感じなんですよ。「東洋人の顔をしているな」とか。

——何十日間の航海だったんですか？

94 日目に着いているんですね。到着したときにすぐに地元のプレスが来てくれたわけですね。そのときいろんなことを聞かれて、それが記事になったわけです。翌日、月曜日の朝になって、総領事館の人に連れられて向こうの移民局へ行って 1 カ月間の滞在許可をもらって、それからサンフランシスコの総領事館に行ったら記者会見が用意されていたんです。日系の大学の先生が通訳で、報道関係から質問が来る。「どうしてそんな航海をしたんか」という質問があるんですけど、この人が英語から日本語に訳してくれて、僕は答えるわけですよ。「したいからやっただけのことです」と答えているんですけど、この通訳はそのとおり訳していないで、「そこに海があるから」と答えているんですよ。だから話が噛み合わないねん。終わるとサンフランシスコのシティホールに来てくれということで行ったら、ジョージ・クリスロファーというサンフランシスコの市長が、サンフランシスコの名誉市民の鍵をくれたわけです。到着して二十何時間しかたっていないときですよ。ジョージ・クリスロファーさんが言うのには、そもそもアメリカに最初にやって来たコロンブスも、パスポートを省略してやって来た、おまえもいいやろ、ということだったんですよ。でも日本を出る前には、基本的に賛成した人がいなかったね。1 人もいないね。あれは物理的にもうまくいくか、いかないかという 1 つの大きな問題が当然あるんですけど、物理的にうまくいったからといって何なのよ、という感じだったと思う。だから、日本人の価値観とは違ったんですよ。ピンと来ないんです。あるジャーナリストに言わせると、日本人の価値観に影響を与えたという。そんな見方もあるわけです。

——毎日の航海の中で、ヨットではどういう操作が必要なのですか？

本質的に帆と風ですよ。現在地を確認するのは六分儀ですよ。六分儀というのは分度器みたいなやつで、要するに太陽とか星、水平線と太陽の角度を測るものなんですよ。これが分かれば、時間と照らして現在地が出るわけなんですよ。それは 1 日に 1 回とか 1 週間に 1 回でもいいわけ。大体東に向かって行けばいい。アメリカ大陸を乗り越すことはないわけだね。ヨット部出身ですけど、基本的には。でも、そんなことは習わなかったから、教えてくれる人もいなかったね。

——行こうと思った人はいたんでしょうか、単独で太平洋に。

いや、どうかね。そもそも地球が丸いということはギリシャ時代に大体分かっていたし、地球の大きさも計算しているんですよ。実際にそれはほぼ合っているんです、計算が。誤差は 16% やったと言うからね。それは B.C 3 世紀ぐらいですよ。そうすると、人類の中にはこれを一周したいと思う人がおると思うな。実際にやったのはマゼランですよ。あと 8 年したら 500 年なんですけど、トライしようと思った人は、いてると思うんです。

——1962 年の旅を思いついたきっかけというのは、何ですか？

よく専門誌とかそんなのを読んでいると、世界一周した人もおるし、いろんな人も

おるわけですから、僕は太平洋も渡ってみたいなと思った。別に特別なことではないと思うんですけど、クルーザーで行ったり来たりはあったんですが、単独ではいなかったんです。僕は『太平洋ひとりぼっち』に書いたんですけど、あのとき、日本人初となっているんですけど、実際は世界初でしたね。まだそれほどの情報がなかったのね、僕の知っている範囲では。だから日本人ではないだろうということだけど、実際には太平洋を渡ったのはハワイとアメリカの間は 2 人いてるんですよ、1930 年代に。ただ日本から行くというのはそれが初めてです。いないね。でも、とっぴもないほどではないと思うんですよ。というのは、米軍関係とかアメリカ人なんかが、ヨットを作って日本人を乗せて太平洋を横断したやつもあるんですよ。恐らく日本人だけが何人か乗り込んで太平洋を横断する人が出てきて、そのうち単独が出てくるのが順番だと思うんですよ。日本人だけで何人かで行くのがなかったわけですよ。

——それにしてもヨットの雑誌などで、そういう話題はなかったですか？

そうですね。僕が行こうと思ったのは 17、18 歳のころですね。高校 1 年のときにはヨット部でしたが、僕の周りでそんなのをやろうとか話題は出ないね。あまりそんな話をする、奇人変人に思うわけよね。とんでもないことを言っているように思われる。でも太平洋横断は、世界的には別に不思議なことでも何でもなくて、当たり前だと思いますよ。僕が高校生のときに、ゴムボートで大西洋を横断した実験漂流記というのも本で出ていましたし、それは考えないはずはないと思うんですよ。

——高校よりも前に、もっと小さいころからヨットに対する興味はありましたか？

ない、ない。僕は、中学時代は体操部だったんですよ。体操部だったのが高校からヨット部に入ったんですけど、体操というのはヨットと比べて難しいですよ。そう思いませんか？ それは鉄棒もあるし、徒手体操もある。体操をやっていたら、ヨットをやることというのは非常にやりやすい。ヨットって、ロープを引っ張ったり、また別の難しさがありますよ。ちょっと楽器みたいないところがあります。力を入れたら速く走るといってもんじゃないじゃないですか。何でもそうですけど、それなりの難しさがありますよ。だけど、体操から見ればどうってことない。見たら格好ができるじゃないですか、2、3 日練習すれば。大丈夫なんですよ。

——高校でヨット部に入ってみようということになったんですか。

何かきっかけがあったわけじゃない。僕が入った高校にヨット部があったから行こうか、これにしようかな、みたいな感じです。しかし、1 カ月もしない間に新入部員は全員やめてしまったんですよ。僕ら大学の付属高校やから、僕ら 1 年生と大学 4 年がいたら 6 年の差があるのと、それからコーチというたら戦前の軍隊の予科練とかあんなんでしょう。そういうことで、つらいときもあったわけですけど、高校 1 年にヨット部に入ったという瞬間が、人生のターニング・ポイントなんですね、結局は。

——それで 3 年間続けて？

やりました。卒業してから関西大学の OB ばかり 10 人でヨットを作る仲間に入れて

もらったんです。そのときも太平洋へ行こうと決めていました。仲間とああやこうや、話もしていましたから、大体僕の計画は知っていたとは思いますが、あまりまともには話していない。

——探検とか冒険という意識はあったのですか？

そんなのは、僕らと発想がちよっと違うんですよ。僕なんかは部活の延長でやっているんですよね。朝日新聞の本多勝一さんなんかは、冒険とは何かとか、探検はどうやとか言ってましたが、僕は冒険と探検の意味の違いも知らなかった。考えもしない。スポーツとしての部活の延長で行っているだけで、それが結果として冒険というものに、はまるんと違うかとか思っていました。

——ぶれずに太平洋横断までですか。

23 歳ですね。学校を卒業して 5 年、だから僕は 20 歳になったときは悔しかったですね。20 歳までにやれることだったんですよ、気持ちでは。僕は勝手にやっていたから、僕が行くときに両親はそれなりに協力もしてくれた。「大丈夫か」と聞くから「大丈夫だ」と言ったら、「そうかね」と、別に反対も何もしていないですよ。

——ご両親が後押ししてくれるってすごいですね。今の親御さんはたぶん難しいと思います。

それはそうだけど、自分が産んで育てたわけでしょう。それが「行ける」と言うてんのを信用しなかったら誰を信用するのや、この世で。そんな寂しい親になるなと言いたい。それはリスクがあるかもしれないけれども、それは親としてかぶったれや、と思うのよね。だから部活するとか、そんなもんは四の五の言うはずもないと思っていたしね。こっちは船員になってもいいし、とび職人をやってもいいし、だから学校を出て資格を取ろうという気がそもそもないんですよ。学校の卒業証書はありましたけど、あれだっってもらったからって何になるんだという気はありましたしね。生活のことはありますけど、男は健康であれば何の仕事をしたって食いつぶれることはない。みんな賢すぎるんだよな。だけど、僕らみたいなばかりじゃ社会はもたないね。僕はとび職人になってもよかったなと思っているんですよ。漁師もいい仕事や。今では海洋牧場とか何とか言って養殖しているけど、漁師って、勝手に海で育ったやつをばっと捕ってくる狩猟民族のやることでしょう、結局は（笑）。俺も本当に広い世界を感じたい。もっと勝手にいろんなことがしたい。大体そういうのが基本的に好きだね。

——90 日間、航海しているときに朝から夜までずっとお一人なわけで、どういうことを考え、あるいは感じていたのでしょうか。

ヨットの航海の最大の仕事というのは、目標に向かって、どれだけ進められるかということです。これが一番神経を遣うわけです。ヨットって、風が舵を取るような方法であって、大体思った方向へ行くんです。行くんですけど、やはりずれるわけです。ずれてもここまでなら許せるという誤差範囲があって、反対に行きだしたら放っておくわけにいかないですからね。かなり神経を遣います。それもあれば、安定しているときは結構本も読む。寝ている間も走っているんですよ。舵とか帆は全部縛り

付けて、それで大体真っすぐ行くんですよ。実際には帆と舵をうまく縛っていると、風がこう来ているとヨットはこう走るわけですけど、これがこっちへ行ってしまうと戻るようになっているんですね。これが上がりすぎると戻りよる、こういったらこうしながら行っているんですよ。基本的には自動操縦ってそういうもんなんですよ。それも別に電気も何も使わずにね。

——では、ほぼ行きたい方向に行けている。

行くんですけど、突然ずれていくのがあって、そのときは戻らないといけないんですけど、戻らなくなってぼんちと行ってしまうこともあるわけですよ。そんな誤差は分かんないですよ。例えばアメリカと日本の間が1メートルとするじゃないですか。それが90何日、1日1センチしか進んでいないから、簡単やね。これがこう行きながらちょっとずれたぐらいはどうってことない、そんなものは。寝ていても、休んでいてもヨットが変な方向に行ったり、風がどうなったか気が付くことがあるんですよ。例えばこう傾いて、波がこっちから来ている。船体に波が当たるとき、トントんと船体に当たる波の音があるんですよ。それがこっち側から音がすると、これはおかしいってなもんで。傾き方でも分かる、寝ていても。ちゃんと休ませてくれよという感じはあるけどね。だんだん野生化していくんですよ、人間が。五感が鋭くなる。だから、そういう意味では五感の訓練にはなるでしょうね。だから第六感が出てくるのかも分かりませんから、やはり人間として大事なものは、五感をある程度使うことですよ。

——ほかにいろいろな冒険をされているんですけども、1962年のものとは別に、特に印象深い冒険というのはありますか？

幾つかあるんですけど、大きく分けると、そのあとに世界一周とか縦回りとかあるんですよ。そのあとに足こぎボートをやっているんです。足こぎボートというのは、自転車のペダルを回してプロペラを回して進んでいくという動力源。今までのやつは風で進む、帆に風を受けて進むというので動力源が風だったのが、今度は人力になったわけですね。そのときは50代だった。本来であればもっと若くて元気なときにやっつくべきだとは思いますが、若くて元気なときは、それが僕にできることが分からなかったんです。だけど、ヨットの航海を続けている間に、人力でもできるなということがひらめいたんです。

要するに、いろんな行動をしていると新たな世界が見えてくることがあるんです。何かやっていると、新たな世界が見えてくる。それなんですよ。だから太陽電池で行くソーラーボートの航海とか、それから波のエネルギーで進むヨット。波というのは風と同じだけの歴史を持っているわけですよ。だから、それはギリシャ時代でもローマ時代でもできたはずなんですけど、誰もやっていないんですよ。これは舟が波で揺られて行くので、電気とかそんなのは一切使わないやり方なんです。

実際には今から百何年前に、イギリスで波のエネルギーで進む特許を出した人がいてるんです。それから60年か、70年前かな、アメリカの『ポピュラーサイエンス』

という雑誌に、アメリカ人がこんな小さな模型で、波で走るボートを実験して成功したというのが紹介されているんです。そういう記録は残っているんですけど、実際に航海したのは僕が初めてですよ。



1962 年、サンフランシスコに到着した堀江さん

——冒険を重ねれば重ねるほど、新しいアイデアが出てくるんですね。

どんどん出てくる。だから僕は太平洋航海を何回かしているわけですけど、大きく分けると、帆に風を受けていく風のエネルギーで行くのと、あと太陽電池と人力と、それから波の力、この 4 つができたわけですよ。人類史上、太平洋を船が航海しているエネルギーって一体何と何があるのかというと、風と化石燃料はありますよね。人力もあるかも分からないね。それ以外でも一応、電気と波も僕がやった。でも、だからどうなのよ、と言われたらそれまでですけどね（笑）。そこで僕が言っているのは、表現の方法ですけど、僕は「行動すればするほど、いろんな世界が見えてくる」と言うんです。またほかの言い方もあって、「チャレンジすることによって、新たな世界が開ける」とか、いろんな表現があると思う、同じことなんですけど。

——これからまだ大きな冒険に挑戦されますか。

やります。僕もずっと前からほら吹いている。三桁までやりますから。でも、心臓がいつまで動いているか、これは分からない。三浦雄一郎さんのお父さんは、102 歳までスキーをやっていましたね。三浦さんの世界で 80 歳ということもすごい、ヒマラヤで。山と海なんてまるで違うんですよ。

——何が違うのですか？

例えば、山なんていうのは空気もない、寒いな。荷物も担がないけない。ヨットは

見てごらん下さい。空気は 100%ある。やはり生物が生存するには、水の上というのは一番生存できるわけですよ。今言ったように空気は 100%ある、ゼロメートルですから。寒いというたって、溶けた水の上でしょう。荷物というたって、缶詰でも何でもヨットに積んどいたらいいねん。山は担がないかんねん。一步、一步、歩かないかん。ヨットは寝ていても行くんです。だから絶対条件は海の方がはるかにやりやすいですわ。年齢的にもやりやすい。一般の人は、たぶん水の方が怖いと思っていますが、それは先入観であって、そんなことはない。生物というのは海から発生したとおり、海というのはものすごく条件がそろっている。だから、一般的には山とか海は自然が相手だから兄弟分ぐらいに思っているけど、まるで条件は違うんですよ。

——**だけど、山では倒れていても 1 週間たって助かることがありますけど、水に落ちたらすぐに死にます。**

ヨットは、舟の上で倒れていても進んでいきますよ。条件はいいですよ。山なんていうのは、缶詰も大体持っていけないでしょう、重いから。ヨットなんて缶詰でも何でも持っていけますからね。それに、景色が違いますよ。水平線が見えるというのは素晴らしいよね。刑務所の映画なんかを見ていると、何か悪いことをすると独房に入れたりするじゃない。あんなのはたまらないよね。しかし、ヨットは違いますよね。思った方向へ、目的地へ進んでいくし、空は見えるし、水平線が見えるわけでしょう。揺れるというたって、それは揺り籠ぐらいに思っておけばいいんで、メリーゴーランドに乗っているつもりでね。

——**堀江さんのヨットは、ほかのスポーツと比べていかがですか？**

僕なんかの世界というのは、人が価値を認めていないわけよ。みんなが素晴らしいと言うジャンルでは、必ず誰か若い人が出てくるじゃないですか。でも、僕なんかは違う。ジャンルがない世界、そんな世界にあえて行っているところがありますよ。それは自分の価値観ですから。だから自己満足の世界なんですよ。

——**高校生は育て方次第で面白い人間に育つと思うのですが、どのように感じますか？**

今の学校でも 4 月に入学式があったんですね。しかし今年は、入学式をちょっと遅らせたんですよ。その前に 2 泊 3 日の合宿やって、それから入学式があったんですよ。そうすると今までの入学式の生徒と違うんですよ。どんなに違うかといったら、例えば入学式ですから校歌も歌うけど、「君が代」も歌うわけですよ。今までの入ってきた高校生はほとんど「君が代」が歌えないんです。だけど、「君が代」を教えたんかね、違うのよ。やたらいろいろ前向きで積極的なんで、今回はこれが成功した。淡路島へ行ったんですけど。初めて入学式で友達に会うのと合宿して来ているのとは違うね。良かったなと思ってね。やはり五感を鍛えることですよ、外の空気に当たって。

——**身体で覚えるんですね。**

何でもそうですよ。船酔いもして、苦しんでこないと。やはり海でも船酔いするから嫌だって言ってたんではだめ。それを乗り越えると波の揺れ方もメリーゴーランド

になる。パラダイスが待っているんですけど、パラダイスの前は地獄ですから。無我夢中になったら、何が何でも行けるところだけ行く。

——お仕事は、西宮甲英学院で教育のことをされていますね。

この学校も平成元年にできたんですよ。僕がこの学校に入ったのは6年前からなんですけど、今から10何年ぐらい前から、高校の理事長が堀江を校長にしたらしいという話をずっと吹き込まれたらしい。学校を拡張したとか何か、そういうタイミングで僕を呼んでくれた高校なんですけどね。理事長とか校長とかいうのは、資格が要らないからいいね。僕は教員免許もないもん。

——今の高校にヨット部はないんですか？

ない、ない。やはりしたいとは思いますが、ヨット部を作るというのは難しいよ。練習場のベースを確保すると、費用もかなりかかりますし、コーチをどうする、練習どうするとか。我が母校のヨット部もつぶれかかっている状態です。ヨット部のOB会で再建に取り組んでおりますが、簡単なことではありません。

——今日は、勇気づけられるお話、興味深いお話をありがとうございました。

(2014年5月 大阪にて)

特集1 第1回ロングトレイルシンポジウム

2013年11月23日～24日

【主催】NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構

【共催】公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

【主管】日本ロングトレイル協議会

【後援】観光庁、長野県、長野県教育委員会、小諸市、小諸市教育委員会

【ロングトレイル協議会特別協賛】ミズノ株式会社

主催者挨拶



節田 重節(NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構 会長)

本日はせっかくの休日のところ、多数お集まりいただきまして誠にありがとうございます。本来でしたら、外でやりたいところですが、こんな素晴らしい天候の中、皆さんを室内に閉じ込めまして、大変恐縮に思っております。

現在、ロングトレイル協議会は全国から10の団体が加盟しておりまして、それぞれ過去に各トレイルで6回ほどフォーラムを開催してまいりました。しかし、今回

のような、いわば本州の中心である小諸での中央集会的なシンポジウムは初めてでございまして、実りあるシンポジウムになることを期待しております。この開催にあたりましては、安藤百福センターの使用を始め、全てにおいて安藤スポーツ・食文化振興財団に大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。また、阿部長野県知事はじめご来賓の方々、また市村先生はじめご登壇いただく皆様方、お忙しいなか本当にありがとうございました。

私事ながら、実は先週の日曜日までネパールに行っていました。いわゆるトレッキングをしてきたのですが、この「トレック」という言葉は、実は南アフリカに住んでいるオランダ系のボーア人の古い言葉でして、「牛車で旅をする」というのが語源だそうです。ゆったりしたペースでその土地の自然や文化、歴史に触れながら、歩いて旅をするということが定義だと言われております。ネパールにはこのようなロングトレイルがたくさんあり、長いものは1カ月ぐらかかるルートもございます。今回私が歩いてきたのは、ネパールの第2の都市ポカラという、アンナプルナ連峰が見える非常にきれいな街からでした。そのポカラからチベットに繋がっているジョムソム街道という交易ルートを歩いてまいりました。馬やラバの背中にチベットの岩塩を

載せてネパールの方に運んで来まして、また今度はネパールあるいはインドから物品を持ってチベットへ通うというキャラバン・ルートですね。行き違った多くの欧米人の方々が、歩いて旅をしていらっしゃいました。それだけ古い歴史のある道ですから、色んなものを確かめながら歩こうというスタイルですね。なかには、改造した車椅子で歩かれている方もおりまして、実に楽しそうでした。旅はかくあるべしと、改めて実感させられた次第です。

日本の経済はひたすら効率化を求めて今までやってまいりましたけれども、歩く旅というのは、その対極にあるものだと考えております。せめて余暇時間だけは、より不便さを楽しむ余裕を持って暮らしていきたいものだと考えております。ロングトレイルという遊びの文化を、一時的なムーブメントとしてではなく、根付かせていきたいと我々は考えております。これから様々なご議論やご意見を頂戴いたしまして、より実りのあるシンポジウムにしていきたいと思います。明日のエクスカーションを含めて、皆様方にはよろしくお付き合いのほど、お願い申し上げます。



モンブラン山塊のトレイル

共催者挨拶 安藤 宏基(公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長)



本日はロングトレイル協議会のシンポジウムを催すことができましたことを大変喜んでおります。

ここ長野県の小諸は、ちょうど日本の真ん中ということで、安藤財団が安藤百福センターを設立させていただき、基本的にはまずは自然体験活動の指導者育成のための施設として、岡島成行センター長の下で運営しております。また、安藤財団ですが、これはちょうど今から 30 年前に、日清食品の創業者の安藤百福が、基本は青少年の心身育成を目的としてこの財団を設立いたしました。財団では陸上競技活動、自然体験活動、食文化活動、そして発明記念館運営の 4 つを行っております。創業者の株式をこの財団に投じることによってこの財団ができ、運営にあたっております。創業者は、食とスポーツについて、これは車の両輪だと常々申しております、このような活動に取り組んできたわけでございます。この中で「トム・ソーヤースクール」の表彰事業を行わせていただいております、安藤百福センターが皆様方と同等の指導者を育成する機関として、年間約 100 名の自然体験活動指導者の上級を輩出しております。

スポーツ関係のことでは、小学生の陸上大会をサポートさせていただいております。中学生、高校生対象には陸上競技の大会がありますが、小学生対象のものはないということで財団が引き受けさせていただき、小学生の陸上競技大会を行っております。これは毎年 1 回国立競技場で、今は横浜の日産スタジアムで大会を行っております。全国から 16 万人の選手の方々に参加していただき、活動をサポートさせていただいております。

先ほど申し上げたところで、食創為世と書いてありますが、食創会というのは、これは食を創造する会ということで、これも表彰事業でございまして、これは優秀なベンチャーを起こされた方や食品の技術に対して表彰を行っております。大賞 1000 万円で、このような形でも運営しております。それから、創業者はベンチャース・ピリッツについて「学ぶことはいいけれども、考えることをしてほしい」と常々語っておりました。その経緯から、小学生の子どもさんたちに発明記念館を通じてヒントを差し上げる、何かを学ぶことから始まり、そして自分で考え、子どものころからベンチャーの気持ちを持ってもらうために、クリエイティブ・シンキングをテーマに作っております。その内容は、例えば小麦粉からインスタントラーメンを手作りするなど、簡単にできることを伝えながら、小学生の低学年の方にも体験活動を提供しています。

ロングトレイル・シンポジウムをきっかけにこちらへお越しいただき、ツリーハウスに疑問を持たれた方がいらっしゃると思いますが、これは 1 つのアートとして考え

ています。このような施設にもアートがあってもいいのではないのでしょうか。ツリーハウスというテーマをデザイナーの方にお出ししまして、どんなものかということをお考えいただいたわけです。中には鳥の集合住宅のような、長屋のようなものもあり、鳥が住んだらどうなるのかというような、こういう小さな鳥かごを集めたような形のものがあったり、面白い形で変わったものが幾つかありますけれども、現在、5棟できております。全部で10棟ほど作る予定にしております、来年の春にはオープニング・セレモニーを行いたいと思っております。意外とこのような研修センターよりも、ツリーハウスの方が若い方には興味があるようでして、このような事業の展開も同時に考えております。

このようなロングトレイルをはじめとする自然体験活動は、万人の健康を培うとともに、日本の自然に触れるという歴史的、文化的な学習の促進を含めて多くのテーマを含んだ、大変価値あるものというふうに私は感じております。ロングトレイルは、そのネーミングを登録させていただいております。これは誰でも使えるという意味からであり、誰かが独占しないために敢えて登録していることをご理解いただければと思います。

このようなことから、皆さん方と一緒に、情報の場として安藤百福センターがお役に立てることがあれば大変光栄です。今日は長野県の阿部知事をはじめ小諸市からは市長さんもお越しいただいておりますし、また、筑波大学から市村名誉教授に講義をいただくということで、岡島先生をはじめ節田先生、中村先生にはご協力いただきまして、ありがとうございます。私は共催ということでバックアップさせていただきますので、どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

来賓挨拶

阿部 守一 長野県知事

私ども長野県の小諸市、そして安藤百福センターで第1回のロングトレイル・シンポジウムが開催されますことを、まずは心からお祝いを申し上げますと同時に、全国からお集まりの皆様方を地元の知事として、心から歓迎を申し上げたいと思います。長野県は全国の中でも最も多くのルートを持しているという地域であり、世界水準の山岳、高原観光地を作っていくという取り組みをしております。そうした中で、トレッキングやカヌーなど、長野県をいろんな形で移動してもらえるようなルート設定をしていきたいのですが、ロングトレイルは、こういった取り組みの中で中核的な位置付けになる事業であります。



関係の皆様方のご尽力の賜物で、ロングトレイルは徐々に定着をしてきている感もあります。しかし、案内標識がもっとデザイン性のあるもの、統一感のあるものにしていったらいいのではないかというご意見もあり、課題も様々あると思います。今日のシンポジウムでは、ロングトレイルがますます発展する方向に議論を引き上げていただければ、大変ありがたいです。

私ども長野県は、おかげ様で男性も女性も今、日本で最も健康長寿の県であります。先ほど安藤財団のご紹介が安藤理事長からございましたが、食とスポーツは健康を支える両輪であると言われていています。長野県を健康長寿県としてもっともっと伸ばしていきたい。そのためには、この食とスポーツに、さらに力を入れて取り組んでいきたいと思っています。気候風土に恵まれ、美しい水や空気に恵まれ、果物、りんごやぶどう、あるいは野菜、レタスやセロリ、きのこ類。この機会に長野県の恵みにも触れ、楽しんでいただきたい。また、1998年、長野冬季オリンピックを開催したわけですが、いま県としてもスポーツ振興、とりわけ県外の皆様にスポーツ合宿で長野県にお越しいただくという取り組みを進めております。ぜひそうしたことも、皆様方から口コミで広めていただければ大変ありがたいと思っております。今日お集まりの皆様方には、長野県の山々を本当に愛し、楽しんでいただいていることと思います。私どももそうした皆様方と長野県の自然を守る立場として、しっかりとその責任を果たし、大勢の皆様方に楽しんでいただけるこの山岳、高原観光地を作っていきたいと思っています。

このロングトレイル・シンポジウム、第1回ということですから、これを契機にロングトレイルが発展しますこと、そして、今日集まりの皆様方が自然との触れ合いの中で心豊かな人生を送って、そして次の世代、子どもたちにも日本の自然、山の美しさを伝えていただきますことを心から祈念申し上げまして、私の皆様への歓迎の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございます。

記念講演「フットパスに見る英国ウォーキング事情」

市村 操一(筑波大学名誉教授)



市村でございます。今日は第1回ロングトレイル・シンポジウム、記念すべき回にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。

私のようなスポーツ心理学をしていた人間がなぜここに呼ばれたかということなのですが、実は私は若い時に、ゴルフに熱中した時代があります。イギリスのゴルフ場に行きますと、カートの前を人がぞろぞろ歩いていくんです。それで「まだ打っちゃだめ」とイギリス人みんなが言うんです。理由を聞いたら、「あの人たちのここを歩く権利が僕たちより優先しているんだから、彼らが通ってから打とう」と言われました。これは面白いと思い、イギリスのウォーキング事情を調べ始めて、山と溪谷社から14年前ぐらいに本を出させていただきました。

今日お話ししますのは、長距離歩行路の具体的な映像を私の古い写真を含めていくつかお見せして、長距離歩行路とはこういうふうに歩行路ができていて、人々はどのようにしてそこを利用しているのか、というのを具体的にお示しできればよろしいかなと思います。その例として2本の長距離歩行路を取り上げます。1つはロンドン市内も通るテムズ川沿いの長距離歩行路で、288キロの長さがございます。それを市民たちがどういうふうに歩いているかという映像もお見せしたいと思います。2番目には長距離歩行路ができてくるまでにはあまりロマンチックではない歴史があるわけです。最初のきっかけは、労働者の散歩する権利を要求する労働運動として起こってまいります。そのお話もさせていただきます。その運動によってできた第1号の長距離歩行路が、ブリテン島のスコットランドからイングランドの中央部までつながる、長いペナインウェイです。そのお話もさせていただきます。そして、ウォーキングは国際的にもものすごい勢いで広がっておりまして、フランスやドイツなどヨーロッパ大陸の中でも長距離歩行が非常に発達しておりますので、その話に触れたいと思います。最後に歩く歩行者たちをどうやって育てるか。どうやって組織するか、ということについてのお話をさせていただきます。

ウォーキングを愛好するイギリス文化

最初にロンドン市内を通るテムズ川沿いのテムズパスについてお話をします。ロンドンから始まりまして、ずっとさかのぼってヒースロー空港があります。ここが女王様の週末のお住まいであるウィンザー城、ここがオックスフォード大学があるオックスフォード、そしてコッツウォルズの風光明媚な田園地帯に入っていきます。288キ

ロメートルです。イギリスで本屋さんに行くと、ウォーキングのための案内書だけでたくさんの本が並んでいます。

ロンドン市内から見ていきましょう。これは、皆さんご存じの国会議事堂とビッグベンです。サウスワークバンクを歩いている人たちを見ると、デートしている人、友だち同士でそろそろ歩いている人、ジョギングしている人もいます。そして、長距離ウォーカーがいます、リュックサックを背負って。ロンドンからずっと上流の方に歩いていく人だな、と思います。また、別の日に同じ場所に行って観察していますと、雨が降ってもロンドン市民は歩いちゃうんです。イギリスは一日中晴れることはあまりありません。晴れたり曇ったり雨になったりですが、とにかく歩くことが盛んで、この都心でも歩く場所が確保されていることは素晴らしいと思います。

次に、これは今年 9 月にロンドンに行ったときに写真を撮ってまいりました。僕は 10 年前ぐらいにここを歩いたことがあるんですが、そのときはなかった、立派な歩行者だけの道路標識が設置されていました。ここに歩くマークがあります。それから細かい数字が書いてありますが、これはバスの時刻表ではありません。この地点から地下鉄のどの駅までは何キロメートルあるよ、という印が書いてあります。そうしますと、歩いている人は「ああ、ここから何々駅まではあと 6km あるな。じゃあそこまで歩こう」という目安が立ちます。そして、このテムズ川に沿って、「この所が歩く通路だよ」ということが分かるように掲示板が出ています。この掲示板、かなりお金をかけて作っていると思うんですが、この所にこれは歩行者用の掲示板だによって標識があります。歩く人の下に黄色い字で「ウォーク・フォー・ヘルス」、健康のために歩きましょうというキャンペーンが書かれています。それで今、イギリス全体ではこういう言葉があちこちで使われているのが分かりました。「イーツ・ウェル、ムーブ・モア・アンド・ロンガー・ライフ」。これは先ほど知事さんがおっしゃったように、よく食べて、体を動かして、スポーツをして、そして長生きしようという、そのようなキャンペーンがイギリス全体で行われています。ウォーキングに関わる団体は「ウォーク・フォー・ヘルス」という言葉を使いながら、市民に歩くことを呼びかけていっているという状況がありました。

さらに上流に行きまして、15 キロほどさかのぼりますと世界遺産のキューガーデンズという立派な植物園がございます。その向こう側にテムズパスが走っています。ここに歩行路がありまして、ランニングをする人がおります。外に出てみますと、ここに来ますともう舗装道路ではなくて、細かい砂利を敷いた通路ができております。歩いている人たちを見ていますと、平日の昼間でしたから、お年寄りたちが歩いていてここでしばらくおしゃべりをしているとか、植物観察をしながらのんびりと歩いていくという姿が見られます。

とても大事なことは、イギリスの長距離歩行路には、ここにテムズパスという道路標識が必ずきっちり出ていることなんです。右の方に行くとリッチモンドの駅まで、

あと 4 分の 3 マイルですよ、ということが書いてあります。このリッチモンドという上流に、私は 1999 年に行ったことがありますので、そのときの写真を映したいと思います。そうしますと、十数年前にやはりテムズパスという標識がリッチモンドの駅前にちゃんと出ていまして、駅を降りるとこの標識がいちばん上に書いてあります。それで歩く人はテムズパスへ下っていけるようになっています。ここに行きますと、テムズ川の昔の船着き場がレクリエーションのために利用されるようになっています。長距離を歩いてきた人たちがここで一息入れて、地下鉄に乗って帰るというような風景が見られます。こちらではかなり立派な靴を履いている人、長距離を歩いてきたことが分かるような方がたくさんいらっしゃいました。それから、この辺りをぶらぶら歩いている市民もたくさんいらっしゃいました。

私は、ロンドン市民はどういう歩き方をしているんだろうかと思って興味を持ち、すでに夕方でしたけれども、しばらくここにいてたくさん写真を撮りました。とてもイギリス的な風景だなと思ったものの 1 つは、これは長距離歩行路、つまりロングトレイルだけではなくて、細いフットパスで自由に歩ける道路が網の目のように張り巡らされている様子です。その道を、ショッピング帰りのようなスタイルで若い女性が歩いていたりします。それから、これはテムズパス、ロングトレイルなんですけど、初老のご夫婦が「もうくたびれたー」というような感じで歩いていました。さらに夕方になってもっと暗くなってまいりますと、犬の散歩をする市民が現れたり、デートをしている二人が歩いてきたりします。妊婦さんの夕方の運動のためにも、こういう長距離歩行路が使われているという状況もございます。

さらに上流に行きました。今年の 9 月に行ってきたんですけども、ロンドンから鉄道で 1 時間ぐらいさかのぼりますと、ウィンザー城のところにまいります。ウィンザーの駅を降りますと、ここにテムズ川が流れていますけど、テムズパスという標識がちゃんと出ています。ウィンザー城で橋を渡って反対側の岸に行きますと、ここにテムズパスという標識がまたはっきりと出ております。

それで、この標識を読んで僕はびっくりしたんですけども、これが「ここから私有地」という意味なんです。「毎日、犬の散歩をさせてるので俺はよく知ってるから連れてってあげる」といって、老人が入り口をしてくれたんです。ここを見ますと、この土地は高等学校、イートン・カレッジっていう超有名な名門高等学校のレクリエーションをするための芝生なんです。それで「ここはイートンカレッジの土地ですよ」と書いてある。「規則を守って歩いてください」ということが書いてあって、この注意書きには、当然のことながら、「ゴミは持ち帰りください。犬の始末はちゃんとしてください。火を焚いたり、バーベキューはしないでください」とあります。面白いのは、ここにはテムズ川が流れているのですが、「ここで釣りはやらないでください」と書いてあります。それから最後のセンテンスは、「近隣の人たちに迷惑をかける行為は、やめてください」です。だから、ここでどんちゃん騒ぎをしてはいけないということな

んでしょうね。それで私がイギリスのフットパスを歩いた経験では、歩く人たちはゴミを必ず持ち帰っています。大騒ぎも決してやりません。というようなことによって、私有地の地主さんたちも、「まあ、通っていいだろう」という寛容な態度で道を開いています。

この道は、運動場の中をずっと歩けるようになっていきます。そこに犬を散歩させている人が来ました。私も歩いていって振り返ると、「ここにウィンザー城が見える、とても眺めのいいところだよ」と、先ほど犬を散歩していたおじさんが言ってくれたので、歩いていきました。しばらく行くと、イートン校の運動場が終わって、次の民有地に入っていきます。ここにも「これがテムズパスですよ」というマークがあります。このどんぐりマークがイギリスの長距離歩行路、ここで言えばロングトレイルのサインです。この標識は必ずきっちりとできていて、地図を持ってさえいれば、歩く人が迷わないでずっと歩いていけるというふうにできております。そうすると、今度はテムズ川のほとりを通りますと、若い男女のデートコースになるような、とてもいい景色になります。

労働者による歩く権利獲得闘争

このようなテムズパスができたのはそんなに古いことではなくて、1989年です。こういった歩行路ができる歴史的な背景をお話ししますと、1918年にヨーロッパでは第1次世界大戦が終わります。第1次世界大戦では、イギリスは約90万人の若者を失うんです。第2次大戦のときの戦死者よりも第1次大戦のときの方が多い。労働者階級の人たちも、兵隊としてかなり取られて出ていったわけです。そのような人たちが、健康的なレジャーを求めるような生活水準もだんだんに保証されてきます。そうしますと、テムズ川には水運のために馬や人夫が船を引いて引っ張り上げるという道があったのですが、その舟引き道をレクリエーションのために使い始めます。

第2次大戦が起こり1945年に終わりますが、このとき国立公園法という法律ができます。そのとき同時にカントリーサイド、田園地帯に自由に入り、歩いていいという権利が法律的に認められるようになります。それで1949年に議会がテムズ川の舟引き道をつないでしまおう、ロングトレイルを作ろう、という予算を作り、テムズパスだけじゃなくて、北イングランドのペナインウェイが公認されるわけです。それでテムズ川の長距離歩行路は1989年に開通する、そういう歴史を持っております。

実はこういう歩行路ができてくるにあたって、労働者により自分たちにも田園地帯を自由に歩かせろという権利獲得闘争が行われます。1939年に、産業革命でどんどん栄えていたマンチェスターの労働者たちが、近くの荒野に入っていく権利を要求します。イギリスの農地というのは日本の農地と少々違ってまして、水田と違ってあぜ道を作らなくていいから、1つの畑がものすごく大きくなってしまふのです。そうすると、畑と畑の間は単なる石垣ですから、これが牧場であったり、麦畑であったりす

るわけですが、小さい道はないんです。それから、この丘の上の方も実は民有地である場合には囲い込まれていて、その中で鹿を放牧し、大地主が狩場にして有料で雷鳥の狩りをさせる商売に使っていらしたので、労働者が勝手に入って散歩してはいけないような状況があったわけです。

そこを歩かせろという労働者の集会ですけども、そうしますと、ここの石切り場の跡に労働者が集まってリーダーが演説をして、「それ、行くぞー！」と集団で民有地に突入する事件が起こるわけです。労働者が目指したのは何もない丘陵だったのですが、ここはとても良い雷鳥の狩場だったそうです。それはマス・トレスパスとイギリスの歴史では言われていまして、1932年の7月24日の日曜日に労働者が民有地を歩く権利を求めて突入したという歴史が残されています。確認したら新聞に残っていました。労働者が突入した場所は整備され、今では市民が歩ける場所になっています。

現在は、このように自由に歩ける道のことを「フットパス」とイングランドでは言っています。フットパスがどのくらいあるかということ、1999年の統計ですけど17万キロメートルほどです。東海道を歩く東海自然歩道が500キロメートルだということと比べると、どのくらい自由に歩ける歩行路があるかというのがお分かりいただけると思います。

世界初の長距離歩行路、ペナインウェイ

次に、おそらく世界で最初にできた長距離歩行路だと思いますが、いわゆるレクリエーションのための歩行路です。これはペナインウェイと呼ばれています。それで1951年に着工して1965年に完成するわけですが、これは1999年の統計ですけど、年間の延べ利用者が約2千万人いる。半日だけちょこっと歩いてくる人も、それから何日もかけて歩く人も入れて2千万人。この歩行路はロング・ディスタンス・パスとイギリスでは言っていますが、それは今やイギリスだけでなく、ヨーロッパ中に広まっています。これはどこにあるのかというと、ブリテン島のちょうど真ん中を南北に走っています。この辺りがマンチェスターになっています。このペナインウェイは、実はドーバー海峡を渡ってフランスのローヌ川沿いにマルセイユまで、フットパスがつながっているというような状況になっております。

このペナインウェイを、人々がどのように歩いているかという状況をお見せします。実は僕も歩いてきたんですけども、これが典型的な長距離歩行者だと僕は思って写真を撮ったんですけども、ご夫婦が大きいリュックサックを背負い、犬を3匹連れて、これは何泊か泊まりがけで何日間かの長距離歩行をしている姿です。もちろんその途中には、犬も連れて行って泊まれるようなロッジがたくさん準備されております。ですから、何日もかけてこの299キロのペナインウェイを歩く人もおられると思います。

僕たちは1日歩いていたんですが、いろんなタイプがあります。途中で野宿もできる準備をして何日も歩く人、ペットボトルだけを持って歩いている人、半日だけ歩こ

うというレクリエーションの人、中学生も歩いたりしています。

これがペナインウェイの本線です。そうすると横にもルートがたくさんございます。中学生たちが、年寄りがもし疲れたらここからエスケープロードで下りなさい、そうすると下にパブがあるよ、バスの停留所があるよ、というふうに教えてくれました。人の牧場を横切っていく場所もあります。人様の牧場を横切って、動物が逃げられないようにドアを開けてはいけないので、この上を乗り越えていくような使い方をさせてもらうところもありました。

現在、このナショナル・トレイルは、同様の長距離歩行路が 12 本整備されています。これはイギリスのイングランドとウェールズだけです。この上のスコットランドでも最近 4 本の長距離歩行路ができました。ヨーロッパ大陸のウォーキング事情は、日本にあまり入ってきていないような気がしますが、実はヨーロッパもかなり盛んです。これがヨーロッパの長距離歩行路の 1 号線です。ノルウェーのいちばん北から出てスウェーデンを通してデンマークを通してドイツに入り、ドイツのシュバルツバルト、黒い森地帯を通してスイスを通してイタリアに出てナポリまで行きます。ヨーロッパ・ウォーキング連盟で公認している長距離フットパスは、12 本あります。これは面白いから日本人も、もっと行ったらいいと思います。宿泊施設や交通の便も非常にいいと思いますので。私も何本か所々、半日ぐらいちょこっと歩いてきましたので、これはとてもいいと思います。

ウォーキング団体はどのように組織されているのか

わが国に日本ウォーキング協会というのがございますけれども、イギリスではそういう団体はかなり古くにできていました。1935 年ですが、イギリスではウォーキング協会ではなくランブラー協会というんです。ランブラーというのはウォーキングよりも軽い、のんびりと歩く人たちのことをランブラーというんですけれども。ランブラーズ・グレイトブリテンというふうなニックネームが付いておりますが、正式な名称はブリテンズ・ウォーキング・チャリティ、英国ウォーキング財団と私は訳しましたが、そのホームページをのぞきますと、とてもチャーミングなキャッチフレーズ、「ファインド・ア・グループ・トゥ・ウォーク・ウィズ」、「一緒に歩くグループを見つけましょう」というので写真が載ってます。ホームページには、「我々のグループ、英国ウォーキング財団は 19 世紀のウォーキング・クラブに始まって現在は 500 のクラブが加盟しています。他人と歩く社交的な雰囲気を求める人は加盟クラブの一つに入ってください。ウォーキング財団」とあります。これはみんなと歩こうという傾向が強いですね。一人だけ長距離を歩いて「どうだ、やったぞ」というよりは、「みんなと歩こう」。歩くグループを探したい人は「地域によって探してください。グループ全体の一覧表を見て探してください」。20 歳、30 歳代のどんどん歩くグループを探したい人はこれ、のんびり歩きたい中年の人たちのグループはこれ、とクリックするとグ

ループ名が出てきます。イギリス全土にわたってこのシステムは機能しています。歩く人とグループをつくって、お互いに知り合って散歩の中で人間関係をつくろうという、こういう考え方はヨーロッパの散歩文化の中に初めからあるんです。これは南ドイツの1810年の絵ですけども、散歩というのは社交の場所であったわけです。1810年というのは、世界史で「火縄くすぶるバスチーユ」で1789年にフランス革命が起こって、王政が崩れて市民社会が出現した20年後です。そうしますと、市民たちが解放されてどんどん郊外を歩き始めるんです。そういう伝統が今にも続いているような感じがします。

もう一つは、このイギリスのウォーキング財団の非常に重要な働きというのは、フットパスの整備や予算が削られてだんだんできなくなってくる状況への対策です。それに対して、イングランドのフットパスの人たちがこれを何とかしようとする。「我々の歩行路の予算を守れ」というようなキャンペーンが貼ってあるんですけど、その中に「我々に対する小さな投資でもって国民の健康が守られているじゃないか」と。国の経済、要するに観光産業としてかなり大きい貢献をしてるはずだと思うということも主張していくわけです。それと同時に、予算が取れなくて修理ができない自治体に対しては、我々ウォーキング協会が70のボランティア・チームを持っているから、必要な自治体はボランティア・サポートの部門に連絡してください、とも書いてあります。歩く人たちも修理するという姿勢を見せているところが、イギリスの非常に勉強になるところかなと思います。

歩行路での風景、エトセトラ

これからお示しします写真は、脈絡なく私が撮ってきたスナップ写真です。これは黒人の親子が歩いている写真です。移民もイギリス文化の中ではこういう歩行の習慣を身に付けていくというような典型的な例だなと思って。ウォーキングの文化がイギリス人だけじゃなくて他国の人にも受け入れられ、非常に気軽に長距離ペナインウェイを歩くんです、こんな感じで。それからこれは、牧場に入っていくときに羊が逃げないように特殊なドアがあって、それを開けて歩く人が入ってくるんですけど、ここに書いてある字を大きくしましょう。こう書いてあります。「プリンス・チャールズ・アンド・レディ・ダイアナ 1989年7月29日」ダイアナ妃もここを歩いたっていう記念碑。それからこれは麦畑の中に、農家に協力をしてもらって種を蒔かないところをつくってもらうんです。ここを歩いていけるようになっています。さっきお示したように、イギリスの農地というのはあぜ道がないから一気に種が蒔けちゃうのですが、ここは蒔かないで、という協力をお願いして歩く道が保証されています。ここも実は長距離歩行路の一部です。ドーバー海峡沿いの、有名なサウスダウンズを通る長距離歩行路です。

それからこれは私のイギリス人の友人の、マンチェスター大学教授のご家族と一緒に

に家庭ウォーキングをしたときの写真です。あるお宅のお庭を通らせてもらうところもあるんですけども、そこにある看板には「私どもの庭を通るパブリック・フットパスによろこそいらっしゃいました。でも、どうぞ私どものプライバシーを尊重してください。サイクリングや生徒の団体はお断りします」と書いてあるんです。ここのドアを開けて中に入っていくと、大きな農家の果樹園の中を通るようになっていました。これはとても大事なことですけども、ここから先の方に、これも歩行路の標識が非常にはっきりと示されています。もっと田舎の方であまり人が通らないようなところにも、きちんとこのように示してあります。

これ、皆さん、何だと思います？ 実はこれは草刈りの人たちです。イギリスも草がよく生えます。それを刈る、歩行路の草を刈る仕事をする人たちがいます。これは国立公園事務所の名前が付いたジープでしたが、この予算がどこから出るのかよく分かりませんでした。しかし、実は道路を造っても、道路の管理をするためには地方自治体などはお金を使わなければいけないということがあるので、歩く人たち、それから歩くことを指導する人たち、それから地方自治体などと非常に緊密なる協力関係というのを築く必要があると思っております。

ちょうど時間のきりが良いようですので、これで区切りとさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

報告「ロングトレイルに期待するもの」

八木 和広(観光庁スポーツ観光推進室長)



はじめに

観光庁でスポーツ観光を担当している、室長の八木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今日は「ロングトレイルへ期待するもの」ということで報告をさせていただきます。私の方からは現在の観光の状況、特に最近我が国では訪日外国人の旅行者を増やそうと取り組んでおりますので、その状況と、スポーツ観光の取り組み状況を、ロングトレイルに絡めてお話しさせていただいて、皆様が今後ロングトレイルでご活躍される際の一つの参考にしていただければと思っております。

まず、こちらのデータは外国人旅行者の受入数を国際比較で示したものでございます。これは歴年ですけれども、昨年の 2012 年のものでございます。日本は去年は約 836 万人、世界で 33 位です。一番上がフランスで、8,000 万人を超えています。ですから、日本の約 10 倍以上の外国人の方が来ている。ヨーロッパは大陸続きということもあって、多いというのも分かるんですけども。アジアの方は一番受け入れているのは中国です。これだけ文化財もございますし、食べ物も素晴らしいものがあって、またこれだけの豊かな自然に恵まれている日本がアジアで 8 位というのは、まだまだ日本の潜在能力に見合った外国人の方が来ていないのではないかと、ということが分かるかと思えます。今度は消費額で見たデータです。2011 年は全体で約 22.4 兆円でございます。その中で見ていただくと分かるかと思いますが、日本人の消費額というのは約 95% ですから、ほとんど日本人で国内旅行の消費額というのは賄われているということがわかります。訪日外国人旅行者に至っては 1 兆円の約 4.5% にすぎませんので、この部分がかなりシェアを占めることになれば、現在は 22.4 兆円でございますけれども、30 兆円という額で消費額が伸びていくことが期待されております。

今度は国別の訪日外国人旅行者数ですが、韓国の 204 万人、そして台湾の 147 万人、中国の 143 万人を合わせると 59%、約 6 割になります。要するに近隣国の方々がかなり来ているということが分かるかと思えます。今年の 10 月の段階で 866 万人ということで、過去最高の訪日外国人旅行者数になっております。これまでの最高は 2010 年の 861 万人でございましたが、これを抜いた形になります。

このように順調に伸びているんですが、懸念材料もございまして、皆さんもご承知の通り福島の問題から始まり、最近の政治状況等もございまして、韓国についてはとうとう昨年と同月比からマイナス 5.9% という形になっております。韓国は一番単位が大きゅうございますので、ほかのところがいくらかなりの伸び率を示しても母

数が大きいために、このマイナス 5.9%というのは効いてきます。その一方で中国がずっとマイナスでしたが、ここにきてプラスに転じまして、若干戻りがきている。あと約 140 万人で 1,000 万人となるわけで、1 カ月で 70 万人達成すればという話もあるんですけども、今後韓国がどのくらい下がってくるか、まだまだ厳しいという現地からの情報もございますので、本当に 1,000 万人に到達するかどうかというのは正念場を迎えているということでございます。

スポーツツーリズム

今度は話が変わりまして、スポーツのツーリズムについてお話させていただきます。いわゆるニューツーリズムというのが最近のはやりでございます、スポーツツーリズム、そのほかエコツーリズム、医療ツーリズムというものがございます。スポーツツーリズムというのは、簡単にいえばスキー旅行、ゴルフ旅行、またはプロ野球の観戦に行って、その周辺の観光をして帰ってくる。こういうのがいわゆるスポーツ観光の典型的な例であったと思います。ただ、スポーツ観光とかスポーツツーリズムという言葉自体は、なかなか認知度がなかったという状況がございます。ところが、政府の方で 2010 年ごろからスポーツ観光というようなニューツーリズムの一つが大きな柱として固められたことによりまして、かなり認知度が全国で高まっているところでございます。これに、観光立国推進基本計画というものを策定することになっているんですけれども、閣議決定が 20 年 3 月 30 日にされまして、スポーツツーリズムの推進という文言が入りました。これによって、いわゆる政府の公式文書としては初めてスポーツツーリズムという言葉が入ったということで、大きな社会的認知度の高まりというのが、一つの転機になったのではないかと考えられます。

合わせて、同じ日に文部科学大臣決定のスポーツ基本計画というものができました。こちらの本文でもスポーツツーリズムが至る所に明記され、こうした文言が盛り込まれたということでございます。次に今年の成長戦略と呼んでいるものなのですが、正式には日本再興戦略 - JAPAN is BACK - というもので、6 月に決定されたものがあります。日本政府のこれからの重要政策の方向性を示しているものですが、この中で戦略市場創造プランというものがございます。この戦略市場創造プランの中のテーマの 4 の②番に「観光資源等のポテンシャルを生かし、世界の多くの人々を地域に呼び込む社会」という言葉があります。これはロードマップとして示されているものですが、ニューツーリズムのジャンルが書かれています。その中で、エコツーリズムと共にスポーツツーリズムというのがニューツーリズムの代表例として盛り込まれたということで、いろいろなところでスポーツツーリズムというのが認識されている。右上の方に行きますと、この赤字はマラソンとかサイクリング等を楽しむ訪日外国人の増加ということが書かれております。この中にロングトレイルというのも含まれていくということで考えております。

スポーツツーリズムのデータにつきましては、なかなか取るのは難しいですが、2つほど資料を拾ってみました。まず左側を見ていただきたいんですが、こちらは観光庁の方で毎月行っているものなんですが、訪日外国人の方の次回来日目的というのを調査しております。今回したことで言いますと、やはり日本食を食べたこととかショッピング、温泉、そういうところに高い数値で出ています。ところが、次回してみたいことになると、例えばロングトレイルに関係するところであれば、四季の体感とか、自然体験ツアー、農漁村体験、こうしたものが軒並み高い伸び率を示しています。そのほかスポーツ関係ではスキー、スノーボードまたはゴルフ、スポーツ観戦、こちらいずれも伸びが出ておりまして、これから何が分かるのかということになりますと、リピーターの方の需要としては、次回の自然体験に非常に高い期待値を示していることが分かると思います。

今度は国内状況でございまして、最近やはりジョギング・マラソンブームがかなりのもんです。2007年に東京マラソンが導入され、その影響も大きかったとは思いますが、2006年に推定人口が606万人だったのが、2012年には1,000万人を超えています。わずか6年間に約400万人も増えてきているという状況です。例えば1つの例で、皇居周辺をジョギングしている人が1日推定で5,000人から1万人いると言われていました。1万人というのは大きいですね。マラソン大会とほぼ同じ規模ですので、それだけの方が走っているということです。もう1つの資料はJリーグなんですけれども、Jリーグも2004年に717万人の方が見ていたというデータがございまして、2009年で961万人ということで、こちらも5年間で34%も伸びているということが分かります。いずれもスポーツに対する期待は外国人の方、日本人の方を含めて高くなっているのではないだろうかということがうかがえます。

スポーツコミッション

今度は日本の自然状況に目を転じてみます。日本の国土の森林率というのは68.5%です。これは非常に高い数字でございまして、フィンランドの72.9%、スウェーデンの68.7%に次いで世界で3番目です。世界の森林率の平均値というのは砂漠等もございまして約30%、それから比べれば非常に森林率が高く、そして自然に恵まれた国であるということが分かります。これだけ山岳地帯があれば、今回のテーマでございましてロングトレイルはもとより、例えば冬であればスキー、キャニオンリングができたり、自転車があればヒルクライムや登山など、いろいろなことができる。様々な可能性を秘めているということが分かります。スポーツツーリズムについては動きもあり、政府の関心が高まってきたということもございまして、日本スポーツツーリズム推進機構が平成24年の4月に発足しました。約1年半たったところでも、有識者の方とはもとより、旅行関係者、大手の旅行会社に入っただき、電通とかアシックスとかミズノさんなどにも入っただき、あとは、スポー

ツツーリズムに関心のある自治体さんにも入っていただきまして、合宿の仲介とか大会の誘致などでご協力させていただいている団体です。もう1つ、さいたま市にある、さいたまスポーツコミッションというのをご紹介させていただきたいんですけども、スポーツに関しましては、従来であれば教育委員会が学校体育、体育の延長線上としていろいろ大会等をアレンジしてきたという経緯がございます。ただ、これだけ社会経済が複雑化する中で、なかなか教育委員会の中だけで大会を運営するというのは難しい状況になっています。例えば、地域の大会をやるにあたっては、それをもとに県警との調整やボランティアの動員問題、または特産品の売り上げ、旅館等の手配、こうした諸々のものが発生してきます。そうしたときに、ワンストップ的にアレンジするところがあれば便利ではないか、という発想から来ているのがこのスポーツコミッションでございます。まず1つ目の役割が大会誘致のプロモーター、いわゆる大会を誘致してこななければいけない、それはどうやってやるかというところある程度のノウハウがないといけませんので、いろんな国際会議等にも出て行って大会を拾ってくる。拾ってきたら、今度は持ち帰ってそれを地元の関係者や地元の競技団体とも話して、こうした話があったと、引き受けてはどうか、と調整をする。じゃあ大会を行うということになれば、さらにはボランティアの動員問題とかその辺をアレンジしていくというのが、スポーツコミッションの役割でございます。さいたまスポーツコミッションは、公益社団法人さいたま観光国際協会の方が事務局を専任で4人置きまして、そうした形で運営をしております。

もともとスポーツコミッションの発祥というのは、アメリカです。アメリカのインディアナポリスは自動車レースのインディ500ですごく有名な所なんですけども、ここが世界で初めてスポーツコミッションというものを作りました。元々は産業都市だったんですけども、産業都市が1970年代になって衰退してきてしまったと、なんとかして地域活性化させたいということで、全米初のスポーツコミッションを作りました。今ではアマチュアスポーツの首都と言われるくらい非常に認知度の高い都市へ成長しました。そのままアメリカ全土に広まっていきまして、全米で約560くらいございまして、至る所でスポーツコミッションが立ち上がっている。一方、日本の状況なんですけれども、我が国も至る所でスポーツコミッションというものの設立の広まりが出ております。さいたまのスポーツコミッションというものが平成23年の10月、本格的なものとしてはここが初めてだと思いますが、ここでできたのを皮切りに、新潟市では文化とスポーツを兼ねた文化・スポーツコミッションというのが立ち上がりました。また、沖縄県がスポーツコミッション沖縄という大会誘致のプロモーター的な組織を27年の4月に立ち上げることを決めまして、準備委員会が立ち上がりました。いろいろございますけども、スポーツコミッション、スポーツツーリズムを使った地域活性化の動きというのは、高まっているというのが分かります。

観光庁の今年初めて行った取り組みとして、若干トレイルとも関係があるかと思い

ますが、マラソンですね。今、マラソンは日本だけではなくて世界的にもブームになっております。日本のマラソン大会を世界に売り込みたいなと思ひまして、今年、マラソンジャパンというのをソウルで行いました。簡単に言えば日本のマラソン大会はいろんなものがございすけども、10大会くらい集まっていたいて、それを韓国の旅行会社の方に、メディアにPRして訪日外国人の増加につなげるという取り組みでございす。今年の7月にソウルの方で行ひまして、韓国の旅行会社、メディア、マラソン関係者含めて約150人に参加していただきました。いろんなところのマラソン大会に来ていただき、長野県からも長野マラソンに参加いただいたということです。報道関係ではかなりの露出がございまして、韓国の聯合ニュース等にもすでに配信されましたし、日本のメディアの方でもかなりニュースが流れていす。

ロングトレイルへの期待

ロングトレイルにつきましては、皆さんご承知だと思いますので説明については割愛させていただきますけれども、協議会もできまして、これからますます盛んになっているところとございす。環境省の方でも東北沿岸の方にみちのく潮風トレイルというのを開設に向けて取り組んでいるところとございす。トレイルに関しての各地の取り組みの状況を幾つか紹介させていただきますけども、例えばこのウルトラトレイル・マウントフジ。これはいわゆるトレイルランですけども、こちらの取り組みとして非常に特徴的なのは、10個の市町村が連携して、全てが主催になって取り組みをしたという大会とございす。これはヨーロッパで名前がウルトラトレイルというモンブランの姉妹大会として開設されました。1,000人くらい参加いただいているんですけども、特筆すべきなのは、そのうち約200人が外国人の方が来ていると。非常にトレイル、トレイルランに関しましては日本人が思っている以上に外国人の方の関心が強いということが分かると思ひます。これにつきましては、来年も開催予定と聞いておりますので、我々も注目していきたいと思ひます。そのほか、九州ではロングトレイルという言い方はしていませんが、オルレという形で、いわゆるロングトレイルの取り組みを進めております。オルレというのは韓国語からきておひまして、トレイルの意味です。済州島がオルレということで非常に有名とございす。九州は韓国と地理的に非常に近いことがありまして、親近感をもってもらうためにオルレという言い方をしております。これにつきましては、九州の運輸局と九州観光推進機構の方で取り組みをしていただいております、全部で今8コースですね、オルレという形で設けられているということとございす。そのほか観光庁の方で今年度、官民協働した魅力ある観光地の再建・強化事業というのをやっております。地域の観光資源、そこに専門家の方、目利きを派遣して商品化につなげていくという取り組みを行っております。全国から613件の応募がございまして、今年その中から78件の取り組みを選定して行っているところとございすが、見ていただくと分かるように、スポー

ツツーリズムのものに関しましても、相当数取り上げられております。例えば、ロングトレイルでいえば中標津のロングトレイルのプラットフォームモデル事業とか、スノーカントリートレイル、または高島トレイルのビワイチ！トレイルランニング。こうしたものが採択されて、現在行われているところです。文化財、文化とも兼ねたトレイルという事業もございまして、これは青森県のものですけれども、青森ヒバ、こうしたものを題材としたトレイル、モニターツアーを組んでいまして、青森ヒバ材とか太宰治の関連とか、そうした文化的な内容も盛り込んだ形のモニターツアーを行っているところです。これらにつきましては、観光庁の方で専用のホームページの日本タビカレッジ、仮想の大学というような形でウェブサイトを開設しております。

現在の政府の状況ですが、10月4日に内閣官房のほうにオリパラ室、いわゆる大会推進室というものができました。ここに関係省庁がぶら下がる形で各政策を調整していく形になります。ただ本格的には、左側にございますように東京都とJOC、日本オリンピック委員会の方で大会組織委員会というのを2月に発足させることになりました。基本的にはここが全面的にコーディネートすることになりますので、こうしたところとよく連携しながら、大会の円滑な実施に向けて取り組みを進めてまいりたいと思っております。観光庁の取り組みですが、やはりオリンピック対応というのも非常に大きな課題ですので、庁内に大会準備室というのを設置いたしました。そして今後は、10月に関係者の方を集めて一度、説明会というのをさせていただきましたけれども、随時情報交換・意見交換というものを行ってまいりたいと思っております。私の方からは以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

パネリスト 磯野 剛太 公益社団法人日本山岳ガイド協会 理事長
(安藤百福センター専門委員、アトラストレック代表取締役)
木村 宏 NPO 法人信越トレイルクラブ 事務局長
(信州いいやま観光局事業課長兼企画開発室長)
前川 正彦 NPO 法人高島トレイルクラブ 会長
(マキノ高原観光取締役、日本山岳ガイド協会認定山岳ガイド)
節田 重節 日本ロングトレイル協議会会長
(安藤百福センター専門委員長、日本山岳会副会長)
田中 正人 スノーカントリートレイル
(アドベンチャーレーサー、イースト・ウィンドプロダクション代表)

【以上、五十音順】

コーディネーター 中村 達 日本ロングトレイル協議会代表委員
(安藤百福センター副センター長、アウトドアライフデザイン開発機構代表理事)

まとめ 岡島 成行 安藤百福センター センター長



右側より田中氏、磯野氏、木村氏、前川氏、節田氏、中村氏

中村 2年前の7月にロングトレイル協議会を、7トレイル団体が集まって作りました。そのときに、バックパッカーで作家の加藤則芳さんが来られ、アドバイザーに就任いただきました。その前に電話で「加藤さん、こういうものを作ると面白いと思うんだけど、どう思う？」とたずねたら、加藤さんは大賛成で、「僕も一緒にやりたい、やりましょう」と。「僕はアドバイザーがいい」とおっしゃっていました。

その加藤さんが今年の4月に、お亡くなりになりました。本来ご存命であれば、ここに座ってもらうのですが、大変残念なことでございます。

今日は、加藤さんの奥さまをご招待しました。奥様から一言、ご挨拶をお願いします。

加藤 加藤則芳の妻です。加藤奈美と申します。今日はお招きいただきましてありがとうございます。加藤則芳が亡くなりまして7カ月たちましたけれども、こちらにお見えの皆様には、存命中は本当にお世話になった方々がたくさんいらっしゃると思います。ありがとうございます。ロングトレイルは彼の大きな夢でしたし、日本中にたくさんのロングトレイルができて、魅力的なロングトレイルができて、それがたくさんの人を招いて、そして自然保護と地域活性とか、人と人をつなぐ道として、みんなの中に浸透していけばいいな、というのは彼の大きな夢でしたから、こういったロングトレイル・シンポジウムを重ねて、たくさんの人が知るロングトレイルが根付いていけばいいな、と私もいっしょに思っています。今後ともよろしくお願い致します。

中村 それでは早速シンポジウムを始めたいと思います。簡単にご紹介をします。一番左端が冒険レーサーで有名な田中正人さん。特にパタゴニアのレースはBSですと放送されています。次に、磯野剛太さん。日本山岳ガイド協会の理事長さんです。そして木村宏さん、長野県の北部・飯山市にある信越トレイルを運営している団体の中心人物の一人です。本職は飯山市の観光協会の幹部です。それから、滋賀県北部、高島トレイル代表の前川さんです。そして節田さん、ロングトレイル協議会の会長と同時に日本山岳会の副会長です。では節田さんから自己紹介と、今自分がやっていることとロングトレイルの関わりをお話しいただきたいと思います。

節田 皆さん、こんにちは。「山と溪谷社」という出版社で40年間、山と遊んで給料をもらっておりました。私も中村さんも後ほどお話いただく岡島さんも、元を正すとみんな、いわゆる「山屋」なんですね。登山活動を学生時代から長年続けてきた連中なのですが、だんだんそれなりの年になりましたので、高い山の雪よ岩よという世界は難しくなってきたものですから、このような運動を数

年前から進めておりました。先ほども言いましたように、我々が考えている以上に大きな賛同の声を頂きまして、驚いております。

前川 滋賀県から参りました前川といいます。NPO 法人高島トレイルクラブというのが琵琶湖の西北にございます。滋賀・高島プロガイドクラブという、プロの山岳ガイド 15 名の代表もさせてもらっています。専属で全国の山をガイドしているのが 2 名、アルバイト的に高島トレイルをガイドしているのが 13 名という形で、旅行会社等との契約並びに自社企画のツアー、それからコアなツアー、岩登りやシャワー・クライミングをしたり、といったツアーを提供しています。関西へお越しの節は、高島トレイルへぜひ一度お越しください。

木村 信越トレイルクラブの木村です。たぶんあの山に登ると、信越トレイルが見えるんだと思います。13 年前に、このロングトレイルというのを初めてやってみようということで、スタートしています。冒頭に奥様からお話がありましたが、加藤則芳さんに 13 年前に出会って、「理想のトレイルを作っていこう」と、この信越トレイルに心血を注いでくださいました。正に加藤則芳さんの思いがこの信越トレイルに詰まっています。それと報告ですけれども、その心血を注いだトレイルの麓で眠らせたいというご家族の思いがあって、トレイルのセクション 4 の麓にありますお寺に樹木葬という形で、先々週ですか、加藤さんのお骨が眠りました。そういう意味では「ロングトレイルの父」と我々はぜひ呼ばせていただきたいなと思っていますが、信越トレイルを訪ねる中で、このお寺にもぜひお参りいただきたいと思います。

磯野 日本山岳ガイド協会の磯野でございます。節田さんや中村さん同様に山屋のなれの果てでもございますけれども、現在、日本の山や自然のガイドの、プロガイドのスタンダード化、それから各地域社会の中でガイド業を営んでいる方たちを、さらに一緒に取り込んでいく活動をしております。最近では屋久島あるいは月山の山麓ですとか、幾つかの新しい仲間が増えつつあります。私自身も長年、各国のいろんなトレイルを経験しております。例えば宗教の道でいいますと、スペインのサンチャゴに参りますカミーノ・デ・サンチャゴという道ですとか、チベットの奥地のカイラス山を一周するようなカイラス・トレイル。さらに、巡礼の道であるインカトレイル、またアメリカの典型的なトレイルであるジョン・ミューア・トレイルです。それからヨーロッパでは、ツール・ド・モンブランですとか、ツール・ド・モンテローザ、あるいはオートルートというような、かなり長いロングトレイルというのがございますけれども、本日はそういうことも皆様にお話しできるかと思います。

田中 スノーカントリートレイル実行委員会の副委員長をさせていただいています、田中正人と申します。スノーカントリートレイルというのは、新潟県・長野県・群馬県の 3 県 7 市町村にまたがる雪国観光圏という広域事業があるのですが、

その7市町村を全て巡る約280kmのコースを設定させていただいております。今年、オープニング・イベントをして、夏から秋にかけて期間を設けて、事業を進めさせていただきました。お一人全コースを、セクションハイクという形ですが、踏破していただくことができました。とりあえず動き出してみたのですが、すけれども、そこで感じたことは、「なんで道を歩くことというのは、こんなに難しいのだろう」ということで、様々な問題点・課題がたくさん出て来まして、また初心に戻ってしっかりやっていきたいなと思っています。

中村 スノーカントリートレイルに関しては、また後で少し質問させてもらいたいと思います。ちょうど去年の今ごろ、10月、11月の初めでしたよね。『日経トレンドィ』にロングトレイルが今年ヒットするもののナンバー1に選ばれた。びっくりしました。その後、アウトドア関係の専門メディアや週刊誌も含めて、ロングトレイルという特集がどんどん出た。しかし、実際には、ロングトレイルというのは1年や2年でできるものじゃない。かと言って、歩いている人が「俺はロングトレイルを歩いている」などと思っている人は、ほとんどいないというのが僕の実感です。世の中がロングトレイルのブームですが、前川さん、何か変化ありましたか？

前川 私どものトレイルは里山、最高峰でも1000mない山を80kmつないでいます。11回くらいのセクションに分けて制覇するというのが、一つのテーマです。やはり、山ガールや山ボーイ、中高年の方、家族連れの方など、お客様は確かに増えました。ただ、メーカーさんがウェアや靴を売ったときには、きっちりと山のことを説明してほしい。道に迷う人などが当然増えてきています。

中村 その小売店のスタッフも山の知識が乏しいから。売るのはいいけれど、道具の使い方とかが説明できない、ということですか？

前川 そうです。服を売ったときに店員さんが「こうしたら山は安全ですよ」「これは危険ですよ」というような話を交えながらビジネスをしていただけると、もっと底辺が上がるかなと思います。

中村 ロングトレイルがブレイクし始めて、お客は何%くらい増えたの？

前川 昨年で約4万5千〜5万ですけども、ツアーに関しては、今まで3千人くらいあって、去年は2600人くらいです。自社ツアーと旅行会社のツアーが、特に増えている。旅行会社が募集してトレイルを歩くというツアーが増えているということですね。

中村 磯野さん、ロングトレイルに関して、一般市民のニーズは感じていますか。

磯野 信越トレイルさん、高島トレイルさんのように旅行商品化しているものが多い見受けられます。これは日本の旅行業者の性と言いますか、あるいは日本のお休みのシステムの性と言いますか、非常に短期間で切り取り型の旅行が多いです。例えば高島トレイルの場合も、大阪・関西発着の1日日帰りを何十回もや

るというパターンなものですから、ある意味ではロングトレイルの醍醐味というのは、ほとんど味わえないものが多いですね。旅行会社も普通の日帰りの山登りと同じ感覚で捉えているケースが、まだまだ多いのが事実だと思います。

中村 ツアーで募集した場合、ロングトレイルという概念がお客さんにはない、ということですね？ 信越トレイルはどうでしょう。

木村 『日経トレンディ』以来、お問い合わせが圧倒的に多くなってきた。事務員を置いておかないと、対応できないような日もある。とてもカラフルな雰囲気でお越しいただいたり、ファッショナブルな感じでいらっしゃる。女性一人という方が多い。テントサイトをオープンしましたので、バックパッカーも、如実に増えております。それから、視察に来る数が非常に多くなっています。関心がすごく高くなっているなと感じます。卒論にロングトレイルなんていう、考えられないような卒論を書くような学生さんもいらっしゃいます。飯山線というローカル線にバックパックを背負って列車に乗ってくる。買い物のお爺ちゃんお婆ちゃんに交じって学生やカラフルな人たちが乗ってきて、「ああ、いいなあ」というような、そんな雰囲気になってきました。

中村 報道が先行したんだけど、影響はやっぱり出てきているということですね。ある山岳専門の出版社が信越トレイルへ行く企画をしたら、すごく集まったんですって、若い女性ばかり。そこで節田さん、日本山岳会も高齢化がすすんでいますね。会員はロングトレイルに関心があるのでしょうか？

節田 日本山岳会は2年後に110周年になります。日本で一番古い山岳会なんですが、平均年齢が確か65歳くらいです。それでも、山に若者が戻ってきているように、日本山岳会の中にユースクラブというものを作りまして、たぶん40歳以下の人たちだと思いますが、かなり増えてきております。ロングトレイルについての関心というのはまだです。自分は頂上を目指したいという人たちが多いと思います。

中村 先ほど市村先生からお話が合ったように、フットパスは低地がずっと続いていくところもありますが、日本のロングトレイルというのは、すぐに山にぶつかっちゃう。だから、ロングトレイルといえども日本の場合は、山の要素が非常に強いというのが特徴だと思います。田中さん、スノーカントリートレイルは何kmでしたっけ？

田中 280kmです。

中村 とても長いですね。新潟と長野にまたがって群馬へは行っていくという。いろいろと事前のイベントを多く開催されて、ネームバリューは高いと思うんだけど、実態はどうですか？

田中 名前の方が先に出ていて、実態はまだそれに追い付こうとしている段階です。コースも、ほとんど舗装道路の部分もあれば、かなり本格的な山岳エリアもあ

ります。「初心者の方は、このエリアはご遠慮ください」とか、「行くのであれば経験者の方とか、もしくはガイドとの方と一緒に行ってください」というような呼びかけをしっかりとしなければいけないし、地元の認知とか、さらにそれ以前にいろんな道を管理・監督している行政機関とかとの調整、国有林が多く、また国立公園内のエリアも多いので、環境省や林野庁の関係、特に林野庁との調整が意外と難しいですね。

中村 群馬と新潟と長野と 3 県結ぶトレイルですね。

田中 そうですね。群馬県はみなかみ町だけで、長野県は栄村だけですね。あと 5 市町村が新潟県ですけども、今は事務局はみなかみ町の観光協会内に設置させていただいて、そこが主導で頑張っています。

中村 全国でロングトレイルを作ろうと思っている所が相当あるんです。九州から北海道まであります。そこで先発の皆さんのご意見を聞いていきたいと思います。八ヶ岳山麓スーパートレイルという、200km のトレイルの代表の米川さん。今年、スーパートレイル歩く人は多かったですか？

米川 はい、非常に多かったです。私どもでガイドが足りないくらいだった。東京からですと日帰りが主で、かなり忙しい。1 泊で計画していただいたんですけど、人が集まらず、日帰りですとけっこう年配の方は集まる。で、忙しいということになります。

中村 じゃあ、日帰りだと地元にお金が落ちるのが…。

米川 1 泊しませんので、温泉に入るくらいで、あとは何も落ちないです。ガイド料だけです。いや、弁当も売っているんですけど、皆さん自分でお持ちになる。

中村 高島トレイルの弁当の売り方を、ちょっと教えてください。

前川 初めてのツアーのときは、弁当と地形図、必要な場合はガイドブック、それとガイド料ですね。そして帰りに道の駅に必ず寄る。これがパッケージなんです。これを守っていただくところと契約してます。それくらいしっかりと縛りをした、価値観を付けています。地図は売れますね。来た数だけは地図が売れていく。80km 歩いたら踏破記念として、非常に乾きが良くて、今売れてるドライウェアみたいなステテコ、山が印刷されているんですが、それをプレゼントする。また、トレイルパスポートいうのを作って、区間ごとにはんこ押して、全部貯まったらそれをプレゼントするんです。

中村 さすがに近江商人ですね。信越トレイルクラブは、お客さんからのお金を頂く方策は何かあるんですか？

木村 お弁当類は確かに斡旋をするくらいのことにはしていますし、踏破章等も発行はしているんですけども、そんなに積極的ではなくて、またこれは高島トレイルに習いに行かなきゃなあというところなんです。ステテコじゃなくて、うちの伝統産業は仏壇でして、かなりいぶし銀の世界で、奥手な方ではございます。

- 中村 磯野さん、ガイドの取りまとめとツアーの会社と両方やっておられるんですけど、「お金が落ちないんですよ」というところに、何かいい方策がありますか？
- 磯野 トレイルの土俵の違いで、マーケットに介在する顧客層の出身地の違いもあるかもしれません。関西はいわゆる大阪のおばちゃんがいっぱい来まして、それはもう徹底的に演技をしないと商売にならない。東京のお客さんとは商売のやり方が違う。それと、さっきの短時間の問題というのは、これからの旅行業にとっても実は大きい問題です。国内旅行業では今、バスツアーが圧倒的に強い。安くバスで行ける、日帰りでもなんでも付いているというので、競合しておりまして、この競合が、旅行業そのものの本質的な良さを、どんどん落としていく可能性があるんです。山とかウォーキングというのは、本来それには合わない分野ですね。日本人がもう少し滞在型で、宿泊をきちんとして、のんびり歩く。あるいは登るというような土俵を、どこでどう作るか、そんな感性がどういうふうに啓発できるかを考えております。
- 中村 霧ヶ峰・美ヶ原・中央分水嶺は約 40km ですね。代表の高橋さん、今年のトレイルの状況をお話してください。
- 高橋 うちはロングトレイルという名前の中では 38km しかない一、番短いトレイルコースです。ただ皆さんの地区と違うのは、ほとんど山岳地帯で、歩き始めが標高 1,300m で、最後が 2,034m、平均標高が 1,700m ですから、基本的に水がないんですね。500 リットルのタンクで水を運んで、自家発電でやっている休憩所もある。旅行会社は水が欲しくて事前に相談に来るわけですが、「貸してほしかったら、冬泊まり 3 本、夏泊まり 2 本を保証してほしい」と、はっきり言います。日帰りのツアーのお客さんだけで、1 日にバス 6 台も 7 台も来ると、それで浄化槽の能力をオーバーしちゃう。信州でも真ん中の地域は、もしかしたら近江よりも厳しい商売をやっているかも知れない。
- 中村 人が増えてくるとロングトレイルで、そういう問題が起こりますね。北海道のランチウェイ 70km が去年開通して、私も歩いて来たんですけど、すごくいいトレイルですよ。牧場をずっと歩くトレイルですね。ところが難しいのは、あまりたくさん来てもらおうと口蹄疫の問題とか、牛が驚くとか、牧場に迷惑がかかる。問題がいっぱい出てくるんですね。たくさん来てほしいという気持ちと、現実的な問題が発生してくる。節田さん、歩かれてどう思われましたか？
- 節田 北海道の場合はおそらく、夏に限定していると思うんですよね。そうすると余計、負担が大きいのかなと思います。今のところ北根室は、佐伯さんという牧場主が牧場の仲間を説得して、なんとか通らせていただいています。素晴らしいトレイルなんですけども、いずれ難しい問題が起きるかなと思います。後半は登山道が整備されておりまして、西別岳から摩周湖にかけては、山のコースとして非常に素晴らしいコースです。

中村 大分の国東半島のロングトレイルが今年開通すると聞いています。国東半島峯道ロングトレイルの方、トレイルを説明してください。

木田 実は来週、11月30日がオープンなんです。九州初ということで、「やろう！」ということで盛り上がっています。10コースの中で、今回は2コースだけをオープニング記念としてやるということになっております。大体1コースが13～14km程度、全体で10コース、130km程度になっております。

中村 管理者・運営者の主体はどうなっていますか。

木田 今、ロングトレイル協議会を作って、2市でやっております。道は1,300年来の、天台宗の僧侶が歩いた峯道をたどりながら、お寺を巡るようなコースです。今回、平成25年度の予算を、私の地元の自治体で1千万円の予算を組んで整備をし、それにまた県も追随するという形です。

中村 そのほかにもたくさん計画が進んでいます。白山の白川郷を中心にトレイルを作ろうという構想があり、委員会ができたと聞いています。トヨタ白川郷自然学校の浅野さん、どうですか。

浅野 白川村は、合掌造り集落が世界遺産になっておりまして、現在でも年間140～150万人の方々が来られますが、残念ながら日帰りで1～2時間の滞在が多く、すぐ次の高山や金沢の方に行ってしまう。実は、合掌集落以外にも古い街道があります。白山の東の麓にありまして、高い山から里山まで、自然環境を背景にした伝統文化が残っているところです。それをぜひとも活用して、滞在時間を延ばしていただいて、地域の振興にもつなげたいと考えています。手始めに、白山の東の麓に白水の滝という、昔は華嚴の滝や那智の滝に並ぶ有名な滝だった所へ到達するための古い道を発掘することから始めようということで、白山、白川郷のトレイルクラブというのが、地元で発足致しました。その事務局を私ども自然学校でやらせていただいています。もう一方は、白山のロングトレイルということで、4県合同で長距離トレイルということも考えていこうとしています。

中村 トレイルを作るのに皆さん一番苦労されるのは、地域とのお付き合いですね。ある県と隣の県が一緒にやる時に、戦国時代の戦の話を持ち出してくることがある。いまだにそんなこと言うかなあ、と思うのですが。県をまたがっていくのは、苦労が多いと思うんですが、そのへんはまだこれからですね。

浅野 これからの問題ですけれども、その4県には国立公園というつながりが元々あります。白山国立公園というのは、全国の国立公園の中でもわりとまとまりがいいところで、4県の連携はほかの地域よりも良いんじゃないか、と期待はしております。

中村 浅野さんは元環境省の官僚なんです。だからまあ、そのへんはうまくやられるのかなと思います。木村さんのところは今、新幹線が来ると言って、それで盛

り上がっておられると思います。トレイルで地域連携というのは、実際にはいかがですか。

木村 信越トレイルは信州と越後、長野県と新潟県のまさに県境にルートがありますので、周辺には 150 集落ありまして、計画の段階からまず集落に入って、「こういう道を造ろうと思うんだけど、どうだろうか？」という協議を始めたのと、10 市町村ありましたので、長野・新潟両県の市町村の皆さんに集まっていたいて、やるかやらないかから議論をした記憶があります。市町村の中ではかなり温度差がありましたので、それをどういう共通の目標を持って前に進めるかということ数を数年続けて、そのあと県が、特に長野県がいろんな形で支援をしてくださった。直接信越トレイルにお金を出したわけじゃないんですが、雇用を生むための費用とか、自然の中でこういった新しい取り組みをすることに対しての助成事業をしていただきました。決定的だったのが、阿部知事と新潟県の泉田知事と協議をする中で、「信越トレイルは両県共通の重点観光の目玉にしていきましょう」と握手をしていただいたことです。今は両県をまたいで協議会もでき上がっています。

中村 スノーカントリートレイルは 3 県にまたがりますから、地域連携って相当やらなきゃいけないと思うんですが、進捗状況は。

田中 このロングトレイルの事業を大々的に打ち出して、いろんな方に来てもらうとなると、トレイルを管理する、監督する機関の立場としては、いろいろ問題があるということで、林野庁とか国の機関としては統一して安全管理をするという問題があります。基本的には国の土地なんですけども、各自治体に道を借りてもらって、そこで全部責任を持ってやってもらわないと難しい。たぶん、これは全国的な問題かなとは思っています。

中村 スノーカントリートレイルとしては、主導というのはどこが発揮しているのでしょうか。どういうふうに主体的に動いて、自治体をいかに説得して、仲間に入れるかっていうのは、大きな課題がありますよね。

田中 最初は行政主導ではないので、それにどう行政関係が協力してもらえるかっていうのが、なかなか難しい課題ではあります。

中村 地域連携ということで、今のトレイルは行政の支援が欠かせないと思うんですけど。高島市の場合はいかがですか。

長瀬 高島市役所の長瀬と申します。高島市は平成 17 年 1 月に合併しまして、トレイルの構想が持ち上がったのが平成 18 年です。平成 18 年から 22 年までの間は整備だけで、約 3 千万円程度のお金を入れております。それに伴って、県からも特区事業という認定も併せて受けまして、それで約 900 万円のお金を入れさせていただいています。地域の連携につきましては、前川さんの高島トレイルクラブが主体になっていただきまして、福井県の美浜町とか京都府の美山町の

方からも問い合わせがありますし、近県や地域につきましても、協力関係ができていていると思っています。

中村 高島市というのは琵琶湖の北西の方にあります。中央分水嶺の高島トレイルを超えれば、もう福井県です。高島は観光の目玉って何なんですか？琵琶湖はあるけど。高島トレイルの関係者は「トレイルが中心」と言っておられますが。

長瀬 観光の目玉というのは、滋賀県の長浜とか彦根、大河ドラマでよく話題にのびります地域と、まるっきり逆。歴史といってもあるんですけど、目立たない。その代わり自然がある。全国山の百選のうち 13 カ所もあり、歴史的文化景観というのもあります。それと田舎体験ですね。それを生かした観光。その 1 つの目玉がロングトレイルの高島トレイル、という位置付けをしております。

中村 トレイルで婚活というのがあるそうで。前川さんところはやっておられる。

前川 1,000m 以下の山を案内していると、景観だけでは満足がいただけないので、いろんなイベントをやろうということで、「トレッキングで友達作り」というので始めたけれども、「一生ものの絆」というので、第 2 弾をやりましたら、なんと、女性の方は募集 20 名出したら、3 日でいっぱいになりました。男性は全く来ないですね。「どうしてかな」って思っていたら、「山がきついと男は来ない。フットパスにすればいっぱい集まる」っていうことを聞きまして、あ、なるほどねと思いました。ただ、人は集まるんですけど、まだうまいことって結婚までいったってような事例がございません。

中村 信越トレイルは婚活に限らず、イベントはどのようなものですか。

木村 高島ほど派手ではございません。なんせ仏壇の街ですから。とはいえ、バックパッキングでスルーハイクをするイベントを仕掛けてきています。それと外国人、ヨーロッパの人たちを考えています。京都・奈良、それから黒部ゴールデンルートというのがあるんですが、その次にトレッキングルートを歩いていただく層を狙おうということで、モニタリングをしています。

基本的には英語版なんですけど、リーフレットやウェブサイトも整えまして、外国人に向けたトレッキングルートの普及というか、誘客をしています。もう 1 つ、今年から修学旅行でこのトレイルを歩いてくださる学校が出てまいりました。都会ではなかなか味わえない里山とか人と自然の触れ合いを、トレッキングルートを歩きながら教えたいということです。追随する学校も出て来そうな気運です。高島は派手にいってますので、信越は地味にやっていますが、そういう効果は出てきています。

中村 磯野さん、そういったものに旅行社はこういった対応をされるんですか。そういうものって商品になるんですか？

磯野 旅行会社そのものがそれを商品にするということは、あまりないですね。それに今の婚活みたいなものは、むしろ地域社会が対応して呼び込むという形がい

と思います。ただ、私どもはロングトレイルの活性化にあたっては、整備状況というか、水の問題、キャンプ地の問題、指導標などに注目しています。日本で、トレイルの指導標は、全国ある程度同じ標識であってほしいなと思います。各国語でもある程度整備されるというふうに、整備状況と一緒に伴って開発されていくと、非常に付加価値も高まり、外国人も来るようになって、日本の若い皆様も来て、活性化すると思います。

中村 トレイル・ランニングはどうですか。アメリカでは、トレラン人口はものすごく大きいです。日本で今、5万人から10万人ぐらいで、まあ20～30万人が延べ参加者かなあと思われますが、アメリカでは250万人くらいと言われています。このトレイル・ランニングについて、どういうふうに考えておられるか、ご意見聞きたい。

田中 トレイル・ランニングはどんどん増えているけども、マナーの問題とか事故の問題とかたくさん出て来る。山を歩くことと、走ることとの違いって何だろうって考えた場合、これもなかなか難しい問題がある。今のところまだ実態としては、トレイル・ランニングされている方の質が良くて、「気を付けなければいけない」という話はよく出ていますが、これからどうなっていくか分からない。トレイル・ランニングやっている脇を、中高年のハイカーたちが追い抜くというケースも多々ありますし、いろんな楽しみ方があるということで発展していけばいいんじゃないかと思います。

中村 磯野さん、ガイド協会の立場ではどうですか。

磯野 トレランに関してはヨーロッパでも北米でも盛んなんですが、日本でも盛んになってきています。山岳トレランも、有名なハセツネカップをはじめたくさんあるのですが、最近ハセツネのトレランもかなり増えてきてます。特に中高年の登山者の中からは「トレイルランの人たちが通るので怖い」とか「危ない」とかいろんなお話をいただきます。しかし、トレランの人たちは、私が拝見している中ではなかなかマナーも良くて、登山者をよけて走ります。ツアー登山に来られる方というのは、自分たちのツアーだけが全ての世界だと思っている方が意外と多いものですから、そういう意味では、その範疇に入っていない人に関しては、非常に違和感を覚えてしまう。でも、犬を連れて散歩している方でも、マタニティの方でも、どなたでもお互いに共存しているということと同じだと思うんですね。旅行業もガイド業もそうなんですが、取り込もうとするあまり、逆に排他的になっていくのと同じように、種目が違えばお互いに排他的になりかねないというのを、もう少しニュートラルにしていきたい。指導標とか水とか、あるいは泊まる所とか、そういうところから明確に決めていって、あとはお互いに安全のマナーがきちんとしていけば、いろんな種目が混在できるでしょう。自転車もあるでしょうし、いろんなものがあると思います。ただ、

大会となると大量な人数になりますので、それはそれなりにお互い譲り合って、ある地域はその大会のために封鎖される時期があるということは、前もって明示されればいいと考えております。

中村 木村さん、お願いします。

木村 信越トレイルクラブの立場としては、大会・イベントのトレイル・ランニングはお断りするという立場を取っています。考え方としては「歩くために作ったトレッキングルートだ」という考え方で、トレッキングルールの1番に「トレイル内を歩きます」と書いてあるんです。

前川 高島トレイルに関しましては、団体とかのトレランはお断りします。ただ、全部駄目っていうのもこれは酷な話やと思うんで、モニタリングツアーの中にあえて20kmのトレランのコースを造りました。高島市は森林率70%という、どこでも山ばかりなんですけども、「そこの、空いてる山があるやないか」「せっかくなんで、トレランの人を歓迎できるようなステージが出来へんかな」ということで考えました。高島トレイルとは完全に別ラインになりますけれども、朽木という所の道の駅からスタートして道の駅へ帰って来る、車も置いて、帰って来たら温泉もある。そんな中に新しく20kmのコースを造らしていただきました。「トレラン専用コースですよ」というようなPR部分も出して行きたいと思っています。

節田 私はトレランについては、先ほど田中さんがおっしゃった通りだと思います。いかに共存していくかということが大事かと思います。高島みたいに商売上手で、両方取り込めるようなコース設定が出来ればいいと思うんですが、登山者が走ってるのか、走ってる人が山へ来てるのか、そのへんはつきり見極めないといけない。例えば鎖場があつて渋滞するような所とか、あるいは雪渓があつたり、万が一ケガしたりしたときどう対応するのか。それらも含めて、登山者と同じように自己責任でどう対応していくかっていうのを考えていただきたい。いずれにしろ、共存できないことはないと思っています。

中村 そろそろ終わりたいと思いますが、ロングトレイルというのは、今日お聞きいただいたように、ブームというか、やたら文字が躍っていますけど、実際にはまだまだ試行錯誤かなあという気がします。先ほど市村先生から、フットパスのお話がありました。完成までに数百年の時間がかかるんですね。例えば古道、高野山の道とか四国のお遍路は、千年以上の歴史があるんですね。その意味では、今のトレイルはせいぜい10年ですね。50年100年というふうな長いスパンで見たような道造りが必要です。ロングトレイルには地域貢献であるとか、教育であるとか、もちろん安全とか環境とか健康とかのコンテンツはあるんですが、時間がかかると思います。最後になりましたけど、東京農工大の学生の梅君は、卒論のテーマがロングトレイルだそうです。ちょっとその一端を

聞いて、終わしましょう。

梅 東京農工大の農学部 4 年の梅と申します。ロングトレイルに関しての研究をさせていただいています。まず、各地のロングトレイルがどのような過程で生まれて、それぞれがどんなコンセプトを持ってやっているのかなっていうのを見つつ、協議会がどんな役割を果たしているのかを見て、ロングトレイルというものが、まず運営者側から今後どのように進んでいって、新しい観光にとってどのような意味を持っていくのか、ということを勉強させていただいております。よろしくお願いします。

中村 ということを勉強している学生も出て来たという時代です。そろそろこのセッションを終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

中村 次に、岡島センター長にこのシンポジウムのまとめをお願いしたいと思います。

まとめ

岡島 皆さん、どうもご苦勞様でした。本日は小諸まで来ていただいて、本当にありがとうございます。非常に刺激的なお話をしていただきまして、すごく面白かったです。その中で課題もかなり見えてきたと思うんですね。中村さんもおっしゃってたように、これから長い間かけて造っていかなければいけない。第一に、日本の社会システムが、ロングトレイルをゆっくり 1 週間かけて家族で楽しむという仕組みにまだまだなっていない。休みもあんまり取れないし、集中してしまう。学校の問題もある。道の整備にしろ、トレランにしろ、結局自己責任が必要で、厳しく規制もしなきゃいけない部分もあります。人に迷惑かけない形で走ればいいと思うし、テントで泊まっても、糞尿の問題もあるし、ゴミの問題もあるし、そういう問題への対応や意識を社会全体で変えていかなければいけない。それからもう 1 つは、ビジネスの話と、地域づくりの話ですね。観光という話も出ましたが、地域社会をどうするかっていったときに、お金と物、これも大事ですね。学校も大事だし道路も大事だし、医療も大事です。でも、どこまで儲けりゃ気が済むのかというところもありますね。65 歳以上のお年寄りが 50%を超えたら限界集落で、「これはあと 10 年で滅びるだろう」と言われたのが 7~8 年前なんですけど、実は滅びてないんですね。けっこう元気なわけです。だから、都会で計測して「こうだ」と言っても、そうじゃない場合がある。なぜ元気かっていうと、限界集落のお年寄りは、限界集落に住んでいるんだけど 1 時間圏くらいのところに子どもたちがいる。行ったり来たりしている。限界集落の年寄りが死んだら、その長男が帰って来たりしているとか、いろんなやり方があって生きているわけで、ただ観光だ、ビジネスだっていうお金の方からだけ考えると限界集落は死ぬんだけど、そうではないです。やっ

ぱりそこで、我が国のそれぞれの地域が、どのような文化とどのようなものを抱えながらこれから生きていくのか、そこがちゃんとしてないと、いくらお客が来ても、先ほど言ったように壊されちゃったら終わっちゃうとか、そういうこともあると思うんですね。

ですから、「ロングトレイルはすごくいい機会だと思うので、自分の所にロングトレイルを造って人に来ていただきたい」、これは大事なことだし、いろんな国の人に来て、いろんな知恵を付けてくれたり、いろんな地域の話聞かしてもらったりするのは、大変良いことなんです。ただそこで、ぜひとも皆さん、羽目を外さないで、「自分の国・自分の地域をどこまで、どういうふうにしたらいいんだろう」と、何のためのロングトレイルなのか、そのところをしっかりとディスカッションしてください。その鍛え方が足りないと、おそらく瞬間的には、5年10年人が来ても、その後続かないということになろうかと思しますので、ぜひこういう集いでは、しっかりと議論してください。その上でスクラムを組めば、日本は変わりますよ。

もう1つ、先ほど市村先生のお話にあったように、イギリスではビジネスでやっていますか？あそこで。フットパスが、17万kmあるけど、ビジネスじゃないでしょ。それでもちゃんと動いているわけですね。だけど、ビジネスを加えてもいいわけです。問題はバランスですね。ロングトレイルで金儲けだけしようなんてけちな根性起こさないで、ロングトレイルで地域を品格のあるものにしようとか、ロングトレイルを結び付けて日本の国を良くしようと、そういう発想でもってやろうじゃありませんか。私も節田さんの指導の下、また中村さんに後ろから蹴飛ばされながら、お手伝いさせていただきますので、今後ともよろしくお願いします。ぜひ皆さん、いいロングトレイルを造っていきましょう。



特集2 自然体験活動指導者の課題

自然体験活動の指導者養成は現在、曲がり角にあると言われています。2000年に自然体験活動推進協議会（CONE）が設立されて以来、全国280以上の自然学校、青少年団体、自然保護団体などが共通の指導者制度を運営してきましたが、2014年からは国立青少年教育振興機構とCONEが共同で自然体験活動指導者の養成を始めました。また、スキー指導者や山岳ガイドなどの関連団体も指導者養成に関心を強めています。こうした中で、安藤百福センターは日本環境教育フォーラム（JEEF）からプロ指導者養成事業を引き継ぐとともに、CONEへの支援、スキーや山岳ガイド、ロングトレイルとの連携を進めており、日本における自然体験活動指導者養成の中心的役割を果たしつつあります。

しかしながら、欧米に比べて我が国は、自然体験活動そのものが未発達である段階で、指導者養成も社会的に認知されていない状況にあります。指導者養成と自然体験活動の普及とは車の両輪であり、両者そろって回転していかなければ、国民みんなが安く、安全で、良質な自然体験活動を楽しめるようにはなりません。

今回は、この課題を特集として取り上げ、多くの関係者の方々にお考えいただく契機となるべく、識者にお考えをまとめていただきました。

自然体験活動指導者の役割

岡島 成行(安藤百福センター センター長)

自然体験活動の歴史

日本の自然体験活動は、古くから子どもたちが成長する過程で集団的に伝承されてきた。親や祖父母、近隣の年長者など周囲の人々の経験に学びながら、子どもたちは兄弟姉妹友人たちと野山に出かけ、今でいう自然体験を楽しみながら人間としての知恵を身につけていった。自然体験は生活の一部であり、勉学の一部でもあった。大人に目を向けても、釣り、花見、巡礼、登山講などがあり、宗教的意味や遊び仕事といった形での自然体験が行われていた。

明治になると、ヨーロッパからハイキングや登山がレクリエーションとして日本に伝えられ、その影響で集団学校登山が始まった。さらに、キャンプや林間学校などにも広がった。1905年には日本山岳会が設立され、1911年には学習院で教育キャンプ「スキー術」が紹介された。1919年にはボーイスカウトがキャンプを始め、10年後にはボーイスカウト日本連盟が設立されている。1932年、YMCAが5週間にわたる長期キャンプを長野県で実施している。

第2次世界大戦後、すぐに登山、レクリエーションが回復し、1948年にレクリエーション協会、1951年には日本ユースホステル協会が設立された。1956年にはネパールのマナスル峰（8,163m、本誌の表紙写真）が日本人により初登頂された。1966年には日本キャンプ協会、1967年に日本オリエンテーリング協会が設立されるなど、自然体験は大きく幅を広げるようになった。民間の動きに呼応するかのよう、文部省は1959年、静岡県の御殿場に国立青年の家を、1975年には高知県・室戸に国立少年自然の家を設置した。青年の家、少年自然の家は地方自治体にも広まり、2011年時点で、国立27施設、公立516施設に広がっている。

それまで民間では青少年団体が活躍していたが、1970年代に入ると独立自営型の自然体験施設である「自然学校」が生まれ始めた。80年代にはホールアース自然学校、キープ協会、国際自然大学校、OBSなど現在も活躍している自然学校が続々と生まれてきた。

子どもたちが自然の中で遊べなくなったのは、経済の高度成長期以降といえる。都市化が進み、その都市化された場所で生まれ育った子どもたちには、すでに自然体験の様々な技術が伝承されなくなっている。すなわち、子どもだけでは山、海、川で遊べなくなってしまう、大人が助けて遊ばせる時代になってきた。青少年団体の多くは団体での自然体験だが、一般の親は自らの経験から、個人での自由な楽しみ求めるため、お客様として扱ってもらえて、融通の利く自然学校に流れたのだと思われる。

一方、大学では1969年から筑波大学で幼児キャンプが始まり、1975年には「野外関係学生の集い」が開催されている。一連の研究、実践をリードしたのは筑波大学野外教育学研究室で、大学を中心に幾多の人材を輩出し続けている。

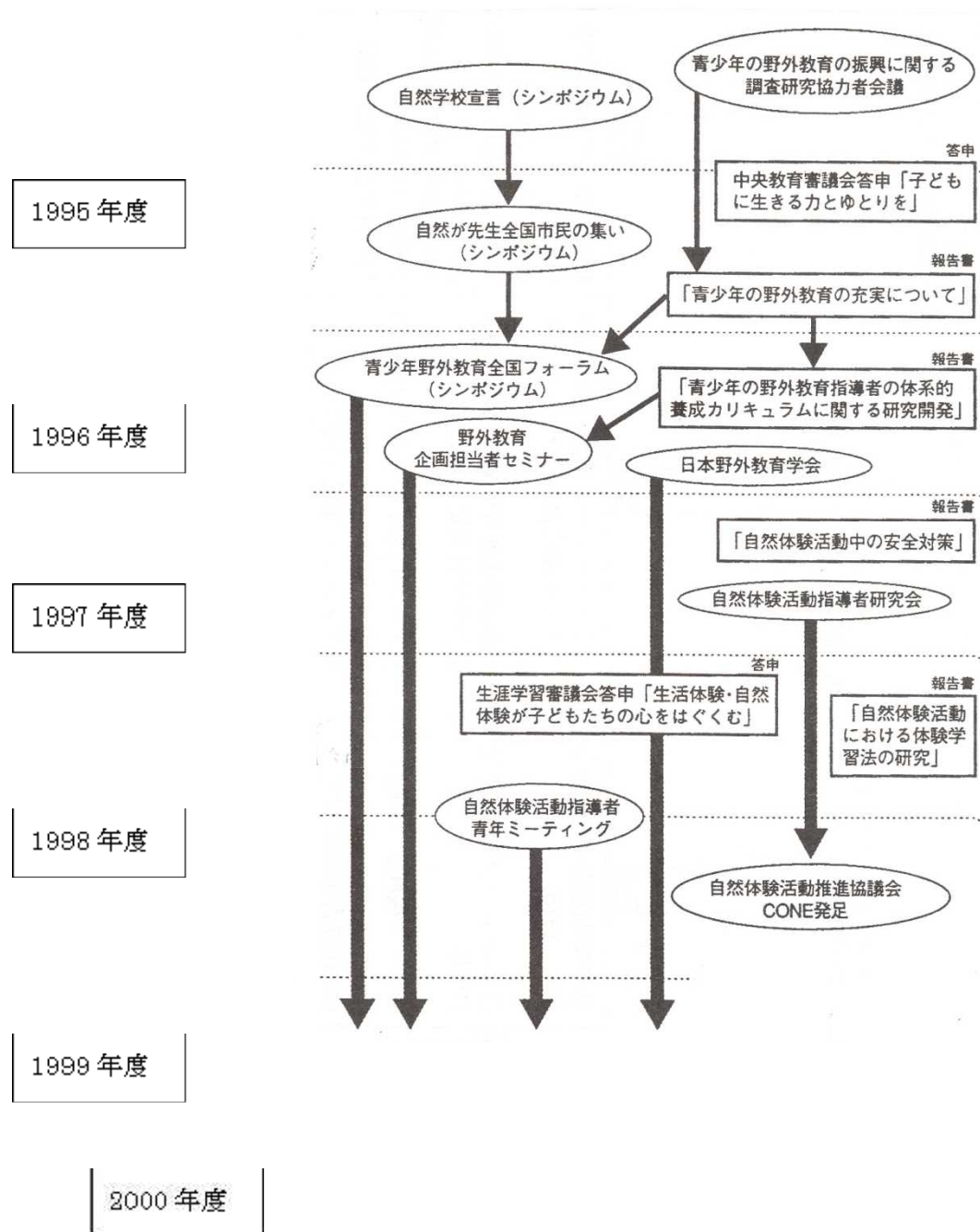
1987年9月、山梨県の清里に環境教育・自然体験という括りで全国から97人が集まり、第1回清里フォーラムが開かれた。そこでは、それまでとはやや違う形で、自然を通して環境教育を実践するというコンセプトをまとめ、自然学校を全国に普及していくことを決めた。翌88年、清里フォーラムに野外教育、冒険教育の活動家が合流し、現在言われる自然体験活動の形が見えてきた。これが後の日本環境教育フォーラム（JEEF）に発展する。

JEEFでは、当初から指導者養成を課題に挙げていた。質の良い自然学校の専従職員を確保するため、各地の自然学校が合同で指導者養成を行うことを検討し、長い準備期間を経て、1999年から「プロ指導者」の養成を始めた。実技としてOJTを6か月行い、その後大学院レベルの講義を2カ月で280時間、集中的に行うトレーニング・システムである。

青少年団体や自然保護団体でも指導者養成を行っていたが、1980年代になるとカヌー、森林インストラクター、ネイチャー・ゲームなど新たな活動が広がり始め、自然体験活動の指導者像が分かりにくくなった。このため、JEEFや青少年団体、自然保護団体などが集まって指導者制度の共通化を探り始めた。文部省の全面的なバックア

ップを受けて、全国から主要な団体が何度も東京に集まり、議論を進めた。その結果、2000年5月、自然体験活動推進協議会（CONE）が設立された。設立の主な目的の1つに共通の指導者養成システムの確立があった。

CONE 発足までの流れ



こうして JEEF のプロ指導者養成システムと CONE の民間指導者養成システムが一応の完成を見たが、ここには、筑波大学をはじめ各大学での指導教員や国公立の経験豊かな指導者は、ほとんど入っていなかった。この欠点を補うため、国立青少年教育推進機構と CONE との間で合同の指導者養成制度を作ることになり、3 年の準備を経て、2014 年 4 月から新制度が正式にスタートした。

新たな段階

CONE が設立された後、日清食品の創業者である安藤百福氏が CONE の活動を認めてくださった。子どもたちのための自然体験活動にご理解をいただき、名誉顧問に就任していただいた。安藤氏は CONE の年次報告に対し、特に指導者について関心を持たれ、① CONE の支部長にシニアを充てて、ボランティアとして全国展開すること② 指導者養成、中でも上級指導者が大事であること、の 2 点を強調されていた。安藤百福氏がお亡くなりになった後、日清食品社長の安藤宏基氏が百福氏の意向を汲み、日本の子供たちを健全に育てるため、一般指導者を指導する上級指導者の養成を主とする教育施設を設立する決断を下され、2010 年 5 月、長野県小諸市に安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター(略称・安藤百福センター)が建設された。

安藤百福センターでは当初から JEEF のプロ指導者養成も支援しており、CONE の上級指導者養成支援と合わせて、日本の自然体験活動全般の上級指導者養成の中心的存在になった。JEEF のプロ養成については、当初は共催という形をとっていたが、後に JEEF から事業を引き継ぎ、2014 年から安藤百福センターの主催事業となった。

また、山岳ガイド協会やスキー指導員が安藤百福センターのプロ養成制度に興味を持ち、特に座学部分のプログラムについて参考にしたいという意向を示してきた。山岳ガイドやスキーの指導者は技術指導に特化することが多く、心理学、環境問題など現代人に必要な教養についての勉強が不足がちだという。上級指導者となれば、たくさんの指導者の尊敬を受けなければならない、自ずと教養、人格が必要とされる。このため、山岳ガイド協会と日本スキー連盟の有志が安藤百福センターで研修事業を行うことになった。また、山岳ガイド協会では、自然体験活動に特化した新たな資格である「自然ガイド」を設置した。

安藤百福センターでは近年、各地で盛んになっているロングトレイルについても重要な自然体験活動だと認識し、安藤百福センターを中心としたトレイルの開設や八ヶ岳一周と浅間山一周のトレイルと結ぶトレイルをオープンしている。2013 年には第 1 回ロングトレイル・シンポジウムを安藤百福センターで開催した。

一方、2014 年から発足した新たな指導者養成制度は NEAL と呼ばれ、CONE が作ってきた指導者養成システムをほぼ踏襲している。この部分については 74～78 ページの「自然体験活動指導者 (NEAL) 認定制度について」に詳しく掲載されている。NEAL が発足し、官民一体となった指導者養成事業がスタートしたが、これに筑波大

学を中心とする野外教育学会の主要研究者たちが賛同し、研究活動を通じて支援する動きが始まり、NEAL は名実ともに日本を代表する自然体験活動指導者養成制度となっていくものと見られる。

上級指導者養成と普及活動

上級指導者について、これまで漠然とした「経験を積んだ指導者」といったイメージであったが、技術だけの上級では真の指導者とは言えない、という声が高くなり、指導者の位置付けを明確にする必要が生まれてきた。こうした中、2013 年、国立青少年教育推進機構青少年教育センターで行った「コーチング研究」が今後の大きな方向性を示している。この研究では「自然体験・野外活動における指導者養成のコーチングに関する研究会」を設置、研究員がアンケート調査および自然体験活動上級指導者へのインタビュー調査を行うとともに、ビジネス・コーチングの専門家、五十嵐朝青氏に「ビジネスにおける指導者育成」について、日本サッカー協会副会長の田嶋幸三氏に「日本サッカー協会における指導者育成」について、この研究分野の第一人者である、びわこ成蹊スポーツ大学の飯田稔学長に「野外活動・自然体験における指導者育成」について、お話をいただいた。外部からの意見を聞く一方、我が国の野外教育・自然体験を長い間リードしてきた飯田先生から現状分析と将来の課題についてご意見を伺った。一連の議論を総合的に考察した結果、上級指導者養成のための基本的な方向性を確立するにあたっては、次の 5 点を基盤とすべきことが明らかになった。(以下は「同研究報告書」から抜粋した)

- ① 指導者は指導される人々の「未来を創る」作業をしている。このため、上級指導者は、単に技術を教えるだけでなく、指導哲学、理念をしっかりと持ち、広い視野を持つべきであり、一般教養の習得にも心がけるべきであること。これは各専門講師が指摘しており、ヒアリングにおいて平川氏が、スキー指導は技術に偏重しすぎたとの反省を述べていることとも一致する。また、丸山氏はスキーがグランドスポーツ化してしまい、山を総合的に楽しむことが失われ、スキーそのものが矮小化されていると指摘している。
- ② 指導する際、論理性に優れていなければならない、特に言語技術の習得が望まれる。
- ③ 指導者養成にコーチング技術を導入すべきである。コーチングは自覚させることが目的であり、教えようとはしない。
- ④ 自然体験活動の指導者養成制度の全体像を再構築し、その中での上級指導者の位置付けを明確にすること。
- ⑤ 上級指導者には資格取得後、活動する場が必要である。そのためには自然体験活動の普及が不可欠。指導者養成と活動の普及とは車の両輪である。

アンケート調査「CONE 指導者の活動状況調査」は平成 26 年 1 月 31 日～2 月 21 日、Google のオンラインアンケートフォームを使用した。調査対象は、平成 26 年 1 月 31 日～2 月 21 日まで、自然体験活動指導推進協議会(CONE)に登録している CONE トレーナー312 名。回答者数(回答率)は、117 名(37.5%)だった。質問項目は、①属性 ②過去 1 年間の指導者養成講習会における活動状況 ③各指導者の自己評価④今後の課題などについてのコメント、の 4 カテゴリー。これらの分析については、まず対象者の属性と傾向を把握するために、①から③までを単純集計した。また自己評価に何かしらの特徴が見られた場合は、その要因を探るために①②とのクロス集計および χ^2 二乗検定を行って調べた。

その結果、CONE トレーナーであっても、自分にとって納得がいく体験が蓄積されていると感じている指導者と、そうでない指導者のバラツキが少なからずあり、さらに一人の指導者が受講カリキュラム全 8 テーマにわたって必ずしも一定の水準を確保しているとは言えない状況であることが明らかになった。

しかし、このことは反面で、個人として自分の弱点を理解しているとも考えられるため、補うための何らかの措置をとることによって対処していくことができる。例えば指導力に対して自信がない人(上記③において、自己評価項目に 1 をつけた人)は、現在の個人の課題について自由記述で「常に勉強」「組織マネジメント」「実践的な研修を取り入れていくことが必要」「職業柄、指導者としての活動に制約があるが、地域の他団体とも連携をして、活動を続けていきたい」など、意欲的な課題を挙げていることから、指導者としての意識は高いが、個々に適した場や方法の獲得が困難であるために伸び悩んでいると感じている状況が想像できる。中・上級者は、指導カリキュラムに満足していないことが明らかになっており、現行カリキュラムを改良する必要があると思われる。また、少人数の上級指導者に対しては、個人の意見を具体的にすくい上げ対応していくことが有効で、ビジネス・コーチングに代表される、個人指導の在り方は参考になるだろう。

以上のことから、上級指導者を養成するためには、技術指導のほかに、指導哲学、社会との関わり、幅広い教養などについてしっかり学ぶ必要があることが明らかになった。同研究センターでは 2015 年、前年の研究成果を発展させ、上級指導者のための基本カリキュラムの策定に関する研究を行う。

上級指導者の養成システムは徐々に完成の域に近づいているが、同時に自然体験活動のさらなる普及、発展が不可欠でもある。これまでの方法論をはるかに超えた作戦を展開する必要がある。

ロングトレイルの現況

中村 達(安藤百福センター 副センター長)

概況

ロングトレイルは相変わらず注目され続けている。一昨年『日経トレンドィ』でヒットするモノの第1位に選考されて以来、マスメディアはこぞって取り上げだした。アウトドアや登山の専門誌だけでなく、最近では情報誌やトレンド誌、そしてファッション誌にまで登場している。「山の日」も制定されて、さらに注目度は高くなると予想する。



私の知る限り、アウトドア分野でこれほど取り上げられたのは、30年前の日本百名山と中高年登山、20年前のオートキャンプ、数年前の山ガール、そして世界文化遺産に認定された富士登山に次いでだろう。

しかし、ロングトレイルが注目されているとはいえ、一気にブームとなるような性格のものではない。流行りからといっても、トレイルを整備するには、まず地権者の許可や了解が必要である。国有地であれば国が管理している場合が多く、地方自治体が所管する土地もある。また、民有地の場合、複数の地権者が存在したり入会権が設定されている場合も多い。そのため土地所有者から許諾を取らない限り、トレイルの設定は困難だろう。さらに、たとえ地権者や地元の了解や賛同があっても、トレイルを数十kmにわたって整備し、地図などを作る作業には、少なくとも4、5年は要する。

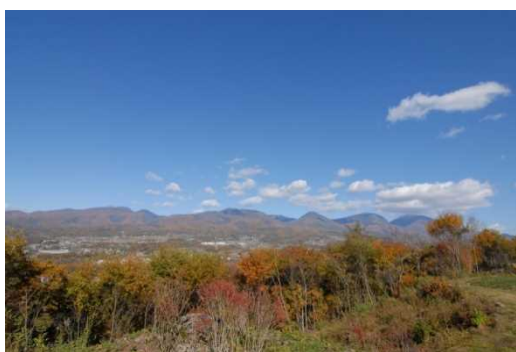
また、トレイルの利用によってもたらされる経済効果や、地域社会の雇用促進の結果が出るまでには、それ相応の年月が必要である。

ロングトレイルのスキーム

もちろん、どのような組織で、どんなスキームで行うかを決めることも重要である。地元の観光協会をはじめとする観光事業者が主体となる場合が多いが、山岳関係者や

自然体験関係者が中心となっていることもある。さらにトレイルが単独の行政区で帰結することは少なく、複数にまたがる場合が多い。行政区が他府県に広がれば、理解を得たり、交渉などには相当複雑な作業が必要になる。

例えば、八ヶ岳山麓スーパートレイルの場合、長野県と山梨県にまたがり、さらに12の市町村の行政区を通っており、各行政区の合意と賛同を取り付けなければならなかった。そのためにフォーラムやエクスカーションを開催するなど、相当な時間と労力を要した。ようやくその努力が実り始め、協力体制のための協議会が設立されることになった。



八ヶ岳山麓スーパートレイルから見た浅間連山

英国のフットパスは歩く権利が法制化されているので、現在、この種の問題はほとんどないが、日本ではそうはいかない。しかし、歩く権利が確立され、広く国民に受け入れられまでに300年の年月を要している。ブームだからといって短時間にロングトレイルを整備するのは、極めて難しい作業であると考えべきである。

国内では、長野県の信越トレイルや滋賀県の高島トレイルが先行しており、運用を始めてほぼ10年が経過して、ようやく軌道に乗り始めた。信越トレイルは先行者利益もあって、我が国のロングトレイルのモデルとされることが多い。マスメディアには頻繁に取り上げられ、注目度も知名度も高いものになっている。

一方、高島トレイルはビジネスモデルが確立されつつある。中でも、山岳ガイドの育成や雇用に成果が現れるとともに、地域社会への経済効果が高く評価されている。高島トレイルが同市の地域観光の重要な装置として期待されている。

両トレイルは国内のロングトレイルの代表的存在になり、その動向がほかのトレイルのモデルとされることも多い。

また、一昨年開通した北海道の北根室ランチウェイは、牧場の中にトレイルが整備された、国内にはきわめて珍しいロングトレイルである。国内の牧場は、欧米などと比べて規模は小さいが、北海道に関しては遜色のないところもある。ランチウェイはそんな牧場の真ん中にルートが設定されている。北根室ランチウェイは、牧場主が中

心となつてつくりあげたトレイルだけに、様々な課題も比較的容易にクリアできた。ただ、口蹄疫の対策を理解してもらうことに労力を要し、今も予防の努力が続いている。

トレイルの運用では、牧場にある厩舎を改装してトレッカーに提供したり、送迎をボランティアで行ったりと、きめの細かい対応を行っている。本来、この地域は酪農が主産業で、観光に関心が高かった訳ではない。しかし、酪農の将来と若者の雇用や魅力ある地域づくりには、新たな観光産業の確立が必要と考えたのが、ランチウェイの整備目的の一つである。



昨年一部が開通した、大分県の国東半島峯道トレイルは、修験者の道を中心にロングトレイルを整備したものだ。完成すれば総距離は 140 km となる。至る所に石仏や磨崖仏があり、歴史と信仰のトレイルといってもいいだろう。国東半島はおもてなしの地域とも言われている。実際、トレイルのエクスカージョンでは、事務局に依頼された訳でもなく、各地域が自主的にお茶を用意したり、梅干しを配ったりと、通過するトレッカーに心からのおもてなしをしている。主催者には、九州地方の中核として機能させたいという強い思いがある。

島崎藤村ゆかりの地、安藤百福センタートレイル

安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター（以下、安藤百福センター）は、施設利用者のプログラムに対応できるように、周辺部にトレイルの整備を行っている。その距離は 4 つのコースで、およそ 25 km となる。

島崎藤村は著書『千曲川のスケッチ』で、安藤百福センター付近を通り、御牧ヶ原をめぐった、という趣旨のことを記述している。御牧ヶ原の標高はせいぜい 800m だが、八ヶ岳連峰や北アルプスの穂高岳から白馬岳までが遠望できる自然環境にある。最近では、利用団体がこれらのトレイルを、研修プログラムに組み込んでいるところも多くなった。また、小諸市や東御市など、近隣住民の利用も始まっている。



浅間連山が見える



八ヶ岳の眺望

また、八ヶ岳山麓スーパートレイルと浅間ロングトレイルの中間に位置しているため、この2つのロングトレイルのジョイント・トレイル（約40km）として、安藤百福センターを中心に春日温泉、懐古園間を結ぶトレイルを設定している。さらに、藤村ら文人たちが歩いたといわれる、軽井沢までのおおよそ50kmを、安藤百福センタートレイルの延伸として検討中である。

新たなロングトレイル

観光活性化や地域の活性化を目的に、各地で積極的にロングトレイルの構想を練り始めている。

整備予定の主なロングトレイル(名称は仮称 順不同)

白山白川郷トレイル
京都美山原生林トレイル
南房総トレイル
かめおか里山トレイル
甲斐の国南アルプストレイル
富士山一周トレイル
余呉湖トレイル
オホーツク海トレイル
山形トレイル
スノーカントリートレイル
金沢トレイル
みちのく潮風トレイル その他

例えば、岐阜県の白川村はトヨタ白川郷自然学校と協同して、白山白川郷トレイルの整備を始めた。地元の森林管理署なども協力して、白山信仰の足跡をルートとするようなコース設定を検討している。この秋には、一部開通の予定で準備が進んでいる。

現在、日本ロングトレイル協議会には10のロングトレイル運営管理団体が加入しているが、新たに整備したいという地域は相当数あり、連日の

ように協議会に問い合わせがある。千葉県南房総トレイル、京都府美山原生林トレイル（仮称）、かめおかさとみちトレイル（京都府亀岡市）などは、整備も佳境を迎えている。また、甲斐の国南アルプストレイル（仮称）や広島県などにもロングトレイルの構想がある。

ロングトレイルに必要なガイド・指導者は？

全国各地のロングトレイルを巡るトレkkerも出てきた。彼らは HP やガイドブックなどで事前に情報を入手している。訪れたトレイルで、自然環境はもちろん、謳い文句通りのトレイルであったか、整備状況はどうか、などをチェックしているようだ。もちろんチェックが目的ではないが、各トレイルを歩くと必然的に比較してしまうのは当然だろう。中でも、ガイドやインタープリターなどの評価は傾聴に値することが多い。例えば、ガイドは安全にトレイルを案内・誘導するのが第一義であり、適切なガイディングがなされているかが問われる。もちろん、コースの自然環境、地形、植生、生息する動物などの解説は必要条件である。

あるトレイルのガイドは、「自然解説中心で、フィールドとしての登山経験が少なかった」、という評価もあった。また、学校団体や旅行社によるツアーなども、ロングトレイルを訪れるようになってきているが、主催者の最優先の命題は安全である。この安全がいかに確保されているかが問われる。特に、2009 年の北海道・大雪山系のトムラウシ山のツアー登山者大量遭難事故以降、ロングトレイルにも、質の高い山岳ガイドによるガイディングが求められるようになった。ガイディングは無論のこととして、万が一の事態に備えたレスキュー体制と技術が要求されるのは当然である。したがって、従前の自然体験指導者や環境教育のインタープリターの資格だけでは、ロングトレイルでの多様な要請に対応できない状況が生まれてきているといえよう。

また昨年、あるトレイルで体験学習に来ていた小学生の行方不明の事故があった。幸い翌朝、自力で下山し事なきを得たが、有資格の山岳ガイドが同行したわけではなく、宿泊施設の関係者がサービスとして同行しただけで、児童の点呼や確認など安全確保に不備があったと指摘されている。

ロングトレイルのルートは、この国の持つ地勢から必然的に山岳地帯になる。そのためルートの多くが山や溪谷などを通ることになる。したがって、好むと好まざるにかかわらず、登山技術や緊急事態への対処方法、応急処置、レスキューなどのスキルが要求される。その結果、現状では日本山岳ガイド協会のガイド資格が、ニーズに対応できるものの一つであろう。

すでに、八ヶ岳山麓スーパートレイルや高島トレイルでは、この山岳ガイド資格の取得を奨励している。安藤百福センタートレイルや準備中の白山白川郷トレイルなどでも、山岳ガイド資格の取得者が増えつつある。

その一方で、ガイドには自然保護、動植物、地理や地学、土地の歴史、風俗、生活文化、風習などの基本的な知識も必要であり、この分野の研修も必要である。

また、環境教育や自然体験学習には有効なフィールドであるが、環境教育や自然体験分野で取得できる指導資格だけで、四季を通してロングトレイルのガイディングが果たして可能かどうかの検証が必要だろう。

外国人トレkker・ハイカーのガイディング

ロングトレイルには地域観光の活性化という目的もある。中でも、外国人観光客の誘致が活発化してくると思われる。欧米の観光客には日本の自然に触れてみたいというニーズが、特に顕著である。現在、国内には登山についての外国語訳の詳しい解説書やガイドブックは、ないに等しいのが実情である。

ロングトレイルには外国語対応のガイドシステムが必要であり、信越トレイルはすでに英語でのインフォメーションを始めている。

日本の山岳は明治時代の初め、英国の科学者ガウランドや宣教師のウェストンらによって、その美しさと気高さが諸外国に紹介された。「日本アルプス」という命名は、ガウランドによるものとされる。日本の山々や森、深く刻まれた溪谷は、外国人にとっても大きな魅力である。

訪日外国人は東京や京都から、今、地方都市とその周辺部に足を延ばしている。彼らの観光ニーズは、日本の自然へと移行するのは確実であり、それもウェストンたちのように、山岳が対象になると思われる。全国各地にロングトレイルが整備されれば、母国でのトレイル・ウォーキングに親しんでいる彼らにとって、絶好の装置となるはずである。



ヨーロッパ・アルプスのトレイル



アルプスのトレイルはMTBも走行可能

まとめ

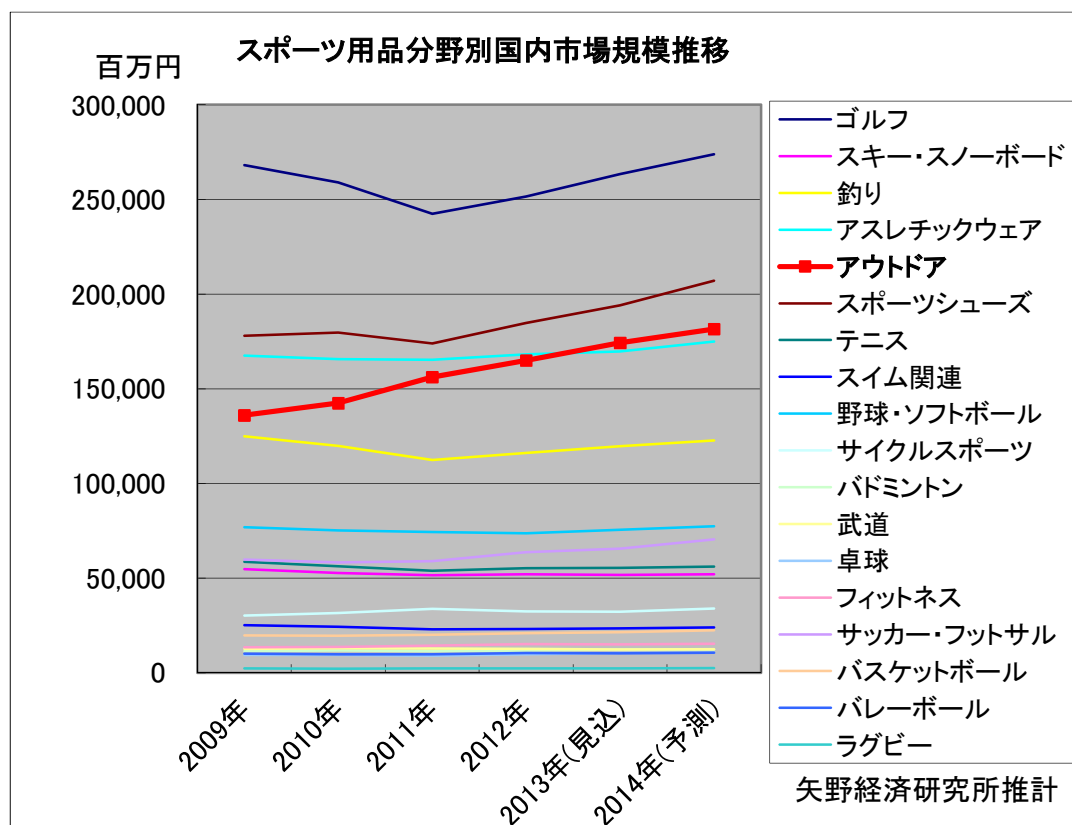
ややメディア先行の感はあるが、ロングトレイルがブレイクし続けている。国内にはロングトレイルという名称を付けたり、当該のトレイルをロングトレイルと自任しているトレイルが加入しているのが、日本ロングトレイル協議会である。

ロングトレイルの定義だが、どの程度の距離があれば「ロング」と称することが出来るのか、実のところいまだ定まった規定があるわけではない。協議会では名称については各トレイル運営団体に任せているのが実情である。いずれ何らかの定義が必要になるかもしれない。

また、先日「山の日」が制定され、今後「山」と「登山」がさらにブームとなるの

は自明である。その中で、ロングトレイルは分かりやすい装置として機能するものと容易に想像できる。

登山を中心としたアウトドア・マーケットは、出荷ベースでおよそ 1,800 億円 (2014 年) と推定されている。小売市場ではおよそ 3,000 億円にのぼる。中でも、この 5 年間で毎年 5% の伸びを見せたのは、全スポーツの中でアウトドアズだけである。



かつて、日本のアウトドアズはバーベキュー・マーケットだ、と揶揄された時期もあった。しかし、富士山が世界文化遺産に認定され、祝日として「山の日」が制定されるなど、登山は国民的なレジャーとなってきた。

アウトドアズの中で登山は、マーケットとしても重要な位置を占めるようになった。さらに、高齢化社会と健康、自然、環境などというコンテンツに、「旅」が加わりつつある。そして、ロングトレイルという装置の誕生で、それがライフスタイル型レジャー「山旅」に進化していくものと期待したい。

スキー指導員の現況とカリキュラム

平川 仁彦(八海山スキースクール 代表)

現在、日本のスキー指導に携わる商業施設は、S A J（体協傘下の競技団体）とS I A（職業教師の団体）が公認する施設数がおおよそ 500 弱、このほかに、様々な形態の団体や個人が運営する施設を加えると 1,000 を超えるものと推測しています。この総体が対象とするスキー人口は、延べで 100 万人規模になると思います。実質的には 30 万人ほどのスキーヤーが施設を利用しているものと考えられます。

施設の活動実態は様々です。詳細は省きますが、シーズンの収入面で比較すると 1,000 万円から 1 億円超に至るまで、その格差はとて大きいといえます。S A J や S I A の団体が公認する施設の経営実態はおおよそ把握することができますが、ほかの団体や個人が主宰する施設の経営実態は正確に捉えることができません。おそらくですが、S A J、S I A の公認施設が得る収入に匹敵する規模のマーケットが存在しているものと推測しています。

こうした現状が構成されてきている要因は、様々なことが考えられますが、大きな点は、スキー場の経営主体の変化、そして、顧客のニーズの変化があるものと推測します。簡単に分析すると、スキー場の経営者は営業効果を求め、顧客はサービスの質を求める、という傾向が強まったということです。

具体的には、「場」の提供者は来場者数の絶対値を高めることがノルマになり、価格競争に参戦せざるを得なくなりました。指導というサービスの現場は、低コストで良質のサービスを提供しなければならなくなりました。その実態は、「場」を管理する経営者の意向に大きな影響を受けているといえます。

指導の施設では、総じてコストの安い指導者をパート化して効率的な回転を考える、という図式が定着してきているといえます。勿論、そうした現状に逆行して、個性化するコンセプトで維持している施設も現れています。しかし、総体的には、現実的に需要を賄える指導者の頭数をやりくりする人事采配の技術が、経営技術の要になってきています。

こうしたフランチャイズされた事業形態は総じて形骸化し、私設の事業体を増やす要因になっているとも考えられます。非常に小さな規模で、I T システムを駆使し、限定的な顧客を囲い込み、年間を通して満足度の高いサービスを提供するという仕組みが、「場」に関係なく密かに進行しています。実際に、こうした施設の方が行き届いたサービスを提供していますから、顧客のニーズには適切に応えているといえるかもしれません。

以上のように、概観ですが、指導の現場状況の変化は、受益者の希求に敏感に反応して動いているということを認識しなければなりません。

課題は、こうした現状認識の上に立って、好ましい指導者育成を実施するかということです。この観点に立つと、指導の現場環境は多様で良いと認めざるを得ませんが、マーケットを総体的に眺めると、受益者の利益を高めるという視点から、「インタープリテーション」と「ファシリテーション」のスキルを啓蒙することが必至と考えます。そして、基礎的な課題としては「リスクマネジメントの知識」を徹底することが必要と考えます。その理由は、顧客との契約関係において、複雑なトラブルが多数派生してきていることです。

我々の「自然体験活動の普及」というコンセプトのなかで、ウィンター・バージョンとしての「スキー」を位置付けるとき、そのコンセプトが求める指導者像は、既存の組織団体が実施している「運動技能」を基準とした育成事業ではなく、「人づくり」の事業でなければならないと思います。

確かに「技能」は「手段」として重要なファクターになりますが、いたずらに「流派」を押し付けることは避けなければなりません。根幹的な「技術」はスキーのあらゆるジャンルに通ずるもの、という設定でカリキュラムを立ち上げていく必要性があると考えています。

今後の活動の指針は、現実的に考えて、既存のスキー指導に携わる商業施設の管理者を対象とした「経営管理のノウハウ」を構築し、具体的にセミナーの形で動き出してみる試行が必要と考えています。現状は、新しい資格付与の制度を立ち上げるよりも、既存の各種資格制度に連携して不足を補う形で、現実的に稼働している指導者のリニューアル（意識改革）を目指していくことが喫緊の課題と判断します。

自然体験活動指導者 (NEAL) 認定制度について

太田原 康志 (自然体験活動推進協議会 事務局長)

自然体験活動に関わる人材育成は、民間では NPO 法人自然体験活動推進協議会 (CONE、通称コーン) が中心となって全国の自然学校や関係機関などとともに実施してきました。この協議会は 2000 年 5 月に発足し、自然体験・アウトドア・環境教育などの分野で活動している全国約 300 の団体で構成される国内唯一最大のネットワーク組織です。これまでに全国で開催した指導者養成講習会には、5 万人を超える人たちが参加されています。

学校教育や社会教育の現場などにおける自然体験活動への関心度が年々高まるにつれて、その活動に関わる指導者への期待もさらに大きくなってきました。そこで民間だけではなく、官民が連携した人材育成が進められるナショナル・スタンダードとなる指導者制度が検討されてきました。ここで紹介する、この新たな指導者制度は、自然体験活動推進協議会が培ってきた制度をベースにして、現在の社会状況などを考慮して官民が一体となって作り上げたものです。この制度では、NEAL リーダー、NEAL インストラクター、NEAL コーディネーターの 3 つの種別があり、NEAL リーダーは平成 26 年度よりスタートしており、ほかの 2 つについては、平成 26 年度内に試行事業を行った上で、平成 27 年度より完全実施されます。

◆自然体験活動指導者 (NEAL、ニール) とは

自然体験活動には、キャンプ、登山、ハイキング、カヤック、自然観察、農林漁業体験など、多様なフィールドで様々な活動があります。自然の中で感性を磨いたり、土地の伝統文化や食文化に触れたり、専門的な知識と技術を持って自然体験活動の普及



や振興に貢献するのが「自然体験活動指導者」です。自然体験活動指導者として、様々なフィールドで自然の素晴らしさを伝えることができるとともに、全国の指導者が集う研修会や交流会に参加でき、活動団体や専門分野を超えたネットワークづくりや情報交換をすることができます。(※NEAL: Nature Experience Activity Leader)

◆指導者の種類と役割

指導者資格には以下の 3 種類があります。

○自然体験活動指導者 (NEAL リーダー)

役割: ①プログラムのねらいを理解し、参加者および担当するグループのメンバーの支援を行う。

②プログラムを実施する際に基礎的な指導にあたる。

③参加者および担当するグループのメンバーの安全に留意する。

登録期限: 終身制

登録料: 5 千円 (学生は 3 千円)

受講資格：18 歳以上

○自然体験活動上級指導者（NEAL インストラクター）

役割：①自然体験活動におけるプログラムを企画・運営・評価する。

②リーダーに対して、自然体験活動におけるプログラムのねらいを伝え、指導方針の共通理解を図る。

③自然体験活動におけるプログラムを直接指導する。

④自然体験活動におけるプログラムの安全管理を行う。

登録期限：3 年ごとの更新制

登録・更新料：6 千円（3 年間）

受講資格：NEAL リーダー資格取得者で、かつ NEAL リーダー演習Ⅰを修了した者

○自然体験活動総括指導者（NEAL コーディネーター）

役割：①自然体験活動事業を企画・運営・評価する。

②リーダーおよびインストラクターに対して、自然体験活動事業のねらいを伝え、指導方針の共通理解を図る。

③自然体験活動事業全体の安全管理を行う。

登録期限：3 年ごとの更新制

登録・更新料：6 千円（3 年間）

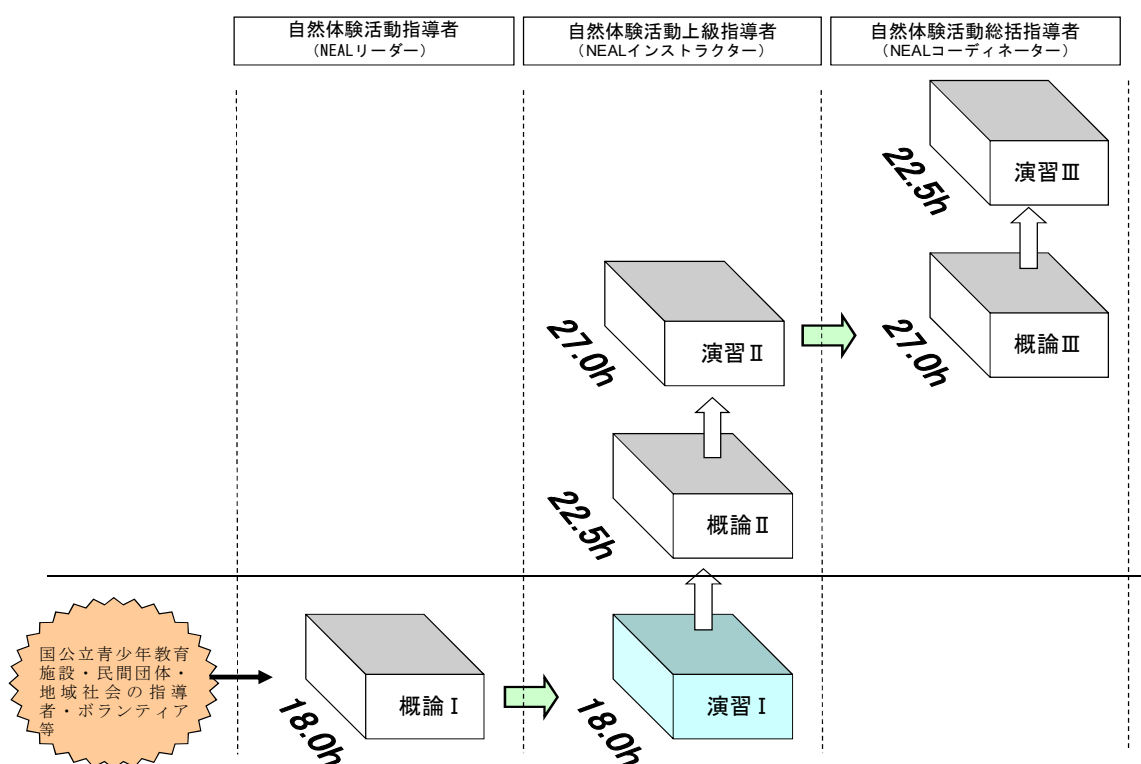
受講資格：NEAL インストラクター資格取得者

◆指導者養成カリキュラム

指導者養成カリキュラムは「概論」（講義および実技）と「演習」（実務経験）で構成されており、NEAL リーダーからコーディネーターを取得するまでの総時間数は合計 135 時間です。各「概論」の養成講習終了時には、認定試験が実施されます。また、「演習」では自然体験活動の実務経験（いわゆる OJT：On-the-Job Training）を積んだ上で、履修表をその証として提出します。

3 種類の指導者資格の受講要件と資格付与要件がそれぞれで少し異なります（下図参照）。NEAL リーダーは、18 歳以上であれば誰でも受講できます。概論Ⅰを修了し、概論Ⅰの終了時に実施される認定試験に合格して登録申請すると資格が付与されます。NEAL インストラクターを受講するためには、NEAL リーダー取得後に NEAL リーダーの演習Ⅰを修了しておく必要があります。その後に概論Ⅱと演習Ⅱの両方を修了して登録申請をすることで資格が付与されます。NEAL コーディネーターは、NEAL インストラクター取得者が受講することができ、概論Ⅲと演習Ⅲの両方を修了して登録申請することで資格を取得することができます。

全国の各自治体の施設や民間団体では、自然体験に関わる事業を行う際の課題として今後の指導者不足が懸念されています。しかし、人材が不足しているからといって誰でも良いわけではなく、自然体験の技術、参加者との関わり方や安全管理などの基本を身に付けた人材が求められています。この制度を通じて、現在活躍中の指導者とともに NEAL リーダーとなって活動してほしいという思いから、このように NEAL リーダーだけは概論の試験に合格すれば資格が付与される構造になっています。



各カリキュラムの概論と演習の科目や時間数は以下のとおりです。

○自然体験活動指導者（NEAL リーダー）

No	科目	主な内容	概論 I	演習 I インストラクター 受講に必要
	ガイダンス		1.0	
1	青少年教育における体験活動	・ 青少年教育における体験活動の意義	1.5	
2	自然体験活動の特質	・ 地域の自然体験活動の特色 ・ 自然体験活動の意義と課題	3.0	3.0
3	対象者理解	・ 対象者理解の方法	1.5	3.0
4	自然体験活動の指導	・ 指導者としての基本的な心構え	1.5	3.0
5	自然体験活動の技術	・ 様々な自然体験活動の体験 ・ 自然体験活動の基本的な技術 ・ 自然体験活動の構成	6.0	6.0
6	自然体験活動の安全管理	・ 自然体験活動における基本的な安全管理 ・ 応急処置	3.0	3.0
	認定試験		0.5	
	合計時間		18.0	18.0

※リーダーについては、概論 I の修了により資格を付与します。ただし、インストラクター養成講習を受講するには演習 I を修了する必要があります。

○自然体験活動上級指導者（NEAL インストラクター）

No	科目	主な内容	概論Ⅱ	演習Ⅱ
	ガイダンス		1.0	
1	学校教育における体験活動	・学校教育における体験活動の意義	1.5	
2	自然体験活動の特質	・地域の自然環境、文化、歴史、産業	1.5	3.0
3	対象者理解	・対象者への配慮と対応方法 ・特別な配慮を要する対象者の理解と対応	3.0	3.0
4	自然体験活動の指導	・自然体験活動の指導方法 ・自然体験活動の指導技術	3.0	3.0
5	自然体験活動の技術	・自然体験活動の専門的な技術の体験 ・自然体験活動の専門的な技術の理解	3.0	4.5
6	自然体験活動の安全管理	・安全管理の意義と方法 ・活動場所とプログラムにおける安全管理	3.0	7.5
7	自然体験活動の企画・運営	・自然体験活動におけるプログラムの企画 ・自然体験活動におけるプログラムの運営・評価	6.0	6.0
	認定試験		0.5	
合計時間			22.5	27.0

○自然体験活動総括指導者（NEAL コーディネーター）

No	科目	主な内容	概論Ⅲ	演習Ⅲ
	ガイダンス		1.0	
1	青少年教育における体験活動	・青少年期を支える体験活動の理解	1.5	
2	学校教育における体験活動	・学習指導要領における体験活動の位置づけ	1.5	
3	自然体験活動の特質	・地域社会と自然体験活動の関わり ・地域との連携方法	3.0	3.0
4	対象者理解	・多様な対象者に対する効果的な理解と対応方法 ・グループ活動を通じた個人の理解方法 ・スタッフ等に対する効果的な対応方法	4.5	4.5
5	自然体験活動の指導	・自然体験活動事業の指導体制	3.0	3.0
6	自然体験活動の安全管理	・安全管理体制づくり ・安全管理上の関係法規と保険	3.0	3.0
7	自然体験活動の企画・運営	・自然体験活動事業の企画 ・自然体験活動事業の運営 ・自然体験活動事業の評価	9.0	9.0
	認定試験		0.5	
合計時間			27.0	22.5

※インストラクター／コーディネーターについては、概論および演習の修了により資格を付与します。また資格を更新するためには、有効期限内に「更新講習」を受講する必要があります。

◆演習について

演習とは、概論で行う実技のことではなく、自然体験活動におけるプログラムの実務経験（OJT：On-the-Job Training）のことで、各概論に合格した後に主任講師（講習責任者）と呼ばれる講師の責任のもとで実施される事業に参加する必要があります（合格前の過去の活動は認められません）。

演習受講者は、各科目の演習を修了するごとに履修表の該当欄に主任講師（講習管理者）に署名と押印をしてもらいます。履修表の全ての科目欄が埋まったら、演習Ⅰの場合はインストラクター養成講習の申込時に主催の養成団体に提出し、演習ⅡおよびⅢの場合は資格取得申請書と指導者登録料を併せて自然部会事務局（下記の「組織の内容と構成」を参照）に提出します。

◆組織の内容と構成

本制度では、全国体験活動指導者認定委員会（認定委員会）を設け、その下に自然体験活動部会（自然部会）を設置しています。

全国体験活動指導者認定委員会（認定委員会）

青少年をはじめとする多くの人々の体験活動を推進するため、体験活動にかかる指導者の資質と指導力の向上を図ることを目的とします。

国立青少年教育振興機構をはじめとした体験活動に関する関係機関・団体、有識者等からなり、主に養成団体・指導者の資格認定や登録証の発行を行います。

自然体験活動部会（自然部会）

全国体験活動指導者認定委員会が設置し、主に養成団体や指導者資格の認定審査、自然体験活動指導者の登録、有資格者の活動促進等の業務を行います。自然体験活動部会は自然体験活動推進協議会（CONE）をはじめとした自然体験活動に関する関係機関・団体、有識者等から構成されています。

お問い合わせ先

全国体験活動指導者認定委員会自然体験活動部会 事務局
（NPO 法人自然体験活動推進協議会内）

TEL：03-5452-4058 FAX：03-6407-8241

Mail：info@neal.gr.jp URL：http://www.neal.gr.jp/

自然体験活動の品質保証

自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会

■研究会について

自然体験活動指導者の「活躍の場」の創出は重要な課題である。そのためには自然学校従事者の「雇用拡大と安定雇用」が必須条件となる。この課題をクリアするための研究をベンチャービジネスの側面から検討する。

ビジネス展開を目指すための前提として、自然体験活動そのものを商品・サービスとして提供していくためには、一般的な商品・サービスと同様にその質の担保が必要であり、客観的な評価基準が必要となる。今の自然体験活動の分野においては、各個人や各団体は良質な活動を心がけているが、それらは個人や団体によりバラツキが大きい。そのため安心・安全な商品・サービスとして一般顧客に提供していくためには、品質を保証する仕組みが必要である。

昨年度（2012年度）行われた自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会では、3回の検討作業を終え、今まで以上にビジネスとして自然体験を提供するためには、その品質保証のシステムが必須であることが再確認された。

また、もう1つの視点として、自然体験活動は新商品・新サービスの手段でもあり、世の中に溢れている既存の商品・サービスに自然体験活動というエッセンスが加わったとき、新しい価値観を創り出せる可能性がある。企業から既存の商品・サービスを刷新できる自然体験活動が選ばれるためにも、信頼性の高さを示す基準が必要となる。

今後ベンチャービジネスを提案していくにあたり、2013年度の本部会ではまず商品・サービスとなる自然体験活動の品質保証について検討を行うこととし、その対象として自然体験活動を提供する組織と人材について検討を行った。

■2013年度全体スケジュール

第1回作業部会	5月 9日（木）	今後の方向性について議論
第2回作業部会	6月 19日（水）	認証制度作りのステップを検討
第3回作業部会	7月 17日（水）	具体的な認証要件を検討
第4回作業部会	9月 2日（月）	認証の方法について議論
全体会	10月 15日（火）	指導者制度について議論
第5回作業部会	11月 26日（火）	自然学校認証制度案作成
第6回作業部会	12月 16日（月）	認証制度の運用方法について議論
第7回作業部会	2月 6日（木）	認証制度全体像の整理
第8回作業部会	3月 13日（木）	今年度まとめと次年度に向けた提案

【2013年度終了】

■2013 年度 研究会メンバー一覧（順不同・敬称略）

- ① 佐藤初雄★ 国際自然大学校 理事長
- ② 佐々木豊志★ くりこま高原自然学校 代表
- ③ 川嶋直★ キープ協会 環境教育事業部シニアアドバイザー
- ④ 崎野隆一郎★ ハローウッズ プロデューサー
- ⑤ 飯田洋 千葉自然学校 理事長
- ⑥ 浅野能昭 トヨタ白川郷自然学校 校長
- ⑦ 北川健司 アウトドアサポートシステム 代表取締役
- ⑧ 辻英之★ グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事
- ⑨ 村上忠明 Kids'-AU 代表理事
- ⑩ 山田俊行★ トヨタ白川郷自然学校 校長補佐・事務局長
- ⑪ 田中啓介★ ホールアース自然学校 東京事務所所長
- ⑫ 三好利和★ 野外教育事業所ワンパク大学代表
- ⑬ 太田原康志★ 自然体験活動推進協議会 事務局長
- ⑭ 砂山真一★ ポジティブアースネイチャーズスクール（PENS）
- ⑮ 岡島成行★ 安藤百福センター センター長

★印は作業部会メンバー 代表者は川嶋氏

安藤百福センター 中村達 安藤百福センター 副センター長

事務局 小島真一 安藤百福センター 事務局員

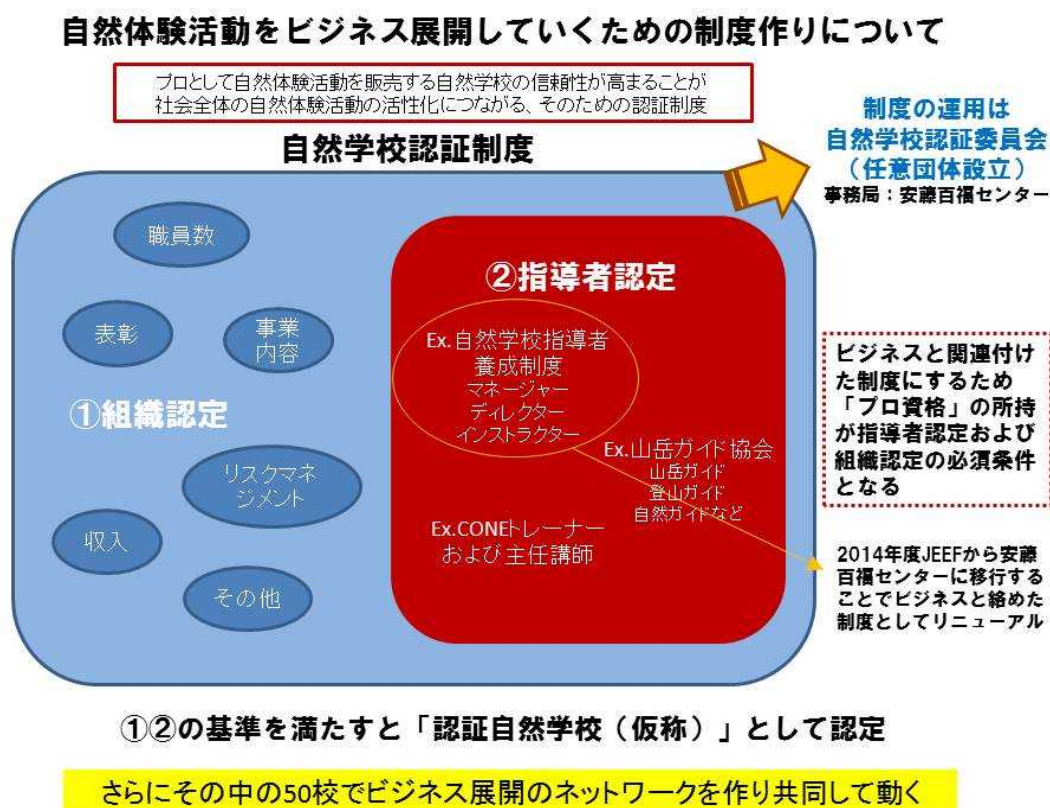
■自然学校認証制度について

- ・組織と人の品質保証システムとなる「自然学校認証制度」を検討した。
- ・①組織基準および②指導者基準の 2 つの基準を満たすことで、信頼性の高い「認証自然学校（仮称）」として認定を受けることができる。
- ・さらに基準を満たす 50 校に絞り、自然体験活動分野の 50 選として選定する。
- ・50 選でネットワークを構成し、新規ビジネスを展開していくために協働する。

■認証によるメリットの可能性

- ・第三者機関からの品質保証による社会的信頼の向上。
- ・組織体制の見直しや業務効率の改善。
- ・新規事業（協働や受託など）の獲得。
- ・リスクマネジメントの整備。
- ・スタッフのモチベーション向上。
- ・認証委員会からの紹介および推奨を受けることができる。
- ・専用ホームページに掲載される。
- ・認証マークを使用できる。

【認証制度の概念図】



■認定基準および組織認定について

- ・日本国内の代表的な自然学校をベンチマークとし、また、既存の認証制度（スキー、カヌー等）を参考に認定のための基準を検討してきた。

資料 1 【自然学校認証のための基本情報整理①～③】 参照

- ・認定要件と参考項目から成る認定基準案を作成。

資料 2 【自然学校認証のための認定基準一覧①～③】 参照

- ・認定要件の基準を全て満たすと認証自然学校（仮称）として認定
- ・それをユーザーに向けて情報開示する。

資料 3 【認証自然学校プロフィールシート】

- ・参考項目は、自然学校の信頼性がさらに高まるように、専門資格所持者数と実績等の諸条件を明示する

■指導者認定について

- ・認証自然学校（仮称）として認定するための柱となる「人材の認定」についての基準として「指導者認定制度」が必要となる。
- ・指導者認定は既存の自然学校指導者制度をリニューアルして活用する。
- ・制度についての規定は資料 4 【自然学校運営者に関する規定】 参照。

認定の条件

認証自然学校（仮）となるためには、以下三職位のうち、いずれかの認定を受けた者が所属していることが要件となる

- ・ 自然学校指導者（インストラクター）
- ・ 自然学校企画運営者（ディレクター）
- ・ 自然学校組織運営者（マネジャー）

認定方法

認定試験に合格すること（三職位共通）

三職位における認定までの流れ

(1) インストラクター

- ① 事前学習
- ② 2泊3日の養成会（発表、ディスカッション、ワークなど）
- ③ 認定試験 →合格者は認定

2014年度のインストラクター講座は下記の2パターンで実施する

A パターン：一般対象（4月～12月）過去14年間実施してきた従来のスタイルカリキュラム内の修了講習をクリアすることで指導者認定

B パターン：自然学校実習生対象（10月～12月に行われる座学研修と組み合わせで受講できる新しいスタイル）

→（1）（2）共に合格者には同じ資格（インストラクター）が与えられる

(2) ディレクター

- ① 事前学習
- ② 2泊3日の養成会（発表、ディスカッション、アクションプラン作成等）
- ③ 現場でアクションプランの取り組み
- ④ 2泊3日の認定会（成果発表）
- ⑤ 認定試験

→合格者は認定

(3) マネジャー

- ① 事前学習
- ② 2泊3日の養成会（発表、ディスカッション、アクションプラン作成等）
- ③ 現場でアクションプランの取り組み
- ④ 2泊3日の認定会（成果発表）
- ⑤ 認定試験 →合格者は認定

(1) ～ (3) の養成会および認定会を一度修了すれば、次回以降の受講は免除
 ※初回の試験に不合格でも、次回以降は試験だけを受けられる

■認定カリキュラムについて

- (1) インストラクター ※受講生のイメージ：各自然学校の実習生～2年目職員
 【事前学習】 下記のテーマについて各自で学ぶ（レポート等作成）
 【養成会】 事前学習してきたことの発表、学びを深めるワークおよびディスカッション等
 【認定試験】 筆記および面接試験

カリキュラム項目

1	環境教育論	日本における環境行政の歩みと、社会における環境意識の変容や教育の意義を理解する
2	自然学校原論	自然学校の業界が、どのような経緯で今に至っているのか、その歩みと特徴を理解する
3	日本の自然（植物）	フィールド学習を通して身近な植物に関する知識を専門家から学び、インタープリテーションのレベル向上につなげる
4	日本の自然（生きもの）	生きもの（哺乳類・鳥類・両生類・昆虫など）に関する知識を専門家から学び、インタープリテーションのレベル向上につなげる
5	伝える技術（理論）	インタープリテーションの基本的な考え方やインタープリターの役割・意義を理解し、日々の現場に還元する
6	伝える技術（実践）	実際にインタープリテーションの実習を行い、ほかの受講生や講師のフィードバックを受けて自己の伝える技術向上につなげる
7	伝える技術（アイテム）	各自然学校の現場で実際に用いている、インタープリテーションで有用なアイテムを持ち寄り、今後の工夫につなげる
8	アイスブレイク	アイスブレイクの基本的な考え方を理解し、代表的なアイスブレイクを体験・実習する
9	野外救急法	自然フィールドで発生する怪我や事故に対して、その場にあるものを利用して適切な処置ができるように、具体的なスキルを学ぶ

10	リスクマネジメント	事故が起きる前と起きた後でそれぞれ指導者が成すべきことを、ワークを通じて体系的に理解する
11	伝わる文章の書き方	業務報告やメール・ブログ等、あらゆる媒体において必要となる、分かりやすい文章を書くコツを学び、業務力向上につなげる
12	社会企業論	自然学校以外の業種において、社会的企業が社会課題に対してどう取り組んでいるのかを学び、視野やネットワークを広げる
13	自然学校の今	各自然学校の旬な話題を共有し、それぞれの自然学校の強みや特徴、方向性等を理解する

(2) ディレクター ※受講生のイメージ：各自然学校の3～5年目職員

【事前学習】 下記のテーマについて各自で学習（レポート等作成）

【養成会】 ワークおよびディスカッション、課題解決アクションプラン作成

【認定会】 アクションプランの取り組みと成果を発表

【認定試験】 筆記および面接試験

1	プログラムデザイン	実際に実施しているプログラムの事例から、顧客ニーズや社会的ニーズを分析し、ポテンシャルと方向性を整理する
2	事業評価	実際に実施しているプログラムの事例から、評価シートに基づいて設定目標と成果を分析し、実践可能な次なる一歩へつなげる
3	企画書・申請書の書き方	助成金の申請書や新規事業の企画提案書など、具体的な実例を教材にして書き方を学び、実際に1～2本の申請書・企画書を作成する
4	ファシリテーションスキル	ファシリテーターとして必要な関わる技術や聴く技術、グラフィックや色を活用したまとめる技術などを学ぶ。
5	プレゼンテーションスキル	KP法やプレゼン資料の作成等に係るノウハウを学び、実際の現場に還元する
6	ソーシャルメディア	ホームページやブログ、SNSなどインターネットを活用した情報発信の具体的な手法や考え方などを学び、実際に組織メディアを改善する

(3) マネジャー ※受講生のイメージ：各自然学校のマネジメント職員

【事前学習】 下記のテーマについて各自で学習（レポート等作成）

【養成会】 ワークおよびディスカッション、課題解決アクションプランを作成

【認定会】 アクションプランの取り組みと成果を発表

【認定試験】 筆記および面接試験

1	【経営戦略】 ロジックモデル	ロジックモデルを活用し、組織が展開している多角的な取り組みと組織のミッションとの整合性を整理し、組織の方向性を再検討する
2	【経営総合】 企業に学ぶ	企業の実例を題材に、経営や人事・労務等における具体的な取り組みを学び、ノウハウやヒントを共有する
3	【経営総合】 行政担当者に学ぶ	環境省・文科省・農水省・観光庁など関連省庁の具体的な施策を学び、新たな事業計画の立案につなげる
4	【人事評価】 コーチングスキル	コーチングの手法を学び、職員のモチベーション向上や人材育成につなげる
5	【資金調達】 ファンドレイジング	クラウドファンディングや助成金など、様々な資金調達の手法を学び、非収益事業を担保する方法を検討する
6	【税務】 収入と支出を考える	各自然学校の実際の財務状況から、節税対策や固定費の見直しなど経営者として知っておくべき知恵を身につけ、組織に還元する

【参考】 自然学校指導者養成制度カリキュラム（※「日本型環境教育の知恵」より抜粋）

(1) インストラクター座学カリキュラム

基礎課程	専門課程
生態学概論	自然の理解
環境学概論	人間の理解
環境教育総論	つなぐ技術① 伝え方・引き出し方
地域学概論	つなぐ技術② 自然解説
社会構造論	つなぐ技術③ プログラムデザイン
野外活動論	生き方・暮らし方
自然学校原論	自然学校運営の基礎
教育方法論	修了講習

(2) ディレクター、マネジャー研修会の内容

講義と実習	自然学校とは
講義	自然学校の使命と役割
講義	自然学校の運営
講義	マネジメントの基礎知識
	マネジメントとは何か
	「人、もの、金」を対象にした改善計画
	PDCA サイクルの流れと業務
	マーケティング
	スタッフトレーニング
	リスク管理
	計数管理
実習	職務評価表と自己評価記入
実習	アクションプランづくり
	職務上の課題の洗い出し
	あるべき姿を考える
	方策を考える
	計画化する

■自然学校認証制度の運用方法について

申請資格

自然体験活動を事業として提供している組織（法人格は問わない）

審査機関

自然学校認証委員会【任意団体】（事務局：安藤百福センター）

CONE、JEEF、JON、国立青少年教育振興機構、研究者、業界外の方などで構成

審査時期

1次審査 年間2回程度行う（認証委員会開催時）

2次審査 1次審査の後、随時行う

申請から認証までの流れ

申請事業者	申請資格条件の確認
	申請資格や手続き方法などの確認
申請事業者	申請希望の申告
	認証委員会へ申請希望の申告
	申請書類を入手
申請事業者	申請書類の作成と提出

	申請書の記入および添付書類を用意 審査料の振り込み 認証委員会へ提出
認証委員会	認証審査 1 次審査 認証委員会での書類審査 2 次審査 現地での訪問審査および面接
事務局	認証審査結果通知 認証結果を通知 年会費の納入確認
事務局	認証登録証・認証マークの交付

更新手続き

3 年に 1 度、上記の流れで再審査（書類および訪問審査）を行う

申請に必要な提出書類

- ・ 自然学校認証審査申請書（フォーマットを作成）
- ・ 団体概要が分かる書類（パンフレット等）
- ・ 認定基準クリアを証明できる添付資料
- ・ 審査料振込領収書

申請受付時期

1 カ月間の申請期間×年 2 回程度設定

費用について

審査の申請時に「申請料」、認証された後に「年会費」が必要

申請料：50,000 円（税込）

年会費：30,000 円（税込）※会費は自然学校の規模による

認証制度運用開始時期

2016 年 4 月から（早ければ 2015 年 4 月～）

検討が必要な項目

- ・ 委員会メンバーおよび事務局担当の選定
- ・ 認証項目の詰め
- ・ 申請書など各種書類の作成
- ・ 細部の調整

■ビジネス展開の議論について

- ・ 2014 年度よりメンバーを再編成して行う
- ・ 自然学校業界外の方たちにも協力してもらう
- ・ 人選、スケジュール等は検討中

→今後の認証制度、指導者制度およびビジネス研究についての提案は別紙参照

2013.11.29

自然学校認証制度のための基本情報整理①																				
※主な自然学校をベースに検証する																				
名称	法人格	常勤職員・社員数【自然学校業務に関わる部分】						年間売り上げ【自然学校業務に関わる部分】						安全を担保する資格等保有状況【◎＝2点、○＝1点、△＝0.5点】						
		0人	1人～5人	6人～10人	11人～30人	31人～50人	51人以上	0～1,000万円	1,000万～5,000万円	5,000万～1億	1億～3億	3億～	施設の所有		①資格		②教育	③システム		④保険
													普通救急救命講習受講	MFA	スタッフへの安全教育	リスクマネージャへの安全教育		リスクマネージャの配置	リスクマネージャの整備	
自然学校 A	公益財団法人					○					○		○		◎			○	◎	◎
自然学校 B	NPO法人					○					○				◎	○		○	◎	◎
自然学校 C	株式会社とNPO法人					○					○		○		◎	△		○	◎	◎
自然学校 D	一般社団法人と株式会社			○					○				○		◎	◎		○	○	◎
自然学校 E	NPO法人				○					○			○		◎	◎		○	◎	◎
自然学校 F	NPO法人					○					○		○		△			○	◎	◎
自然学校 G	NPO法人				○						○		○		◎	○		○	○	◎
自然学校 H	一般社団法人			○					○				×		○	○		○	◎	◎
自然学校 I	株式会社とNPO法人				○						○		○		◎	WMA/RESCU3		◎	◎	◎
自然学校 J	株式会社					○					○		○		◎			○	○	◎
認証要件	常勤職員が1名以上（雇用できているか）	1,000万円以上（社会的信用があるか）						1点以上		1点以上		1点以上		1点以上		1点以上				

◎、○、△それぞれの意味を記載する必要がある。
例えは教育の場合、
△関わるスタッフ全員に1時間以上の安全講習を行っている
◎何人かは資格を取得している
◎職員全員が資格を取得している

自然学校認証制度のための基本情報整理②																	
自然学校の類型化の試み（プログラムの目的）																	
※主な自然学校をベースに検証する																	
プログラムの目的による分類 【◎＝2点、○＝1点、△＝0.5点】 ※自然学校としてやっていることや成果が出ていることで分類																	
名称	法人格	理念・特徴	野外教育	指導者養成	環境教育/ ESD	地域振興	アウトドア体 験	農的くらし	森の ようちえん	冒険教育	食育	各種保全活動	課題を抱えた 人の自立支援	災害救援/ 復興支援	山村留学	国際協力/ 途上国支援	特記事項
自然学校 A	公益財団法人	解説→	キャンプ （子ども）	外部に預けて の養成会	自然体験型	地域との関わ り	登山・スキー・ ラフティング・ 洞窟など		◎	◎	○	△				○	研究・アセス 森林療法
自然学校 B	NP0法人		◎	◎	○	△	◎	△	◎	◎	△		○				
自然学校 C	株式会社と NP0法人		◎	◎	◎	◎	◎	◎	△	○	○	○		△		△	健康推進
自然学校 D	一般社団法人 と株式会社		◎	○	◎	△	◎	◎	○	◎	○	○	◎	○	○		
自然学校 E	NP0法人		◎	◎	○	○	△	◎	△	△	○			△	◎		
自然学校 F	NP0法人		◎	◎	○	◎	○	◎	△	△	◎	◎		△			
自然学校 G	NP0法人		◎	◎	◎	◎	△	○	◎	△	○	○	△	○	○	○	自然教育
自然学校 H	一般社団法人		◎	◎	○	◎	○	△	△	○	○	○	○	△		○	ツurisズム振興
自然学校 I	株式会社と NP0法人		◎	◎	◎	◎	◎	△	△	◎	△	△		△			レースイベント
自然学校 J	株式会社		◎	○	◎	○	△	△			△	○					
自然学校 K	任意団体		◎	◎	◎	△	◎										
自然学校 L	一般財団		◎	◎	△	◎	○										
合計			23	22	18.5	16	15.5	12	9.5	9.5	9.5	9	4.5	4.5	4	3.5	
		順位	①	②	③	④	⑤	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
認証要件 上位5つのプログラムのうち、2つ以上の事業を行っていること																	

参考資料 1 - ③

自然学校認証制度のための基本情報整理③										
※既存の認証制度を参考										
【参考】スキースクール認定基準										
要件	スキー場営業期間中は常時開講	常勤イントラ4名以上かつ正会員3名以上	常勤教師の中から安全推進委員を定める	日赤救急法救急員または同等の資格保持者1名以上	1スキー場に1スキー学校	校長はステージⅢの資格取得後、公認スキー学校において3年以上の指導経験を有すること。30歳以上。				
【参考】カヌースクール認定基準										
A 公認スクール要件	代表者は公認イントラⅡで25歳以上	年間事業営業日90日以上	代表者含む3名以上の正会員または準会員で構成	すべての水域で事業活動ができる	参加者5人につき1人の指導者	参加者に対し、1艇1式の用具を用いる	参加者が傷害保険に加入	スクール、代表者、スタッフそれぞれ賠償保険加入：対人1億1事故2億以上	運航規程の設置	ログブック（運航記録）の保存
B 公認スクール要件	代表者は公認イントラ1で23歳以上	年間事業営業日90日以上	代表者含む2名以上の正会員または準会員で構成	クラス1の静流域で活動	参加者2～3人につき1人の指導者	参加者に対し、1艇1式の用具を用いる	参加者が傷害保険に加入	スクール、代表者、スタッフそれぞれが賠償保険加入：対人1億1事故2億以上	運航規程の設置	ログブック（運航記録）の保存

参考資料 2 - ①

自然学校認証のための認定基準一覧			
【認定要件】全ての項目を満たすと、認証自然学校（仮称）として認定			
項目	要件	クリア基準	説明
組織体制	設立年数	3年以上	設立から2年間が経過している
	売上金額	1,000万円以上	自然学校業務に関する年間の売上
	職員数	常勤1名以上	自然学校業務に関わる職員 （通年営業を行っている）
	事務所	1か所以上	通年営業を行っている
事業	主催事業	収入の5%以上	3時間以上の主催事業を年間12回以上実施した上での収入（森のようちえんや山村留学のような通年事業は、3時間で1回とカウント）
	プログラム	野外教育、環境教育、指導者養成、アウトドア体験、地域振興のうち2つ以上を実施	主に野外で自然と関わるプログラムを提供している
人材	指導者資格	自然学校指導者資格を所持する職員1名以上	インストラクター、ディレクター、マネジャーのいずれかを所持している
リスクマネジメント	スタッフ教育	全スタッフが3時間以上の講習を受講	普通救命講習（3時間講習）程度を修了している
	資格	現場における安全管理スキルを証明できる	活動を行う現場に適した資格を所持している（山岳ガイド、カヌーガイド、MFA、WFAなど）
	保険	賠償保険および傷害保険の加入	万が一の怪我・事故等に備えて補償の仕組みが整備されている
	配置	リスクマネジャー1名以上	組織内に1名以上いる（施設ごとではない）
	マニュアル	緊急時対応マニュアル	マニュアルがあり、毎年見直されている
活動場所	フィールド	利用および管理ルール	持続的に利用できる仕組みが整備されている
	施設 （保有団体のみ）	利用および管理ルール	持続的に利用できる仕組みが整備されている

参考資料 2 - ②

自然学校認証のための認定基準一覧									
【参考項目①】専門資格所持者数(常勤職員のうち、以下の資格を所持している人数)									
この記載内容は自然学校のプロフィールとして公開を前提とします									
人材育成	安全管理		指導者			旅行・国際	運転免許	野生鳥獣	その他
主任講師	水上安全法救助員	Wilderness First Aid	NEALコーディネーター	PWエデュケーター	自然ガイドステージⅠ	国内旅行業務取扱管理者	普通自動車(限定なし)	わな猟免許	気象予報士
CONEトレーナー	伐木等業務特別教育	Wilderness Advanced First Aid	NEALインストラクター	PWTエデュケーター	自然ガイドステージⅡ	総合旅行業務取扱管理者	普通自動車(AT限定)	第1種銃猟免許	生物分類技能検定
PWファシリテーター	刈払機取扱作業安全衛生教育	Wilderness First Responder	NEALリーダー	ネイチャーゲームリーダー	登山ガイドステージⅠ	国内旅程管理主任者	中型自動車(11t未満)	第2種銃猟免許	ビオトープ管理士
PWTファシリテーター	危険物取扱者(乙種第4類)	リスクマネジャー	NACS-J 自然観察指導員	GEMSリーダー	登山ガイドステージⅡ	総合旅程管理主任者	小型船舶		ご当地検定
GEMSアソシエイト	安全運転管理者	リスクマネジメントディレクター	キャンピングインストラクター	JNFAアクティビティリーダー	山岳ガイドステージⅠ以上(旧山岳ガイド)	TOEIC750点以上/英検準1級以上			社労士
JNFAアドバンストインストラクター	救急救命士	リスクマネジメント講習会(修了)	キャンピングインストラクター2級(PD)	森林インストラクター	スキーガイドステージⅠ	通訳案内士			税理士
コーチトレーニング	MFAベシックプラス	防火管理責任者	キャンピングインストラクター2級(MD)	保育士	スキーガイドステージⅡ	地域限定通訳案内士			中小企業診断士
チームビルディングファシリテーター	MFAケアプラス	防災士	自然学校指導者(インストラクター)	幼稚園教員資格	レクリエーションインストラクター				マイクロソフトオフィススペシャリスト
MFAインストラクター以上	MFAチャイルドケアプラス		自然学校指導者(ディレクター)	小学校教員資格	レクリエーションコーディネーター				食品衛生管理者
ツリークライミングインストラクター	RESCUE3 スイフトウォーターレスキューテクニシャン		自然学校指導者(インストラクター)	中学校教員資格	ベシックツリークライマー				栄養士
キャンピングインストラクター1級	RESCUE3 ファーストレスポnder		環境カウンセラー	高等学校教員資格	JNFAベシックインストラクター				その他

参考資料 2 - ③

自然学校認証のための認定基準一覧	
【参考項目②】認証自然学校の信頼性をさらに高めるための諸条件	
この記載内容は自然学校のプロフィールとして公開を前提とします	
実績については具体的に明記《いつ、どこ、何かを、受賞した、など》	
※実績＝各項目につき最大5つまで	
項目	要件
情報公開	決算および実績等の情報がWEBページ上で公開されている
受賞歴	自然学校としての事業に関する表彰を受けた
マスコミ 掲載実績	自然学校としての事業に関する情報が掲載された
出版	市販されている書籍がある（要ISBNコード） ※共著はOK、紀要・報告書はNG
協働事業	行政、企業、学校などと協働事業を行った（受託含む）
助成金	助成金を受けたことがある
指定管理者	公共施設の指定管理者となっている、またはなっていたことがある
環境保全	ISO14001、エコアクション21、エコステージ等の環境マネジメントシステムを取得している
ネットワーク加入	自然体験、アウトドア、環境教育等のネットワークに加入している

参考資料 3

認証自然学校（仮）プロフィールシート案			
フリガナ	アンドウモモフクキネン シゼンタイケンカツドウシドウシャヨウセイセンター		
団体名	安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター		
団体の目的および事業活動の概要（定款より）	自然体験活動の振興に寄与することを目的として、達成のために以下の事業を行う (1) 自然体験活動における上級指導者養成事業 (2) 大学、大学院、専門学校等の自然・野外・環境・観光・農業等に係わる講義、実習等（単位の取得等も含む） (3) 自然体験活動及びアウトドア全般に係わる専門家等の養成・研修事業 (4) 指導者養成カリキュラム等の研究、開発事業 (5) その他、安藤百福センターの設立目的を達成するための事業		
主たる事業所の所在地	〒384-0071 長野県小諸市大久保1100		
設立年月日（経過年数）	2010年5月21日（3年10か月）		
常勤職員数	3 名	非常勤職員数	2 名
年間売上（最新決算）	1,000万円～5,000万円		
電話番号	0267-24-0825	FAX番号	0267-24-0918
Eメールアドレス	info@momofukucenter.jp		
団体ホームページ	http://www.momofukucenter.jp/		
関連ホームページ（ブログ等）	http://www.momofukucenter.jp/treehouse/index.html		
主な活動分野	野外教育 ・ 環境教育 ・ 指導者養成 ・ アウトドア体験 ・ 地域振興		
	農的暮らし ・ 森のようちえん ・ 冒険教育 ・ 食育 ・ 環境保全活動		
	自立支援 ・ 災害救援/復興支援 ・ 山村留学 ・ 国際協力/途上国支援		
	その他（ ）		
主なプログラム	・ 自然学校指導者養成講座（4月～12月）		
	・ 自然学校指導者ディレクター合宿研修会（9月、1月）		
	・ 野山を楽しむ自然塾（5月、8月、12月、2月）		
	・ 浅間大学院生セミナー（5月）		
	・ 環境思想シンポジウム（3月）		
	・ 自然体験入門講座（6月、9月、11月）		
自然学校指導者資格の所持	インストラクター ・ ディレクター ・ マネジャー		

自然学校指導者資格の所持	インストラクター ・ ディレクター		
安全への配慮	・全てのスタッフに対して安全教育を行っている ・安全管理スキルを証明できる資格を所持している ・万が一の怪我、事故等に備えての対応方法および補償の仕組みが整備されている ・安全管理を統括するリスクマネージャーが所属している		
主な活動フィールド	所在地周辺の里山および浅間山麓周辺		
保有施設	事務所、キャンプ場		
専門資格所持者数 ◆常勤職員に限る 短期スタッフ、ボランティア スタッフ等の非常勤職員の所持者数 は含めない	自然学校指導者（インストラクター）	2	名
	自然学校指導者（ディレクター）	1	名
	CONEトレーナー	1	名
	CONEインストラクター	1	名
	CONEリーダー	3	名
	自然ガイドステージⅠ	1	名
	MFAチャイルドケアプラス	1	名
	ネイチャーゲームリーダー	2	名
	プロジェクトワイルドエデュケーター	1	名
	わな猟免許	1	名
	マイクロソフトオフィススペシャリスト（Word）	1	名
	中学校教員免許	2	名
	リスクマネージャー	1	名
	森林インストラクター	1	名
	防火管理責任者	1	名
	普通自動車（限定なし）	3	名
			名
			名
			名
			名
			名
			名
			名
			名

情報公開 WEBページ上で公開されている具 体的項目（財政面、実績、組織体 制など）	運営組織、事業内容、イベント情報、イベントレポート、施設利用案内、紀要
受賞歴 自然学校としての事業に関する表 彰（5つまで）	・平成26年度 ○○環境大臣表彰 ・平成25年度 第9回△△優秀賞 ・平成24年度 長野県□□賞受賞
マスコミ掲載実績 自然学校としての事業に関する掲 載実績（5つまで）	・NHK総合「○○○○」（2012年3月12日） ・NHK総合「△△△△」（2010年8月11日） ・信濃毎日新聞「□□□□□□」（2014年2月1日） ・小諸新聞「◇◇◇◇◇◇◇」（2013年4月1日）
出版 市販されている書籍（5冊まで）	・「自然学校をつくろう」山と溪谷社/2000年
協働事業実績（受託含む） 行政、企業、学校などに行った協 働事業の実績（5つまで）	・小学校長期キャンプ事業（2009年～） ・環境保全事業（2010年～） ・学生リーダー養成事業（2013年～）
助成金 受けたことがある助成金の実績 （5つまで）	・平成24年度トムソーヤースクール企画コンテスト（10万円）
指定管理者 指定管理者となっている公共施設	・○○青少年教育センター（2012年4月～）
環境保全 取得している環境マネジメントシ ステム	・ISO14001（2014年）
ネットワーク 加入している自然体験・アウトド ア・環境教育等のネットワーク （5つまで）	・Aネットワーク 正会員（2013年～） ・Bネットワーク 正会員（2012年～） ・C協議会 正会員（2010年～）
特記事項	子どもから大人まで森の中で楽しめるキャンプ場があります。設備やレンタル用品も充実、インストラクターも常駐しているので、はじめての方でも安心してご利用いただけます。

参考資料 4

公益社団法人日本環境教育フォーラム「自然学校運営者」に関する規定

第1章 総則

(総則)

第1条 この規定は、公益社団法人日本環境教育フォーラム(以下フォーラム)定款第4条(6)環境教育活動に係わる指導者の育成、派遣をおこなうために必要な事項を定める。

(定義)

第2条 この規定でいう用語について、次の通り定義する。

(1) 自然学校 「自然」をフィールドにした環境教育活動を行う中で社会的債務を果たしている組織。この組織は、以下の4つの要件を満たしているものとする。

①人：専門性を持った常駐の職員がいること。

②場：プログラムを実施する施設やフィールドがあること。

③プログラム：環境教育をねらいとした月に1回以上かつ通年を通したプログラムを展開していること。

④組織：人、場、プログラムを始め組織活動として必要なシステムが社会的信用を得て安全に運営されていること。

(2) 養成事業 指導者養成カリキュラムを用い養成を行う事業。

(3) 認定 指導者養成講座を修了し、指導者として認定されること。

(4) 登録 指導者養成講座を修了し、手続きを経て登録されること。

(5) 更新 一定の手続きを経て登録有効期間を延長すること。

(指導者の名称と資格)

第3条 この規定で定める「自然学校運営者」とは、次のものとする。

(1) 自然学校指導者(略称インストラクター)

自然学校におけるプログラム提供のための基礎的な知識と技術を有し、プログラムを企画し運営ができる。

(2) 自然学校企画運営者(略称ディレクター)

自然学校において、すでに組織としての運営がなされていて事業が発生しているという一定の要件のもとで、事業を企画し運営ができる。

(3) 自然学校組織運営者(略称マネージャー)

自然学校における組織または一組織部門の管理運営を行い、事業や人材などの開発ができる。

第2章 指導者の受講要件

(指導者の受講要件)

第4条 認定を受ける指導者は、以下の要件を備えているものとする。

1. 自然学校指導者

(1) フォーラムの会員であること。

(2) 20歳以上。自然学校におけるプログラム提供のための基礎的な知識と技術を有していること。

(3) 上記(2)の活動実績証明書を発行できること。

2. 自然学校企画運営者

(1) フォーラムの会員であること。

(2) 自然学校指導者の資格を有していること。

(3) 25才以上。指導経験が3年以上かつ150日以上の現場指導実績があること。かつ、150時間以上のプログラムデザイン実施運営実績があること（2泊3日のプログラムデザインを7回以上実施）。

(4) 上記(2)の活動実績証明書を発行できること。

3. 自然学校組織運営者

(1) フォーラムの会員であること。

(2) 自然学校企画運営者の資格を有していること。

(3) 30才以上。事業管理および運営の責任者として3年以上かつ300時間以上の実績を有するもの。

(4) 3名以上の専従職員がいる団体に所属していること。

(5) 上記(2)の活動実績証明書を発行できること。

第3章 指導者の認定及び登録・登録更新

(指導者の認定)

第5条 各指導者の認定は、「自然学校センター」が認定し、運営委員会にて承認された者とする。

第6条 各指導者の認定要件は以下の通り。

1. 自然学校指導者

(1) フォーラム自然学校指導者養成講座において、基礎・専門課程およびOJTを修了したと認められるもの。

(2) フォーラム自然学校指導者養成講座において、基礎・専門課程及びOJTの一部の科目を履修している場合には、残りを漸次履修することにより修了することができる。

(3) 各団体において、上記基礎・専門課程およびOJTと同程度の内容を履修し技能を修得していると認められた者。

(4) 各大学、専門学校、教育機関において、上記養成講座の基礎・専門課程と同程度の内容を履修し、フォーラム及び各大学、専門学校、教育機関が認めるOJT受け入れ校にてOJTを修了した者。

2. 自然学校企画運営者

(1) フォーラムが主催するディレクター指導者養成講座を受講し修了したと認めら

れる者、または養成講座修了と同等の能力を有することを認められる者。

3. 自然学校組織運営者

- (1) フォーラムが主催するマネージャー指導者養成講座を受講し修了したと認められる者、または養成講座修了と同等の能力を有することを認められる者。

(指導者の登録)

第7条 指導者の登録は以下の手順で行うものとする。

- (1) 自然学校センターによって認定され、運営委員会で承認された者は、資格を登録することができる。登録を希望する者は、登録料および登録申請書を自然学校センターに提出する。
- (2) 自然学校センターは所定の登録申請書を確認の上、登録証を交付する。
- (3) 自然学校センターは、自然学校運営者の登録名簿を開示する。
2. 自然学校運営者が団体正会員・団体会員に所属している場合には、団体正会員においては無制限に、団体会員においては3人までを団体正会員および団体会員会費内にて所属を認める。団体会員において4人以上の場合には、あらたに個人会員として登録をするなどのフォーラム会員会費を納入のこと。

(登録料)

第8条 指導者の登録料は以下の内容とする。

- | | |
|---------------|----------------------|
| (1) 自然学校指導者 | 登録料及び登録更新料を1000円とする。 |
| (2) 自然学校企画運営者 | 登録料及び登録更新料を1000円とする。 |
| (3) 自然学校組織運営者 | 登録料及び登録更新料を1000円とする。 |

2. 一旦納入された登録料は、理由の如何を問わず返却しない。

(登録及び登録の更新)

第9条 指導者の登録更新の手続きは、次の手順で実施するものとする。

1. 自然学校指導者

- (1) 自然学校指導者の登録有効期間は、1年とする。
- (2) 登録更新希望者は、更新手数料を登録有効期間内にフォーラムに提出する。
- (3) 資格失効者の再登録については、運営委員会の承認を得るものとする。

2. 自然学校企画運営者

- (1) 自然学校企画運営者としての登録有効期間は、1年とする。
- (2) 上記の条件を満たした者は、更新手数料を登録有効期間内にフォーラムに提出する。
- (3) 資格失効者の再登録については、運営委員会の承認を得るものとする。

3. 自然学校組織運営者

- (1) 自然学校組織運営者としての登録有効期間は、1年とする。
- (2) 上記の条件を満たした者は、更新手数料を登録有効期間内にフォーラムに提出する。

(3) 資格失効者の再登録については、運営委員会の承認を得るものとする。

(指導者登録の終了)

第10条 指導者は次の場合その資格を喪失する。

1. 自然学校指導者

(1) フォーラム会員の資格を喪失したとき。

(2) 更新が行われないとき。

(3) 自然学校センターによって、自然学校指導者としての資質が認められないと判断され、そのことが運営委員会で承認されたとき。

(4) 本人から書面での申し出があったとき。

2. 自然学校企画運営者

(1) フォーラム会員の資格を喪失したとき。

(2) 更新が行われないとき。

(3) 自然学校センターによって、自然学校運営者としての資質が認められないと判断され、そのことが運営委員会で承認されたとき。

(4) 本人から書面での申し出があったとき。

3. 自然学校組織運営者

(1) フォーラム会員の資格を喪失したとき。

(2) 更新が行われないとき。

(3) 自然学校センターによって、自然学校組織運営者としての資質が認められないと判断され、そのことが運営委員会で承認されたとき。

(4) 本人から書面での申し出があったとき。

(住所及び氏名変更届け)

第11条 指導者は、登録申請時に、フォーラムに届けた住所、氏名、その他に変更があったときには、速やかに届け出るものとする。

2. 自然学校運営者が団体正会員・団体会員に所属している場合、所属先が変更した場合には、すみやかに変更先を明らかにすること。団体正会員・団体会員から離れて、個人になった場合には、あらためて個人正会員・個人普通会员として、フォーラムに入会手続きを行うこと。

(登録の拒否)

第12条 自然学校センターは、自然学校運営者としてふさわしくない行為をした場合、運営委員会に諮り、認定を抹消することがある。

第5章 補則

(規定の改正)

第13条 本規定の改正は、公益社団法人日本環境教育フォーラム運営委員会の審議を経て行うことができる。

附則 1 本規定は、平成17年8月1日より施行される。

投稿論文

報告

学校環境教育における当事者意識の育成に関する研究
—石巻市雄勝地区船越小学校での実践を事例として—

石山雄貴（東京農工大学大学院連合農学研究科）

This research is a case study to analyze the possibility of ESD from education practice in Funakoshi elementary School. It was practice mainly on the children's spontaneous learning by their problems' recognition. On the other hand, it was the practice aimed at the learning that relates to the local nature, industries and earth scale environment problems. That is the practice to cultivate the children's sense of ownership for local issues and earth scale environmental problems. The sense of ownership was shared between teacher and children. Through sending the learning outcomes to out-of-school and residents' participation in community development plan, the education for sharing the sense of ownership exceeded the framework of school education to become the future issue as ESD.

キーワード：学校教育、ESD、当事者意識、地域教材

1. はじめに

学際的な性質をもつ環境教育の推進において小学校がもつ役割は大きい。環境教育の指針として「環境教育指導資料」(中学・高等学校編 1991 年、小学校編 1992 年、事例編 1995 年)が創設され、それは 1990 年代から 2000 年前半にかけての環境教育に関する大きな動向を受けて 2007 年に改訂されてきている。一方で、今村・塩川(2005)が環境教育の実施における 6 つの障壁¹⁾を挙げているように、「総合的な学習の時間」の削減など学校をめぐる社会状況などにより、環境教育を推進することが困難になっている状況がある。つまり、現在、学校教育における環境教育は過渡期のなかにあり、あらためて従来から行われていた総合的な学習を中心とした、環境教育実践の意義を明らかにする必要があると考えられる。

2. 学校教育における当事者意識の育成と ESD

2006 年の教育基本法改正、2007 年の学校教育法改正を受けて 2008 年策定の教育振興基本計画では「持続可能な社会の構築に向けた教育の推進」という文言が規定されたこともあり、今後の ESD の推進において学校教育のもつ役割は大きい。阿部治(2010)は、国際的動向、国内の動向に賛成したうえで、ESD を「人々が持続可能な社会の構築に主体

的に参加することを促すエンパワメントであり、そのための力（つなぐ力、参加する力、共に生きる力、持続可能な社会のビジョンを描く力、など）を育む教育や学び」²⁾と定義している。また、ESD が登場した背景として、グローバリゼーションの台頭により様々な事象が複雑に絡み合う地球環境問題が登場したことがあり、ESD はグローバリゼーションに対抗する学びとしても捉えられる。そもそも、学校における環境教育は地域と深いつながりをもって展開されてきている。過疎・高齢化など疲弊する農山漁村において、持続可能な社会の構築に向けた地域づくり学習の拠点として学校は大きな可能性をもつ。そこでは地域づくりの担い手として地域課題や環境問題に対する当事者意識を育むことが、学校教育における ESD として求められている、と考えられる。

本研究では上記の研究目的のもと、徳水博志先生が宮城県石巻市雄勝地区(旧雄勝町)船越小学校（2014 年 4 月石巻市立雄勝小に統合）で行われた実践から当事者意識を育む教育実践のあり方を明らかにし、その ESD としての可能性を明らかにする。そのために教育実践に関して徳水自身がまとめた資料(『文芸研の授業⑨/総合学習編 森・川・海と人をつなぐ環境教育』、明治図書、2004 年 8 月・「森・川・海と人をつなぐ環境教育」『生活教育』、640、42-55、2002 年 3 月・「総合学習地球の環境問題を調べよう」、第 39 回文芸教育全国研究大会・青森大会資料)と実践の背景である彼の教員としての資質・力量に関するインタビュー調査にもとづくデータを分析した。

3. 徳水博志先生による船越小学校での環境教育実践

雄勝地区は人口約 4000 人、約 1500 世帯の地区(平成 22 年国勢調査)であり、2005 年に石巻市と合併した。リアス地域特有の山と海に囲まれた雄勝地区では、帆立貝養殖業や硯生産が営まれてきた。徳水による船越小学校での実践のうち、なかでも注目できるのが「船越学区の帆立貝養殖について探ろう」と「船越学区の森・



川・海をつなぐ」 という前後期テーマからなる「森・川・海と人をつなぐ環境教育」の実践(2000 年度)と「地球の環境問題を調べよう」の実践(2003 年度)である。

「森・川・海と人をつなぐ環境教育」は、船越小学校で総合的な学習を始めていくにあたって試行錯誤のなかで展開された実践である。この実践は、「子どもたちに身近な地域素材である帆立貝の養殖を成り立たせている自然的条件に気付かせて、地域の森・川・海のひとつながり(相関・連鎖)の生態系を認識したり地域の環境を見つめ直して、そこから地球温暖化、酸性雨、森林破壊などの地球規模で起こっている環境問題に関心を深めて、自然と人間の『共生』に関する基礎的認識を獲得させること」をねらいとしている。また、

この学習のねらいを達成するにあたり、当時、北海道大学教授であり『森が消えれば海も死ぬ』（講談社）という書物を発表していた松永勝彦の海と川との生態系が繋がっているという科学的な学説を下地とした。

前期の「船越学区の帆立貝養殖について探ろう」は、以前から社会科で扱ってきた帆立貝の養殖体験活動①帆立貝の出荷体験②採苗器の投入体験



図2 採苗器の投入体験の様子（注2）

③耳吊り体験）から始まる。共通体験活動の後、個々人が課題を設定し、それぞれ親や地域の養殖業者、漁協への取材に行き調べ学習が行われた。さらに、児童たちが調べた結果を比較等することで、矛盾点や整合性を明らかにし、新しい課題を設定していった（徳水はこの過程を「すり合せ」と呼んでいる）。その結果、「雄勝湾と船越湾という二つの湾の養殖方法の違い」という課題が、児童全員が共有する問題意識として形成されていく。この問題意識に関して、両湾の自然的条件や社会的条件の違いを調べ学習のなかで明らかにしていった。その後、単なる体験学習や調べ学習で終わらないために、「二つの湾の養殖の違いは、自然的条件の違いから生じていることに気付く」「漁師は自然的条件を活かして養殖方法を工夫していることを捉えると共に、自然と人間の共生に関する基礎的認識を獲得する」ことを学習目標として再設定し、児童の集団思考の授業をしていく。この授業は、教師が児童たちに学習目的にそって両湾の違いや共通点に関して質問をしたり、対話をしたりしていくことで展開され、そのなかで自然的条件や社会的条件の違いのなかで養殖方法が工夫されるという認識を、児童たちが気付くことで当初の学習の狙いに接近していった。

後期のテーマは、「船越学区の森・川・海のつながりを探ろう」である。はじめに、「森は海の恋人」運動をしていた畠山重篤の講演が学校で開催され、講演後は児童が感じた課題や興味に関しての調べ学習が行われ、「地元の海はこの森から栄養分が運ばれてくるか」という学級全体の問題意識を形成していった。その問題意識にそって、共通の体験活動（①森の腐葉土を調べる体験活動②沢水を調べる体験活動③海のプランクトンの採集）が行われた。当初は3回の体験活動で終了する予定だったが、当時、児童たちが持っていた腐葉土への関心もあり、腐葉土の保水力実験が追加され行われた。これらの共通体験をもとに一人一人課題を設定し、同様に調べ学習の結果を発表した。発表会と児童全員が共有する問題意識の形成過程のなかで、地元新聞が報道した磯焼けに関心が集まり、磯焼けに関する学習会がビデオ等を使い行われた。この学習会の背景には、児童による磯焼けに関する調べ学習と、沢水ルートと砂防ダムに関する調べ学習の発表をすりあわせると、大変価値がある課題が生まれるという徳水の判断があった。事前に徳水は当時、漁師向けに開催していた講習会の資料を取り寄せ、自身で磯焼けに関する学習を行い、磯焼けの要因として様々な要因がある中で、教師の狙いや教材化の可能性などを勘案し、磯焼けの要因

を森林破壊による鉄イオン不足にしばった学習会を行った。学習会で学んだことと調べ学習の結果を照らし合わせると、広葉樹林の減少が磯焼けと関連することがわかり、地域の磯焼け調べへの関心がさらに高まっていった。この過程に徳水は「教師から与えた磯焼けのテーマが、子ども自身の内面から生まれた問いに転化していき、地域で起こっている磯焼け問題を、自分自身の課題として担う主体が形成された」ことを実感したという。一連の学習により磯焼けの場所と原因を探ることが共通の問題意識とされ、実際に山に入り、森林分布や沢水のルートを地図に落としていく実地踏査と、地区の漁師にアンケート調査が行われた。この調査結果と松永勝彦の科学的な学説に基づく仮説を検証し、雄勝地区での養殖業における問題点を上げる話し合いが行われた。その後、学習課題を「人間は自然の一部であり、自然を利用しなければ生きていけない存在であり、自然のつながり(生態系の連鎖・連関)を壊さない範囲内で最小限に自然を利用して自然と共存するしか、生き延びていけないことを認識する」と学習の狙いを再設定し、「船越学区の帆立貝養殖を守り発展させるためには、どうすれば良いのか」という課題をもとに話し合いを行うことで、学習の狙いの達成が目指された。

もう1つは、「地球の環境問題を調べよう」という実践である。この実践は、平成20年8月の文科省による小学校学習指導要領解説の総合的な学習の時間編内での一事例として掲載されている。実践は6年生を対象に行われ、その前に行われた「森と土の探検」の実践と連続性をもたせている。地域の森林から地球の環境問題へ連続性を持たせるために、森林の立ち枯れの要因として酸性雨による土壌の酸性化を唱え、炭の散布によって土壌を中和させていく実践を描いた宮下正次による『炭は地球を救う』(リベルタ出版)を参考にし、「多く地域の森林に存在していた立ち枯れと酸性雨との因果関係を探らせること」「人間と自然の共存の思想を育てる」という学習のねらいを設定した。前段階である「森と土の探検」の感想の中で、酸性雨や環境問題に関して高い関心をもっていたこともあり、酸性雨に関しての学習から始められた。学習の結果生まれた課題に対し、各々が調べ学習を行い、その発表が行われた。酸性雨の原因や仕組みに関する知識の取得という学習の到達点や、少数の児童が地域の立ち枯れの問題と酸性雨の因果関係について考えているという学級の様子から、参考にしていた宮下正次を招き、立ち枯れの状況や酸性土壌を中和する炭の効用の話、雄勝の山の土壌のpH調査に関する講演と、実際に炭を撒く体験学習を行った。その結果、少数の児童しか認識していなかった立ち枯れの問題と酸性雨の因果関係に関する課題意識が児童全体に広がり、「雄勝の立ち枯れと酸性雨の関係について調べてみよう」という共通認識を形成していく。この共通課題をもとに、森林に入り、一本一本の樹木やその植生の調査や立ち枯れに関して地域住民にインタビュー調査をし、立ち枯れが酷い松の根元に炭を撒く活動を行った。これらの調査の結果に関して、まとめの話し合いを行った。まとめは、児童の学習過程の感想文の変化をもとにして、「人間は自然の一部であり、人間は自然を利用しなければ生きていけない存在だが、自然の生態系を壊さない範囲内で最小限に自然を利用して、自然と共存するしか生き延びていけない、という人

間観・世界観に到達させたい」という学習目的、学習の到達点を設定し、自然と人間との関係性や自分に出来ることは何かについての話し合いが行われた。

上記に挙げた徳水実践の特徴として以下の点が挙げられる。授業の展開の仕方として、導入部分で、価値ある課題の設定に結びつくような共通体験活動の導入、子どもの経験知と科学的な知識を結びつけて問題意識を高められるような学習会を行い、それを出発点としながら課題を設定し、調べ学習を行い、その成果を発表することによって各々の課題の共有化をしている。その過程を経て1つの共有する問題意識を形成し、それにそって授業や調べ学習を行う。その結果をもとに、話し合いや発表会を行ってまとめをしている。実践の中で帆立貝養殖や「森は海の恋人」運動、森林の立ち枯れ調査という教材に関して現場で働く専門家を招き、講演など児童との交流をしている。また、実践を行っていく上で単なる体験学習、調べ学習で終わらせるのではなく、「人間と自然の共生」という明確な学習の狙い、つまり教師側が教えたい「教え」を持って行われている。一方で、学習の狙いを持ちながらも、児童たちの課題認識という教材に対する「気づき」によって授業を展開させていく、児童たちの主体的な「学び」を育てる実践だったと考えられる。つまり教師の「教え」と子どもの「学び」を一致させる授業であったと言える。さらに、地域における自然や産業を教材としながらそれに関する課題を探っていく中で、地域の個別の問題が地球規模の環境問題とつながっていると気づかせて、個と全体、特殊性と普遍性を結びつけていく実践であった。それは、児童自身で地域における課題を発見し、解決方法を探っていく中で、同時に地域課題と地球規模での環境問題との連続性を認識していく、当事者意識を育む教育であったと考えられる。

4. 環境教育を実践するために必要な教師の力量・資質とは何か

2014年1月の徳水へのインタビュー調査により、環境教育を行うための教師の力量・資質として、4つの能力が必要だと認識した。

1点目は、教育に対する強い教育愛である。徳水は「子どもたちを新しい世界に導きたい、新しい世界を見せてあげたい」という「強い欲求、願い、知恵、力」が必要だと語っており、教育実践は子どもに対する強い教育愛に支えられることが必要だと認識できた。

2点目は、社会的な問題や地域の問題を教材化出来る力量が教師には必要である、という点である。徳水の実践は、磯焼けや松の立ち枯れなどタイムリーな地域課題を扱っている。総合的な学習の時間で、生の現実を教材化して授業を展開していくためには、まず教師自身が「絶えず新しいこと、課題、社会や地域の問題に敏感でないといけない」と徳水は言う。また、自身でも教育実践に関わる本を何冊も購入し学習することで、それらに関する問題意識を深化させていき、徳水自身がもつ問題意識を子どもの発達段階にに応じて教材化し、プログラムを構築していくことで教育と結びつけている。徳水は「教科学習は現実の事象をある観点で抽出したモデル学習であるが、総合学習は現実の多様で複雑な生の教材を扱う。教師側に学習の枠組みをつくる教材化の力量が欠かせない」と述べている。

3 点目は、教材と子どもを結びつけるための、教師の「メタ認知」の能力である、と徳水は語る。扱う教材からどのような「社会認識、自然認識、人間認識」を育んでいくのか、子どもに獲得させたい能力（教育目標）を立て、一人一人の子どもの能力の現段階を把握しながら、与える教材の「最近接領域」の設定と絶えざる検討を行う力である。その過程は児童の反応によって修正する臨機応変な柔軟さを必要とし、学習の目標と児童たちの学びの欲求と絶えず擦り合わせをすることで、両者を一致させる必要性を語っている。それは、「教師が一方的に与えて結論を押し付けることは学びではない。子どもの思考をくぐっていないと全く意味がない」という「子どもが自分で試行錯誤して獲得した知識こそが本物」という認識に基づいている。さらに、そのような児童たちの試行錯誤の「学び」の中に教師の適切な「教え・指導」を入れることで、認識を深め、高いレベルの真理・真実を追求させていく必要性を語っている。徳水の教育の方向性や授業を展開させていく過程は、この「メタ認知の力」に左右されると考えられる。この徳水の教育観は、美術教育から得られたものであると言う。徳水はこうに述べている。「絵を描くという行為は、まず表現者の子どもの意識の中に、ある種の表象やイメージが湧きあがることから出発する。このイメージは教師が外から与えようとしても与えられない、子どもの主体的な行為であり、子ども固有の感受性が源になる。固有の感受性から得られたこの初発のイメージを、子どもが色と形を使って試行錯誤しながら行きつ戻りつしながら具現化していく過程で、教師は様々な「教え」を与えることになる。ここに美術教育が成立する土俵がある。しかし、教え過ぎると子どもの個性をつぶし、子どもが抱いたイメージとかけ離れた教師の求める絵になってしまい、押し付けになってしまう。」こういった児童の「学び」と教師の「教え・指導」の関係性が、教科指導や総合学習などの教授・学習全般にも当てはまると徳水は考えている。

4 点目は、「子どもに対する観察力と感受性」が必要だと徳水は語る。徳水は「母親と赤ちゃんの関係」を例にしながら、児童の表情や動き、ちょっとした口調、雰囲気などに絶えず神経を張り巡らせて、「この子は今飽きているから集中してないので、このこと言っても駄目だろう」「今やると、この子は吸収するだろうという」というような児童たちの学びの構えを、丸ごと捉える観察力と感受性の必要性を語った。また「夫婦の関係」を例にしながら、人間として尊重し、対等に与え合う「相補の関係性」の必要性を語った。つまり、それは子どもと自分(教師)との関係が一方的に教える＝教えられる関係ではなく、教師の働きかけに素直にこたえる信頼関係のなかで、互いの目的を1つにしていくことが必要であり、それらを達成していくためにも、子どもの成長や個性に対して注意深く寄り添っていくことを重視していることが考えられる。

これら 4 つの点は、それぞれに独立するのではなく重なり合っている。「社会的な問題や地域の問題を教材化」するにあたって、それを単に教師から子どもへ伝えるだけでなく、学習の目的をもって展開し、子どもの反応や学習欲求によって修正を図りながら両者を一体化するように展開させる。その修正を方向付けているのが「メタ認知の力」である。さ

らに、これらの展開の前提となっているのが、「子どもと教師の相補の関係性」であり、子どもと絶えず向き合う集中力である。そして、その全体は徳水自身の「子どもたちを新しい世界に導きたい」「新しい世界を見せてあげたい」という「教育に対する強い欲求・愛」によって形作られていると考えられる。また、「メタ認知の力」や「教育に対する強い欲求・愛」が総合学習に明確な学習課題の設定の土台を担っており、その学習課題を達成していくにあたり、「社会的な問題や地域の問題を教材化」し、さらに「子どもと教師の対等に与え合う相補の関係性」を重視するが故に、子どもの主体性を確保しながら地域課題から環境問題へ連続性をもった実践が進められたと考えられる。

このような徳水の教育論は、彼のライフストーリーに支えられる。徳水は、大学と大学院（修士課程）修了後、教育関係の出版会社に入社し、30歳を過ぎてから小学校教員の道を歩き始めた。小学校教員になったきっかけとして、学校教育の現場へ取材に行ったことを挙げている。中でも小学校を選んだ理由としては、自分がこれまで使ってきた大人の言葉、難しい概念が通用しない世界で自分を鍛え直したいという彼自身の思想があった。そもそも、彼は大学で哲学を学んでいた。高校の時、進学先の選択肢として哲学を学ぶか芸大で学ぶか迷っていたのだが、高校時代から抱えていた「世界の存在の理由とは何か、人生の目的とは何か」というテーマに関して自身に切実な要求があり、哲学科を選択した。進学後、大学で哲学を学んでいく中で研究者としての道も視野に入っていたのだが、文献学的な研究に飽き足らず、また全共闘世代の後の世代として、社会を取り巻いていた目の前の切実な問題に向き合っていくためにも就職を決意した、と言う。教員になって半年後、文芸教育研究協議会に加入した。文芸教育研究協議会は「自己と自己を取り巻く世界をよりよい方向へ変革する主体を育てる」という教育目的をもっており、その理念が、彼が当時もっていた問題意識や思想に重なったのだと言う。文芸教育研究協議会会長である西郷竹彦からは「思想から授業論から教師論から一番影響を受けているかもしれません」と語っている。さらに、総合的な学習のプログラム作成や実践をしていくにあたって、日本生活教育連盟にも加入している。日本生活教育連盟に加入した理由としては、文芸学理論が先行していた文芸教育研究協議会に不足する、子どもたちの問題意識や取り巻く地域、生活などの生活文脈から学習を組み立てていく視点を補うことを挙げている。その他にも、哲学とともに強い関心をもっていた美術に関する研究会にもいくつか所属している。これらから、彼の教育観の原点には哲学と芸術があり、そこで培われた自然認識や社会認識が、教育研修や研究会への参加に繋がり、この環境教育実践の目標としての「人間と自然との共生」に繋がる。さらに、哲学科から出版社就職へ、さらに教員という目の当たりにした現場へ次々と入っていく「現場主義」というライフヒストリーが見えてくる。それは彼の社会的な問題や地域の問題を認識しそれを教材化していく原点であると考えられる。

5. 当事者意識を育む環境教育実践のあり方と ESD としての可能性

本実践の取り組みは、彼が持つ芸術や哲学を通した自然・社会認識に関する思想や教員

としての力量を土台にした当事者意識を育む教育実践であった。また、この実践の背景には徳水自身がもつ問題意識がある。つまり、本実践で育まれる当事者意識は、児童の中だけで共有されるのではなく、学級全体で共有されていることが分かる。教師がもつ地域課題、環境問題に関する当事者意識を出発点とし、児童たちの主体的な学びに寄り添うようにして教師が地域課題と環境問題をつなげ合わせた方向性を示すのである。それにより、教師＝児童の垣根を超えて当事者意識が共有されるのである。

だが、本実践においては、地域における課題から自身の生活や環境問題にまで視野が広がりつつも、その背後にある社会状況や経済活動に関してまで教材化はしていない。教材化の枠組みを理科学的な内容に焦点化したからであるが、そういった統合的な視点が ESD には不可欠である。

一方で、この実践は学習発表会の創作劇や実践終了後も、これらの実践に関してテレビの取材や日本海水学会が雄勝町で開催されることで、多くの住民に発信された。テレビの取材は養殖業実践を支えた地域住民に支えられ、日本海水学会が子ども、学校、保護者、町役場、町長、地域の漁業関係者の協力と参加に支えられた。さらに、これらの実践をきっかけに、地域住民たちが植林を始めている。つまり、これらの実践の結果、学校教育の枠組みを超えて、地域全体で本実践で扱われた地域課題の当事者意識が共有されていた可能性をもつ。このように学校が地域づくりの拠点としての役割を持つことは ESD において必要な視点だと考えられる。

今後の研究課題としては、本実践を受けた当時の児童や実践協力者の視点から調査し、本実践が持つ地域づくりとしての側面を考察していくことが残っている。ここで育まれた意識が今後の生活にどのような影響を与えているのか。特に、実践協力者を中心とした地域住民がこの実践から何を学んだのかを明らかにすることが今後の ESD 研究において必要な視点だと考えられる。

6. おわりに

本研究で扱った雄勝地区は東北地方太平洋沖地震に伴った 20m 近い津波が中心地に襲来し、住宅や港、加工場、商店街などが全壊した。徳水が震災時勤めていた雄勝小学校も同様に被災し、自宅だけではなく、保護者の就労の場も失った児童が多く在籍したため、児童数も著しく減少することになった。そのような状況の中で、徳水は被災体験と復興に向き合うことで、「喪失体験」に寄り添っていく教育実践を行っている。さらに、雄勝地区震災復興まちづくり協議会の委員を務めるとともに、「地域の復興なくして学校の再生なし」のスローガンを提唱し、自らも妻と復興プロジェクト「雄勝花物語—ローズファクト



図3 ローズファクトリーガーデンの様子(注3)

リーガーデン」を立ち上げるなど、自身も雄勝地区の復興の担い手としての役割を担おうとしている。つまり、震災を契機として、学校教育のなかだけではなく、復興という地域課題に対しても積極的に活動していることが分かる。環境教育の源流として位置づけられる公害教育における教師は、学校教育の枠を乗り越えるようにして、公害被害者によりそいながら、地域課題の解決に努めていた。そうした地域における教師のあり方が、徳水の学校内外の実践からみることができ、その下地として本実践が位置づけられる可能性をもつ。今後は徳水の、東日本大震災を契機とした学校の教員から地域づくりの担い手としての飛躍のプロセスと、復興の主体としての取り組みの実態、諸活動の役割から、東日本大震災後の環境教育における教師のあり方を展望していく必要がある。

注 1

<http://portal.cyberjapan.jp/site/mapuse4/#zoom=11&lat=38.54491&lon=141.35147&layers=TTTB> より筆者作成

注 2 芸研の授業⑨/総合学習編 森・川・海と人をつなぐ環境教育 p48 より抜粋

注 3 2013 年 7 月 14 日筆者撮影

引用文献

- 1)今村光章・塩川哲生,「持続可能性にむけての教育を阻む障壁を乗り越えるために」,『持続可能性に向けての環境教育』,昭和堂,155-171,2005 年 10 月
- 2)阿部治,「ESD(持続可能な開発のための教育)とはなにか」,『ESD をつくる地域でひらく未来への教育』,ミネルヴァ書房,1-27,2010 年 4 月

安藤百福センター・トレイル

明治 32 年（1898 年）から 6 年間、小諸義塾で英語と国語の教師をしていた島崎藤村は、大正元年（1912 年）に「千曲川のスケッチ」を発表した。この作品は、自らの足で訪ね歩いて、小諸の自然と地元の人たちの生活ぶりを書いたものである。

藤村は、冒頭に旧小諸町大手にあった自宅から、千曲川を渡り安藤百福センター付近の松林を通して、南に広がる御牧ヶ原でわらびを採り、その後センターに隣接した鵜久保集落に戻って半日を過ごしたと記している。今から約 115 年前に、藤村は仲間とともにトレイル・ウォークを楽しんだようだ。

安藤百福センター・トレイルは、安藤百福センターを起点として全 4 コース 23km からなり、雄大な浅間連峰を望みながら、雑木林やため池、そして田んぼや畑など暮らしの中で育まれた多様な里山の自然と、布引観音や風穴、石仏などの歴史に触れることができ、往年の藤村の足跡も追うことができる。すでに地元やセンター利用の人たちがトレイル・ウォークを楽しんでいる。

また、安藤財団では日本ロングトレイル協議会と連携し、ロングトレイルの普及、振興のための支援事業を始めることとした。財団は、長年にわたって自然体験活動の普及・啓蒙に取り組んでいるが、子どもたちがおこなう自然体験の活動地は、山、川、海や身近な森林やキャンプ場が中心であり、どのフィールドでも「歩く」ことが基本であると考えからだ。



「御牧ヶ原コース」



「浅間・森林浴コース」

（安藤財団 荒金善一）

小諸ツリーハウスプロジェクト

安藤百福センターの森では、自然体験に興味がない人でも、「アート」をフックにして豊かな自然に触れ合ってもらうことを目的に、国内外で活躍する著名なデザイナーや建築家らがデザインした、「既存の枠にとらわれない自由な発想のツリーハウス」を展示し、自然体験活動のさらなる普及と底辺の拡大を図っている。

将来、森の中に 10 棟のツリーハウスを建築する計画だが、現在すでに 5 棟が竣工している。今後、安藤百福センターのホームページでの情報提供のほか、アウトドア雑誌、アート・デザイン情報誌などを通じてプロジェクトを発信していき、小諸市の交流人口創出を図り、微力ながらも地域観光の活性化にお役に立てればと思う。

《2013 年度 竣工作品》

第 3 弾 7 月竣工 「チーズハウス」 プレイセットプロダクツ デザイン

第 4 弾 10 月竣工 「オオムラサキのツリーハウス」 カニカピラ デザイン

第 5 弾 11 月竣工 「間」 佐藤可士和 デザイン

(施工: 中山空間設計、原建築)

URL : <http://momofukucenter.jp>



(安藤財団 荒金善一)

事業報告

第4回環境思想シンポジウム

2014年3月18日（火）

【パネリスト】※五十音順、所属先は開催当時のもの。

朝岡 幸彦（東京農工大学教授）

加藤 尚武（京都大学名誉教授）

鬼頭 秀一（東京大学教授）

関 智子（国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター主任研究員）

富田 涼都（静岡大学助教授）

野田 研一（立教大学教授）

北條 勝貴（上智大学准教授）

福永 真弓（大阪府立大学准教授）

山里 勝己（名桜大学副学長・琉球大学名誉教授）

結城 正美（金沢大学教授）

【コーディネーター】

岡島 成行（安藤百福センターセンター長）



講演1 ゲーリー・スナイダーの環境思想——日本との関連で 山里 勝己（名桜大学副学長・琉球大学名誉教授）

皆さま、おはようございます。山里でございます。本日はお招きいただきまして、大変ありがとうございます。私は、アメリカ現代詩の研究から始めて、ゲーリー・スナイダー研究、環境思想、環境関係の仕事をするようになったんですけれども、沖縄ににいるということで、それだけではどうも満足できなくなってきて、アメリカ研究ということに関心が広がっていったということがございます。最近、文明論のような、いったい自分がいる状況というのはなんだろうというところまで来ています。本日は、スナイダーを中心に、自分が今いるところ、私たちが今何をしているんだろう、ということの少しお話しを申し上げたいと思います。



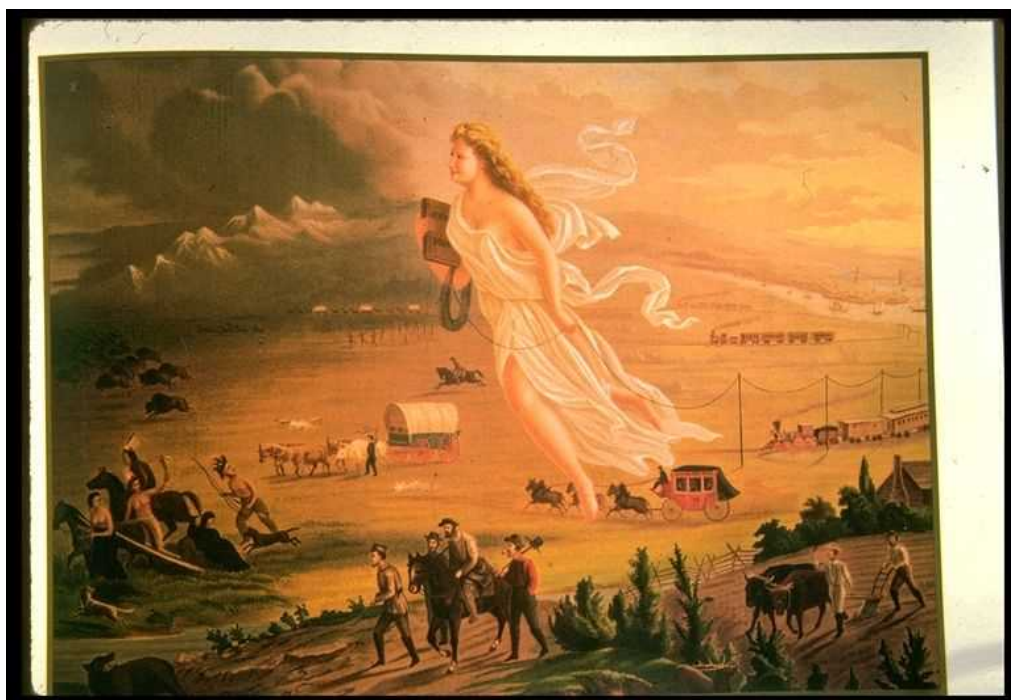
スナイダーは 1930 年、サンフランシスコで生まれて、それからすぐにワシントン州やオレゴン州のポートランドに移って、ポートランドのリード・カレッジを卒業します。リード・カレッジというと、スティーブ・ジョブズが卒業したというので有名です。それから、1945 年に、セント・ヘレンズ山に初登頂する。53 年にカリフォルニア大学バークレー校で日本語と中国語を学びます。最初はインディアナ大学に行くのですが、やはりどうもちょっと違う、自分はもうちょっと別のことをやりたいというので、バークレー校に戻って日本語と中国語を学びます。それから 56 年には京都に来て、相国寺や大徳寺で禅や仏教、それから山伏など、いろいろな日本の文化を勉強することになります。59 年に京都で最初の詩集が出ます。京都で結婚をして、68 年にアメリカに帰っていきます。74 年に『亀の島』という詩集が出て、これで 75 年にピューリッツァー賞を受賞します。それから、カリフォルニア大学のデービス校創作コースの教授など、アメリカ詩担当の教授に就任します。アメリカ文学アカデミー会員にも選ばれ、重要なエッセー集『野生の実践』を出版します。96 年に長編詩集の『終わりなき山河』を出版、これで 97 年に由緒あるボーリングゲン賞を受賞します。日本との関係でいえば、仏教伝道文化賞、正岡子規国際俳句大賞を受賞している。それから、Ruth Lilly 賞とか Wallace Stevens 賞というアメリカの詩人が受賞する最高峰の賞など、ほぼ全ての重要な賞を受賞している方でございます。2002 年にカリフォルニア大学を退職して、現在はサンフランシスコから車で 4 時間ぐらいのシエラ・ネバダ山脈の西側斜面、標高 1,200m にある家でエッセーを書いたり、詩を書いたり、国内外で朗読会や講演をしているという状況です。

さて、これから非常に大風呂敷を広げてお話をしたいと思いますので、お許しいただきたいと思います。これ（次ページ参照）は 1872 年に描かれた、ジョン・ガスト

の「アメリカン・プロGRESS」という絵です。これも非常に有名な絵で、皆さんも何度も見たことがあるかと思いますが、これをちょっと読み直してみたいと思います。この絵の中央には、西洋文明を象徴する女性がいて、本を持っています。それから電線の線を引っ張っていて、後ろから汽車が来て、もうアメリカ大陸の文明化が始まっています。右側が光に満ちた啓蒙された世界です。左側がダークな世界。闇の世界に追われていくのがネイティブアメリカンであり、野生の動物であり、それからシエラ・ネバダ山脈かもしれませんが、あるいはロッキーかも知れませんが、まだ開化されない世界がその先に見えます。真ん中は空間になっていて、人が漂流していく世界です。この女性の足元を見てみると、足が地に着いているのか飛んでいるのかよく分からないというような状況です。右端の隅には、すでに人が定住していて農業が始まっている、家もできているというような状況です。これは別の言葉で言えば、「明白なる天命」を描いた絵です。「明白なる天命」というのは白人が大陸を支配するのは、神の思し召しだというような理論です。このようなイデオロギーに追われていく人たちがいます。これは別のことでいえば、空間を場所に変えていく動きだというふうに言ってよろしいかと思います。

ところでこの「場所」の意味ですけども、簡単に言えば、ある物事が存在したり行われたりする所、位置、あるいは自分がいる所、占める位置です。オックスフォードの新英英辞典では、プレイスというのは、「自分の家」とあります。Come to my place とよく言いますね。プレイスというのはただの場所じゃなくて、自分が存在する自分の場所なんだ、という意味です。空間と場所といいますけれど、空間というのは物理的空間で、人が移動していく、漂流していくところです。漂流をやめてそこに定着して、定住すると職業が生まれ、生活が生まれ、文化が生まれ、その文化が蓄積されると歴史が生まれてくる。そこからいわゆる「場所の感覚」、自分がどこにいるのか、自分は何者であるか、その周囲の物理的な環境とはどういう関係にあるのか、その関係の中で自分のアイデンティティというのが育っていく。エコロジカル・アイデンティティともいいますが、「場所」とはそういう感覚が育っていくところであると考えていいかと思います。

それで、「アメリカン・プロGRESS」をもう一回読み直してみますけれども、あれは、もともとアメリカの発展というか、展開というか、そういうものを描いたと思います。しかし、別の見方をすると、この絵で描かれている人たちを場所を獲得する人たち、喪失する人たち、奪われる人たち、追われる人たち、というふうに分けることもできるのじゃないか。あの絵を見ても分かると思いますが、場所を失う人々がいますね。画面左側の人たちです。この人たちは追われて漂流を始めます。それから野生動物もそうです。右側には場所を獲得する人たちがいます。この人たちの後から来る人たちですね。ところが、その人たち自身も実は場所との関係を切断された人、あるいは自ら切断して漂流し、これから定着する場所を探していくというような人たちではない



か、というふうに読めるわけです。ですから、実はアメリカの発展というのは、このような動きを基礎にして展開されたのではないか、この絵を見ているとそういうふうに感じるわけですね。

場所を喪失する人々について、私は沖縄の人間だかということもあるかと思いますが、ずっと考えてきました。1945年以降の沖縄で「場所」を失った人たちはどうしたかということ、要するに自分たちの「場所」から排除されていく。大城立裕さんという、沖縄で初めて芥川賞をもらった方がいますけれども、その方が『普天間よ』という作品を書いて、普天間飛行場の中にある聖域、そこに戻っていきたい人たちの物語を書いています。それから福島、今年で3年目ですけども、あそこはフェンスの代わりに、不可視のバリアがあって、場所を失った人たちがやはりいるんじゃないか。移動をすることによって場所を喪失し、帰れないということが起こってきます。

日本中で、今、人々の漂流というのが起こっている。それから、先ほどのプレイスという言葉で言えば、やはりプレイスレスになった人たちが出現しています。これは北は北海道から、南は沖縄まで、今、私たちの目の前で起こっている現象じゃないかという感じがします。このような現象の根底にあるものは環境と倫理、軍事と環境という言葉で置き換えていくこともできるんじゃないかという感じがするわけです。ですから、環境という言葉の意味をもっと広げていくことが、私たちの仕事になってきている。私自身の仕事になってきたかなという感じがいたします。先ほども申し上げましたように、ちょっとだけ、私自身の自分探しといいますか、環境という視点から沖縄でずっと考えていることをお話しますと、1945年にアメリカがやって来て激烈な

砲撃が行われているわけです。この結果として、場所が奪われていった、場所を失っていった人たちがいるんですね。琉球併合があり、それから 1945 年以降は米軍占領というのがあって、人々が移動して行きます。ハワイ、カリフォルニア、ボリビア、アルゼンチン、チリ、ペルーに移動します。それから今度は、実は移民することによって、人が移動することによって成功したとか、そういう神話がありますけども、これも考え直してみると、移動される側から見ると、沖縄から人々が移動したために場所を失っていく人たちがいるわけです。このあたりも、私たちは環境の問題としてとらえることが可能かもしれない。そうすると、文明と人間の問題、先ほど言いましたけど、ジョン・ガストの「アメリカの進歩」を考えると、あの女性はどこまでやって来たのかなと思います。あの女性はアメリカ大陸を東から西へ横断し、それから太平洋を渡ってもしかすると広島、長崎、福島まで来てるんじゃないか。あの女性はもしかすると、今、3月11日で立ち止まっているんじゃないか、という感じがしないでもない。

1853 年、ペリーは江戸に行く前に琉球に寄っています。ペリーが来たときに「琉球のネイティブたちは、我々の文明に接することによって、文明の害悪を受けるかもしれないけども、しかし、今の生活よりは良くなるだろう」というようなことを言っているわけです。なぜこういう考えになったかという、いろいろな説明ができるかと思いますが、「アメリカ人のエデン探し」ということをアメリカの研究者は言ったりします。これはアメリカ文学の立場からです。アメリカでは、失われたエデンを探すためにヨーロッパ人がアメリカにやって来たんだ、ということを言ったりするわけです。ヨーロッパからの移住者が西部のウィルダネスを見て、ここはエデンだ、というようなことを言うんですね。非常に理想化されたアメリカの自然です。そしてそこにエデンを見る。そういうものを探して行って、西へ西へと進んだということも言えないわけではありません。

次に、アメリカの自然観と、ヨーロッパ人が自然に接した場合、あるいはアメリカ人が自然に接しながらどういうことを考えていったかということをお示ししたい、ということで引用しますが、ゲーリー・スナイダーの 2004 年の『山頂（絶頂）の危うさ』（*Danger on Peaks*）という本の中に、「夜明けの原爆」（“Atomic Dawn”）というエッセイがあります。彼は 1945 年にセント・ヘレンズ山に登るんですね。まだ少年なんですけど、結構山登りがうまくて、大人のクラブに入って一緒に登らせてもらうんです。実は、8月9日に原爆が投下されたんですが、彼が山から降りてきたのは 12 日で、13 日に新聞が彼のキャンプ地に届いていて、そこで原爆投下のニュースを読むわけです。そのときにスナイダーは——「両肩には朝の光、モミの樹林の匂い、大きな木の陰。薄いモカシンを履いた両足に大地を感じ背後にある雪を載せたセント・ヘレンズ山と一体化になっていた。衝撃を受け、科学者や政治家や世界中の政府を非難しながら、私はこのように誓った——永遠にそびえるセント・ヘレンズ山の清らか

さと美しさにかけて、僕は、一生をかけて、この残酷な破壊力とこれを使用しようとする者たちと闘う」— というようなことを言うわけです。ですから、アメリカの詩人の背後にあるのは、ひとつのイデオロギーというよりは、自然とウィルダネスと接することによって出てくる感性といいますか、感覚といいますか、感じ方といいますか、そういうものがあるんじゃないかという感じがしています。もちろん、スナイダーは成長していろいろなヨーロッパの思想家とか、いろいろなものを読みますけども、このあたりが彼の原点かなと思います。

また、彼は、自然との関係で、人間の眼差しで世界を支配するのではなくて、人間も見られているんだということを言っている。夜の闇の中から去っていく場面ですけども、背後の、どこか見えないところでコヨーテやクーガの冷たい目が、立ち上がり、去って行く僕を見つめている。“Watch me rise and go”ということを書いてあります。実はこの詩は長い詩なんですけど、大文字の私を使わない。“I”を使わない。最後の“Watch me rise and go”のところだけには、“me”というかたちで人間が出てきます。あえて大きな主語を使わないで、人間の大きさ、屹立する人間を描かないで、受け身のかたちの人間をひとつだけポンと出してきた。人間は、向こう側からのまなざしを受ける立場であると感じる。それまでは人間の行為によって世界を変えていくというような考えだったと思うんですが、そろそろ、向こう側の眼差しを意識する姿勢が、スナイダーの詩に特徴的なかたちで出てきているかな、という感じがするわけです。これもウィルダネスから出てきた感性で捉えた自然かな、と思います。イデオロギーから出発したんじゃないくて、体験の中から出てきたものではないかな、という感じがいたします。

実はアメリカ文学の中には、大洋を越えて東に行きたいという衝動があるわけです。ソローは、我々は一旦、ヨーロッパを忘れようとして太西洋を越えてきた。しかし、大西洋を越えるだけでは十分ではない。もう1回大西洋の3倍の幅を持つ「忘却の川」すなわち太平洋を渡るときに、我々はアメリカ人として本当のアメリカ人になれるんじゃないか、というようなことを言っている。それをスナイダーがそのまま実践したという感じです。

それからもうひとつ、スナイダーに大きな影響を与えた人として鈴木大拙がいます。スナイダーはインディアナ大学からバークレー校、カリフォルニアに移ったと言いましたが、実はそのとき、大拙を読んでいるんです。読んでいるうちにやっぱり自分は言語学者になるべきじゃない、もうちょっと大きい仕事をしてみたいということを考えて、西部に戻って中国語と日本語を勉強することになります。

スナイダーのもう一つの特徴は、西洋文化への懐疑ですね。彼はアメリカ先住民とも非常に長い付き合いをして、いろいろ考えるわけです。そうすると、西洋文化全体に対する懐疑が出てくる。もしかすると、太平洋を越えた向こう側に、何か自分に教えてくれるものがあるんじゃないか、ということで、日本に出發するということにな

ります。日本に行く前に友人にあてた手紙で、こういうことを言います。 - - 「僕の血にはフロンティア風のウォブリーのアナキズムがある」。ウォブリーというのは、アメリカ北西部で非常に盛んだった労働運動のことです。アナキズムというのはアメリカ西部のアナキズムです。「僕はその伝統の中で育ったんだけど、これを東洋の歴史の深みと結合させると、僕は文明をひっくり返すための槌子を手に入れることになるだろう」とスナイダーは言っている。だから別の言い方をすれば、日本に来たのは、その槌子を探しに来たと言っていると思います。その槌子は何か、ということも私たちは考えたいと思います。

それからもうひとつ、環境思想の中で重要なのですが、食物連鎖についてスナイダーは京都に到着した後でこういうことを書きます。「Where am I in this food chain?」。いったい僕はこの食物連鎖のどこに位置しているのだ、と言うんですね。別の視点から見ると、スナイダーが日本に来たのは、ただのオリエンタリズムということじゃなくて、もっと深い、人間の存在論的な意味を探していたんじゃないか、と。人間であるということは、いったい何を意味するのだ。この地上に存在するというのは、いったいどういうことなんだろうというような、そういう問いかけ、自問というのがあったのではないかという感じがいたします。「Watch me rise and go」というあの言い方、ウィルダネスの野生の動物たちが僕が立ち上がって、去っていくのを見つめている。まさに宮沢賢治ですね。有名な『注文の多い料理店』で、人間が野生の乗物に鍵穴から見つめられている。あそこどこか通じているところがあります。宮沢賢治は岩手で、スナイダーはカリフォルニアで、何か同じことを考えていたのではないか、という感じがいたします。ですから、スナイダーは 1968 年に出版された、日本滞在の詩を中心に集めた詩集の最後のセクションに、宮沢賢治からの英訳詩をたくさん入れています。英語で宮沢賢治を世界に紹介したのはスナイダーが最初です。盛岡の賢治記念館に行きますと、スナイダーの大きい写真が飾ってあります。

スナイダーはまた、西洋が我々にもたらしたのは社会革命だった、東洋が人間にもたらしたのは、自己が基本的には無であるという個人的な洞察だ、と言っています。表現する詩をそういうことを組み合わせながら、自分の思想をつくっていくというところが見られます。そのようなことをひとつを紹介したいと思います。日本文化、文学、仏教、自然観と、アメリカ現代詩を融合させよう、アメリカの思想と日本やアジアの文化・思想を融合させようという試みのひとつです。「Kyoto bone in spring song」というタイトルの詩があります。京都で生まれた春の歌とでもいいましょうか。一行目の「Beautiful little children」美しい、かわいい、小さな子どもたち、瓜の中で見つかった子どもたち、竹の中で見つかった子どもたち 怪しく輝くうぐいすの卵の中で見つかった完璧な女の子たち、女の赤ちゃん、と書いてあります。これは何かというと、「竹」はすぐわかりますね。かぐや姫ですね。「うぐいすのたまご」ですから、うぐいす姫です。メロンって私よく分からなくて、これを理解するのに非常に苦労し

たんですが、柳田国男を読んで分かりました。これ、瓜子姫のことです。スナイダーに、柳田国男を読みましたか？と聞いたら、読んだというふうに言ってました。自然と人間との間に一線を画するものがあるかどうか、そこに興味がある。舌切雀のエピソードもノートに書いたりしていますけれども、そういうふうには、人間と自然界が壁をなくして行ったり来たりしているという、日本的な、と言っていいんでしょうか、日本のディープなところから出てくる考えというのを、自分の詩の中に入れていこうとするというのがスナイダーにはあります。そこから環境思想の精神性、人間観、自然観の深化ということがあったかと思います。

それから“Song of taste”（味わいの歌）という詩があります。スナイダーの日本時代の「卒業論文」といってもいいかもしれません。これは70年に出版された詩集に入っているものですが、日本で書かれた詩です。自分は食物連鎖の中でいったいどこにいるのだ、Where am I in this food chain? という問いを、56年、日本に最初に来たときに彼は発していて、それをジャーナルに書きます。それに対する問いというのは、散文ではなく、詩人は詩で表現します。この作品では、実際に人間が食べているものはなんだということを、ハムとかベーコンなどと言わないで、実際に生きている動物の部位を使って表現している。これが食べるということの実像なんだ、実態なんだということをはっきりと書いてあるわけです。実は、われわれはお互いを食べ合っている。“Eating each other”というような言葉が出てくる。スナイダーはエコロジーを勉強しています。そういうところから、西洋的な、アメリカ的な考え方、それから日本的な考え方を融合しながらこういう詩が生まれてきたのかなという感じがするわけです。パンを食べる恋人の口にくちづけする、唇に唇を重ねて。ただの食べるという行為が実はセクシャルなイメージも有している。食べるということは愛という大きなひとつの儀式のようなものなのだ。ただ食べるんじゃないくて、お互いに食べる相手に対して、敬意を表現しながら、愛を表現しながら食べるのだ、という倫理観も出てきているという感じがします。

ゲーリー・スナイダーの思想の中では、エネルギーというのも非常に大きいテーマです。彼は現代文明の巨大な成長エネルギーをいかにぐるっとひっくり返して、自己と自然に関する探求へと変換するにはどうするか、ということ問いかける。

「子どもたちのために」(“For the Children”)という詩の中に、「君たちに一言。君たちと君たちの子どもたちに一言。離れず、花々から学び、身は軽やかに」(“Stay together / learn the flowers / go light”)という3行があります。“Stay together”というのは一緒に力を合わせて働きなさい、ということもありますが、訳ではちょっと短くして「離れず」。それから“learn the flowers”これは花々から、あるいは花々を学び、という言い方をしているかと思います。そして、“go light”「身は軽やかに」。これは色々解釈ができます。エコロジカルな生き方を暗示する言葉です。

そして、スナイダーはこういうことも言います。アメリカ文化というのは移動の文化である。それを再定住、もう一度「場所」に戻って自然と環境、自然環境と人間の関係を考えながら生活してみたらどうか。今の文明というのは、プレイスレスといいですか、ホームレスの文明ではないか。それをもう一度考え直してみよう、というようなことを言うんですね。自分の場所をもう一度発見する、あるいは再発見するというようなことを言いますけども、そのためには、アメリカ人であればネイティブアメリカンの歴史から学ぶというようなことがよく言われるのですが、実は詩集『亀の島』の中に、“What happen here, before ?”（「ここで何が起こったか」）という作品があります。この詩は地球の誕生から始まっています。地球の誕生からいま自分が住んでいるこの場所はどのようなものであったか、というようなことを研究していった、ずっと後で、ネイティブアメリカンもやって来る、白人もやって来る、人間たち、動物たちがやって来るというようなことで、ネイティブアメリカンの歴史さえも越えて、ディープな歴史の中で人間のありようをもう一回考えてみようという示唆します。この地球で私たちは、“How to be ?”（いかに生きるか）というようなことが重要なのだということを言うわけです。先ほどから何度も申していますけども、新しい自然観、人間観、惑星思考というようなものが出てきて、最終的にはわたし（たち）はいったい誰だろう、“Who am I ?” というようなことを言うんですね。これは別に新しいことでもなんでもないんです。シェークスピアを読んでいて、『リア王』の中のリア王が、80 いくつかで悲劇的な死を遂げるわけですけども、死ぬ前に Who am I ? とうめくように問いかけます。これは、文学の、あるいは私たち人間にとっての根底的な問いではないかというような感じがいたします。そのために、それに答えるために日本の、あるいはアジアの文化と、あるいは日本のディープ・ヒストリーと、そしてアメリカのディープ・ヒストリー、あるいはアメリカのウィルダネスといってもいいんですが、そういうものを融合したかたちで、スナイダーの思想、あるいは文学というものが生まれてきている、と言ってよろしいかと思います。

彼が忠誠を誓うのは「亀の島」の土、そこに住む生き物たち、太陽のもと多様性にあふれ、全てが融合し、相互浸透を生きる生態系です。最終的には、*Mountains and Rivers Without End*（『終わりのなき山河』）という彼の半世紀をかけた長編詩集ですが、これには最終的には地球全体を含むような惑星の思考にまでスナイダーの思想が発展していくということが読み取れます。そうするとですね、今考えると、スナイダーがやろうとしていることは「アメリカン・プログレス」で、闇の中に潜んでいた黒い部分、あの絵の左側に潜んでいたディープな、見えなかったもの、そこから何かをもう一回見つめ直し、拾い直して、もう一回、現代文明、近代工業文明の足りないところを補っていく、あるいはそこを修正していく何かを見つけようとするところにあるのではないか、という感じがいたします。

最後にひと言。環境思想について西洋だけじゃなくて、アジアからも何か提案しな

いといけないのではないかとと思っています。宮沢賢治が実はこういうことを言っています。『春と修羅』の中で、「新たな詩人よ 雲から光から嵐から／ 透明なエネルギーを得て／ 人と地球によるべきかたちを暗示せよ」と言っているのです。賢治も近代主義者というよりは、もうちょっとディープなところから地球と人、人がどうあるべきか、ということを考えていたのではないかと。私は国際学会に行きますと、環境文学、環境思想について、日本の宮沢賢治というのがすごいんだと言いますと、まだ訳されてないからよく分からないというようなことをよく言われますけども、私たちは宮沢賢治を大いに世界に押し出していく必要がある、のではないかと考えております。以上です。

岡島 山里先生、どうもありがとうございました。『For the Children』、最近出された本ですけど。これはスナイダーをまだあんまり読んでことがない方にとっては素晴らしい入門書だと思います。スナイダーのエッセンスが非常に詰まった本です。アメリカという国は面白いし、大きい。400年程度の歴史ですけど、各地に歴史があるから、全部合わせれば何千年にも匹敵する面白い歴史がたくさん詰まっておりますし、その中の核心として、ウィルダネスという概念があります。今回のお話は、アメリカ人にとってのウィルダネス、人類にとってのウィルダネスというのを考えていくためのスタートラインになるかと思います。質問をどうぞ。

Q： 宮沢賢治の『注文の多い料理店』に出てくるヤマネコの目というものと、ゲーリー・スナイダーが感じているコヨーテの目というものに同一性を見出されているというお話でしたが、スナイダーの感じている狩猟文化と、宮沢賢治の中にある日本の狩猟文化というものがまたどこかで通じているという問題があるのではと思いながら、伺っていました。もうひとつ、質問なんですけども、アメリカというのは移動の文化であって、再定住化させなければいけないと、お話になりましたけれども、これも日本との関係で考えてみますと、住環境弱者というふうに言えいいかもしれませんけども、常に災害が起こり得るようなところにしか住めない人たちがいる。東日本大震災がそのあたりのことを顕在化したと思います。山里先生が、日本の状況を見てスナイダーの件と比較して、どうお考えなのかな、というところを伺いたいと思います。

山里 移動の文化、確かに、定住することの不幸というのは存在すると思います。しかし同時に定住しないことによって、アメリカが、じゃあどうなるか、ということスナイダーは考えているわけですね。ですから、「再定住」というものは、申しあげましたように、ただそこに移るんじゃなくて、その周囲にある自然環境と密接な関係を持ちながら生きていくということを意味します。

Q： ロングスパンでのヒストリーの中で、先住民たちが居付くという、半ば少し概

念的な部分と、そして、その実際マネジメントをしてやっていくという人たちがいるという 100 年の歴史というのは、実は言説上、ものすごく対立してきたということがあるんだけど、そういうのはスナイダーの中ではどう回っているんだろうな、と思ってお聞きします。

山里 スナイダーが今いる場所というのが実は、いわゆるフォーティナイナーズというのが行ったゴールドラッシュの場所なんですね。それが 1849 年ですか、それから 100 年、150 年経ってもまだ回復しないという姿をさらしているわけですね。だから自分もあえてそこに移って、そこで元に戻ろうとする生活をしているんじゃないかと思います。なぜ、定住するかということを考えていますとですね、要は一体アメリカ人って何か、という問題にまで行く着くわけです。ヨーロッパから移って来て、北米大陸に住んでいる人たちがアメリカ人ということになっていますけど、もともとアメリカ人というのは、ネイティブアメリカンのことを指す言葉ですね。アメリカが国家になる、独立宣言が出されるその前後から、アメリカ人という意味は、ヨーロッパからやって来た白人を指すということになってきますけども、じゃあ、その人たちはいつアメリカ人になったんだとか、いつまでもヨーロッパ人なのかというような考え方もあるわけです。ネイティブアメリカンというのだけでも、そこで生まれたヨーロッパ系の人たちはネイティブアメリカンではないのか、ということも、ひとつの大きな考え方だと思うんですけども。そのときに、アメリカ人になるひとつの方法として、ネイティブアメリカンの歴史とか文化とか、彼らがこの大陸をどう扱ってきたかということ、これは環境思想ですけども、それを考える。それから、土地との関係性というものをもう一度考え直すことによって、新しいアイデンティティが出てこないか、新しいネイティブアメリカンという存在を考えるわけです。ですから、新しいネイティブアメリカンになるためには、土地との関係をもう一回、場所との関係をもう一回、考え直すことによって、ひとつの場所に定住することによって、その場所との密接な関係を構築することによって、エコロジカル・アイデンティティといいますか、あるいはニュー・アメリカン・アイデンティティといいますか、そういうものをつくっていかうという考え方だと思います。大きな文明的なパターンの問題を、スナイダーは捉えていると思うんですよ。アメリカという国がいったいどういうふうにしたのか、アメリカの文化というのはいったいどういうふうにつくられていったか、それを考えた場合に、ヨーロッパから移動して来た人たちが支配的になっているわけですけども、そういうかたちで文化がつくられていった、国がつくられていった場合に、じゃあ、誰が責任を持ってアメリカという社会というか、自然環境というか、そういうものを見るんだということに対する問いかけだと思います。だから、自分がひとつの実験を試みようということを、「再定住」

と呼んでいるというふうに申し上げてもよろしいかと思います。

- Q : スナイダーの再定住の思想には、コスモポリタニズムが深く関わっているとおっしゃっていて、私はそこがとても重要なことだと思うんです。今日のお話だとスナイダーの場所の感覚はウィルダネス、原生野生、原生史の中で培われるものであって、人とか共同体とかという要素が、わりと希薄なように思えたんです。けれども、そのコスモポリタニズムとの関係とか、人との関係とか、その辺りを少しお話しいただけたらと思います。

山里 スナイダーの定住というのは、必ずしも動くなというわけじゃないんです。スナイダーの *A Place in Space* (『空間と場所』) という本があるんですが、その序文に、「野生の心を持って、コスモポリタンのエレガンスでもって生きていきたまえ」、というようようなことが書かれている。ただ、私もまだ分からないんですが、アメリカのウィルダネスの持っている力、ヨーロッパにはないもの、多分日本にも欠けているもの。アメリカの大自然の持っている力からくる何かが、今の彼の近代工業文明の最先端の出来事に対する反応というものを生み出しているんじゃないかという感じがします。都市にもよく見てみると自然というものはありますし、都市の自然、都市の環境というものがあるわけですから、都市とウィルダネスは対立の関係ではない、というふうに言ってもいいと思います。

- Q : 「再定住」なんですけど、訳語について、「住み直し」という言葉を当てるのはどうかと思ったりもしたんです。固定化することをわりと望むような内包的な言葉の力が働くわけなんですけど、住み直しというと少しやわらかい表現にはなると思うんです。あのインハビテーションのエッセーそのものが、わりと人に再定住することを促すエッセーというよりかは、わりと文化論として地域のあり方として、関わり合いの方向性として、あるいは自然との向き合い方として、あるいは今まで気づいてなかった、自分の住むという行為に対する再検討するための素材として、おそらく出されたエッセーだと思っております。

山里 おっしゃる通りだと思います。私が「再定住」という拙い訳をしてしまったんですけども、「住み直し」と言うと、自然との関係において、あるいは場所との関係において、誰でもやらなければいけないことではないかということになりますよね。ですから、あれは訳し直してもっといいようにしていきたいと思います。

講演 2 〈串刺し〉考——〈残酷さ〉の歴史的構築過程

北條 勝貴（上智大学 准教授）

上智大学の北條と申します。よろしくどうぞお願いいたします。本日のタイトルのほうは少し生々しく「〈串刺し〉考——〈残酷さ〉の歴史的構築過程——」となっています。私自身は日本の古代史が専門なのですが、自然環境と人間との関係の歴史を志して、環境史あるいは災害史を専門分野にしながらこれまで勉強してきました。日本に収まっていれば何も分からないので、ある程度東アジアにフィールドを拡大しながら、中国のほうにも調査に入ったりして研究を続けております。



まず動物と人間との関係の歴史というものを考えてみますと、最近、カナダの北方狩猟民の研究をしている Paul Nadasdy という文化人類学者が、北方狩猟民がカナダの近代国民国家とどのような軋轢を生じていくかを問題にしています。北方狩猟民が抱いている、人間と動物とがどのような関係にあるのかという認識、これはよく〈動物の主〉神話という言い方をいたしますが、つまり、北方狩猟民が主な狩猟の対象としている動物は、〈動物の主〉という精霊的な存在が、人間との何らかの契約に基づいて肉として贈ってきてくれるものだから、それを人間が食べるのは正当なことなのだという考え方です。これは従来、人類学において、一種の文化的な構築物として扱われてきたわけですが、Nadasdy はさらに踏み込み、存在論的な実態として把握していくべきではないかという提言をしているのです。つまり、動物と人間との関係をこのような神話で説明しているということではなく、動物が人間のために肉としてやって来るということを真正な事実として認めるべきだという提言をしているわけです。

しかし、この議論には幾つかの問題点があります。1 点目として、Nadasdy の提言を認めてしまうと、環境倫理の立場からすれば、ヒト中心主義の肯定になってしまうということです。すなわち、〈動物の主〉神話を存在論的な実態とするならば、狩猟民の主食となるカリブーやアザラシといったような動物たちは、人間のための食物でしかないという位置付けになってしまうわけです。ここには、〈動物の主〉神話を支えているアニミズムが、果たして森羅万象を尊重するような形での環境倫理たり得るのか、という問題も内包されています。2 点目としては、北方狩猟民の世界観というのは、狩猟民の〈野生の思考〉という非常に体系化された考え方の下で成り立っているものですから、近代科学的な世界観を保持したまま、動物認識の部分だけを切り取って受け容れることはできないと思います。また、そもそも Nadasdy は〈動物の主〉神話をどう捉えるかについて、「文化的な構築物」という言葉と「存在論的な実態」という言葉を対立概念のように使っていますが、果たしてそれは対立概念なのかという見方もできると

思います。

今日させていただくお話は、そのような理論的前提に立ってのことになります。

(1)の「供犠と〈残酷さ〉」について。〈残酷である〉という認識自体、われわれは何を見て残酷と思うかということ非常にアプリアリな感性の働きのように見えるのですが、実はそうした感性そのものが歴史的に構築されてきたのだということをお話ししたいわけです。前近代の社会、民族社会においては、人間が生きることと他の生き物の生命を奪うことが密接に結びついています。日常的な体験の中に、常に殺生があるわけです。しかし、われわれの生きる近代社会においては、衣食住に関わる殺生は一部の生産者の側へ押し付けられ、見えなくされてしまっている。その結果、前近代社会や民族社会に、粗暴性・野蛮性・未開性などのイメージが付与され、われわれと何ら変わらないはずの生活に、残酷さの表象が結びつけられてしまうのです。われわれが持つ〈残酷さ〉の尺度は、そのように、歴史的・社会的に構築されてきたものです。

そうした〈創られた残酷さ〉の中でも、最もアプリアリな印象を持つもののひとつが、この〈串刺し〉という表象だろうと思います。日本の文献におけるこの初見は、8世紀に書かれた『出雲国風土記』の、意宇（おう）郡安来郷比賣埼（ひめさき）という土地にまつわる地名起源伝承です。これは非常に大事なものですので、現代語訳で確認をしておきたいと思います。

「北の海に比賣埼がある。飛鳥浄御原宮で天下を統治なさった天皇（天武天皇）の御世、甲戌の年（西暦 674 年）7 月 13 日に、語臣猪麻呂（かたりのおみのいまる）の娘が、くだんの岬を歩いていたら偶然ワニに出くわし」、このワニがいったい何者なのかということは諸説ありますが、今は問わないことにいたします。「襲われて戻って来なかった。そのとき父の猪麻呂は殺された娘の体を浜に埋葬し、激しい怒りの心を起こして、天に叫び地を走り回り、居ても立ってもいられぬほどに昼夜悲しみ嘆いて、埋葬した場所を離れなかった。そうしたまま数日が経った。そうしたのち、ワニに報復をしようという気持ちになり、矢や鉾を鋭く磨いて、適当な場所を選んで腰を据えた。そこで祈願して、『千五百万の天神、千五百万の地祇、併せて当国に鎮座していらっしゃる 399 の社、及び海神たちよ。大神の和魂はお静まりになって、荒魂は全て猪麻呂がお願い申し上げる所へお集まりください。誠に神の霊でいらっしゃるならば、私に報復をさせてください。それをもってあなた方が真の神であると分かるでしょう』と述べた」、このワニを神として見ているわけです。「するとしばらくして、百余のワニが、静かに 1 匹のワニを囲んで徐に集まり来たり、猪麻呂のもとへ至って進みも退きもせず、ただ取り巻いたままの状態に留まった。そこで、鉾を挙げて中央のワニを刺し殺し、その体を預かり受けた。そうして後、百余のワニは散り去っていった。殺したワニの体を裂いてみたところ、腹から娘の片脚が出てきた。そこでそのワニを切り裂いて串に掛け、路の傍らに立てた。猪麻呂は安来郷の人、語臣与の父である。この出来事から今日に至るまで、60 年が経っている」。

この話を見てもみますと、猪麻呂というのは先ほども言ったように、ワニを神として認識してしまっていて、話の構造を見てもみますと、娘の体とワニの体の交換というものが成り立っています。ですから、北方狩猟民ではありませんが、動物と人間の間の贈与交換が成り立っている話であり、その問題が実は裏側に隠れている。元来は安来の海浜部の漁撈文化に根ざした、動物と人間との対称性を物語る神話の形式であろうと思うわけです。

この伝承が語られた時代は、いわゆる律令国家、古代国家というものの建設期に当たり、そのときには神話の形式も、天皇を頂点とするヒエラルキーが厳然としたものへ改変されていく過程にありました。新しい神話の形式、階層的な神話の形式が国家からさまざまに発信されて、古い神話の形式や、精霊的な神々は排除されていくような状況になっています。また、氏族制から官僚制への移行が進む中で、氏族制に基づく語臣の歴史実践も、国家の官僚、例えば渡来系の人たちによる、文字として筆録する歴史実践に変わって来るときなのです。そこで古い神話の形式もさまざまに影響を受け、結局表面的なところでは、仇討ちのような話になってしまっている。ややヒト中心的なニュアンスに変わってきているのではないかと思います。

しかしその中で、そもそもなぜ串に掛けねばならないのかが、ちょっと気になるわけですね。日本列島の歴史の中で、この〈串刺し〉がいかなる目的で行われたのかを調べてみますと、まず、串を立てることによって結界を作る、神域を設定するものとしての串が出てきます。考古学的にも、六世紀後半頃から、斎串と呼ばれる短冊状の木製品が各地で出土しています。その原型はおそらく榊であって、樹木の枝に玉や鏡を掛けて神霊を寄りつかせる。それが、現在の神社の玉串のようなものになっていくわけですね。

次は『春日権現験記絵』ですが、これはちょっと時代が下って14世紀の始め、1309年の成立でしょうか、春日神のさまざまな示現の場面を描いた絵巻になっています。その中の一場面で、疫病にかかった男が家の中で嘔吐しており、それを疫病の原因である疫鬼が覗見している。これを追い払うためのまじないごとが家の前にしてあるわけで、修験者風の人物が立ち去るところですが、まじないをやって帰るところであろうと思います。ここに何が据えられているかですが、アップにしてみると、串に何か掛けられている。赤い幣帛のようなものと黒い紐のようなもの、ちょっと蛇のようにも見えるのですが、一般的には女性の髪の毛だと言われています。髪の毛というのは、中国文化からの影響ですが、人間の生命エネルギーが横溢する象徴である。その生命エネルギーでもって鬼を祓おうということかもしれません。いずれにしても、これは一見敵対的、攻撃的な関係ですが、神霊に対するものを串に挿しているという状態です。

また写真のように、長野県の諏訪社の御頭祭のときに献じられる、ウサギの串刺しがあります。こうした事例は世界的にも珍しくありませんが、供儀論の研究の中では、

なぜ串刺しにするかというその理由については、非常に残酷な殺し方だけでも、残酷な殺し方をするとその個体の生命エネルギーが外部に溢れ出てくる。それを神が喜ぶという発想でやっているのではないか、と考えられています。昔は僕もその考え方に賛成していたのですが、最近、ちょっとそれも近代的な残酷さの観念に縛られているものではないか、という気がしています。高知県物部村の狩猟儀礼では、獲物のシカの肉をその場で捌いて心臓を取り出し、その一部を切り取って木の枝に刺す。やはり〈串刺し〉です。これは何のためにするかというと、このシカを与えてくれた山の神に対する感謝、山の神への供献であるわけです。現在もこうした狩猟儀礼は継続的に行われています。

〈串刺し〉の問題をずっと突き詰めていきますと、そもそも古代においては、神に供献するための作法のひとつとして行われていたらしい。この点を中心に、非常に多様な意味を持っていたということが分かってくるわけですが、それが時間を経過していくにつれて痩せ細り、ある一定の価値のもとに単一化してしまうのを見ることができます。これを行ったのは仏教です。仏教の殺生罪業観、要するに、殺生は人間のなす罪の中で最も重いものであって、それを犯した者は必ず地獄に落ちるという考え方によって、〈串刺し〉の意味内容は変質していつてしまうのです。例えば、平安初期の『日本霊異記』という書物の中に、次のような話が収められています。これも現代語訳で読みます。「橘朝臣奈良麻呂は、葛木王の子である」、この人物は実在の人物で、奈良時代に謀叛の罪で処刑されています。「不相応な野望を無理に抱き、国を傾けようと考え、逆心を抱く者を呼び集めて、顔を寄せ合って謀叛の手段を相談した。また、僧侶の姿を絵に描き、これを的に立てて、僧の黒目を射る術を修練した。諸々の悪事を好んで行ったが、これより酷いものはあるまい。この奈良麻呂の奴（やつ）が」、これを「奴（やつこ）」と解釈する説もあるのですが、ここでは、奈良麻呂に対する蔑称ということで「やつ」と読んでおきます。「奈良山で鷹狩りを行った。そうして見てみると、その山には狐の子がたくさんいた。奈良麻呂は狐の子を捕らえ、木に串刺しにしてその巢穴の入口に立てておいた。奈良麻呂には幼い子供があったが、母狐は彼に怨みを抱き、姿を変え、その乳飲み子の祖母に化けて、これを抱いて自分の巢穴の入口に至り、自分の子を串刺しにされたように、奈良麻呂の子も串貫いて、穴の入口に立てた。賤しい畜生であっても、怨みに対し報いる手段がある。現報はすぐさま訪れるもので、慈悲の心が無くてはいけない。慈悲の無い行いをすれば、慈悲の無い怨みに曝される。そうして後、あまり日も経たないうちに、奈良麻呂は天皇に嫌われ、鋭い刀剣で斬られることになった」と書かれています。〈串刺し〉が残酷行為の代表のように書かれています。唐の時代に作られた仏教の百科事典『法苑珠林（ほうおんじゅりん）』に収録された地獄の描写に、そうした表現の典拠があるように思われます。同書の大焦炎地獄について説明している部分には、「彼の罪人を投じて、鉄叉の上に貫き、火中に豎て著く」と出てきます。これは言葉としても、構造的に先ほどの串刺し

とよく似ていますし、地獄を描いた絵の一部になって、日本中に普及していきます。おそらくこうしたものに基づいて、〈串刺し〉の意味もだんだんと変わっていくのだらうと思われます。

そして中世になると、このような状況がさらに進みます。無住という人物が著した『沙石集』という説話集に、〈串刺し〉の問題が出てきます。

「下野国に、ある沼で魚を獲ることを生業とする漁師がいた。その沼では、岸辺の下穴の中から魚が多く出てきていた。どれほどの数か、分からないほどであった。穴の中へ入ってよく見てみると、小さな徳利の中から魚が出てくる。これは不思議だと思っていると、最後に徳利の中から、1尺ほどの小さな蛇が1匹出てきた。漁師はこれを捕まえ、串に刺して、道の傍らに立てておいた。それから家に帰って魚を捌いていると、串刺しにした蛇が、その串に身体を貫かれたままでやって来た。漁師はこれを見ると、すぐに叩き殺してしまった。しかし蛇は、殺すたびにまたやって来て、前に来て殺された者の屍体があるのに、その上に重ねてやって来る。どれほどの数か、分からないほどであった。ついに漁師は身の毛もよだち、気分が悪くなって、そのまま気狂いの病になって死んでしまった。しても仕方がないことは、どうあってもしてはならないものである。このような過ちをなすとは、すぐには報いを受けはしないと、人が因果の理を信じないのは愚かである」。

ここには、先ほどの贈与交換のような問題は、もうほとんど出てきません。因果応報の問題としてだけ語られてきて、〈串刺し〉というのが非常に残酷な行為、重い罪業であるとして書かれていくわけです。

このような仏教の言説活動を通じて、だんだん狩猟漁撈文化自体の意味が、ただ残酷なだけのものへ矮小化していくことになります。これは、稲作中心文化のようなものができてくるということと、パラレルに進行する。そうした狩猟漁撈に従事している人たちは、殺生を生業としているということで、罪人として見られていくわけです。結局、鎌倉仏教などは、そうした人たちの救済を目指していくことになるのですが、救済の対象になるということ自体が、狩猟漁撈文化の矮小化につながっていく。救済の渦の中で、その豊かな意味が失われていくのを見ることができます。

いろいろな事例を見ていくと、結局〈串刺し〉というものの実態的な意味内容は、木や杭に生き物の骨や皮肉や内臓などを掛けて立てることであって、それを何のために行うのかが問題なのだろうと思います。例えば、アイヌのイヨマンテなどをみると、毛皮を剥がされイナウで飾られた熊の精霊の本体は、頭蓋骨を二叉のユクサパオニに挟み込み、膀胱・直腸・生殖器などを掛けた〈串刺し〉の姿で表される。〈串刺し〉すなわち「串に掛けて立てる」とことは、元来神霊の顕現した姿を表現したものだったと考えられるのです。

また、何度も「路傍に立てる」という記述が出てきます。なぜ路傍に立てるのか。道は古代から祭祀空間として機能していますが、なぜ祭祀空間として機能するかとい

うと、それは他界に通じているからです。道を伝って他界から神がやって来るわけです。来訪神などというのはそういう形で道を伝ってやって来る。だから道で祭祀を行うのです。アジアの国々に見られる〈送り〉の祭儀においては、祭文や祈り言葉等の常套表現として、動植物の精霊が、魂の原郷である他界へ迷わずに行けるようにということが繰り返し示されます。これはイヨマンテの祈り言葉でも述べられていますし、中国の少数民族の、人間の葬式の際に唱えられる指路経の中で、魂の原郷へ帰っていくためにはどういう道をたどったらいいか、二股の道があったらどっちへ行けばいいのかということを、非常に細かに指示している。そして最終的に、父や母が待っている魂の原郷へたどりつくという話になっています。

これらを前提にした場合、最初に扱った語臣猪麻呂の物語で、串刺しにしたワニの身体を「路の垂」に立てているのは、実はそこで魂の原郷へ帰る道が示されていた、これは〈送り〉の祭儀だったのではないかと考えられます。ですから猪麻呂の伝承は、やはり、残酷さに対して残酷さで返すという報復の話ではない。生命が生きていく上で、食べる／食べられるという関係に至るのは仕方がないことであるが、自分の娘の体は返してもらいたい。しかし、腹を裂いてしまったワニに関しては、丁重に〈送り〉の祭儀を行って、本体の精霊には魂の原郷へ帰っていつてもらおう。そういうことを行ったのが、もともとこのあり方だったのではないと思われるのです。

そうすると、今まで残酷にしか映らなかった〈串刺し〉が、実は生命の交換という厳粛な現実の際し、最大限の礼意を尽くした所作だったのだということが見えてくるわけです。このようなことから考えますと、われわれが持っている〈残酷さ〉の尺度はきわめて曖昧かつ相対的で、歴史を通じて作られて来たものなのだということが明確になるかと思います。

最後に Nadasdy の話に戻ります。こういった提言は、やはり世界が文化的な構築物であるということを、しっかりと受け止めることで可能になるのではないのでしょうか。それが存在論的な実態となってしまうと、〈残酷さ〉の尺度も、非常に普遍的で画一的なものとしか捉えられない。ですから、存在の重さは十分に受け止めていかなければいけないと思いますが、存在論を政治的に軽々に振りかざすことには何とかあがっていきたいと思っています。

岡島 北條先生、ありがとうございました。ご質問、もしくはご意見、何でも結構です。

Q: 存在論的な実態という言葉は誤訳じゃないかという課題があります。なぜならば、ontological のあとに実態という言葉は何を使っているのか知らないけど、substance というのならば分かるのですが、誤訳の可能性を感じます。それから、存在論という言葉を使ったときに 2 つの意味があって、文化的な相対主義を乗り越えて、共通に使えるような存在そのものという意味と、それぞれの

文化の中に置かれた人々、のっぴきならないものということで存在論という言葉を使っているのか、そのどちらかだか分からないので、お話全部が2つの疑問符をずっと付けたまま聞いていました。

北條 誤訳の可能性というのはあり得ることだなと思います。ただ、文化的構築物であることを排して、それが現実であるものとして受け止めなければならないというニュアンスの表現としては出てきています。

Q： 言葉の使い方についての質問です。

Q： 科学的言説によって言われているようなことに対して、きちんと人文学がどう役割を得るかという形になると、論理的には言ってみればア priori に科学的言説で言われていることが正しくて、それに沿うような形の人文学を構築しなければいけないという形になってしまって、それはいいのかということをそうとう最近危惧しています。外国の問題もそうですが、特に日本においては、殺生とか肉食を禁じるということを、どちらかというとい仏教的な観点から、ずっと禁忌という形でやられていた。ところが実際の民衆は、現実の社会の中で動物を食べている。そういうような歴史の関係の中で、本当に保全とかいうようなことをわれわれが人文学の立場からどう捉え得るのか。要するに、自然科学的な環境保全に従属するのではなくて、むしろ対抗的なものとしてそれを重ね合わせたときに、科学的な言説でこれが絶滅するかどうかと言ったって、絶対にそれに従わなければいけないというものでもない。現代的な環境保全の中で人文学が貢献しなければいけないという部分があって、それはいったいどうなのという思いを持ちました。

北條 先生におっしゃっていただいた通りなのだろうと思います。歴史学の環境史のほうでも、最近の環境史の流行の中では、自然科学的データを使っていれば環境史であるというような流行になってきていますが、人文的な方法の中で、環境をどういう風に読み解いていけるか考えたいと思っています。今日の発表の中心も、その考え方に沿って作ったものになっています。

Q： 研究者自身がどの文化にも属さない宇宙人であったならば、ちゃんとした研究ができるけれども、自分の社会での神話を信じていたり、古代人の神話を本で読んで勝手に類推したりします。どうしたら何教でも何文化でもないスーパーマンになれるのですか。

北條 それはなれないですね。ですから、自分の政治的な立場というのを認識しながら、その観点で研究していくしかそれは仕方がないことです。私は浄土真宗の僧侶でもありますし、その信仰みたいなものは基盤として持っています。さまざまな立場から発言をしていくということが、歴史の多様性、文化の多様性につながってくると思います。

Q： おそらくいまの状況の中では、完全に何かの文化の中の繭の中にいる人はいな

いので、どちらにしろその繭の外側で、自分で境界を作りながらやっているし、自分がどこの文化的アイデンティティにいるかというのを獲得しようとしていているのだと思うのです。だから、イヌイットとか先住民というのは、いつでも戻れる世界というのを自分の部族のアイデンティティとして持つ。僕は消費をする、お金を使う。コカ・コーラがぶっちゃけ好きだし、チキンも食うというのですが、そこからいつでも撤退できるかどうかをどう決めるかというのは自分自身だから、撤退の境界を作りたいと言う。その境界というところに関してのお話が今日は出てこなかったの、そこをどう考えていらっしゃるのかお聞きしたいなと思いました。

北條 Nadasdy の論文では、自分は狩猟採集民の考え方をどこまで受容できるのかという議論を進めていくのですが、論の最終的なところでは、自分には西欧的な価値観を一切放棄することはできないかもしれないけれども、例えば狩猟採集民の考え方を全受容すると、これまで説明できなかったこと、自分の価値観においては説明できなかったことが、いろいろ説明できるようになってくるという言い方をしています。例えばウサギを罠で捕らえる際のエピソードなど、彼の論文の魅力、重要性はその葛藤にあると思います。

岡島 それでは、会場の方からのご質問を伺います。

Q : いまの人間から見た話と、食物連鎖という考え方、生物、動植物全て含めて自然の循環の中で循環して、正しい生物の生存をしているという中で、人間はある意味それを壊してきている。いまのご説明の中では、人間が壊してきたのだけど、それを正当化する理論はないかという追求の方法だと思います。食物連鎖という見方から見て、どういうふうに考えるのでしょうか。

北條 人間という生物を考えた場合に、たぶん肉を食べることは人間にとっては自然だろうなと思うのです。また、食物連鎖の中で、人間はかなり上のほうにすることは確かです。しかし、その上のほうにいながら、何か後ろめたさみたいなものを感じていたり、だからこそそれを正当化しなければいけないという、正当化の物語をどんどん生み出していく。〈動物の主〉神話などもやはりそうなのです。もし動物を食べることを当たり前だとだけ思っていたなら、〈動物の主〉が、人間の食べるために肉を贈ってしてくれるのだと説明しなくてもいいと思うのです。しかし、その説明を生み出してしまふ。それが人間のあり方なのだろうと思います。そこに注目をして、食物連鎖の上のほうにいてもそのことに安住できない、常に自分を不安定にしておかずにはいられない人間の業のようなものが、今後の環境と人間との関係を考える上での大きなヒントになってくるとは思いませんか。

Q : 私が死んだら土葬してもらおうから、肉を食ってもいい。私が死んだら火葬してもらおうから、肉は食ってはいけなとなりますか。

北條 それは人の考え方によると思うのです。でも、成り立つと思います。土葬で自分の肉体を微生物に還元していくということは、大事なことなのだろうと思います。

Q : 2 点述べます。常識というか、客観的な一部分を述べるようなコメントが必要なのではないかと思います。一つは、残酷な刑罰を廃止するのに最も貢献した思想は何ですかと聞かれたら、功利主義です。ベンサムが出てくることによって、残酷な刑罰やウシの屠殺の仕方、家畜の移動について残酷さは無意味だ、功利主義に反するという立場が出てきたのです。もう一つは、一般的にはキリスト教以前の人々はウシには魂があるから、お祈りをしてウシにお願いして、譲ってもらって初めて食べられるという考え方をしていたのに対して、本当の魂というのは、神から与えられた聖霊を持つ人間だけなのだから、ウシは食べてもウシの精霊に呪われたり仕返しをされたりする心配はないといって、いわゆるアニミズム的な生命尊重に対して、聖霊概念を、人間のより高次の精神に限定するという役割をキリスト教は果たしてきたわけです。その点は踏まえたほうがいいのではないかと思います。

全体ディスカッション

報告者 結城 正美(金沢大学 教授)

福永 真弓(大阪市立大学 准教授)

岡島 午後は1時間半ぐらいしかありません。最初に結城先生にお願いして、次に福永先生。後は総合討論みたいな形で議論するようしたいと思います。

結城 ありがとうございます。金沢大学の結城です。私は専門が環境文学、エコクリティシズムです。今日は環境思想シンポジウムですので「エコクリティシズムと環境思想」ということで、最近の研究について話題提供的にお話をさせていただきたいと思います。



最近の研究ですが、エコクリティシズム関連の本をいくつかまとめました。2010年に『水の音の記憶 — エコクリティシズムの試み』。これは、日米の作家の作品をエコクリティカルに読むということで、キーワードとしてはサウンドスケープです。

次に最近、食と文学に関して『他火のほうへ』という本をまとめました。こちらはインタビューと論考の構成になっていて、今日はこの話をさせていただきたいと思います。

私は汚染の問題とか食の問題に非常に興味があります。といいますのは、原発事故後特にですが、「汚染されているから危ない、だから食べてはいけない」という考え方がある一方で、汚染されていると分かっている食べているという現象もあるということに、大変関心を抱きました。これにはいろんな理由があると思うのですが、1つは無関心。汚染されているけれども、少しぐらいならいいだろうとか、あまり関心がない。これに対し、汚染の原因に関わった、つまり原発を作った大人の責任として食べるのだという、意識的な選択もあります。リスクの思考とは異質な世界観の反映として、汚染されていると分かっている食べるという現象もあると思われます。

石牟礼道子の『苦海浄土 わが水俣病』に私は注目しています。例えば、こういう一節があります。「水俣病わかめといえど春の味覚。そう思い私は味噌汁を作る。不思議なことがあらわれる。味噌が凝固して、味噌とじワカメができあがったのだ」。これはつまり、このワカメは水俣病の原因であるチッソ水俣工場からの排水によって、有機水銀で汚染されていると分かっている。分かっているのだけれども、春の味覚として食べる。

どうして汚染されていると分かっているものを食べるのか。何かそこには汚染されているものは危ない考える、そういった見解とは異質な世界観があるの

だろうと思っています。贈り物としての食べ物、先ほどの北條先生のお話にもありましたが、動物がギフトとして自分に差し出されているという感覚に近いものが、石牟礼道子の『苦海浄土』に見られるのではないかと思います。これは、石牟礼道子の作品に特有なのかというところではなくて、加藤幸子の『海辺暮らし』、田口ランディの『寄る辺なき時代の希望』があります。リスクの思考とか、危険・安全という、いわば科学的な尺度に取った見方とは違う食の世界というものがずっと続いていて、それが意味ポスト水俣文学、石牟礼さんの『苦海浄土』をプロット水俣文学と呼べるのであれば、ポスト水俣文学といったジャンル、つまり汚染されていると分かっているけれども食べるという世界を描くということで、自明視されている世界観を揺さぶるような文学的世界が創出されているのではないかと思います。

岡島 どうもありがとうございました。大変刺激的な、かなり現代的な問題ですね。では、ご質問があればお受けします。

Q： お話を伺っていて考え込んでいたのは、食というのが必然としての食と、選択としての食と、食べるという行為の中に 2 種類あるのではないか。必然としての食は、汚染とかという問題と全く別の世界がそこに動いている。必然としての食と、選択としての食、という言い方で考えて整理していいのかなと思いましたが伺いました。

結城 必然の食というのはとてもよく分かります。石牟礼道子さんの『苦海浄土』の世界に関しては、それは当てはまるどころがあると思うのですが、では加藤幸子さんの『海辺暮らし』とか田口ランディさんの作品になるとどうなるのだろうかということはあります。選択できるのに、食べる。そこは疑問なわけです。で、ランディさんは観察をする。だから、その時点ではまだ小説にはならないわけですが、福島原発事故後はそれを小説に仕立てている。そこでは必然というよりも、まさに選択。こういう食との関係を自分は選択するのだという、そういった態度が明らかにしている感じがします。

Q： 抵抗として食べるという視点もあるのではないか。あえて食べる。というのは、政治的行為として食べるというか、そういう意味合いを出してもいいのかなと思います。原発以降の問題でも、そういうことはあり得ると思う。

結城 そこは私も気になっていまして、抵抗として読めるのです。でも、ご本人はどう思っていたのだろうかというところが大変知りたくて、『他火のほうへ』という本のインタビューではそこをお尋ねしました。何で汚染されていると分かっていたのに召し上がったのですか、と。抵抗というような感じでの答えではなかったのですが、それは年月がたっているから、そういう回答だったのかもかもしれません。そういう意味では、加藤幸子、田口ランディの、汚染されていると

分かっているけど食べるという行為は、ある種の抵抗だというふうに思います。

- Q： 抵抗としての食べるという行為の話ですが、何に対する抵抗なのかなというのは考えていて、石牟礼さんのところに関して言うと、文学的抵抗という形で書かれていたのです。そうするとその文学的な抵抗というもの、つまりこういう作品の中で表象される「食べる」という行為が、つまりこれが書かれて出版されるということの意味と、実際に漁師さんなり何なりが食べるということの意味は、やはりちょっとずれてくるような気はするのです。いくつかちょっと違うレベルの話が、汚染されているけど食べるということの中の議論にはあって、なかなか僕の中でもうまく整理がつかないところがあるのです。

結城 汚染されているから危ない、だから食べないというのは、いわば科学的に証明されたこととして広く受け入れられている。だけれども、そういう科学的判断に基づいた見方とは違う世界観もあって、それを文学的世界として提示している。それを重ね合わせて私たち読み手が読んだときに、価値観が揺さぶられるわけです。「水俣病わかめといえど春の味覚」って、サーッと理解して読むことはほぼ不可能なわけで、絶対に引っかかる。読者の価値観を揺さぶるということを、この書き手たちはしているのではないのでしょうか。

- Q： 中世の仏教の中で、肉食に関連して出てくる言説で、殺生功德論というものがあるのです。それは、例えば諏訪の神文、諏訪大社がよくした、これを唱えていれば肉食をしても平気だという免罪符みたいなものも出てくるのです。つまり、畜生という存在は、仏教の六道輪廻の考え方から言うと、前世に悪い行いをしたために畜生に落ちてしまったものなのです。そういう存在というのは、例えば捕まえて放してやっても、誰かに食われてしまったり、簡単に命を落としてしまったりする。そういった存在なのだから、あえて人間が捕まえて食べてあげて、自分と一体化することによって、人間が悟りを開いて浄土に往生するのと一緒になって、動物も往生させてあげようという、肉食を正当化する論理なのです。

岡島 フロアのほうでもし意見があれば。

- Q： 水俣で、危ないけれど食べるというようなお話が最初にあったと思うのですが、知識も与えられない、情報も与えられない、しかも今ほどの情報網もない中で、客観的に危険だけどそのことを何も知らなかったというところに、ものすごく悲劇もあったのかなというふうに感じたのです。それに比べると、福島はずっと情報が表に出てきている。やはり情報が昔と今では全然違うのではないかと聞いていて感じたのですが、いかがでしょう。

結城 漁民の患者の人たちというのは、危ないとは分かっていたかもしれない。それは私には分かりませんし、まだそこまできちんと調べていないのですが、文学的にこれを見た場合、その「水俣病わかめといえど春の味覚」みたいな一

節を読む限り、人々が知らされていなかったことの悲劇を作家は了解しつつ、こういう世界を文学的に創出している。私はそちらの事実に向きたいのです。ですから、事実関係として漁民たちは危ないと分かっていたから食べたのではないかということは、それはもちろん追求することは重要だと思いますが、文学研究として見る場合、それとたぶん同程度に、それを知っていたとしても「水俣病わかめといえど春の味覚」という世界を作品に作り上げた、そのこのところの意味を読み取りたいと思っています。

何かこういう対話っていいですね。私が全然きちんと調べていなかったことを、すごく明確に指摘していただいたわけで、「あ、こういうのを調べなければいけない」とすごく思っているわけですので、この場はとてもいいなと思います。来年も参加したいです。

岡島 では、福永先生に移りたいと思います。お願いします。

福永 自分の中では、研究のテーマは大きく 2 つに分かれていて、その中の 1 つ、環境正義 (environmental justice) という話をします。アメリカの社会運動で出てきた文脈の話が、global justice とか distributed justice とか、earth justice とかいろいろなものをくっ付けて、今環境思想のいろんなところで出るようになってきています。今は生物多様性、地球温暖化が出てきて、その justice の度合いが一気に別の領域にいつってしまったような予感がしています。



私は三陸にずっと長くいたのですが、その中でやっぱり一番感じるのが、場所を喪失するということの injustice ということは、やはりあるだろうということをお話したいなと思っています。

私はゲーリー・スナイダーとか、いわゆるヒッピーたち、カウンター・カルチャーの人たちが、いわゆる back-to-the-landers、土地に住み着くといって入って来たようなところを追いかけていたつもりだったのですが、社会学の調査をしようとする、どうしてもやはり先住民にぶつかる。そこで資源管理の話をしてたとき、先住民のおじいちゃんに「何でそんなにもともとの土地に戻らなければいけなかったの」と聞いたときに、彼は「だってそれはそうだ。この土地じゃないと土地が俺を見つけてくれないから、俺はエルクも何もかも獲ることができないんだよ」と言っていました。私が土地を見つけるのではなくて、土地が私を見つけてくれるから、私は何かができる。そのフレーズがものすごく印象深かった。そのときに、「私が考えていたポリフォニー (多声性) ってなんだっけ」ともう一回立ち止まらなければいけなくなってしまうと、それでモ

う一回 **environmental justice** を別の観点から考えてみようと思ったわけです。このことを考えるときに、若干皆さんに説明しないといけないのは、自然資源を利用するということで、先住民ってかなり意図的に再配置をされてきた人たちだということです。土地ごと移動させられて、あるいは部族ごとどこかに寄せられた。それに対して、ほかの人たちが無関心でいられるような仕組みをアメリカ合衆国は作ってきたという事実があります。

環境正義の眼差しというか、環境正義の概念の成り立ち自体は、もともと環境人種差別と言われるものから始まっている。しかし、それはまだ最近、1982 年です。そういった形から、だんだん環境正義というものが全米に広がっていった、特に昨今では先住民を中心にした形で運動が言われることが多いです。

environmental justice に関しては、実は環境正義綱領と言われるものが出ています。大きな特徴が 2 つあって、1 つは、公害というものが常に弱者のところから出発せざるを得ないという現実を描き出すこと。もう 1 つは、先住民などを含んでいるので、それぞれの生き方には非常に多角的な価値があるから、自然への配慮とか弱者への配慮とか、文化コミュニティの自治の尊重みたいなものを中心にしていくこと、です。

ところが、この環境正義自体は、ほかの環境思想とはかなりすれ違う。それはなぜかという、環境正義というのは、出自が社会運動なので、そこにすれ違いの要素がある。

それとは別にもう 1 つ大事な論点として、ハンス・ヨナスの責任の原理というところに基づいて倫理を立てるというグループが環境倫理の中にはいるのですが、正義ではなくて責任という原理によって、未来世代と自然界に対する倫理を形成しようとする。

さらに、社会正義を軸とする環境正義概念で、これがいわゆる先ほど申し上げてきた、社会運動から出てきた環境正義の概念の、理論的なバックボーンに一番近いもので、**Murray Bookchin** とか **Shrader-Frechette** たちの議論がその後ろにあります。そうなってくると、もともと人間中心主義かそうでないのか、というところでは、環境思想とは、根本からすれ違って、対立とその乗り換えというのが言われ始めるのが、やっとな 2000 年代になってからです。私自身は、これらを乗り越えるのは、**subsistence**、生存するということから考えるというのが一番重要なのではないかと思います。「**subsistence perspective**」という言葉はエコフェミニストの **Maria Mies** とかが使っているのですが、私自身、最近「生存の技法と哲学」という訳でどうかなと思っています。要するに、自分が生きることに関して、それまでの自然と社会関係まるごとというものをどう捉えるかということに立脚しながら正義を考えるという、新しいやり方を考えたいなと思っています。

最近、私自身が出会った言葉に **sacrificed zone** という言葉があります。犠牲区域。人種差別とかリスクとかそういったものを、一挙に歴史的に積み上げられてしまった地域のことを歴史的に全部描く。それを **sacrificed zone** というふうに名付けて、そこからあらわになるものを考える。すごく難しいなと思って、今考えています。

ところで、2008年に Aldrich という方が、福島がどういうふうな **sacrificed zone** のようになっていくかということ进行分析したのがあります。アメリカでの環境正義の社会運動に近い形の分析が、福島でされている。しかし今は、またこれが見えなくなっている形があるな、と個人的に思っています。あらわにしようとするのが、逆に言うと被害を受けた人たちに対するさらなる叩きになるのではないかという、研究者自身の抑制に至るところで聞きます。

まとめると、福島の話もそうなのですが、基本的に環境正義の話というのは、場所性を剥奪するというよりも、社会空間そのものが剥奪されたり解体されたりするという問題として、いったん見た方がいいだろうと考えています。なので、私が環境正義の対象とするのは、やはり総体としての被害だろうと考えていて、それが今までの政治的・経済的な基盤の剥奪であったり、あるいは居場所の剥奪であったり、それから社会空間がもともとそこにあった自然との連続性であったり関係性が奪われることであったり、あるいはそれまで自分たちが依拠してきた価値とか物語が断絶されるということであったり、そういうひっくりめたものを描いていくというときに、実は、文学にしか書けないところがたくさんあると思うのです。だから、人文社会系の人たちが重ね合わせるというところは、まさにこういうところなのかもしれないなと思います。大変勉強になりました。ありがとうございました。

岡島 どうもありがとうございました。では、ご質問、ご意見をどうぞ。

山里 文学研究者ができないところからの分析をやっていただき、大変勉強になりました。ありがとうございました。おっしゃるように社会学者と人文学者が重なる部分があるということがよく理解できます。まさにその通りだと思います。石牟礼さんたちの作品もそうですし、私たちがアメリカで勉強してきた環境正義の問題もまさにそうです。それから、アレウトの人たちが実は同じことをやられています、ぜひ研究されたらよろしいかと思います。アレウトの人もアメリカ軍が強制的に集団移動して、帰って来て、ここでまさにお話されたようなことが起こっているような状況で、これはまさにグローバルな問題が含まれているなという気がいたします。

もう1つは、日本の中で私の住んでいる沖縄の方も、国策など中央と辺境の格差であるとか、国策などに伴うある地域の犠牲だとか、そういう論調がマスコミであるのですが、実はこれは別の角度から見ると、まさに環境正義の問題で

すよね。だから、まさにそういうことを踏まえた上で研究していただくと、大変助かる、大変有意義な研究になるのではないかなと感じています。コメントです。どうも、ありがとうございました。

岡島 今日山里先生と北條先生の話の午前中ずいぶん長く議論しましたが、そこで出てきたような問題に結構いろいろ関連しているところが結城先生と福永先生から出てきました。それぞれ独立にやっておられるのに非常にリンクしていたりとか、それぞれ関わっている分野が違うのだけれども実は非常に重なっている。今日はますますその辺の連関がすごくよく見えてきたワークショップでした。ここで何かいろんなものがつながってきたなという感じで、すばらしいなと思いました。

毎年思うのですが、小諸という不便なところに、これだけの方が集まって非常に質の高い議論ができるというのは、本当にすごいなという感じがします。このセンターの方にもいろいろ支えていただいて、どうもありがとうございました。今日の講演者の方、パネリストの方、本当にありがとうございました。

第3回浅間大学院生セミナー

2013年5月31日～6月2日

新緑の5月、環境教育・自然体験・野外教育をキーワードとした研究者たちが集まり、研究を通して研鑽と交流を図ることを目的とした第3回浅間大学院生セミナーを開催した。内容は教員の講義、大学院生の研究発表、ディスカッションなどを主に行い、優秀者2名の大学院生はアメリカの自然学校「ティートン・サイエンス・スクール」に短期留学することができるといったプレミアムも用意した。

- 1日目＝前年度ティートン・サイエンス・スクール短期留学報告、野外体験活動、講義
- 2日目＝講義、大学院生研究発表、全体ディスカッション
- 3日目＝講義、グループ・ディスカッション、短期留学派遣者発表



参加者数：大学院生20名、教員6名

参加教員（順不同）：

安藤昭一（千葉大学大学院園芸学研究科教授）

朝岡幸彦（東京農工大学農学研究院教授）

西村仁志（広島修道大学人間環境学部准教授）

降旗信一（東京農工大学農学研究院共生持続社会学部門准教授）

関 智子（国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター主任研究員）

岡島成行（安藤百福センター センター長）

■ 初日

昨年度派遣者に選ばれた2名のうち、稲木瑞来さん（昨年：大妻女子大学大学院）が代表して、ティートン・サイエンス・スクール短期留学の報告を行った。キャンパス内にいる野生動物の話や本場アメリカの環境教育プログラムの報告を聞いて、参加者のモチベーションは一気に上がったようだ。



■ 2日目

午前は教員の講義を行った。環境思想、食育、公害教育、分子生物学など、参加大学院生の専門領域ではない分野の話も聞くことができた貴重な時間となった。午後から大学院生の研究発表。20名の参加者がそれぞれ8分間の発表と5分間の質疑応答を行った。時間内に収まりきらないくらいの活発な議論が行われる場面もあった。

各発表者に対して、質問や指摘や感想を書いた付箋をプレゼントした。こういったフィードバックは後の研究にきっと役立つはずだ。



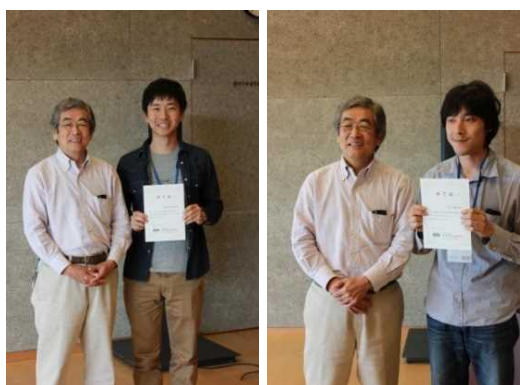
全体ディスカッションでは、互いに感想を述べ合うことを通して、長時間にわたる聴講で混乱している頭と気持ちの整理を行った。



■ 3日目

午前中の講義の後、グループごとで野外に移動し、これからの浅間大学院生セミナーをどうしていくのいいか、来年まで何をするか、参加者同士で意見交換と提案を行った。





今回の短期留学派遣者は、
田開貫太郎さん(富山県立大学大学院修士1年)
と石山雄貴さん(東京農工大学大学院博士1年)
に決定した。最後に安藤百福センターの修了証
を授与。全員、無事に2泊3日のセミナーを修
了することができた。

過去最多の参加者数となったセミナーだった。文系・理系問わず幅広い分野の研究者が
集まり、議論を行うことの意義が再確認された。セミナーの参加者が、日本の未来の環境
分野をリードしていくことを期待したい。

学生の発表要旨（順不同）

五十嵐 翼

(同志社大学大学院 総合政策科学研究科)

【参加動機】

・Teton science School のインターン報告のため



テーマ：「相互扶助」を手がかりとした「つなぐ」という新たな可能性

内容：

私は、2004 年の中越大震災で甚大な被害を受けた新潟県長岡市山古志地区（以下：山古志）をフィールドに研究活動をしている。山に囲まれているため傾斜地が多く、冬は膨大な雪が降り積もる。それは厳しい自然環境であり、自然災害も多く発生する。このような環境下で、自給的な暮らしの在り方が脈々と受け継がれている。棚田の米作りや雪下ろし、農作業、道普請、地域行事（伝統的な行事）の際には、近隣の人たちで助け合いながら作業している。山古志の助け合いは、日常の暮らしの中で垣間見ることができる。

ピョードル・クロポトキン（1842 年～1921 年）は、生物進化論のダーヴィンの競争原理を批判し、生物が集団内で共に助け合いながら、環境に対して生存闘争を繰り広げていることを、多様な生物や先住民の暮らしから明らかにした。ピョードルの著書『相互扶助論』の中で、”Conscience of human solidarity（＝人間的連帯の良心）という言葉が筆者にとって興味深いものであった。翻訳家の大杉は、人間的連帯の良心を「人間

共同の意識」と訳している。これには、共同心または社会心の感情もしくは本能が我々を動かしており、それは無意識的に働くものとした。

「相互扶助」という観点は、山古志のような厳しい自然環境の中で生活を営む上で、欠かすことのできない要素なのかもしれない。中越大震災のような大規模な自然災害の際、集落ごとの密な人間関係が震災を乗り越える上で重要であった観点から、日常的な相互扶助は欠かすことのできないコミュニティの在り方といえる。震災から 9 年が経過した現在、震災当時に比べ人口は半数になった。山古志の「今」とこれからを踏まえた上で、日常的な相互扶助に対して、集落間・地域内外を超えた関わりを形成していくことが大切だと感じる。

参加感想：

今回で 3 回目の参加となる浅間大学院セミナーだが、自身の研究のブレについて多く反省できる機会となっている。また、中途半端な研究に対して、鋭い視点で指摘をいただけたことに感謝したい。それは、他分野の学生からの指摘や議論を通じて生まれるものであり、このような環境が整っているのがこのセミナーの魅力であると感じている。

松村 聡子（千葉大学大学院 分子生体機能学研究室）

【参加動機】

前回の浅間学生セミナーから、自分の研究と浅間学生セミナーで学んだことの双方を生かした活動ができないか考え、中高生のための実験教室を通じで生物に興味を持てる場を提供した。



テーマ：学校外の科学実験教室に来る子どもたちの学びと、参加動機に関する考察

内容：「持続可能な社会に向けた人づくり」（環境省）において、11 項目の内容のうち中学理科は 8 項目に関わるとされた。さらに中学理科の授業時間数は英語に次ぐ増加で 95 時間増の 385 時間になることが決定した。そこで今後、中学校の学校教育では環境教育において、理科教育分野での充実が求められる可能性が高いと考えた。しかし、実際の現場でどのように環境教育を取り入れるべきか、指導方針は決まっていない。

そこで今回、群馬県沼田市の中学生に対して身近なトマトから遺伝子抽出実験を行い、食と遺伝子の関わりを考えるプログラム作成した。さらに実験の事前事後で参加者の興味のどのような変化があるか、また、そもそも参加する理由が何かを調べた。食品の遺伝子を題材にした理由は、身近な食品を科学的な視点で捉えられるようにすること、食糧問題を考える上で品種改良や、遺伝子組み換え植物の作物について考える上で遺伝子について知ることが必要だと考えたためである。

このプログラムは独立行政法人科学技術振興機構の採択プログラムである SPP(サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト) の一貫として行った。SPP とは大学や企業などの専門機関と学校とが協力して生徒たちに科学技術の面白さを体験してもらうプロジェクトである。2012 年 11 月に群馬県沼田市の中学生 35 名に実施した。講座名：中学生のための大学講座「遺伝子って何?」、期間は連続 2 日間（日中のみ）、参加は希望者とした。

その結果、主に 2 つのことが明らかとなった。1 つ目は参加者が「理科」という教科が好きな生徒ばかりではなかったことである。実験を通じて面白いことを体験するために参加していたことが明らかとなった。2 つ目に実験や観察への興味関心は高まったが、理科や科学を学ぶことが実生活や将来とどのように関係してくるかを感じてもらえなかった。実験や簡単な講義では、その関連性を感じることは難しいことが示された。

これらのことから、実験よりもディスカッションをプログラムに取り入れ、遺伝子がどのように生活と関わるか考えてもらう必要があると考えた。

参加感想：

学生同士のディスカッションの中で、どのように取り入れるべきかの案をいただくことができました。また指摘として、中学生よりも小学生の理科の学びの中で、どのように環境教育の内容を含むかが難しいので考えて欲しいというお話があったので、対象に合わせたプログラムの作成ができるようになりたいと思いました。

加賀 芳恵

(東京農工大学/大学院 農学府共生持続社会学専攻降旗研究室)

【参加動機】

自分の研究に関して発表を行い、多くの学生と交流を深めるチャンスとして指導教員に勧められたため。



テーマ：自己紹介と卒業論文「南方熊楠の現代的意義」について

内容：人間による急速な近代化の背後にあった思想とは、デカルト・ニュートンの価値観と呼ばれるものだった。人間の「心」と「物」を別々のものとして捉え、人間社会のより便利で「進歩」や「発展」した社会のためならば、人間以外の自然環境を都合の良ように利用しても構わない対象だと見なす。しかし、その代表的な産物であるところの科学技術や資本主義社会の発展は今、いずれも大幅に行き詰まっていると言える。

現在の状況を打破すべく、「持続可能な開発」(Sustainable Development)という概念が存在する。これはもとは先進国と発展途上国との間の環境問題に対する意見の違いを調整するものとして生まれ、1980 年の IUCN(国際自然保護連合)などによる「世界自然

保全戦略」で初めて使用された。1987年のブルントラント報告では「現在の世代の要求を満たしつつ、将来の世代の要求を満たす開発」とであると定義されたが、この概念の解釈を巡っては様々な議論が交わされており、ユネスコがリードエージェンシーを務める「持続可能な開発のための10年」(UN-DESD)の国際実施計画によれば、この概念は進化を続けてゆくものであるとされる。

かつてのデカルト・ニュートンのような価値観に対抗し、現代の環境に関する問題に取り組む際の指針となり得るような思想を探そうと考えた結果、南方熊楠(1867-1941)に着目した。彼は自然界と人間社会とを相互に関わり合い共生するものとして捉えており、通称「曼荼羅」と呼ばれる彼の自然観と「神社合祀反対意見」の中に表わされている彼の主張は、現代の持続可能性の問題を考えるにあたり、ひとつの先見的で指針となり得る思想であると言えるものである。

参加感想：

参加した当時、私は大学院に入学して間もないころで「研究とはどういうことか」ということが、ほとんど理解できていない状態でした。入学から1年近く経った今、思えばこの「浅間大学院セミナー」で環境教育・自然体験・野外教育という共通点を持ちながらも多種多様な分野の大学院生のプレゼンテーションを聞く機会を持てたというのは、非常に貴重なものであり、緊張しながらも思い切って参加して本当に良かったと思います。ティートン・サイエンス・スクールでの体験の報告なども聞き、短い間でしたが、新しい見聞を広めることができました。また、屋内での発表だけでなく、安藤百福センターの周辺を散歩したのも、良い思い出として印象に残っています。

佐藤冬果（筑波大学大学院人間総合科学研究科 野外運動研究室）

【参加動機】

私が現在、大学院生として所属する野外運動研究室は「体育学専攻」の分野に属している。が、大学時代に森林生態学を専攻していた私にとって、「野外教育」を学ぶなかで体育的な側面と併せ、自然環境的な視点は非常に重要な部分を占めており、このセミナーのテーマに興味を持ったことが大きな参加動機である。また、似た分野を学ぶ他大学の院生との交流についても、大きな期待を寄せて参加した。



テーマ：奥日光湯元キャンプ場の管理と植生

内容：

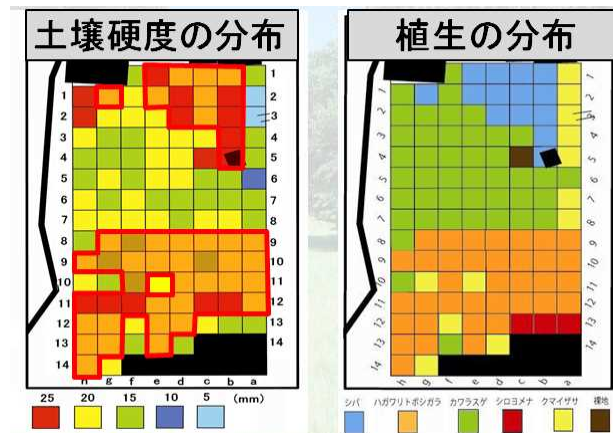
【背景】栃木県奥日光地域は、1934年に国立公園に指定されて以来、自然や風景地の保護、国民の利用、生物多様性の保全といった自然公園としての役割を果たしてきた一方、過剰利用などの人為的要因により様々な環境問題を孕んできた。国民の利用という観点

において、国立公園内のキャンプ場やスキー場はレクリエーション利用の代表例であり、人為的な影響を強く受ける場所である。今後、国立公園の利用の増進と自然保護の両立を目指す上で、レクリエーション用地の植生を明らかにし、人為的な影響を明らかにすることは重要な課題である。

【目的】そこで、①奥日光湯元キャンプ場の現在の植生を明らかにすること②利用や管理と植生の関係を明らかにすることを目的に、調査研究を行った。

【方法】2011 年 7 月、15m 間隔で 1m×1m のコドラートを合計 112 個設置し、Braun-Blanquet(1964)の植物社会学的方法に基づいて植生調査を行った。また、環境要因として土壌硬度を測定し、利用強度の指標とした。そして、得られた植生調査資料をもとに表操作法による組成表の作成と DCA 解析を行った。

【結果と考察】以下の 3 群落 3 下位単位を識別した。Ⅰ．オオバコーシロツメクサ群落、A. シバ下位単位、B. ハガワリトボシガラ下位単位、C. カワラスゲ下位単位、Ⅱ．シロヨメナ群落、Ⅲ．クマイザサオオヨモギ群落。土壌硬度と植生は強い関係があることが再確認されたのと同時に、1984 年の調査と比較して植生の単一化が進んでいること(播種による影響)、土壌硬度の低い部分(人が立ち入っていないエリア)を中心に、外来植物の割合である帰化率が上昇していることが明らかになった。



参加感想：「このチラシ、研究室に貼っておいて……」と、このセミナーのチラシを大学の指導教官から受け取ったときには全く想像していなかったほど、このセミナー参加は大きなターニング・ポイントになった。筑波大学からは 1 人だけの参加だったが、その分、それぞれ興味深い、レベルの高い専門分野を持った他大学の先生方や院生の皆さんとじっくり交流し、自分自身としても、また野外運動研究室としても負けてもらえないと刺激を受けた。そして、なんといっても毎晩深夜まで続く懇親会(という名の飲み会)。次から次へと湧き出てくる話題を、これでもか、と語り合った時間からは、大きく言えば、人生の大きな転機すら与えてもらったと思う。このセミナーでいただいたつながりと、そのつながりがもたらしてくれた学びのチャンスに感謝し、将来、魅力的な指導者になれるよう、修業していきたいと思う。

黄衛鋒（東京農工大学大学院 環境教育研究室）

【参加動機】

私が浅間セミナーに参加したのは今度で2回目でした。豊かな自然の中で、様々な面白い講義を受け、各分野の研究者や学生たちとの情報交換やアイデアの共有を通じ、自分の視野を広げられます。楽しい雰囲気の中、充実した3日間を送れるのは魅力的でした。



テーマ：中国福建省における茶文化グリーン・ツーリズムの探索

内容：

中国福建省は中国最南端に位置する華南茶区にあり、国内有数のお茶生産基地として知られている。特に武夷山市で生産される武夷岩茶と安溪県鉄観音は世界的に著名である。2001年、中国がWTOの加盟国になって以来、中国の伝統茶産業はグローバリゼーションの流れに巻き込まれていった。農業機械化による生産規模の拡大、茶樹の品種改良、農薬や化学肥料などの技術革新によって収穫量は急激に増加したが、環境や人間への悪影響がますます顕著になっている。これらの問題に直面し、持続可能で豊かな地域社会を構築・発展させるためには、当該地域に居住するすべての人々が地域の主役としての能動的な役割を発揮することが、極めて重要である。本研究は内発的発展論を導入、武夷山市南部に位置する茶文化観光の拠点、下梅村を調査地に設定した。中国福建省の茶産地における茶文化観光の実践を考察し、茶産地における内発的な発展の探索を検討することで、行政主導・民間参画の方式から、茶農家と地域住民主導のグリーン・ツーリズムのあり方を展望したい。

参加感想：

この度、浅間セミナーに参加させていただき、本当に楽しかったです。浅間は「朝まで」と言われるように、留学生としてこんな長時間、優秀な日本人学生たちとのたっぷりなコミュニケーションは普段がなかなかできなく、貴重な経験だったと思います。特に今度のワークショップで、違う分野の人たちと一緒に話し合い、頑張って作業を完成させたのは、すごい達成感がありました。今度は2回目ですが、来年の浅間大学院生セミナーを楽しみにしています。

丸谷 聡子（同志社大学大学院総合政策科学研究科
ソーシャル・イノベーション研究コース）

第1回の参加の折には、日本の環境教育を牽引される先生方からご指導いただき、素晴らしい学びの機会となりました。第2回では環境教育を研究する院生のコラボ企画などで切磋琢磨できました。4月に博士課程（後期）に進学し、今後研究を進める上で、多くの示唆を得たいとの思いから、今回も参加させていただきました。



テーマ：地域に根ざした環境教育における教員向け研修プログラム開発に関する実践的研究
ー兵庫県環境体験事業をモデルとしてー

内容：

【研究目的】

兵庫県の環境体験事業が環境教育の一翼を担えるようになるような仕組みづくり、その第一歩としての環境体験事業を担う教員向け研修プログラム開発と研修による効果を検証する。その上で、従来の教員研修に地域に根ざした参加体験型の研修プログラム開発により新しい価値を付け加え、フォーマルな研修プログラムにフィードバックし、日本全体に通用する新たな教育方法の発見を目的とする。

【研究方法】

ソーシャル・イノベーション研究コースの研究方法を踏まえ、過去の研究成果の整理、理論の研究と、環境教育コーディネーターとしての実践を両輪とし、環境体験事業を担う教員向け研修プログラムという具体的な成果物の開発と実践としての教員研修を試行し、その効果の検証を行う。

【研究進捗状況】

兵庫県東播磨管内3市2町の教育委員会環境教育担当者へのヒアリング、環境教育担当教員、理科教育担当教員研修会の講師を担当した際に実施したアンケートの結果と考察、自然体験活動を推進する「明石 のはら くらぶ」の活動において教員をスタッフとして受け入れた事例、教員と環境教育コーディネーターによる定期的な課題研究会の立ち上げの方向性などについて発表した。

参加感想：

第1回から毎回参加しています。第1回でつながった院生たちとは今でも交流があり、環境教育分野での研究を進めていく中で、大変心強い存在となっています。今回も多くの仲間と出会うことができました。また、他大学の先生方からの温かいご指導により、研究の方向性も見えてきました。浅間セミナーは、視野やネットワークが広がり、研究活動が続ける中でのかげがえのない財産を得られる場だと、今回も実感しました。

田開寛太郎（富山県立大学大学院 工学研究科 環境工学専攻
資源循環工学・環境政策学研究室）



【参加動機】

環境教育を専攻し学ぶ学生が、どのようなことに関心を持ち、また、どのような手法・学問で研究を進めているのか、純粋に興味があった。また、それら研究より刺激を受けることで、自身の今後の研究に役立てたいと思ったから。

テーマ：地域と大学との協働に関する研究 ―五箇山における域学連携事業を事例に―

内容：

ユネスコ世界文化遺産・五箇山合掌造り集落は、「合掌造り」と呼ばれる茅葺屋根の伝統的な家屋を保存し、豊かな自然に恵まれ、人里離れた山深い谷間の集落である。五箇山は、伝統的知識・技術が蓄積され、また、茅葺き屋根の葺き替えは、「結」と呼ばれる相互扶助組織によって行われ、持続可能な土地利用により社会を構築してきた。しかし、過疎化・高齢化の問題の影響により「結」は衰退し、合掌造り家屋が減少するなど、五箇山の持続可能性は見直されなくてはならない。本発表では、五箇山における地域課題解決へのアプローチを、自治体、地域と大学との協働というマルチステークホルダー・アプローチによって行う過程を調査し、その協働実施のシステムの構造を明らかにするものである。今回は研究の開始に当たり、その事業概要を紹介するものである。

現在、五箇山では、南砺市、地域の住民・組織と大学が主体となって協働取組みを行う、地域と大学の協働プロジェクト、総務省「域学連携」地域活力創出モデル実証事業を推進している。多様な主体が地域の課題に向けて協働を行う場合、大学はどのような役割を担うのかという視点がクローズアップされる。また、自治体や教育機関主導の取組成功事例は少なく、地域と大学による協働取組みが注目されている。本事業の概要は、都市圏の若者 20 名程度が五箇山合掌造りの集落で 1 年間に 10 日間程度、計 3 回の合宿を行い、地域の住民との交流や体験作業を通して、里山の暮らし、生活を味わい、また地域の歴史や文化を直接体験し、理解することである。これらの作業は、南砺市、地域の住民・組織と大学が綿密な打ち合わせを持って策定することで、地域の主体性を最大限促し、地域の本来的ニーズに即した事業を推進することが可能となる。

参加感想：

環境教育・自然体験・野外教育などを研究する大学院生と共に学び合い、研究・交流を通して、新たなつながりを持てたことが、何よりもの成果でした。環境教育といったキーワード1つとっても、取り扱うテーマ、アプローチの仕方は多種多様で、今後の研究活動への良い刺激となりました。豪華な講師陣による講義、学生同士のディスカッションを通して、学びは深化し、大変有意義な 2 泊 3 日を過ごすことができました。今回のつながり、学びを活かし、地元富山県の環境教育の促進に邁進したいと思います。

小原美紗子（千葉大学大学院 分子生体機能学研究室）

【参加動機】

前年に参加された先輩からお話を伺い、とても興味深く思いました。普段は耳にすることのない話題に触れ、考え、他分野の方と交流することで、自身の視野が広がれば良いと思い参加しました。



テーマ：原始的な植物の遺伝子情報の新奇加工方法に関する研究

内容：

生物を理解する上で、DNA から得られる遺伝情報は非常に重要である。分子生物学の目覚ましい進歩により遺伝情報の取得は極めて容易となった。しかし、その情報を正しく読み解くことができるかは別問題である。遺伝子には機能的な部分とそうでない部分が含まれており、生体内では機能的でない部分を取り除くための加工が起こる。この加工方法を理解することは、膨大な遺伝情報の中から大切な情報だけを取捨選択するために必要不可欠である。

ある原始的な植物で、遺伝情報の新奇加工方法が発見された。この発見により、機能的でなく「ガラクタ」だと考えられていた DNA 領域にも、生存に必須な情報が含まれていることが明らかとなった。これは、機能的な部分だったにもかかわらず、我々が加工方法を知らないがために「ガラクタ」扱いされていたことに起因する。この新奇加工方法の発見により、「ガラクタ」と「機能的な領域」のこれまでの定義自体に問題があることを再認識させられた。そして今もなお、「ガラクタ」だと思われている DNA 領域にこそ、我々が求める機能が眠っている可能性がある。

「ガラクタ」を活かす方法を知り、いかにして「ガラクタ」の潜在的な機能性を見出するか。これは全ての分野に共通した議題であると考えます。

参加感想：

参加者のみなさんの話が理解できるか、興味を持っていただけか、不安もありましたが、結果的に得るものの多いセミナーでした。現場で活動されている方のお話はとても刺激的で、これまで縁遠かったテーマ、考えることもなかったトピックに触れる良い機会となりました。完全に分野の違う私の話にも共通点を見出していただき、自身の研究分野についても新たな側面を発見できたと思います。

姜 雨薇 （東京農工大学大学院 環境教育研究室）

【参加動機】

ほかの大学の学生と交流したいから。環境教育専攻の学生たちがどのような関心を持っているのか、どのような研究を行っているのか知りたいから。研究生として、大学院生との交流を通して様々な研究方法に触れ、今後の研究や学生生活に活かしたいと思う。



テーマ：亜熱帯島嶼地域におけるエコツーリズムと環境教育

内容

【研究の動機】

経済のグローバル化と国際的な観光産業の発展に伴い、生物多様性の宝庫としての亜熱帯島嶼地域における自然資源の大規模な開発と環境汚染が深刻化している。地域雇用を確保しつつ自然環境への負荷を減らすために、人々の間で「環境に与える負荷を最小限に抑えた、地域の自然と文化の保護、地域経済に貢献する、旅行者が生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができる新型旅行形態」としてのエコツーリズムに対する要望は、いよいよ高まっている。日本でのエコツーリズムは、環境問題が言われ始め旅行者の意識が変化するなか、観光のなかでも「環境保全・観光振興・地域活性化」を目的として盛んに取り上げられるようになった。特に沖縄についてみると、1991 年に環境庁が「沖縄におけるエコツーリズム等の観光利用推進方策検討調査」を開始し、1996 年には、全国に先駆けて西表島エコツーリズム協会が設立された。西表島は豊富な自然環境を持ち、それを活かして行われるエコツーリズムが活発だが、県内のその他の地域でも、行政や商工会との連携を積極的に行い、エコツーリズムを通じた地域振興や人材開発に力を入れている。持続可能な観光地域づくりを県内各地域において主体的に行う多様な方々の連携体制としての「特定非営利活動法人 沖縄エコツーリズム推進協議会」が作られ、エコツーリズム推進を目指した取り組みが行われ、その結果、世界でも高い評価を得ている。

【研究の主な内容】

1. 沖縄県の風土に育まれた文化や自然景観を利用してエコツーリズムをどのように展開するのか、主に現在に行われている自然体験学習の方式と手段を分析する。
2. エコツーリズム・ガイド(自然体験学習指導者)の養成。複雑な生態系を説明できるガイドの存在がエコツーリズムの進行にとって不可欠であり、指導者の専門性や学び場を確保する方法について調査・分析する。
3. エコツーリズムの運営においては地元住民、研究者、行政、観光業者、観光客の 5 つの主体が参加することが必要である。その 5 つの主体の役割と協力の可能性を研究したい。

参加感想：

多くの大学院の先生方の講演と院生の研究発表を聞きました。環境教育についていろいろな視点からの研究を聞き、想像より幅広い環境教育世界を発見しました。

研究生の私にとって、環境教育について知識がまだまだ足りないことを知ることができて、勉強すべきことが山ほどあります。

ただ研究だけではなく、浅間セミナーで知り合った先輩たちから日本語の勉強方法についても貴重なアドバイスももらいました。留学生の私にとって、人生の大きな転機を与えてもらったかもしれないと思います。

本当に充実した3日間でした。もし、機会あれば、もう一度参加したいです。

阿部真梨（千葉大学大学院 生態遺伝学研究室）

【参加動機】

- ・学部時代に所属していた学生団体の顧問の先生からの紹介
- ・上記の団体で環境教育イベントの企画をしており、興味があった
- ・他大学院の院生との交流を通じて刺激を受けたかった



テーマ：マイクロサテライトマーカーを用いたアカガシ亜属の生態遺伝学的研究

内容：

本研究は、日本および東南アジアの温暖地帯に分布する、照葉樹林の代表的な構成樹種である、アカガシ亜属の多様性がどのように形成されたのか、地域ごとの遺伝的な特徴(系統地理学的傾向)を解明することにより、そのプロセスを明らかにすることを目的としています。

アカガシ亜属はどんぐりをつける樹種として古くから親しまれており、日本では7種が基本種として分布しています。これらの種は、建材や家具材などに用いられるほか、近年では公園や街路樹などの緑化目的などでも利用されており、生活に欠かすことのできない樹種の1つとして数えられます。しかし、アカガシ亜属は生殖隔離が不完全で、頻繁に種間交雑を行うことが知られており、さらに地域ごとに異なった遺伝的特徴を持つ可能性があると考えられています。地域ごとの遺伝的特徴を考慮されずに移植されるケースも多く、このままでは、交雑による遺伝的多様性の喪失、さらには絶滅の可能性も示唆されています。

そこで種の保全や管理に役立てるため、アカガシ亜属の系統地理学的傾向の解明を目的とした、各地で採集したサンプルのDNAレベルでの分析を行っています。

現時点での分析の結果では、1つの遺伝構造を持つ種と、複数の遺伝構造を持つ種が存

在するなど、複雑な進化のプロセスがうかがえ、種の進化には種間交雑が大きな役割を果たしていると推察されます。

今後はさらに採集地を増加し、より詳細な、アカガシ亜属の多様性形成のプロセスの解明に向けた分析を行っていく予定です。

参加感想：

今まで関わることの少なかった、様々な分野で活躍している方々との交流を通じて、自分の視野を広げることができ、とても良い刺激を受けることができました。各々の専門性や価値観を活かしたディスカッションでは、初めて気づかされることも多く、今まで私の中にあった「環境教育」の概念に囚われない、新しい「環境教育」に触れることができました。

分野の垣根を越えて交流できたことは、研究に対する理解度の不足や専門性の浅さを知る、とても有意義な機会となりました。このご縁に感謝し、これからもたくさんの刺激を受けていきたいです。

村上 紗央里（同志社大学大学院総合政策科学研究科 新川研究室）

【参加動機】

第1回浅間大学院生セミナーに参加させてもらい、環境に関する様々な分野の先生方や学生さんとの交流ができ、とても勉強となり、今回も参加させてもらいました。

テーマ：環境への「感性」を育む環境教育の実践研究

内容：

近年、地球規模で様々な環境問題が起きている。さらに福島第一原子力発電所の事故は、日本における最大の環境汚染を生じた。未曾有の事態に、それらへの対応が喫緊の課題であるが、その背景には地球環境について鋭敏に認識する「感性」の欠落が根本原因であるように思われる。こうした課題解決に向け具体的に活動を行うのが環境教育の使命であり、実践的に環境人材を育成することが求められている。

しかし、実際の教育の現場では、基礎学力重視への教育政策の転換により、環境教育がおろそかにされる傾向にある。また、木俣（2013）は、「環境観を深め、環境配慮行動を変容させるほどの、生涯にわたる長期的な学びを俯瞰する方法論の提供には至っていない」と指摘している。

こうした状況のなか、これからの環境教育では、環境への「感性」を育み、様々な現れ方をする環境問題への接近能力や自らの生活のなかでの環境に対する知覚と認識の能力を高め、課題解決に向けて自ら行動できる人材を育成することが必要であると考え

る。

本報告では、大学生を対象とした環境講座を事例として取り上げ、その具体的な方策について検討を行うこととする。

参加感想：

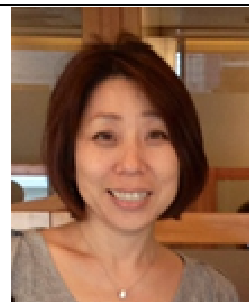
参加者の方々との交流から、様々な気付きや学びを得ることができました。環境について学ぶ方とお話できる機会は少なく、とても勉強になりました。発表についての議論だけでなく、体験などを通じて参加者同士が交流できたことがとても良かったと思います。私自身、2度目の参加ということもあり、皆さんと近況をお話したり、また今回初参加の方々ともお話でき、楽しく参加させてもらいました。またこうした交流から、学会などの機会でも、お話しやすい関係性ができとても良かったです。

飯塚 宜子（同志社大学総合政策科学研究科

ソーシャルイノベーション研究コース 新川研究室）

【参加動機】

多様な立場からの環境教育の研究と実践のお話をお聞きしたいと思いました。



テーマ：生物文化多様性に学ぶ環境教育

内容：

モンゴル遊牧民の12歳の女の子、オユンティユちゃんは、なぜ草原を移動しながら生活するんだろう？

日本の親子向けに、世界の生物文化多様性 — 「地域の自然に根ざす暮らし」のフィールドワークを疑似体験するワークショップを実践している。今回はモンゴル遊牧民の具体的プログラムを紹介した。モンゴル遊牧民の1人の女の子、オユンティユちゃんを目を通した生活の様子を家畜、屠殺、搾乳、燃料など写真で丁寧になぞり、物語のように展開する。主食ともいえる塩入りミルクティー（スーテーツァイ）を飲んだり、どの子どもも持っている日常のおもちゃである羊の踝の骨（シャガイ）に触れる民族衣装を着てみる。馬頭琴という民族楽器に触れ、音色を聞いてみる、など参加者の五感にも訴える、オユンティユちゃん自身が撮影した、彼女が大切だと考えるものの写真を参加者と共に読み解く。そして、グループワークで感じたことを語り合うワークショップである。ワークショップを通して大切にしていることは「自然環境に根ざした暮らし方と自分の暮らし方の比較」、「地域の人々の心や価値観に触れる」である。

文化人類学は近代への危機感を持つ先人が扉を開いた学問であり、地域研究では、自然と文化が乖離しない様々な文化、すなわち今日的な環境問題を引き起こさない営みの

様子を明らかにしてきた。そこには、持続可能な生態知や、それらの暮らしを営む人々の心の拠り所などに関わる様々な知見がある。先端的科学技術、高度情報化社会に向かう私たち、子どもたちが、同じ地球にいるモンゴルや先住民の子どもたちの心を想像し、彼らとの「つながり」や「多様性」を知ることは、未来を考えるかけがえのない材料になるだろう。自然と人間の多様な関係性に学ぶ意義と方法論を、これからも探求していきたい。

参加感想：

いろいろな分野がベースにある方々の、それぞれの「環境教育」の具体的な内容が分かって勉強になりました。先生方とゆっくりとお話できたことも、ありがたい経験でした。会場の周りの環境や設備なども素晴らしさも印象的でした。ありがとうございました。

橋本卓道（同志社大学大学院 総合政策科学研究科 中野民夫研究室）

【参加動機】

浅間大学院生セミナーに参加したのは、他大学の教授や大学院生とのつながりを作り、交流を通して環境教育への理解を深めたいと思ったからです。また、分野横断的に様々な角度から研究を行う実践者の活動を学び、自らの研究に活かしたいです。



テーマ：森と暮らしのつながりを取り戻す学びの場づくりの実践的研究

内容：

東日本大震災と原発事故は、日本人に自然への畏怖・畏敬の念を思い出させ、原子力発電技術の問題点と都市機能の脆弱さを明らかにした。筆者は、原発事故によって故郷を失ったことで、故郷を見つめ直す契機となった。そして、未来世代に残していくべき価値は、子どものごろに過ごした豊かな自然環境であり、「森」だと考えるようになった。

現在、日本の森林は人の手入れがされず荒廃している。日本の森林は約4割が人工林、約6割が天然林となっている。人工林は、戦後の拡大造林政策によって拡充されたが、1964年の木材輸入の自由化、林業の衰退に伴い緑の砂漠と化している。また、天然林は、燃料革命によって家庭用燃料が木炭や薪から、電気・ガス・石油に切り替わり、森林資源としての価値を失った。

森林の持つ多面的機能を発揮し、生態系サービスを享受するためにも、森と暮らしのつながりを取り戻す必要がある。森と暮らしのつながりを取り戻すとは、里山における自然と共生する生活文化や、自然の資源を活用するための知恵や技術を手がかりに、荒

廃した森に再び人が手を入れ、暮らしの一部として継続的に関わる仕組みをつくることである。

本研究では、自然資源を活用した知恵や技術を持った若い人材の育成を目指し、中学生を対象に 2 回のワークショップを行った。プログラムでは、「刃物教育」「火育」「遊び」の要素を重視した。1 回目は「竹のものづくり」、2 回目は「火起こし」をテーマに行い、内容をエスノグラフィー形式で記述し、それぞれの要素の効果を考察した。その結果、①創造性を触発し、潜在能力を引き出すこと、②実践を通して知識と経験を結びつけ深い実感を得ること、③密接な関係性が学び合いを促進すること、④生産から消費までの一連の体験を通して作ることに喜びを見出し、森と暮らしのつながりを実感させること、の 4 点を示し、結論とした。

参加感想：

浅間大学院生セミナーに参加したことで、環境教育の担う役割の変化と、基盤となる環境思想について学ぶことができました。環境教育や ESD など包括的な概念であるため、捉えにくいと感じていましたが、それらの発展の歴史的な流れを知ること、整理することができたように思います。

また、他大学院生との交流を通して、研究手法や視点の違いに大きな刺激を受けました。自らが所属する大学院や研究科の外で、環境教育という共通の意識を持ち活動をする若手研究者とつながりを作れたことは、貴重な機会でした。特に、合宿形式だったため夜遅くまで語り合うことができたのが印象的です。このセミナーを通して、環境教育へのアプローチが分野を横断し、様々な角度から可能であることを実感しました。

石山 雄貴（東京農工大大学院環境教育学研究室）

【参加動機】

学外で研究発表をする機会を 1 つでも多くするため。また、私は環境教育を勉強しながら、自然体験学習に関しては肌で感じたことがなかったため、浅間大学院生セミナーに参加することで、実践者の声や実際に体験してみたいと思ったから。



テーマ：「人間の復興」理念における ESD としての学びのあり方

内容：

東日本大震災が顕著化させた「周辺」としての東北(山下、2013)や実行されつつあるショック・ドクトリン(クライン、2011)と呼ばれるような復興過程のあり方は、東北地方の沿岸地域を中心とした農山漁村において「持続可能性」をますます脅かしている。そのような状況の中で「人間の復興」(福田、1924)理念へ注目が集まっている。それは

置き去りにされつつある被災者が主体となって地域のコミュニティや生活を取り戻していく復興のあり方で、その過程で「社会」「環境」「経済」を統合的に捉え、グローバルゼーションに対抗する地域づくりに向けた学びとしての ESD は、大きな役割を担う可能性がある。上記の研究背景から宮城県気仙沼市南町紫市場設立に向けた活動を調査対象とし、その過程における学習のあり方から ESD としての可能性を考察した。避難所の運営から始まった南町住民の学びは、商店街再生に向けた学びへと展開され、それと同時並行的にまちづくりの学習会や神戸市への視察などが専門家も含めて展開された。それは被災前から行われていた、青年会活動での住民同士のつながりが基盤となっていた。この活動の中で避難所の運営→青空市→仮設商店街→商店街へ、とより日常生活へ接近してゆく生活を創造・提示・共有してゆく学習が付随して行われ、そのなかで、南町での生活再建の断念から商店街、運営委員会参加へ、という住民たちの意識の変化が起こり、その意識が維持されていった。さらに、活動の範囲が災害前にはやられてこなかった地域づくりへと展開したり、目の前の被災という現実から復興してゆく未来やより良い地域をつくっていくための過去の地域課題を意識化していく視野の広がりが見られた。しかし、本活動は住民主体で雇用を創造しつつ、住民主体で地域づくりを行う活動であったが、今後はライフスタイルの転換までも視野に入れた、具体的ビジョンの創造をより多くの住民と行っていく必要がある。

参加感想：

発表後や懇談会の場で参加した学生や先生方とした ESD に関する議論は、私の ESD 理解に新たな視点を与えてくれた。特に、「社会」「環境」「経済」の関係や地域概念の捉え方に関する議論は、私の中で新たな問題意識を芽生えさせてくれた。また、自然体験学習や地域活性化を目指した取り組みの実践者たちとの出会いは、現場の声を聞くだけでなく、実践(者)と研究(者)の関係を改めて考えさせてくれた。このような、自身の研究を深化させるきっかけを与えてくれた関係各位に感謝したい。

アメリカ短期留学を終えて

石山 雄貴

東京農工大学大学院連合農学科

1.はじめに

私は、田開寛太郎さん（富山県立大学大学院）とともに、4月14日～5月8日まで、ワイオミング州にあるティートン・サイエンス・スクールに短期留学をしてきた。本稿では、短期留学中に体験したこととともに、そこから私が何を得たのかについて報告したい。ティートン・サイエンス・スクールは、①Wildlife Expeditions（ツーリズム）②Field Education（子ども向けの環境・野外教育）③Graduate Program(大学院)④Teacher Learning Center（教員研修）⑤Journeys School(幼稚園～高校)⑥Teton Valley Community School(幼稚園～小学校)⑦Conservation Research Center(研究機関)の7つの柱で成り立っており、本留学では①～⑥について見学を行った。



ケリーキャンパスから望む風景



キャンパス近くの道路を歩くバイソン

2.本年度の留学プログラムに関して

本年度の主な留学プログラムに関しては以下の通りである。オリエンテーション時にプログラムのスケジュールが知らされ、途中、私たちの要求などを考慮して、スケジュールの組み替えなど柔軟に対応していただいた。

1 週目

オリエンテーション、TVCS(Teton Valley Community School)、TLC(Teacher Learning Center)の見学、

2 週目

Field education の見学

3 週目

Visitor center、raptor center、murie center の見学、Wildlife Expeditions、Journeys School、stewardship プログラムの参加、見学、last presentation

第1週目は、今回の留学をどういった視点で取り組むのかの確認とともに、特に自分が行いたいことについて意見を出していくオリエンテーションを行った。その後、TVCSの見学を行った。私は、TVCSの職員の方にその組織体系をお聞きし、特に幼稚園での教育プログラムについて見学を行った。この日は数字や文字の勉強が行われ、途中、インターンシップの学生による授業が行われた。幼稚園の教室では、近くの川でとれたトラウトを飼育しており、その日ごとのトラウトの様子や水温に関して日誌が担当の児童によりつけられている。過去、行われた子どもたちによるトラウトの生態や川の調査を軸とした環境教育実践が冊子にまとめられており、幼稚園の中での Place-Based-Education を知ることができた。

TLC はアメリカの学校教員向けの研修プログラムであり、ジャクソン・キャンパスで行われた。この日は、風景のスケッチやサウンドマップの作成、校庭から自然を感じるものを持ち寄り、説明をする体験学習などを実際に行ったり、ワークショップ、Journeys Schoolでの教育実践の紹介などがされた。ワークショップでは Place-Based-Education や Nature-Based-Education についての解説がなされ、それを実際に各自の学校でどのように活かしていくのかについて議論がされた。

第2週目は、Field education の見学が主な学習内容となった。Field education は、年間を通してアメリカ中の学校を受け入れ、子どもたちに野外教育・環境教育の機会を提供する。Field education のインストラクターは TSS の大学院生たちが務め、大学院生たちは、実際にインストラクターの現場で試行錯誤をしながら野外教育・環境教育の手法を学んでいく。

私たちが見学した Field education の1日のスケジュールは、実際にフィールドに赴き、そこでの自然の解説や科学的な調査(pH、酸素濃度)を行う学習を日中に行い、朝晩でその振り返りや関連する内容について授業が約 90 分行われた。このときは5日間のプログラムで、最終日に学習内容の発表会が行われた。今回のプログラム・テーマは「 $L=A+B+C$ 」で L は landscape、A は abiotic、B は biotic、C は culture を指す。



Field education の一場面



Evening program の一場面

TSS 近くの山、川、湖で、この風景の中にある **abiotic** は何か、**biotic** は何かという視点からスケッチが行われ、さらに、**abiotic** として多く見られる岩石について、その特徴を実際の石を使って解説するとともに、身体を動かすゲームを用いて行われた。**Field education** では、そのほかにもプレート・テクトニクスに関してもゲームを用いた学習が行われ、アイスブレイクのゲームも豊富に行われた。こういった子どもを楽しませるゲームが随所にあり、朝から夜まで子どもたちを飽きさせない工夫が見られた。

また、この **Field education** の最大の特徴は、**science circle** の視点から子どもたちを主体的に参加させながらプログラムが展開されることだろう。**science circle** は自身の観察から始まり、それに関して仮説を生成し、それを検証する。最終的にはそれを発表し、研究成果から今後の課題を出し、それを今後の研究にしていく教育のサイクルである。私の班は、子どもたちの観察の振り返りをもとにインストラクターのコーディネートにより、これまで観察した2カ所の環境の比較から、「そこには違う種類だけでも同じ量の動物がいるのではないか」「**kelly worm spring**(TSS 近くの川)の方が水温が高いのではないか」という仮説を立ててその検証を行い、その研究成果についてポスターを用いた発表が行われた。

3週目は、**Visitor center**、**raptor center**、**murie center** 見学、**Wildlife Expeditions**、自己紹介と学習成果の発表を行った。**Wildlife Expeditions** は、TSS による自然観察や野生動物観察をするプログラムで、生物学者のインストラクターとともに行われた。私たちが参加したこの日は、運良くこの地域には30頭しか生息していないオオカミやヌーンを観察することができた(ちなみに一番多く観察することができたエルクは、1万2千頭生息している)。**Journeys School** では、高校の物理の授業を見学できた。ちょうどこの日はいくつかのグループに分かれ、エネルギー保存の法則など、これまで勉強してきたことの発表と振り返りがなされた。発表の形式としては、ポスター発表だけでなく、動画を作ったり、物理法則をリリックにした歌を流したりと、子どもたちの自由な発想を見ることができた。.



サイエンスサークル



Teacher Learning Center の一場面

3 私が学だこと

TSS での学びの軸として「サイエンスサークル」という教育プログラムがある。サイエンスサークルは観察から始まり、その中から疑問点、仮説を生成し、それを検証し、研究

結果を発表していく教育プログラムである。子どものころからこういった科学的な視点を持ったプログラムに触れることは、現在求められるようなクリティカル・シンキングを育む機会となり、大変有意義なものだと思う。ただ、それを5日間の学習で行うことに難しさを感じた。子どもたちの中にはTSSでの学習プログラムを経験している子どももいたが、大部分は初めて来た場所であり、初めての教育プログラムであろう。そのなかで、自分たちで仮説生成から検証、発表する過程が最終日の1日で行われた。それ故に、仮説の生成や検証の手法に関して若干曖昧になっていたように思われる。この部分に関しては、子どもたちが実際に身体を動かして楽しむような体験学習とそれをもとにした科学的な手法を取り入れた学習とどのように配分していくのか、どこまで子どもたちの主体性を確保させていくのかそのバランスが大変重要なものになると思う。ただ、サイエンスサークルは環境教育・野外教育という教育の中だけでなく、我々研究する者として常に意識しなくてはならないことであり、あらためて自身の研究を見直す機会となった。

TSSは、教師を目指す大学院生たちによってField Educationが行われている。Field Educationにおいて、利用する小学校の児童たちは科学や自然を学び、大学院生たちは彼らとのやり取りのなかで、教師として現場での試行錯誤のなかから様々なことを学んでいく。さらにそれをTSSの研究組織が支えている組織体系がある。まさにそれは、学び合う拠点としてのTSSとしての組織のあり方であると考えられ、環境教育を接点とした学び合う拠点づくりは、今後の日本での環境教育の推進において、学ぶべき点が多くあると考えられる。

4.おわりに

最後に、私が率直に感じたことを述べて本稿を閉じたいと思う。私は東京23区の「都市化」された街で育ち、冬の山でのスキーやスノーボードといったレクリエーションをした記憶がない。そのためだろうか、最初の1週間は、キャンパスから見える雄大な山々や野生動物との出会いに関して「初めての経験」や「新鮮」という言葉では収まりきれない「わけの分からなさ」を感じた。映画の中にいるような、そういった気持ちに近いかもしれない。実際に雄大すぎる山々を見ても、絵はがきを見ているかのように、目に映る現実のものとは思えない日々が続いた。そういう気持ちが少し和らいだのは、実際に山に子どもたちとハイキングに出かけてからだと思う。私たちが滞在した時期は未だ雪が降る季節であり、雪の上をスノーシューを履いてハイキングをした。スノーシューを履いても足が雪に沈み、大変歩きにくいなかのハイキングだった。ただそのなかで感じた雪の感触や、ランチパックを食べながらお尻が濡れた感触や、手ですくった雪が太陽に反射してきれいだったり、そういった「雪」を感じたとき、私はこの山に来ているんだという実感をやっと持てたような気がする。この感覚は、自然と人間の共生の関係性を領域とする環境教育を研究する者にとって必要不可欠な経験であり、この感覚を得ることができたことは、大変有意義だったと思う。

アメリカ自然学校 Teton Science School 短期留学報告

富山県立大学大学院 工学研究科

環境工学専攻 博士前期課程

田開 寛太郎

1.はじめに

飛行機から降り立った瞬間、キンと肌を刺すような寒さを感じ、長時間のフライトによる時差ボケは一気に覚める。ジャクソンホール空港に到着したころには、すでに時計の針は夜の 9 時を指していた。月夜に照らされた山々、グランドティートの荘厳さに圧倒されながら、いよいよ始まる環境教育等研修への緊張感と期待が変に入り混じる、むずがゆい想いが私の中を駆け巡った。



写真1 ジャクソンホール空港にて

本稿は、2014 年 4 月 14 日～5 月 7 日の約 3 週間にわたるアメリカ自然学校「Teton Science School(以下、TSS)」短期留学にて、自身が体験した貴重な学びと体験の一端を綴る。また、特に子どもの主体性を最大限に引き出す学びとして、TSS の特徴的な学習手法を一点取り上げ、日本の子どもの自然体験活動の拡大と日本の環境教育の課題に向けて若干の提言を試みる。

2.子どもの主体性を最大限に引き出す学び—コヨーテを追跡せよ

「コヨーテを追跡してくるわ I will chase a coyote.」と、インストラクターが言った。コヨーテとは、オオカミの近縁で形態も似るが小型で、北アメリカ大陸に広く分布する肉食獣である。ここグランドティートン国立公園内には、コヨーテのほかにエルクやムース、バイソンなど多くの動物が生息している。当然、自然の中に踏み込むのであるから危険はつきもので、熊対策用の緊急スプレーをインストラクターは常に持ち歩き、子どもの安全を第一に考えているのである。話を元に戻す。これは滞在 2 週目、TSS の学校向け環境教育プログラムである Field Education の視察として、インストラクターのクリスティと 10 数名の子どもに同行したときの話である。太陽が雲に隠れると未だ肌寒い野外で昼食をとろうとしたとき、「コヨーテを追跡してくるわ」と、クリスティがおもむろに立ち上がり、私に言った。英語の拙い私はなんとか聞き取った単語を耳に残し、滅多に出会えることのない肉食獣、コヨーテへの恐怖心と好奇心が一挙にこみ上げたのである。

さて、この話がどのようなオチに向かって進んでいるのかを明かす前に、まずは表題にある“子どもの主体性を最大限に引き出す学び”について触れるのが先決であろう。環境教育の目的として、トビリシ勧告やベオグラード憲章に見られるように、持続可能な社会構

築においては、環境に対する知識や態度、環境保全に寄与する技能や行動を育むことが国際的にも大切であると認められている。それ以降、その目的を達成するための教育学習の実証・評価が行われており、多くの研究者が最終的に環境保全に寄与する行動へとつながるような環境教育実践の理論化を試みている。現代における環境教育においては、ESDに見られるような持続可能な開発に向けた体系的思考・批判的能力や問題解決能力などを育むことが重要であるとされる。しかしながら、学習者が一足飛びに環境に対する知識や態度を醸成させ、環境保全活動を行うといったことは難しい。また、理論形成における心理学的アプローチにおいても学習者の行動を左右する要因は複雑とされ、いかに学習者の主体性を最大限に引き出すかの様相を明らかにすることは喫緊の課題である。



写真 2 動物に出会う機会は多い



写真 3 遠方よりムースを観察する

ここで、“子どもの主体性を最大限に引き出す学び”とする TSS の特徴的な学習手法 Science Circle の理念・手法について取り上げたい。これに関しては、先代留学者が詳細を述べており、過去の発行物を参考されたい。本稿では、現場における学習者の学びがどのようなプロセスで進められたかについて、筆者による視察、所感を交えて概観する。Science Circle は、インストラクター諸氏の身体に染み付き、TSS の環境教育はこれに沿って展開されるのが一般的である。Science Circle に沿った環境教育は、子どもの「科学」への探究心を高める効果を持つだけでなく、子どもの主体性を最大限に引き出す要因として大きく寄与している。具体的な例を取り上げ、子どもたちの学びと態度の変化について順を追って説明する。

森のハイキング中に動物の死体を発見した際の様子である。まずは、異様な物体が突然現れる衝撃、ときには感動が目突き、強烈な印象として残ることは言うまでもない。真っ赤に染まった残雪の上、むき出しの生々しいあばらや毛の付いた脚、それらが塊として存在していた。衝撃が冷めるやいなや、急に思い出したかのように呼び起される嗅覚は、あたりの腐敗臭を一層際立たせた。この体験は子どもにとって一生忘れられないほどの体験学習となるのだが、子どもの主体性を最大限に引き出す学習教材として、インストラクターはこれを活用することを忘れない。クリスティは、「これは何の死体だろう」と、誰も

が思うであろうシンプルな疑問を、あたかも世紀の大発見といった具合に誇張し、子どもに問いかける。ある子どもが、「大きさからいってムースじゃないかな」と答えると、「大きいといったらバイソンだって大きいよ」とほかの子どもが反応し、あっという間に討論が始まり、いろいろな疑問や仮説が立ち上がってくる。そして、子どもたちの間で話が出尽くすやいなやのグッドタイミングで、クリスティはさらに、「周りにこの動物の足跡はないか」など、いくつかの調査項目、つまり見るポイントを子どもに指示する。ずっとその死体に釘付けだったからだろうか、周りにたくさんの足跡があったことにはっとさせられ、改めて視野が狭くなっていたことに気づかされる。さて、子どもはTSSオリジナルのジャーナルノートを活用しながら、その動物の同定についてさらに分析していく。ジャーナルノートには、グランドティートン内の動物に関する足跡やスキヤット（糞）に関する情報だけでなく、準備がよろしいことで、サイズを図るための測りも付いている。あたりに立ち込めていた腐敗臭は、自然と気にならないほど子どもの集中力は高まり、最後の結論では、若干ながらクリスティの学術的な見解が述べられ、正解へと導かれる。



写真 4 動物の死体との遭遇



写真 5 スキヤットだって良い教材

以上の環境教育は、何も強烈なものがある場合のみ成立するのではない。Abiotic（非生物）、Biotic（生物）、Culture（歴史・文化）と対象を限定するのではなく、様々な物・事象を対象に行く先々で発見できるのである。出会った動物、鳥はもちろん、その辺に落ちている石だって、ウンコだって、なんだって。

3.TSS の環境教育を支えるもの

さて、以上の理念・手法は、全く新しい環境教育、TSS 特有のものではないだろう。一つ一つの段階を踏み、子どもの主体性を尊重しつつ、多角的な視点で物事を捉えられるようにインストラクターが質問を投げかけ、子どもの学習を促進させることは、日本、世界各地で行われているだろう。しかし、TSS による環境教育は「科学」への探求心を高める効果があり、子どもの主体性を最大限に引き出す可能性を大いに持っている。筆者はこの理念・手法を支えるのは、子供たちの学習態度を刺激するインストラクターの力量と、そ

の力量を養成する TSS の効率的・効果的な養成講座の存在であると考えている。Field Education の多くを支えるインストラクターは、Graduate Program に参加する大学院生である。1 年の現場での教育実践を経て、もう 1 年を提携先の大学にてアカデミックな学びを深めるなど、“学術的な学びと教育プログラムの融合”によるカリキュラムが組み立てられているのである。即戦力として環境教育の現場に出されるためのインストラクターの質保証は、TSS の正規職員、同級生、シェパロン(参加学校の先生、保護者など)より、彼らの学びと実践が常に評価されていることであろう。その評価体系の効率的・効果的な取り組みについて、大学院生は、各セメスター(秋・冬・春・夏)によってチームを編成し、Field Education や出張講義などのプログラムを受け持つ。Field Education では、コーチとして TSS の正規職員が統括責任者としてコーチとなり、ホスト(受け入れ学校団体との連絡・調整、プログラム全体進行やインストラクターの評価)、インストラクター(体験学習・現場における指導者)、モーニング・イブニングプログラム担当(朝・夕の 1 時間～2 時間の自然に関する室内研修など)と、大学院生がプログラムの中心となり、役割を分担する。受け入れ団体が変わるごとに、それぞれの役割はローテーションされ、大学院生は評価する立場、評価される立場をどちらも経験することで、自然体験指導者として効果的・効率的に多くを学べるのである。



写真 6 1 日に何度も共有の時間を設ける



写真 7 コーチとホストが同行する

4.おわりに

本稿では、TSS の特徴である環境教育と、それを支える“学術的な知見と教育プログラムの融合”を概観した。これらの成果は、日本の子どもの自然体験活動の拡大と日本の環境教育の課題において、筆者は非常に重要な要素となると考える。2011 年に環境教育等推進法が改正され、環境を軸とする成長を目指すうえで、行政、NPO 団体、企業や大学などあらゆる主体による協働取組みが重要とされる。TSS で Place-based education といった地域における学び、地域協働による環境教育の精神が根付いていることは、先述した学習としての自然の活用や養成講座のカリキュラムを概観することで、若干ながら示すことができるだろう。一方、筆者は日本における環境教育の今後を見据えた場合、全く新し

い学習手法の開発が必要とされるのではなく、環境教育を支える組織・社会構造の再定位・再構築が肝と考えている。“学術的な知見と教育プログラムの融合”を目指すため、大学など高等教育機関と NPO 団体が協働取組みをするなど、日本の環境教育は次のステップに向かわなくてはならない。自身の今後の研究課題としても地域協働論と環境教育・ESD 論の融合、確立を目指すこととし、稚拙ながら本留学における成果と今後の課題報告とさせていただきます。

さて、お待ちかね、「コヨーテを追跡してくるわ」と言われた後の続きを話しておく。私は興味本位でコヨーテ見たさに「一緒に行きたい I will.」と、彼女の傍に駆け寄ったが、何やら具合が悪い反応を示す。当然一緒に行けることを期待していた私は、「私一人で行くわ」、「あなたも行きたいの？」など、予想もしなかった返事に私は戸惑い、それどころか、来ることを拒まれた感覚だけが残った。大人しくその場に残ったが、どうしても生のコヨーテを見たかった私は落ち込んだ。そしてその後、それをもはるかに超えた落ち込みが襲ってくるようになるうとは……。

実は後から分かったことであるが、私は大変大きな勘違いをしており「コヨーテを追跡してくる」とは、「草陰でトイレ（小便）を済ませてくる」という隠語だったのだ！ 日本でいう「お花を摘みに行く」と同じ意味だろう。なるほど合点がいったと同時に、クリスティとのやり取りを思い出した私は、どこか遠いところへ逃げ出したい気持ちになった。しばらくクリスティと目を合わせて話すこともできなかったのは、言うまでもない。

最後に忠告する。「クマを追跡してくるわ I will chase a bear.」と言われた際は、「一緒に行きたい」などと、決して言わないことである。

第 14 期自然学校指導者養成講座

安藤百福センター共催事業

2013 年 10 月 5 日～12 月 22 日

公益社団法人日本環境教育フォーラム主催、安藤百福センター共催で「第 14 期自然学校指導者養成講座」を開催した。これは、職業として自然学校（エコツーリズム、グリーンツーリズム、アウトドア事業、自然体験事業、ESD、ソーシャルイノベーション、地域おこしなど）での指導者を目指す若者を、自然学校側が欲しいと思う人材に磨き上げる日本で唯一の講座である。今期で 14 期（14 年目）となり、これまでの修了生は 116 名にのぼっている。今年は 20 代の男女 4 名が集まった。



まず、この講座は全国各地の自然学校で現場実習（OJT 実習）を行うところから始まる。4 月から 9 月までの半年間、現場での指導方法や運営方法を体験しながら学び、揉まれ、逞しく成長する。現場実習後 10 月からは活動拠点を安藤百福センターに移し、12 月下旬にかけて座学研修を行う。ここで一流の講師陣から

幅広い分野を学び、現場で体験したことを知識として身に付けることで、指導者としての伸びしろが大きく広がる。

座学研修のカリキュラムは、環境教育や野外教育、生態学、環境思想などの基礎科目から、インタープリテーションやプログラムデザイン、登山、アウトドア・マーケティングなどの専門科目を学ぶことができる。また、昨年に引き続き公益社団法人日本山岳ガイド協会の研修会（試験合格者は、自然ガイド・ステージ I の資格を取得）も受講しただけでなく、安全スキルの



の証明に役立つよう MFA（メディックファーストエイド）の講習会も行った。そのほか、全体スケジュールに CONE 全国フォーラムや清里ミーティング、ロングトレイル・シンポジウムといったネットワーク構築の機会も組み込んだ。すでに活躍し



ている自然学校職員との交流も刺激になった。濃密なスケジュールで、あっという間の 9 カ月間だった。

14 期の受講生は全員講座を修了することができ、自然学校などへの進路も決まった。9 カ月間で培った武器を生かし、プロの指導者としてどのような活動をしていくのか、これからの活躍を大いに期待したい。



10月6日（日）10時～17時

科目	体験教育論
講師	西田 真哉 （にしだ しんや）
主な役職	新生会HALC自然学校校長 他
テーマ	体験教育論
概要	環境教育活動、野外教育活動における、参加機会と参加者相互の学習の深まりについて、「受講型（受身型）」、「参加型（体験型）」、「参加者主体型」、「参画型」の区分を、体験的に解説して、活動プログラムに「体験学習法」を導入する効果を体得する。
事前準備	特になし
事前課題	ネットで、「体験教育」「体験学習」および「体験学習法」を検索して、その相異を調べてください。
持ち物	鉛筆，消しゴム
備考	屋外活動の可能性もあります。

◆受講生の感想

同じ現象を見て抱く意見が人によって違うのは、人それぞれの価値観が違うからであることを体験的に学ぶことができた。また、その話し合いにより自身の考えが深まっていくことを実感した。グループになって1つの案を導き出していくことによって、プラスの効果が生まれることを理解できた反面、互いが納得する道を探っていく難しさを感じた。今回、体験的な学びを通じて、「心が豊かになる＝関わりが豊かになる」という最後の言葉に深くうなずいた。



10月9日（水）10時～17時

科目	自然学校原論
講師	岡島 成行 （おかじま しげゆき）
主な役職	大妻女子大学教授、（公社）日本環境教育フォーラム理事長、安藤百福センターセンター長 他
テーマ	日本型環境教育と自然学校の役割について学ぶ
概要	・ 人間と欧米の自然観の違いと、それぞれから学ぶべきこと ・ 日本固有の文化と環境教育 ・ 日本型環境教育とは ・ 21世紀における社会と環境問題 ・ 自然学校とは何か。なぜ自然学校なのか ・ 日本の自然学校の今後の展開
事前準備	特になし
事前課題	特になし
持ち物	特になし
備考	特になし

◆受講生の感想

「なぜ、いま自然体験か」 自然体験がもたらす効果を理論的に学ぶことができた。自分自身にとっての自然体験や、OJT研修での指導者という立場の経験からその効果を実感し、深い理解までもっていくことができた。また、日本と欧米の自然体験を取り巻く社会を比較することで、日本の環境NGOや自然学校の現状、課題を知り、これからを考える時間となった。



10月10日（木）10時～17時

科目	環境教育論
講師	阿部 治 （あべ おさむ）
主な役職	立教大学社会学部教授、日本環境教育学会会長 他
テーマ	持続可能な社会を目指した環境教育/ESDの現状を知り、今後の課題について考える
概要	1. 環境問題の歴史と環境教育の登場 2. 世界と日本の環境教育の歩み 3. 持続可能な開発（SD）と持続可能な開発のための教育（ESD）の登場 4. 多様なステークホルダーによる環境教育/ESDの取り組み 5. 自然学校によける環境教育/ESDの取り組み 6. 地域づくりとしての環境教育/ESD 7. これからの環境教育/ESDの視点
事前準備	特になし
事前課題	特になし
持ち物	特になし
備考	特になし

◆受講生の感想

歴史的背景から世界と日本の環境教育について総合的に学ぶことで、ESDの現状を明確に理解し、その重要性を知ることができた。そのことで日本の持続可能な開発に対する取り組みの課題や問題点について、自分自身が主体的に考えられるようになったと思う。より多くの人がESDを理解し、取り組むことで、自らの意見を持って行動に移せるようになり、社会が変わるのではないかと感じた。



10月11日（金）10時～12時

科目	環境思想・環境倫理
講師	加藤 尚武 （かとう ひさたけ）
主な役職	京都大学名誉教授、東京大学特任教授、鳥取環境大学名誉学長 他
テーマ	環境問題の全体像
概要	経済成長の結果、生態系の不可逆的な変化、廃棄物の累積、資源の枯渇が発生して、持続可能性をおびやかしている。気候変動による生物多様性の喪失は最大の問題である。フクシマ原子力発電所の事故の影響で、世界的に「原子力エネルギーから自然エネルギーへの転換」が行われるという期待が高まっているが、業界筋では、在来型化石燃料から非在来型化石燃料への転換が進むと観測されている。
事前準備	加藤尚武「環境倫理学からみたエネルギー問題」『中央公論』9月号を読んでおくこと。
事前課題	特になし
持ち物	特になし
備考	『中央公論』は別途配布します。

◆受講生の感想

福島第一原子力発電所での事故を契機に、それまで減少しつつあった化石エネルギー（石油）への依存度が高まっており、さらに今後増えるとされているシェールガスなどの非在来型化石エネルギーにも限りがあるなかで、エネルギー資源だけでなく世界を取り巻く様々な問題と絡めながら、自然学校指導者としては、温暖化による生物種の絶滅について正しい理解と研究をしていく必要性を強く感じた。



10月12日（土）10時～17時

科目	生態学概論
講師	北野 日出男 （きたの ひでお）
主な役職	東京学芸大学名誉教授 他
テーマ	生態学という学問内容の理解
概要	1. 私の研究の紹介（ヤドリバチの生物学）、2. 生態学とはどのような学問か、 3. 生態学的環境観（「環境」概念の考察）、4. 生態学の研究分野の概説、 5. 野外観察実習 など
事前準備	高等学校（生物1および2）程度の生態に関する内容を理解しておくこと。参考書： 日本生態学会編（2004）『生態学入門』（東京化学同人、¥2,800.）
事前課題	自然学校指導者として身に付けておくべき「生態学的リテラシー」とは何か、を考 えておくこと。
持ち物	フィールドノート、ルーペ（貸し出しあり）
備考	昆虫・植物図鑑、関連する参考書などは講師が持参します。

◆受講生の感想

生態学を学ぶことが、自然への興味、関心をさらに強めると感じた。人は周りのどのような環境から、どのような恩恵を受けているのか、その意識を持って自然に向き合うことで多様な発見ができる。野外観察実習において、日ごろ気に留めない道端の草木や、茂みに埋もれている小さな生物にもそれぞれのドラマがあったことを知った。そのことを今後どのように人に伝えていくか、そこには自分の関心の強さが関係している。今回の講義では、自分が日ごろどの程度生態に関心を持っているか気付かされるものとなった。



10月15日（火）10時～17時

科目	日本山岳風景論		
講師	小泉 武栄 （こいずみ たけえい）		
主な役職	東京学芸大学特任教授 他		
テーマ	日本の山はなぜ美しいか		
概要	日本の山は世界的にも例がないほど美しいが、その背景には日本の山の自然がきわめて多彩で繊細であるということがあげられる。このことを説明するために、以下のような視点から、山の自然を見ていくことにしたい。 1. 世界的な視野から見た日本の高山 2. 植生の多様性を支える基盤地質と地形 3. 地生態学の考えかた 4. 火山植生と火山の噴火史 5. 各地の事例の紹介 6. ジオパークと世界遺産		
事前準備	特になし		
事前課題	特になし		
持ち物	特になし		
備考	特になし		

◆受講生の感想

日本の山の美しさは、地形・土壌・気候・自然の歴史など、あらゆる要素の相互作用によってつくられていた。相互関係を理解することで、山の風景や山における現象の背景を知ることができる。しかし、その理解の前にまずはそこに疑問を持つこと、「なぜ？」という感性が自分に必要だと感じた。山に関する知識だけでなく、山の見方もこの講義で学ぶことができた。



10月16日（水）10時～18時

科目	日本の火山概論
講師	荒牧 重雄 （あらまき しげお）
主な役職	東京大学名誉教授、火山学者 他
テーマ	日本の火山活動について学ぶ
概要	1) 浅間山関連の噴出物、地層、構造などを野外で観察、討論 2) 火山現象一般の議論 3) 噴火作用の各論 4) 噴出物、火山体などの各論 5) 火山災害の種類と防災・減災の手段 6) 火山の恩恵、社会への影響など
事前準備	特になし
事前課題	特になし
持ち物	野外研修の際は汚れてよい衣服、野外用の靴など
備考	特になし

◆受講生の感想

地学を地球誕生からの時間軸で見たり、文化的歴史から見たりすることで、火山や岩石を体系的に読むことができ、深みやストーリー性が出て非常におもしろくなることを学んだ。また、火山噴火時の様子やその迫力を教えていただいたことで、実際の噴火現場を見たことない私も、火山への興味をかき立てられるものとなった。このことから、自然体験活動の中で「感じること」以外に「学ぶ喜び」を伝えることも大切であることを実感した。



10月17日（木）9時～17時

科目	森林セラピー論
講師	今井 通子 （いまい みちこ）
主な役職	（株）ル・ベルソー代表取締役、登山家、医師 他
テーマ	森林から与えられる地球環境と健康
概要	森林セラピー®とは、実地検証された良い森が、その空間に入った人のストレスを下げ、免疫機能を上げるなど、研究者によって証明された癒し能力だけを利用し、森林空間内で行動し、健康維持、増進等に役立てようとする方法です。今回は志賀高原の森林セラピーロードで森林セラピーを体験していただき、人の生存に対する森林の大切さを感じていただいた上で、地球環境をはじめ森林の多様な役割と現状、保全の試みなどについて講義します。
事前準備	森林内で気楽に動ける服装（Tシャツ、厚手の長袖シャツ、長ズボン、タイツ、毛の靴下など）と、トレッキングシューズ
事前課題	以下のHPを見ておいてください。 森林セラピー®ソサエティ・・・ http://www.fo-society.jp/ 日本衛生学会森林医学研究会・・・ http://forest-medicine.com/ International Society of Nature and Forest Medicine(INFOM) ・・・ http://infom.org/
持ち物	10～20ℓ程度のザック、雨具(上下セパレートがお勧め)、防寒具(耳の隠れる帽子、手袋も)、タオル、水筒またはテルモス、またはペットボトル(湯または水)、メモ帳、その他必要と思う物（カメラなど）
備考	森林セラピー体験後、17時～18時は安藤百福センターで一般の方も参加する講演会

◆受講生の感想

森林セラピー体験を通して、季節の移ろいや五感を使って森の中での時間を楽しむことを学んだ。また、森林セラピーが生まれた背景や森林が人々にもたらす医学的現象、近年の自然災害などにも触れ、森は保全すべき対象なのではなく、経済・健康・環境・観光を通して、人々にも森にも利益の享受があるような循環型社会の在り方を学んだ。「森に何かをしに行くのではなく、森に何かをされに行く」という森林セラピーのスタイルは、森に対する畏敬の念も持ちつつ、寄り添い、共にあろうとする姿勢そのものだと感じた。



10月21日（月）～23日（水）

科目	登山技術
講師	山口 章 （やまぐち あきら）
主な役職	安藤百福センター主任教官、山岳雑誌「山と溪谷」元編集長、クライミングインストラクター 他
テーマ	山を安全に登るための基礎養成
概要	第1日目 山の概要、基礎知識の講義（安藤百福センター） 第2日目 黒斑山登山実習および湯の丸キャンプ場でのテント生活の実践 第3日目 烏帽子岳・湯の丸山登山、安藤百福センター帰着。まとめ
事前準備	体調管理。10月の2,400mの山に登るのと、テント泊が必修なので、寒さ対策は十分にすること。また、濡れ対策も確実に行っておくこと。
事前課題	黒斑山の概要を知っておく。
持ち物	2日目昼食、ザック、ハイキングシューズ、防寒具、雨具、手袋、ヘッドランプ、タオル、水（1ℓ）、ゴミ袋、保険証、日焼け止め、虫除け、シュラフ、テント（あれば）、テントマット、他各自必要な物
備考	この時期は風が強いと体感温度がかなり奪われるので、防寒具はしっかりしたものを。雨具もセパレートで、透湿防水素材（ゴアテックスなど）ものを用意。ビニール雨具は不可。 <u>テントを持っている方は事務局まで申し出ること。</u>

◆受講生の感想

とことん山と向き合った3日間。頭、目、鼻、肌、全身で山を感じた。これぞ実践的と言うべきカリキュラムであり、登山を行う上での準備から歩き方まで体験的に学んだ。また今回、野外実習中はソロで生活をつくっていくということで、各自で食事のメニューを決め、準備して作った。加えてテント泊もソロで実施した。これは自身も初体験のことであり、就寝時は五感がいつも以上に研ぎ澄まされていることを感じた。周りに灯り1つない中、仲間と共に火を囲んだことは忘れまい。



10月29日（火）10時～17時

科目	自然と遊ぶ
講師	蓮池 陽子 （はすいけ ようこ）
主な役職	フードディレクター（コーディネーター）、料理家
テーマ	アウトドア・フードクリエイターになる！
概要	アウトドアにおける食（料理の意味） 基本的な料理技術、アウトドアでの料理技術 美味しさの定義を考える アウトドア・フードをクリエイトする（実際に料理を作る）。 ※参加者の状況に合わせ、上記の内容を織り交ぜて進行 ※当日の天候などに合わせ、室内、屋外実習を予定
事前準備	特になし。
事前課題	自分のソウルフードは何か？なぜその食べ物がソウルフードか？ を考えてくる。 可能であれば絵や画像データを持参。 ※参加するご担当者もご用意ください。
持ち物	持ち物：軍手（皮手）、必要に応じてエプロン、タオル 格好：焚き火用の綿の服、防寒着（帽子、マフラーなどを含む）
備考	

◆受講生の感想

アウトドアシーンにおけるフードコーディネートについて。ご飯を食べたときの「おいしい」をつくり出している要素、外で食べるご飯は何でおいしいのか、外に出て木々に囲まれてみんなで考えた。お昼ご飯に講師がコーディネートしたホットサンドをいただき、ご飯をコーディネートするとはどういうことなのかを、おいしさとともに体感した。午後は自分たちがコーディネーターとなり、シーンを設定し、実際に調理をした。限られた時間、そして野外という限られた条件の中で、料理をふるまうというおもてなし。おいしい一日だった。



10月30日（水）10時～17時

科目	野外教育論
講師	星野 敏男 （ほしの としお）
主な役職	明治大学教授、日本野外教育学会理事長 他
テーマ	野外教育論
概要	全体の講義を4回に分け、討議を交え、話し合いながら進める予定です。 第1講：青少年と自然体験活動について（野外教育の意義、現状と課題など） 第2講：自然体験活動を巡る様々な用語について（野外教育の歴史と背景） 第3講：自然体験の効果、指導者の役割について（野外教育とその指導） 第4項：野外教育指導者としてのアウトドア・リスクマネジメントについて
事前準備	特になし
事前課題	私たちがさまざまな自然体験を「教育」や「学び」として提供する場合、このような教育（野外教育や体験学習）にはどのような特質があるのでしょうか？ 普段の学校教育との違いや教育としての体験活動の意義などについて、あなたの考えを2000～3000字程度にまとめて下さい。
持ち物	筆記具以外、特にありません。
備考	特になし

◆受講生の感想

研究で実証されてきた野外教育の教育的効果について学び、漠然と「良い」と感じていたことが確実性のあるものとして整理された。また、指導者として心得ておくべきことについて、ワークシート形式で具体的な活動状況をイメージしたことで、とても現実味があり、指導者を目指すものとしての意識が高まった。

特に指導者のメタスキル（その人らしさ）は、自然体験活動分野ならではの、重要項目であることを改めて感じた。最後に、野外活動でのリスクマネジメントの考え方について、事例をもとに教えていただき、「生か死か」隣合わせの現場で働く者としての責任を考える機会となった。



10月31日（木）13時～16時30分

科目	人と動物の関係論		
講師	斉藤 富士雄 （さいとう ふじお）		
主な役職	前動物愛護センター所長、環境省中央環境審議会動物愛護部会委員 他		
テーマ	望ましい人と動物の関係について学ぶ		
概要	1、動物愛護センター施設見学 2、動物たちとの触れ合い体験 3、アニマルセラピーについてのレクチャー		
事前準備	特になし		
事前課題	特になし		
持ち物	特になし		
備考	小諸市にある動物愛護センター「ハローアニマル」で実施します。		

◆受講生の感想

長野県動物愛護センター・ハローアニマルに伺って、センターの概要の説明と施設内の案内をしていただいた。なかなか立ち入ることのできない施設内部や、手術の様子なども見せていただいた。そして、実際に愛くるしい犬や猫、ヤギたちと触れ合った。学校機関の見学以外にも、動物との接し方のマナー講座や譲渡の機会が多くあり、一般にも広く解放されていて明るいイメージを抱いた。野生生物と出会うことはなかなか難しいが、ペットとの関わりを通して命の尊さ、温かさ、癒しを知るきっかけにして、自然保護や環境問題へつなげていくこともできるという気付きが得られた。



11月1日（金）10時～17時

科目	環境政策論
講師	堀上 勝 （ほりかみ まさる）
主な役職	環境省自然環境局自然環境計画課生物多様性施策推進室長 他
テーマ	日本の環境政策について、特に自然環境保全政策を中心に学ぶ
概要	日本の環境政策の概要をお話しした上で、特に自然環境保全に関する法制度・各種施策について、下記の分野ごとに説明します。 ・生物多様性の保全 ・野生生物保護（外来生物対策含む） ・自然公園の保護と利用 ・自然とのふれあい ・自然再生
事前準備	環境省ホームページ（ http://www.env.go.jp/ ）で、環境政策の概要をあらかじめ確認しておいていただくといいと思います。
事前課題	特になし
持ち物	筆記用具など
備考	特になし

◆受講生の感想

環境省が取り組んでいる事柄や、現在抱えている課題を教えていただいた。また、その課題に対して受講生なりの解決案の思案や、開発途中のロングトレイルの運営方法を考えた。政策や施設の運営には、行政や地域住民の合意を得る必要があり、それには多くの課題点が生まれる。それを解決することは容易でないことを、ワークを通じて実感した。同時に、何度も議論、実践し、改善していかなければ納得のいくような運営、政策にはならないとも感じた。



11月4日（月）10時～15時

科目	NPO/NGO論
講師	新田 英理子 （にった えりこ）
主な役職	日本NPOセンター統括部門長 他
テーマ	継続的に自立的に活動を推進するための、NPO/NGOのマネジメントと法制度について学ぶ
概要	NPO/NGOと一言でいっても、目的や活動内容の違いによって大きく運営方法も違います。ここでは、NPO/NGOのマネジメントやガバナンスのエッセンスを学んでいただき、皆さんの自然体験活動にどう生かされるのかについて議論したいと思います。NPO/NGOを取り巻く日本の法制度や税制も大きく変化していますので、制度をしっかりと押さえた上で、参加される皆様からの事前リクエストにお応えして進めます。
事前準備	特になし
事前課題	NPO/NGOに関する特に学びたい項目があれば、10月中旬までに事務局へお知らせください。それを反映した内容にしたいと思います。
持ち物	筆記用具とメモ帳
備考	別途テキスト代500円がかかります。

◆受講生の感想

大体のイメージは分かるけれど、今まで自分の言葉では説明できなかったNPO・NGOについて、言葉の説明から運営資金の調達、そこを取り巻く日本の法制度などを教えていただいた。これから所属する団体を選んでいく上で、活動内容だけではなく、経営的な目線からの見方も知ることができた。また、NPO団体が掲げる価値実現という組織理念や行動原理について、OJT研修先と重ねて考えることができ、理解がつながった点や新たな発見があった。今後、自分の進む道について、自分の言葉で自信を持って答えることができるだろう。



11月5日（火）10時～17時

科目	地域学概論
講師	吉兼 秀夫 （よしかね ひでお）
主な役職	阪南大学国際観光学部国際観光学科教授 他
テーマ	地域観光の考え方とエコミュージアムの内容を知る
概要	近年の観光動向を『観光における「図と地」論』として理解し、「地」の振興（快適で楽しい地域環境づくり）のための手法の一つとして、エコミュージアムの事例をもとに解説します。
事前準備	出身地や愛着のある地域の宝を再認識しておく
事前課題	地域の宝を掘り起こして地域づくりをしようという活動が増えています。地域の宝とは一体何でしょう。あなたの出身地、または居住地から地域の宝を5つ以上発見して、それら一つ一つについて地域住民と共有しながら、地域活性化につなげていく方法を考えてください。負の宝でも結構です。A4版にて1600字以内にまとめてください。
持ち物	特になし
備考	特になし

◆受講生の感想

従来、観光とは名所を見に行くものだったが、今は地域文化やそこにいる人も含め、地域全体を味わう観光が重要であることを学んだ。それは、地域の人も暮らしの価値を知り、訪れる人とのコミュニケーションが生まれることで、再度訪れたくなり、地域活性化につながる観光の考え方である。地域が元気になった成功事例として、アートを上手く利用したものがあり、様々な切り口があることに驚き、感心した。多くの事例を先生の解説付きで見ると、コーディネーターとして働く上で、多くの人とシェアし、住民や行政、専門家やお客さんの目線も含め、共同作業で行うことが重要であることを実感した。



11月6日（水）10時～17時

科目	社会構造論
講師	萩原 なつ子
主な役職	立教大学社会学部教授、日本NPOセンター専務理事 他
テーマ	人権、環境に配慮した社会の構築に向けて、市民がどのような関わりを持つのかについて理解する
概要	1. 被差別者の生活と環境 2. 環境に配慮した経済システム 3. 環境問題と経済、政策との関わりについて 4. 基本的人権としての環境権の保護の理念 5. 環境破壊がどのように社会的問題と関わっているか 6. 環境問題をフェミニズム/ジェンダーの視点で分析 7. 第三世界と第一世界との関係
事前準備	特になし
事前課題	特になし
持ち物	特になし
備考	特になし

◆受講生の感想

参加者の干支見から子育てで悩む母親たちの話から始まり、高度経済成長で国や行政が強いてきた不可視化・規格化の概念から、男女共同参画社会基本法などに見られる多様化への変換、トヨタ財団が行っていた「身近な環境をみつめよう」という市民研究コンクールなどの多岐にわたるテーマに触れた。その事例を通して、市民運動と市民活動の違い、ただのコンシューマーではなくグリーン/エシカルコンシューマーとなり、一人一人が小さな意思決定を繰り返していくことで持続可能な社会を作っていくことなど、暮らしやすい社会の在り方について学ぶことができた。そして自然学校指導者として、様々な背景を持つ人々とゆるやかなネットワークを築き、何かあった時にすぐネットワーク（knot working）して活動できるようにすることを、自分自身も体現していきたいと思う。



11月13日（水）～16日（土）

自然学校運営の基礎（実地研修）	
講師	国際自然大学校職員
テーマ	自然学校のプロ指導者として組織運営の基礎を学ぶ
概要	自然学校を取り巻く状況、自然学校の役割、予算管理、リスク管理、報告書作成などの自然学校組織運営に関する基礎を学び、プロ指導者としての自分の方向性、仕事、組織についてのイメージと、その実現のための具体的な始動を考える。また、PA（プロジェクトアドベンチャー）を行い、体験学習法に基づく人間関係トレーニングについて理解する。
持ち物	宿泊用品、防寒着、軍手または皮手袋、雨具（上下セパレート）、野外で活動できる服装、電卓、筆記用具、洗面用具、そのほか各自必要なもの
備考	国際自然大学校日野春校にて3泊4日の実地研修。宿泊費4,200円、食費は受講生による自炊のため実費精算。

◆受講者の感想

自然学校を運営していくにあたって、「地域とのつながり」を重要視していくことの必要性を最も強く感じた。そこには、自然学校が地域へ協力していくのではなく、自然学校が地域に協力させていただいているという考え方があった。このような基本姿勢を持ち合わせながら運営していくことで、地域住民の理解が得られ、そこからお互いに必要な関係を作っていく。また、自分が地域にできることを常に考えておくことが、日頃の地域に対する態度に表れてくると感じた。



11月19日（火）～22日（金）

生き方暮らし方（実地研修）	
講師	ホールアース自然学校職員
テーマ	ホールアース自然学校について知り、中心的な活動（地域密着、農作業等）を体験することで、社会の中での自然学校の可能性を探り、自らの進路について考える
概要	1. ホールアース自然学校の紹介 2. 実習「ホールアース農場」 3. 実習&講義「命を食べる」 4. 実習「里山散策&里山整備」 5. 講義「里山の魅力や課題」 6. 実習「プログラム体験～樹海洞窟探検～」 7. 講義「ホールアース自然学校論」 8. ワークショップ「生き方・暮らし方」
持ち物	レインウェア（上下セパレート）、水筒、筆記用具、保険証、デイバック、暖かい服装、そのほか3泊4日に必要なもの。
備考	ホールアース自然学校にて3泊4日の実地研修。食費宿泊費14,400円。

◆受講生の感想

自然学校での働き方、自然学校との関わり方、そして自然学校と自分の生き方について、ホールアース自然学校で働いてる方の人生に触れながら、自分の人生について考える4日間だった。自分の中のつながり、人とのつながり、社会とのつながりを見つめて、今の自分の位置を知ることができた。また、4日間ホールアースにとけこむことで、自分のOJT以外の自然学校が持つカラーに触れ、そのカラーを作り出しているスタッフの方々にも触れることができた。非常に濃くて、なにより楽しい4日間だった。



11月26日（火）～27日（水）

科目	メディックファーストエイド（2日間）
講師	長谷部 雅一 （はせべ まさかず）
主な役職	Be-Nature School スタッフ、ネイチャーインタープリター 他
テーマ	小児、乳児、成人のためのCPR（心肺蘇生法）、AED（自動体外式除細動）とそのほかの応急手当て（ファーストエイド）を体得する
概要	別紙MFA資料参照
事前準備	特になし
事前課題	特になし
持ち物	筆記用具
備考	特になし

◆受講生の感想

テキストとビデオと解説、そして実践を繰り返し、「知ること」と「できること」は違うということを実感した。特に野外でシュミレーションを行った際は、事故や怪我は複合的な内容であることがほとんどであり、何を優先するべきか分からなくなることを体感。どんな訓練をしても、いざという時は冷静さを失う可能性が高いことを想定するべきことを学んだ実習であった。また、これから命を預かる仕事につくことをあらためて実感し、アレルギー情報など、知らないことに恐怖を感じた。技能以外に心構えも学び、実感できる2日間だった。



11月28日（木）10時～17時

科目	インタープリテーション①概論		
講師	川嶋 直 （かわしま ただし）		
主な役職	（公財）キープ協会環境教育事業部シニアアドバイザー、（公社）日本環境教育フォーラム理事 他		
テーマ	・伝えることの工夫を知る ・自分を知る ・コミュニケーションを知る		
概要	・講義と実習を通して「伝えることの工夫」「自分自身」「コミュニケーション」について学びます		
事前準備	特になし		
事前課題	特になし		
持ち物	筆記用具、野外で活動できる服装		
備考	特になし		

◆受講生の感想

インタープリテーションの極意として、自分の「好き」よりも、みんなの「知りたい」や「見たい」を紹介することだ、と教えていただいた。野外に出て、葉っぱじゃんけんなどのいくつかアクティビティも体験した。半年間のOJT研修でも同じアクティビティを行っていたが、講師が参加者に寄り添いながら楽しい雰囲気になっていたところが流石だと感じた。また、KP法を使って参加者がそれぞれの思いを表現することにも挑戦した。話す側も聞く側も体験して、改めて相手に寄り添うことの大切さを感じた。



11月29日（金）10時～17時

科目	インタープリテーション②実践		
講師	安西 英明 （あんざい ひであき）		
主な役職	（公財）日本野鳥の会主席研究員、（公社）日本環境教育フォーラム理事 他		
テーマ	自然を楽しむ方と伝え方、その意義		
概要	哲学と知識の基礎を講義するとともに、野外体験後にインタープリテーションの企画を作成して発表、評価しあう。		
事前準備	特になし		
事前課題	特になし		
持ち物	参加者自身が持っている範囲で、双眼鏡・虫眼鏡などの観察用具、昆虫採集などの道具、自然や生物系の図鑑		
備考	特になし		

◆受講生の感想

講師が自身の持てる知識を惜しみなく伝えてくださったことで、終始前のめりに受講できた。自身の好きなことを参加者と共に行うことには、自然と「好き」や、「面白い！」という思いが溢れ出てきており、参加者はそれに魅かれてしまう。そのようなことを講師と共にフィールドワークを行うことで強く感じた。生き生きと参加者と向き合う、そこには自然と感動や驚き、充足感を感じられる健やかな場が生まれるのだと実感した。



12月2日（月）10時～17時

科目	プログラムデザイン①講義
講師	山田 俊行（やまだ としゆき）
主な役職	トヨタ白川郷自然学校校長補佐・事務局長、NPO法人白川郷自然共生フォーラム理事 他
テーマ	プログラムの構造を学ぶ
概要	1. プログラムとは何か 2. プログラムの構造を考える 3. 良いプログラムと悪いプログラムを分けるものは何か 4. 教育プログラムとレジャープログラムの違い 5. プログラム実施までのステップ 6. プログラムの評価① 7. プログラムの料金設定
事前準備	特になし
事前課題	過去に自分で参加したことのあるプログラムの概要が分かる資料（募集チラシや当日の資料、個人的なメモ）などがある人は持参してください。
持ち物	特になし
備考	場合によっては屋外で研修を行います。

◆受講生の感想

プログラムとは何か？自然学校的目線だけでなく、プログラムという言葉がもつ幅広い意味を確認するところから始まった。いままで自分が受けたプログラムを思い出し、そのプログラムにはどんなねらいがあったのか、どんな構成だったかを分析することで、プログラムデザインの要素を理解することができた。実際に行われたプログラムと、それができるまでの過程を教わり、翌日の実践へのイメージを作成した。



12月3日（火）10時～17時

科目	プログラムデザイン②実技		
講師	山田 俊行（やまだ としゆき）		
主な役職	トヨタ白川郷自然学校校長補佐・事務局長、NPO法人白川郷自然共生フォーラム理事 他		
テーマ	プログラムの作り方を学ぶ		
概要	1. 15分プログラムを作る 2. 15分プログラムの体験とフィードバック 3. プログラムの評価② 4. ネタの探し方 5. 小道具について 6. プログラムの質を高めるものは何か 7. まとめ		
事前準備	特になし		
事前課題	特になし		
持ち物	特になし		
備考	場合によっては屋外で研修を行います		

◆受講生の感想

前日の講義をふまえ、一人一つずつ自分のプログラムをデザインする実習を行った。自分の思いやねらいと社会的役割をつなげてプログラムという形に起こす、ということのおもしろさと難しさを実感した。自分でプログラムを作ってみることで、いままで受けてきたプログラムがどのようなものであったかを細かく分析できるようになり、そこから自分のデザイン力を上げることができると感じた。



12月4日（水）10時～17時

科目	自然学校の可能性
講師	辻 英之（つじ ひでゆき）
主な役職	NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事 他
テーマ	人口1800人のへき地山村における自然学校の事例に学ぶ
概要	人口1,800人の限界自治体ともいふべき小さな僻地山村、長野県泰阜村。その村に、僻地山村に根ざした山村留学や自然体験教育キャンプなどを進めることを通して、「何もない村」における「教育」を産業化させることに成功したNPOがある。 本講義では、27年にわたって展開される教育NPOの事例をもとに、自然学校の本質的な役割と可能性について、さらには社会変革に必要な小さくとも強い意志について議論を深める。
事前準備	『奇跡のむらの物語 1000人の子どもが限界集落を救う！』（農文協、辻英之編著、1785円）を読んでおくことが望ましい。
事前課題	特になし
持ち物	できれば上記『奇跡のむらの物語』
備考	楽しくディスカッションしましょう。

◆受講生の感想

NPO法人グリーンウッドの事例を成り立ちから実態まで存分に教えていただき、「教育」の力の凄さを感じた。また、自分自身の夢を描きだし、具体性を出したワークでは、ぼんやりとしていた思いが現実味を帯び、「やりたい」と強く思うようになった。思いを言葉にして人に伝えることは、プログラムの社会的ニーズも客観的にフィードバックされるため、やりたいことを実現していく上でとても大切であることを学んだ。財源や条件ばかりにとらわれず、このようなワークを行い続けることで、持続可能なプログラムの実現や、持続可能な自然学校の運営ができるのではないかと思う講義であった。



12月5日（木）10時～15時

科目	アウトドア・マーケティング論
講師	中村 達 （なかむら とおる）
主な役職	アウトドア・ジャーナリスト、（株）ネーチャーインテリジェンス代表取締役、安藤百副センター副センター長 他
テーマ	アウトドア・マーケティング論
概要	アウトドア・マーケティング概論 アウトドア・ライフデザイン論 1 アウトドアズとCSR 2 ロングトレイルと地域観光活性化 アウトドア産業論 アウトドア史 アウトドア・マーケットの課題
事前準備	特になし
事前課題	特になし
持ち物	特になし
備考	特になし

◆受講生の感想

アメリカを始めとする海外のアウトドア・マーケットの規模感や状況と、日本のそれとの差や相違点について触れ、その違いは、そもそものライフスタイルの違いによるもので、日本でアウトドアの産業規模を大きくしていくには教育や普及が必要だという現状を学んだ。また、私たちが志す自然学校指導者の立場としても、自分たちの生活の質を保っていけるような業界にしてゆく気概や意識も必要だと痛感した。



12月21日（土）10時～17時

科目	修了講習
講師	若林 千賀子（わかばやし ちかこ）
主な役職	NPO法人自然体験活動推進協議会理事、若林環境教育事務所代表 他
テーマ	プロ養成講座全体のまとめとふりかえり、今後の進路についての考察を深める
概要	OJT（半年）、座学（39日）での体験と学習について、テキストやノートをもとにふりかえり、自らが何を学び、体得したのかを洗い出す。今後、プロ指導者になるために必要な課題やスキルについて考察する。今後のアクションプランを作成する。
事前準備	OJTでのフィードバック、座学中に使用したテキスト、ノート
事前課題	特になし
持ち物	筆記具、OJTでのフィードバック、座学中に使用したテキスト、ノート
備考	特になし

◆受講者の感想

9ヶ月に渡る講座を振り返った。6ヶ月のOJT研修、3カ月の座学研修で何を学び、感じ、体得したかを洗い出し、今後のアクションプランを各自でまとめた。受講前に思い描いていた漠然とした「なりたい指導者像」が明確になって現れた。それぞれが、この講座で培った自分の武器と、見えてきた課題とともにプロの自然学校指導者としての一歩目を踏み出すことを決意した。



CONE トレーナー養成会・認定会

第1回 2013年6月18日～19日 / 第2回 2013年11月3日～4日

今年度は、CONE トレーナー養成会を6月と11月の2回、認定会を2月に2回開催した(認定会は例年1回のみ)。

トレーナー養成会

第1回養成会(6月18～19日)は6名、第2回養成会(11月3～4日)は13名の参加者を得て、トレーナー認定会までに必要な資質とスキルを理解するための研修を1泊2日で行った。講師は2回とも、森美文氏(森環境教育事務所)、若林千賀子氏(若林環境教育事務所)、大浦秀樹氏(埼玉県キャンプ協会)に依頼した。

研修は、定められたカリキュラムに従って実施された。まず、開講式、アイスブレイクを行い、その後、本養成会の趣旨やCONEの指導者制度、関連情報の共有などを行った。今年度より試行を始めた自然体験活動指導者(NEAL)認定制度についても説明し、それに伴って新設された「青少年教育における体験活動」「学校教育における体験活動」に関しても、講師として留意すべき点を中心に講義を行った。

また、安全管理については事故事例や保険などを通じた講義を行い、事故を未然に防ぐにはどのようなことに気をつける必要があるかを学んだ。そして、小諸周辺の自然と文化に触れる実地研修やプレゼンテーション実習、事業評価についての講義、指導者養成事業のプログラム作りの実習など、トレーナーとして必要な知識及びスキルを修得できるよう配慮しながら行うとともに、最後に認定会までに修得すべきこと(事前課題を含む)などを説明し、研修を締めくくった。



今年度より、養成会受講時に養成団体の推薦状を求めることにしたため、認定会の受講要件を満たし得る方の参加が期待できるようになったが、昨年度と比較すると参加者は減少した。また、第2回の日程では同年度内に認定会の受講要件をクリアすることが難しいとの指摘があったので、来年度以降はもう少し早めの開催を行えるよう検討したい。

トレーナー認定会

トレーナー認定会は、参加者への便宜を考えて、今回は2月8～9日及び10～11日に開催し、15名の参加者を得た（8～9日が6名、10～11日が9名）。

講師、チューターは、8～9日が森美文氏、加々美貴代氏（やまぼうし自然学校）、事務局長の太田原康志、10～11日は森氏と太田原に加えて、若林千賀子氏、宍戸信一氏（都市農山漁村交流活性化機構）に依頼した。審査にあたっては、昨年同様、事前課題およびグループワークで40点、試験で30点、面接で30点とし、100点満点中70点以上で合格として、それぞれ評価項目を設けて臨んだ。

事前課題は4問設けられ、その習熟度をグループワークで確認した（グループは偏りが出ないように分け、各グループにチューターが入ってその理解度を採点した）。例えばCONEが定めた「自然体験活動憲章」の5項目について、伝えたいこと、思い、考えなどを自分の言葉で説明し、参加者同士で質疑応答を行った。また指導者養成カリキュラムについて、実経験をもとに活動内容や課題、成果などを各自説明し、実施における問題点や対策などについて活発に議論した。

2日目は、これまでの内容を踏まえた30分の筆記試験を実施し、最後に各15分程度の個人面接を行って、トレーナーにふさわしい能力や経験を身に付けているかを確認した。そして、終了後に基準に従って厳正に採点を行い、可否を判定した（最終的には3月のCONE理事会で承認される）。



今年度より、認定会の申込時にはトレーナーとして習得すべき125時間のOJTを履修表に具体的に記載するよう定めたため、事前提出に必要な書類が大幅に増え、結果として想定された参加者より少なくなってしまった。また審査をより厳正に行うことで、合格者は15名中8名に留まる見込みだが、その分トレーナーの質の担保はできたと言える。

来年度以降、新しい指導者制度が本格的に動き出すことになるが、より公的な資格制度となる以上、上級指導者としてのトレーナーの質の向上は不可欠である。質を落とさずに意欲ある参加者が増えるよう、今後もトレーナー制度及び指導者制度の魅力を高めていきたい。

自然ガイド・ステージⅠ 登山ガイド・ステージⅡ 安全管理技術研修

2013 年 6 月 25～28 日 / 2013 年 12 月 17～20 日

6 月 25～28 日

1. 実施報告と結果

参加者	18 名（うち 5 名はファーストエイド講習会のみ受講）
参加費	42,000 円 公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団助成事業 （助成金 30 万円）
担当講師	計 6 名 飯田肇先生、上野真一郎、長内覚、菅野由起子、平木順、 （検定員候補生）杉本晴美
結果	全員合格

2. 講義内容

- | | |
|-----------------------------|-------|
| ① ファーストエイド | 平木 順 |
| 内容 JMGA ファーストエイド講習全般 | |
| ② 山の地形と気象 | 飯田 肇 |
| 内容 自然災害の実例とリスクについて | |
| ③ ガイドの基礎的知識、地形図と読図 | 上野真一郎 |
| 内容 自然解説技術、安全管理の必要性、地図の読み方など | |
| ④ スポーツと運動生理について | 長内 覚 |
| 内容 ガイドに必要な登山の運動生理学 | |
| ⑤ 事例検証とデータ分析 | 上野真一郎 |
| 内容 実例での対処法やリスクアセスメントなど | |

3. 実技内容

- ⑥ 危険を回避する実践テクニック
- ☐ 装備の説明
 - ☐ パッキング
 - ☐ 安全なガイディング方法
 - ☐ 基本ロープワーク（結び方・使用方法・必要性）
 - ☐ フイックスロープ（固定・通行・アシスト・安全確保・回収）
 - ☐ 出発前の注意事項

- ☐ 簡単なショートロープの方法
- ⑦ フィールド実習（霧が峰 観音沢周辺）
 - ☐ クライアントの観察
 - ☐ クライアントを疲れさせない歩き方
 - ☐ ストックの利用法について
 - ☐ 休憩の取り方
 - ☐ 危険の認識と、歩行時のガイドの位置すべき場所について
 - ☐ リスクが高い場所でのガイドの歩き方
 - ☐ 危急時の対応について
 - ☐ クライアントのケア
 - ☐ フイックスロープの実践（固定・通行・アシスト・安全確保・回収）
 - ☐ ショートロープのデモと、簡単なショートロープの体験
 - ☐ 自然解説技術のデモ（自然、環境、地形、歴史、文学など）
 - ☐ 読図（地図にない道を通り、地形を読んで、地図に落とし込む）
 - ☐ そのほか必要なこと
- ⑧ 自然ガイドに役立つフィールドワーク
 - ☐ ザック搬送の方法
 - ☐ ザック担架の作成と利用方法
 - ☐ ツェルトの張り方
 - ☐ そのほか必要な事

上記実技内容を、それぞれ講師が担当し 1～3 班に分かれ実施した。実施場所は、2 日目は安藤百福センター講習室、3 日目は霧が峰観音沢周辺～八島湿原、4 日目は安藤百福センター駐車場及びセンター内里山で実施

4. 実技講師担当者レポート

報告者 平木 順

①ファーストエイド講習（机上講習と実技講習） 6月25～26日（昼）

感想：4日間通しで受講する自然ガイドⅠと登山ガイドⅡの受講生に加え、本講習のみを受講する旅行業の特別受講の方がいたが、全員ファーストエイドに対する関心が高く、熱心な受講態度であった。

理解度・習得度：数名を除き、日赤等の救急法講習会を受講済みであったので、さらに情報をプラスした今回の講習は十分に理解したと感じられた。一方、本講習会がFA講習会初受講となる数名の者はレベルの違いを感じ、もう少し時間を取った方が良かったように思われた。心肺停止時などチームとしての救命処置が必要な場合、ガイドとしてクライアントに指導しながら協力を仰ぎ、手当を進めていく課題を与えたが、多くの者には新鮮でメリットがあった様子だった。

課題：訓練用人形に対して、訓練用 AED が 1 台で、練習の効率が悪かった。

改善：レンタルでもよいので、人形の数分はやはり訓練用 AED が欲しいと思う。また今回、新品の訓練用 AED を送ってもらったが、初期設定等が一切されておらず、電池も入っていなかった（現地購入した）ので、大変設定に手間取った。

②実技講習 担当「自然ガイドが知っているのと得をするロープの使い方」26 日午後

感想：今回も買ってきたそのままのロープやハーネスを持ってきた者が何人もいた。

初めてロープに触る者も多く、レベル差を非常に感じた。自然ガイドと登山ガイドの講習を一緒にやること自体、無理があると感じた。

理解度・習得度：登山ガイドでもロープのザックへの収納方法、使い方など知らないものも多く、やっと結び方を憶えた程度の者がほとんどだった。

課題：一方クライミングをやっている者はロープの結び方などが簡単すぎて、より高い内容を講習することが時間的に難しかった。

改善：開催案内に、基本的な結び方 5 種類を図解で明記し、当日までにそれが出来るようにしておく旨案内すると良いと思う。実際は当日までにマスターできない参加者もいると思うが、現状よりそういう方は圧倒的に少数になるはずなので、指導がやりやすいと思う。

今後の展望：自然ガイドと登山ガイドのロープの講習はレベル差がありすぎるので、少なくともそれらを分けて、より効果の高い講習をやることを提案したい。

③実技講習 「危険を回避する簡単な方法 1」

感想：最新の教本には「出発準備」の項目がなく、すなわちスタート時の安全管理の項目がないのと同様であると感じた。それゆえに出発準備の項目を指導し、3 班にわけ、何回も練習させた。これらは講習生にとって有益であったように感じた。雨天のため、本来外で日中行う予定であったロープの固定を、ロープワーク初心者講習に必要であったため、室内で行なった。室内で行ったゆえに、固定ロープで必要なロープテンションを十分に掛けることができず、不十分な講習になったと感じた。また、3 日目のフィールド実習のどこかで、初歩のショートロープの実習を行う予定であったので、ロープのさばき方と持ち方、クライアントへのつけ方まで指導した。これについては講習が 2 日間に分断されたのが残念だった。

理解度・習得度：ロープワーク初心者の者数人は、やはり結びに時間がかかりすぎ、使えるレベルには程遠い。また結べる者でも多くはしっかり締まった結びになっておらず、基本的な安全管理技術としてのロープワークに対する考え方をしっかり教える必要がある。

課題：更新研修等では雨天の野外でもこの講習は実施できるが、初めての者対応ではやはり雨天の野外は効果的な講習を行うことが困難。（今回はそのためカリキュラムの順序を変え、室内で行なった）。最初からこれを室内でも行えるように準

備しておく必要性がある。

改善：会場側との事前の打合せを十分に行う。

今後の展望：前項であげたことであるが、自然ガイドと登山ガイドを分けた講習が必要。登山ガイドにはより実戦的な固定方法を講習することが必要である。

④実技講習 担当「フィールド実習」27日

感想：移動時間は往復2時間強掛かるが、登山ガイドにとっては非常に良いフィールドだと感じた。2万5千分の1の地図に記されていない道があり、それをたどりながら地図に落とさせる訓練は、地図読みではとても有効だと感じた。また滑りやすい道でのガイディングの実演は、特に自然ガイドにとって、行動中のガイドの安全管理とはどういうものなのかを実際に見せることができ、彼らにとっても非常に有益だった様子だった。一方、本来受験者に課せられる受験のための経験値を満たしていないものが数人おり、レベル差を感じた実習だった。

理解度・習得度：実際のガイドがどのようなガイディングを行なっているのかを実地で見せることができたのは良かったが、受講生自身にルートガイディングを行なわせる実習はほとんどできず、この部分で、もしルートガイディング検定を行なったとしたら、合格するものは少数であろうと感じた。

課題：検定チェックシートに基づいた研修内容を、実際に受講生が行えるようにすべきである。

改善：原因の一つは前項までと同じく、自然ガイドと登山ガイドを一緒に講習していたことであるが、同じフィールドで行わず、それぞれのフィールドで講習を行うことが必要。

今後の展望：よく整備された里地・里山で自然ガイドを行う者が、自然ガイドⅠという定義であるので、それに沿った（登山ガイドとは違うカリキュラムの）講習を行いたい。自然ガイドには自然ガイドの安全管理があるはずである。

⑤実技講習 「危険を回避する簡単な方法2」

感想：まったく初めてという者がほとんどだった。また、ザック搬送に適さないザックを持参してきている者も何人かいた。ツエルトに関しては装備表から漏れており、持ってきていない者が多かった。またツエルトに入ること自体が初めての者（多くは自然ガイド）も何人も居た。この講習を受けないままガイドになると、ツエルトも知らないガイドが生まれてしまうところだった。

理解度・習得度：その時にやり方は憶えたが、1年後やれる者が果たして何人いるのか疑問。何回も講習を行なう必要性を感じた。

課題：ザック搬送に適するザックやツエルトの準備をさせること。

改善：実技検定時の持ち物リストと同じものを、講習参加者に送り、持参させることが必要。実際にガイドを行う際に使うものを検定要項には記載してあるはずなので、講習によって分ける必要性がない。

今後の展望：講習修了後にガイド資格を取得しても、ガイド組織ごとに基本的な研修を重ねる必要性を特に感じた。また、全般的に感じたことであるが、毎回の講習会の経験が次の講習会に十分踏襲されていないように感じた。例えば安藤百福センターで行なう講習会の担当者は誰々、団体加盟の担当者は誰々、他は誰々などで、情報はすべてその者を通して行うようなシステムにすると、受講生に送られる要項のチェックも確実に出来るように感じる。

報告者 上野 真一郎

全体的レポート

感想：参加者が少なく残念でした。その分、密度の濃い研修となった事と思います。

ほとんどの参加者が、真摯に取り組んでいたように感じます。特に若い方々は、やる気も能力も高く期待できます。通訳士の方お二人も、自然体験や山歩きの体験がないのが問題ですが、理解度が高く、海外からの観光客に大きくアピールしていただきたいと思います。安藤百福センター事務局長が空席ですので、ぜひ本協会で管理をできたらと思います。ここを拠点に、常設のガイド研修・育成ができれば理想的なものになります。

理解度・習得度：SIA、通訳士、CONE 関係と異なる組織、団体の参加者でレベルにかなり差があります。従って、習得レベルにも差が生じます。

課題：次回以降は、対象者のレベルをなるべく合わせて、より効果的に実習を行いたいと思います。特に未経験者には、モデルプランに参加させるような形の方が、良いと思われます。

①机上講習 担当「ガイドの基本/自然解説」「安全管理/リスクアセスメント」

感想：参加者レベルに、大きく差があり、講習内容がどうしても散漫になりがちで、的が絞れません。

課題：実技講習同様、ある程度のレベルの統一が必要と思われます。

今後の展望：この研修認定制度は、既にガイド行為を行っている、あるいはそれに準じた行為を行っている方を対象にしている事が基本ですが、それでもバラつきが大きくあります。今後は、可能であれば、回数を増やしレベル毎のカリキュラムを用意した方が、より効果的に行えると思います。あるいは、かねてよりの課題である常設の自然ガイド養成講座のようなものを開設しても良いと思います。今後の課題に関して、次回、検定員研修会において検討を開始したいと思います。

報告者 長内 覚

①登山の運動生理学および実技について

感想：全員「まじめでモチベーション」があった

理解度・習得度：理論については理解度・習得度については少人数のためこれまでに

ないぐらい良い

課題：いかに、実践的な経験に活かしていくか

改善：参加者において、レベル・経験・仕事の内容（通訳士・スキー指導者）の差があるため、講師としてはどの基準や視点で指導するか悩む事が多い。

今後の展望：受験者に対し、前もって実技や理論が予習出来るシステムを作る必要性がある。また、資格所得後スキル UP やフォローUP するためにシステムが必要である。試験・研修委員会のメンバーを中心に「都内で日帰り参加出来るセミナーを開催すべき」である。12月～4月で10回くらい開催できればよい。自信がない人・ガイドを目指す人・資格を取得したが経験が少ない人を救うプログラムである。参加者はそれを望んでいる方が多く、また、経済的な余裕がある人が多い。

報告者 杉本 晴美

参加者の感想 今回の研修に参加した成果

①現在ガイドをしている方の色々な実情や様子が聞けたこと

自分が使うためでなく、お客に使ってもらう様々なロープワークを学べたこと

野外を想定したファーストエイド技術を学べたこと

実際のフィールドを1日かけて、体験しながらガイドのポイントを学べたこと

自然ガイドとして働くにあたってのリスクマネジメントの大切さを認識できたこと

②実習で初めてのフィールドに行き、ロープワークなどを実際にできたこと

自分の今までの装備の甘さにあらためて気がつけたこと

同じ志を持つ方々にお会いでき、話ができたこと

上野さんを筆頭にプロのガイドの方から直接研修を受ける事ができた事

本来であればもっと長時間研修を受ける必要があるのですが、4日間という短期間の設定はこの時期であればありがたかった

③ファーストエイドが学べた

ロープワークが学べた

装備に関する知識が増えた

安全と楽しさを提供するというガイドの役割が分かった

自然を楽しむ喜びをわかち合いたい意欲がわいた

④ファーストエイドについて実践的訓練が受けられたこと

自然ガイドが目指すべき事や知識を体系的に学べたこと

ロープワークやザック搬送など何度も練習して学べたこと

野外研修で、特に自分が補助されるお客さんの立場になった時、どういう状況で、どういうサポートが受けられ、それに対してどういう安心が得られたなどのお客さん目線の体験ができたこと

野外研修のデモンストレーションガイディングを聞いて、実際にどういうガイディングが効果的で、どのポイントでどういう情報を提供するかなどのスキルを学ぶことができて、非常にためになったこと

⑤ガイドの職能についてしっかり認識できた

講師のプロの仕事をフィールドで体験できたことはかけがいのない経験となった
全国から集まった参加者の方々と共に学び交流できたこと

講習を通して、また交流会でのお話で自分の進む道が少し見えてきたこと

霧ヶ峰の素晴らしい自然を体験できたこと

この機会を与えてくださったすべてに感謝です。ありがとうございました。

⑥今まで知らなかった技術や知識を習得できた

自分が目指すガイドとして不足している部分を知ることができた

スキルアップできる機会がどのような場であるかなど、情報を集めることができた

プロフェッショナルな先生方に教えていただきスキルアップできた

もっと勉強したい、ガイドとしてやりたいという気持ちが高まった

資格が取りたくて参加しましたが、研修に参加させていただいたことに大きな意味があったと感じています。少しずつ勉強して高めていきたいと思います

4日間ありがとうございました。

⑦ガイドとしての必要な知識を得られた

危険箇所の通過方法を実地で体験できた

標高が高くなくても自然を楽しめる事を実感した

ガイドとしての装備について認識を新たにした

将来仲間となる人たちに知り合えた

⑧ガイド業務の基本となる部分を学べた

ガイド業務に対する情勢や現状を知ることができた

全てにおいて、日々勉強であると強く感じた

目標に向う心構えができた

新たに同じ目標を目指す仲間に出会えた事

現在、ガイド業を行っていますが、今回の研修を通じ、能力の低さ、知識不足、明日からのガイド業務が怖いです。少しずつですが、日々頑張っていきたいと思います

⑨今まで以上にガイド業の魅力に気付けたこと

講師の方々のプロ意識にふれられたこと

知らない土地、自然を体感できたこと

自分の不足分をはっきり自覚できたこと

素晴らしい仲間ができたこと

⑩先生方とお話しすることができたこと

参加者の皆様と知り合え、情報をたくさん交換できたこと
 自然ガイド、エコツーリズムについての話が興味深かったです
 霧ヶ峰の観音沢コースに連れて行っていただけたこと、いつか案内できたらいいな
 と思いました
 自分の今後やるべき事、やれる事を見出す材料をいただけたと思います

⑪山を歩きながらの研修

ロープワーク 安全管理について マーケティング 気象について

⑫ロープの重要性を改めて感じた

ガイドが顧客をいかに楽しく案内するか改めて感じた

マーケティングの重要性

いかに安全にガイドするかを様々な視点で学べた

今まで経験しないことを実技および実演で学べた

⑬同じ考えを持った仲間ができたこと

冬のスキーだけでなく、夏に山に入り仕事ができる気になったこと

1つのロープで色々なことができることが理解できたこと

スキーの技術だけでなく、それを生かして仕事ができると思ったこと

ガイドのプロとしての心構えが良く理解できたこと

5.筆記試験 評価表

	得 点	年 齢
1	96	39
2	96	51
3	94	38
4	92	63
5	88	37
6	88	27
7	88	52
8	86	48
9	84	51
10	82	35
11	80	39
12	78	34
13	74	62

最高点(96) 最低点(74) 平均点(86.6) 合格率 100% 平均年齢 44 歳

平成 25 年 6 月 25～28 日 (ファーストエイド講習のみは 25～26 日昼)

日付	時間	内容	担当
1 日目 6/25 (火)	9 : 30～ 9 : 50	開講式・オリエンテーション	平木/菅野
	10 : 00～12 : 00	ファーストエイド 1 講義 (ファーストエイドの目的 傷病者の評価)	平木
	12 : 00～13 : 00	昼食	
	13 : 00～14 : 50	ファーストエイド 2 実技 (心肺蘇生法)	平木
	15 : 00～16 : 50	ファーストエイド 3 講義 (外傷の基礎 傷と止血)	平木
	17 : 00～18 : 50	山の地形と気象	飯田
	19 : 00～19 : 40	夕食	
	19 : 40～21 : 30	ファーストエイド 4 実技 (三角巾と包帯法)	平木
2 日目 6/26 (水)	7 : 30～	朝食	
	9 : 00～ 9 : 50	ファーストエイド 5 講義 (山で起こる病気とその処置)	平木
	10 : 00～12 : 00	ファーストエイド 6 実技 (捻挫・骨折・捻挫の対処 固定法)	平木
	12 : 00～13 : 00	昼食 (ファーストエイド講習のみ参加者は昼食なしで解散)	
	13 : 00～14 : 50	ガイドの基礎的知識、自然解説技術、地形図と読図 講義	上野
	15 : 00～17 : 00	自然ガイドが知っているのと得をするロープの使い方(実技)	平木/上野
	18 : 00～19 : 00	夕食	
	19 : 00～21 : 00	危険を回避する簡単な方法(実技)	平木/上野
3 日 6/27 (木)	6 : 45～	朝食	
	8 : 00～ 9 : 10	バスによる移動	
	9 : 20～16 : 20	フィールド実習(実技) 霧ヶ峰観音沢	上野/平木 /杉本
	16 : 20～17 : 20	バスによる移動	
	18 : 00～19 : 30	夕食	
	19 : 30～	意見交換会、懇親会	

4 日 目 6/28 (金)	7 : 30～	朝食	
	8 : 30～10 : 20	危険を回避する簡単な方法(実技)	上野/平木 /長内/杉 本
	10 : 30～12 : 20	スポーツと運動生理について	長内
	12 : 20～13 : 20	昼食	
	13 : 20～15 : 20	事例検証とデータ分析 登山を例にした、 リスクアセスメントの方法	上野
	15 : 30～16 : 30	まとめ 研修確認試験	全員
	16 : 30～	閉講式 解散	

12月17～20日

1. 実施報告と結果

参加者 20 名（自然ガイド 18 名、スキーガイド 2 名）

参加費 42,000 円

公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団助成事業(助成金 30 万円)

担当講師 計 4 名（平木順、長内覚、上野真一郎、畠山浩一）

結果 全員合格

2. 講義内容

12 月 17 日 (火)	9:30	開講式 オリエンテーション
	10:00～11:30	日本山岳ガイド協会の資格制度について 本研修会の位置づけ
	13:00～16:00	実習 実習危険を回避する基本的な方法 ロープを使って、参加者の安全を守る方法 簡単な結び方、危険箇所にロープを固定するアイデア
	16:30～18:30	自然ガイドの「自然解説技術」
	19:30～21:00	参加者交流会、情報交換会
12 月 18 日 (水)	8:30～16:30	実習 ルートガイディング、自然解説、危急時対応 5 人ずつの 4 班に分かれ、安藤百福センター周辺のトレ ールを使ってガイド役を交代しながら行う 昼から降雪になり、早めにセンターに戻り、室内でツエ ルト設営、搬送
	19:00～20:00	山の気象と地形
12 月 19 日	8:30～10:00	ファーストエイド 緊急度と重症度 傷病者の評価

(木)	10:30～16:30	実習 ファーストエイド
12月20日 (金)	8:30～11:30	実習 ファーストエイド
	11:30～12:30	
	13:30～14:30	フィールドにおける安全管理 安全管理の基本認識、自然界における危険の認識と評価 、登山を例にしたリスクアセスメントの方法
	14:45～15:30	研修確認試験
	16:00	閉講式 解散

3.所感

●自然解説及び二日目実習

所感：ここでの研修も、そろそろ転換期のように感じた。受講生のレベルに差があり、内容にも温度差がある。対象の各団体への告知方法、開催時期などに検討が必要と思われる。受講生の年齢が若い事は、良い事である。この人達を質の高いガイドへ育成することが今後の課題と思われる。また、今回、初めて敷地の外周りのコースを利用したが、他に利用者もおらず、実にコンパクトで色々な要素があり、自然ガイドの研修には最適である。今後可能であれば、この会場を常設にした講習会を計画しても良いと思う。

●ルートガイディング

感想：年代の若い方（CONE系）の参加や、研修生などモチベーションも高く、講習態度はまじめだった。かなり満足度も高く喜ばれた企画だった

理解度・習得度：当初、仕事の内容が違うため、特に安全管理の意識が低い方が多かったが、後半には意識が変革し吸収度が高くなった。

課題：いかに安全管理意識の必要性を理解できるかが課題である。また、ルートガイディングにおける解説知識やアドバイスやトークのボキャブラリーを増やさせるか

改善：経験とケーススタディを指導・伝達する

要望：安全管理講習が中心だが「いかにバランスよく指導し」ハズレのガイドを少なくできるかである。

●危険を回避する簡単な方法（実技講習）、フィールド実習（実技講習）、「ザック搬送、ザック担架、ツェルトの張り方」は野外実習の後、ファーストエイド（実技講習）

感想：（ロープワーク全般）ロープを使った経験がある人間が、今回皆無だった。どちらかというと、研修・講習というより、体験会の様相を呈していたように感じた。今回も買ってきたまま封を開けていないロープを持参している者が2名いた。

(ルートガイディング全般)安く資格が取れるということがクローズアップされている。本来この講習会は、各地ですでに自然ガイド（スキー指導を行なっている者のためのスキーガイドⅠ取得を除く）を対象にしたものであるはずだが、実際蓋を開けてみると自然ガイドの経験者は極少数である。今後のフォローアップが絶対に必要だと感じた。

(ファーストエイド全般)興味を持って受講してもらったが、現場経験が少ないがゆえに、講習時間数の不足を感じる。

理解度・習得度：(全般)恐らく、一週間後に同じことをやれと命じて、やれる人間は3分の1もいないと思われる。経験度が圧倒的に足りない。スキーガイド取得希望者に対しては特に、もっと講習時間が必要だと感じた。

課題：(ロープワーク全般)ロープの結びを教えることに時間がかかる。本来、ルートガイディングでの安全管理の方法を覚えることに多くの時間を取りたいが、些細なことで時間がかかるのが残念。

(ルートガイディング全般)自然ガイドの資格取得のための講習会でありながら植物の名前をはじめ、自然に対する知識が足りない。おそらくそれまで自然に対して抱いていた興味の不足だと思われる。

(全般)参加者の中にはカルチャースクールを受けるようなつもりの者も見受けられる。今回一番初めに畠山さんの参加者への説明で、これは仕事をするための資格取得を目的とした講座だということを、まだ良く理解していないのではないかとと思われる。

改善：(ロープワーク全般)ロープワークに関しては、受講申し込み時に、フィギュアエイトノット、ボーラインノット、クローブヒッチ、ガースヒッチ、ムンターヒッチの5つは、図解入りのレジュメを送付し、当日までに自分で出来るようにしてもらう。

(ルートガイディング全般)教本を事前に読んでくるように、案内に書いているが、ここをもう少し強調するべきであると感じた。

(ファーストエイド)ファーストエイドに関しては、事前にBLSの講習会を日赤・消防で受けてきてもらうことを義務づける。

(全般)この講習を受けて資格取得した者に対しては全員、フォローアップ研修を義務付けるべきである。特にルートガイディングの部分は、他に2日程度の実技研修が必要。

展望：各地で活躍している自然ガイドの取り込みがこの講習会の目的であるが、現実にはそうっていないというのが現実である。正規に一次試験を受けてきた者との不公平感がある。やはり本来のこの講習会の目的に戻り、各地の自然ガイド団体からの推薦状がないと受講できないようにすべきだと思う。

●山の気象と地形

20名の参加者は皆さん熱心に研修に取り組んでいると感じました。ただ、参加者の半数ほどが実際にガイドの実務経験が無かったり、野外体験そのものの時間が乏しかったりして、この研修会発足時の主旨であった、「既に何らかの活動を行っている人たちに資格を付与するため」という性格が変わってきているようにも感じました。

3泊4日の合宿型の研修会は、決して安易なものではなく、運営する側も、受講する側も物心両面で大変だと思いますが、安藤百福センターは、フィールドにも恵まれ、講義施設、宿泊施設などで利点を持った施設だといえます。周辺環境も、山岳や登山Ⅱのような内容には不足ですが、自然ガイドの研修には充分に対応できます。

4. 筆記試験 評価表

1	88
2	94
3	86
4	86
5	90
6	88
7	88
8	92
9	88
10	94
11	88
12	90
13	96
14	96
15	92
16	84
17	90
18	90
19	88
20	88

最高点（96）最低点（84）平均点（89.8）合格率 100% 受講者平均年齢 45.5 歳

安全管理技術積雪期スキー研修

2014 年 3 月 11～13 日

1. 実施報告と結果

主 催 公益社団法人日本山岳ガイド協会
(公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団助成事業)

開催場所 長野県小諸市 安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター
志賀高原 奥志賀高原周辺

参加者 8 名

参加費 40,000 円

担当講師 高村眞司 畠山浩一

結 果 7 名合格、1 名不合格

2. 講義および実技内容

3 月 11 日 (火)		
10:00～12:30	講義、実習	ガイドイング概論、冬山での安全管理
13:30～15:30	実技	安全確保のためのロープワーク、搬送技術
15:40～18:00	講義	雪山の安全管理、雪崩、気象について
19:30～21:00	演習	スキーツアーのナビゲーション表、ツアー計画書作成
3 月 12 日 (水)		
10:30～17:45	フィールド実習	スキーツアーのガイドイング実践 レスキュー技術、ビーコン搜索
19:30～20:10	確認筆記試験	
21:10～21:30	講義及び演習	雪山の安全管理、雪崩、気象について スキーツアーのナビゲーション表、ツアー計画書作成
3 月 13 日 (木)		
8:30～15:35	フィールド実習	スキーツアーのガイドイング実践 奥志賀高原スキー場周辺エリア・竜王スキー ツアーコースを使ってレスキュー技術、ビー コン搜索
15:50～16:30	まとめ	
16:30	解散	

3. 担当講師所感

- ① 8名の受講者に対して、2名の講師で進行することができたので、きめ細かく対応ができて良かった。安藤百福センターの環境も、今回の内容であれば十分に活用できました。ロープワークや搬送などは雪山のなかでやるより、習得しなければならない技術に集中できて良かった面もありました。また志賀高原は積雪量の心配もなく、今回のように天候の変化があっても、ステージⅠの資格に適したスキー場サイドのエリアが多数取れるので環境としては良かった。
- ② 参加者の意識は大変高く、自分に不足しているスキルも十分に認識している様子だったので、今後当会の会員になってからの活動を期待しています。
- ③ 「スキー指導者対象」とした研修会であるが、SAJからの参加者はなく、またSIAからの参加者も8名しか集まらない現状を考えると、今後のこの研修会の位置づけと、告知の仕方などについては再検討が必要かもしれません。

(報告者 畠山浩一)

第4回環境公開講座

2013年10月17日

2013年度で4回目となる環境公開講座を実施した。これは、自然学校指導者養成講座における座学部分を広く一般の方々に開放し、聴講してもらうことで環境意識を高めてもらうねらいがある。昨年に引き続き、医師であり登山家でもある今井通子氏を講師に迎え、「森林から与えられる地球環境と健康」をテーマに講義を行った。

なお、参加者は23名であった。



森林と健康

現代社会において病気の大きな原因となるものの一つにストレスがある。ストレスが蓄積すると体調を崩し、場合によっては病気が重症化することも少なくない。日々さまざまなストレスを受けながら生活している現代人にとって、ストレス解消は健康を維持するために欠かせないものとなっている。

癒し効果が科学的に検証された「森林浴効果」

夕方からの講義に先立ち、実際の森林セラピーを長野県の志賀高原にある森林セラピー基地にて体験した。受講者のストレス値を測定し、森林を歩く前と後で変化があるかを検証。結果、全員のストレス値が下がり、森林浴の効果が科学的に証明された。

草木由来の成分の効果

森林内において検出されるフィトンチッドや、各植物に含まれる成分には様々な効果が確認されている。笹の抗菌作用やヒノキの防腐・沈静作用などは、昔から人々の生活の中に存在したものであることから、ご存知の方も多いことと思う。人は昔から森の恵みを巧みに利用していたことが分かる。

森を維持するための共営・共同・共益の連携

森林を維持管理していくためには森の恵みを享受しているという意識が必要不可欠である。森林が環境に対して果たす役割や、人間社会にとっての活用方法など、森林規模に合った運用を考えて適切な管理を行うことが重要となってくる。

健康・観光・経済・環境

森林セラピーには多くの効果が期待されている。森の中へ入り、心身のリフレッシュを図る健康増進への効果、森という地域資源の有効活用策としての観光効果、そこを訪れる人々の増加によりもたらされる経済効果、それらの循環を継続していくために行われる環境の整備や維持管理の過程がもたらす環境教育効果など、様々な効果が期待されている。



森林セラピーの開始前に、血圧や唾液中のストレス値を計測。森林浴の効果とはどのようなものなのか、期待が高まる。



森の中で身体をリラックスさせるためにシートを広げて横になる。木々の葉が擦れる音や野鳥のさえずりなど、森の中には自然の音が溢れている。森では時間がゆっくりと流れていた。



森林浴終了後、各自のストレス値などを再計測。結果、ほぼ全員が数値の低下を確認し、森林セラピーが身体に与える影響について科学的に証明された。

第1回 キラキラハイキング

5月11日～12日

安藤百福センター初となる女性のための登山教室、「キラキラハイキング」を開催した。これは登山初心者の女性が継続して山登りを楽しめるための登山スキルや安全スキル、楽しみ方スキルの向上を目的としている。プロの登山ガイドが指導することで、将来的には受講者が仲間や家族とともに山に行った際、リーダーになることを期待して実施した。1日目は登山での食事を楽しめるように野外でアウトドアクッキングの実習。2日目は黒斑山登山を行った。

期日：2013年5月11日（土）～12日（日）

5月11日（土） 開会、アウトドアクッキング

5月12日（日） 黒斑山登山、閉会

参加者数：参加者20名、講師2名、事務局1名

参加費：9,800円（食費、宿泊費込）

アウトドアクッキング講師：加々美貴代（NPO法人やまぼうし自然学校代表理事）

登山講師：山口章（山岳雑誌「山と溪谷」元編集長、安藤百福センター主任講師）

■ 1日目



初対面の方ばかりなので、緊張をほぐすためにアイスブレイクアクティビティを行った。女性同士ということもあってか、すぐに打ち解けた雰囲気が生まれた。



森の中でのアクティビティとして、「春を探そう」といったテーマで、グループごとのお気に入りの草木や風景の写真撮影を行った。それを印刷して、食事の際のランチョンマットとして使用した。こういった細かいことも楽しみ方スキルの向上をねらいとしている。



天候が雨だったため屋根付きの地下スペースでアウトドアクッキングを実施した。準備から片付けまで参加者自身が行うことで、女性同士のまとまりが生まれていた。



焚き火料理の指導として、ドラム缶を半分に切ったもの（半ドラ）を使用して火を起こした（左）。大きな火柱に驚きの声が上がった。

チーズフォンデュ（右）を登山時でも行えるように、ワンバーナーとクッカーを使用した。



どれも山で手軽に調理できるレシピを用意した。今回は「山ごはん」といった女性目線の雰囲気を出すために、特別な食器やテーブルクロスなどを用意して、食事の際の楽しみ方にも力を入れた。

アウトドアクッキングメニュー

- ・春野菜のチーズフォンデュ
- ・白土ばれいしょのポトフ
- ・簡単パスタなめたけ風味
- ・地元野菜のサラダ胡麻ドレッシング
- ・バナナの春巻きチョコソース

他、余りの材料を使って参加者オリジナルの料理も登場した。

■ 2日目



朝食はサンドイッチバイキング（左）。また、同時に山でのお弁当（右・ロールバケット）も各自で作った。



雨上がりの2日目は快晴だった。標高 2,000m の登山口へ向かう途中、雲海の景色や運よくカモシカにも遭遇することができて、山登りの期待感が一層高まった。



今回登るのは標高 2,404m の黒斑山。火山活動が続く浅間山の絶景が楽しめる山で初心者にも人気が高い。まだ雪が残る登山道を、山ガールらしいカラフルな服を着て登っていった。



ガイドの山口氏は、安全管理の話を中心としたガイディングを行った。また、隊列を入れ替えることによって自然の話や安全の話がまんべんなく行き渡らせることを行った。



風もなく、この春一番の登山日和だった。山頂から眺める浅間山の絶景に、大変だったけど頑張って登ってよかったという声が聞こえた。



山頂からの景色をおかずにしながらのランチタイム。各自で手作りしたお弁当は十分なボリュームだったようだ。

今回山登りが初めてという方もいたが、全員無事に登頂および下山することができた。2 日間通して年代を超えた女性同士がアウトドアクッキングや、ゆっくりと話しながら山に登る楽しみ方を学んだり、日常生活とは違った環境の中で勉強になったようだ。この経験を機に継続して登山を楽しむ女性が増えていくことを期待したい。

第2回 キラキラハイキング

7月27日～28日

アウトドア活動が盛んになる7月、安藤百福センターでは2回目となる女性限定の体験イベント「キラキラハイキング」を開催した。これは、登山初心者の女性が継続して山登りを楽しめるための登山スキルや安全スキル、楽しみ方スキルの向上を目的としている。1日目はアウトドアクッキング、2日目は標高2,000mの高原でハイキングを行った。

期日：2013年7月27日（土）～28日（日）

2日間の主な内容：

7月27日（土） 開会、アイスブレイク、アウトドアクッキング体験

7月28日（日） ハイキング（東麓の登山、池の平湿原）、閉会

参加者数：参加者7名、講師2名、事務局1名、サポートスタッフ2名

参加費：12,800円（食費、宿泊費、期間中のプログラム体験費込み）

アウトドアクッキング講師：加々美貴代（NPO法人やまぼうし自然学校代表理事）

ハイキング講師：山口章（『山と溪谷』元編集長、安藤百福センター主任講師）

■ 1日目



アイスブレイクとして、森にある素材を用いたつながり探しゲームを行った。参加者同士の交流だけでなく、森林浴効果もあり、リラックスした雰囲気で行われた。



雨天のため屋根付きスペースでアウトドアクッキングを実施。今回は少しワイルドな焚き火料理に挑戦した。参加者が協力して、自分たちで火をおこすところから始まった。



食材の下ごしらえから片づけまで、全て参加者同士で行った。講師がレシピを伝授しながらうまく作業分担しながら調理が進んだ。みんなテキパキと手慣れており、予定より大幅に早く調理を行うことができた。



今回のメイン料理「鳥の丸焼きハーブ風味」。じっくりと焚き火で焼かれた鶏肉は驚くほど柔らかくジューシーだった。中にはたっぷりの野菜と香ばしいハーブが詰め込まれていた。



テーブルクロスを引き、できた料理を食器に盛り付けて、みんなで食事会。野外での食事で会話が弾む。かなりのボリュームでお腹は大満足だったようだ。

アウトドアクッキングメニュー

鳥の丸焼きハーブ風味 青竹ハンバーグ 夏野菜のスープ 地元野菜の夏サラダ
炊き込みご飯カレー味 冷凍バナナのデザート

■ 2日目



雨上がりの高原ハイキング。まずは東麓の登山(2,227m)に挑戦。登山口からの標高差は100m程度だったが、1時間弱で山頂に到着すると、青空にぷかぷかと雲が浮かぶ爽やかな景色が広がっていた。



続けて、高山植物の宝庫と言われる池の平湿原を歩いた。

現地の情報によると、今日は 80～90 種類の花が咲いているようだった。この時期の花だけでなく、春の花や秋の花を楽しむこともできた。



お昼ごはんは、自分たちで作ったお弁当。街を見下ろせる見晴らしのいいところで、高原の涼しい風に吹かれながらの気持ちのよいランチタイムだった。



帰りは高峰高原に立ち寄り、黄色く咲き乱れるニッコウキスゲを楽しんだ。

女性同士でアウトドアクッキングを行ったり、涼しい高原のお花畑を歩いたりすることで、また一つ新しいアウトドアの楽しみ方を学んでいただけたようだ。参加者からは他の山や高原にも行ってみたい、ダッチオーブン料理にも挑戦してみたい、といった前向きな感想をいただくことができた。これからも日常生活の中にこういった活動を取り入れていただけることを期待したい。次回は冬のスノーシューハイキングを予定。

第1回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

9月14日～15日

運営協力：ネイチュアリングスクール木風舎

来年度の事業計画立案の一助とするためのニーズ調査として、首都圏在住のトレッキング初心者を対象とした体験講座「橋谷晃さんと歩くトレッキング講座」を開催した。今回は登山者に人気のある橋谷晃氏にご協力いただき、標高約 2,000m での高原トレッキングと、安藤百福センターで座学のレクチャーを行った。東京、神奈川、埼玉などから 17 名の方にご参加いただいた。実施後、参加者にアンケート調査を行った。

期日：2013 年 9 月 14 日（土）14 時～15 日（日）13 時

2 日間の主な内容：

7 月 27 日（土）開会、高原トレッキング（池の平湿原）、交流会

7 月 28 日（日）講演「バテない歩き方教えます」、番組上映、閉会

参加者数：参加者 17 名（男性 5 名、女性 12 名）、講師 1 名、事務局 1 名、

サポートスタッフ 2 名（木風舎）

参加費：19,500 円（食費、宿泊費、期間中のプログラム体験費込み）

講師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■ 1 日目



高山植物の宝庫・池の平湿原トレッキングは 2 日目に設定していたが、台風の影響による天候不良を考慮して初日に変更した。橋谷氏のガイドで初秋の涼しい高原をゆっくりと歩いた。



マツムシソウやリンドウなど、秋の高山植物のレクチャーを行いながら進んだ。数は少なかったが、色や形のよいものが目立ち、写真撮影を楽しむ姿が見られた。



スケジュール変更のため短時間のトレッキングになってしまったが、標高 2,000m の高原が初めての方もいて、別世界にいるような感覚だと話していた。センターに戻ってからは夕食と交流会を楽しみ、興味のあるイベントやレクチャー内容について意見をいただいた。

■ 2 日目



橋谷氏の講演「バテない歩き方教えます」。この話を一番の目当てに参加した方もいた。バテないための事前準備や装備の揃え方、心構えなどについてレクチャーした。橋谷氏がイスを用いて山の歩き方や登り方を実演する場面もあった。参加者も一緒になって登り方を練習した。姿勢やバランスの取り方一つで、いつもより楽に歩けることを実感したようだった。



講演のあとは、橋谷氏がガイドとして出演している「大人の山歩き」（第 1 回～2 回）を上映した。今回時間の関係で歩けなかった籠の登山（かごのとやま）の素晴らしい展望が映され、ぜひ一度歩いてみたいという感想があった。



天候の関係でスケジュール通りには行かず、メインのトレッキングが短時間となってしまったが、ガイドとの交流や講演、斬新なデザインの建物に宿泊できたなど、全体的な満足度は高かったように感じられた。次回開催を望む声も多かった。

卷 末 資 料

安藤百福センター 運営組織

顧問

荒牧 重雄	東京大学名誉教授、火山学者
林 貞行	元外務事務次官、元駐英特命全権大使
丸山 庄司	元全日本スキー連盟 専務理事

運営委員会

委員長	安藤 宏基	公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役社長・CEO
副委員長	安藤 徳隆	公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団 副理事長 日清食品ホールディングス株式会社 専務取締役・CSO
委員	岡島 成行	大妻女子大学 教授、安藤百福センター センター長
	飯田 稔	びわこ成蹊スポーツ大学 学長
	柳田 剛彦	小諸市長
	水野 正人	公益財団法人日本オリンピック委員会 名誉委員

専門委員会

委員長	節田 重節	公益社団法人日本山岳会 副会長
委員	磯野 剛太	公益社団法人日本山岳ガイド協会 理事長
	川嶋 直	公益財団法人キープ協会 環境教育事業部シニアアドバイザー
	河原塚達樹	公益財団法人日本レクリエーション協会 スポーツ振興政策関連事業チームマネージャー
	小林孝之助	公益財団法人ボーイスカウト日本連盟 リーダートレーナー
	佐藤 初雄	NPO 法人自然体験活動推進協議会 代表理事
	佐藤 博康	松本大学総合経営学部 教授
	山岸 仁	独立行政法人国立青少年教育振興機構 教育事業部長
	中村 達	アウトドアジャーナリスト・プロデューサー 安藤百福センター副センター長
	橋谷 晃	木風舎 代表
	平川 仁彦	公益財団法人新潟県スキー連盟 常務理事
	平野 吉直	信州大学教育学部 学部長

(2014 年 3 月現在)

2013 年度 主催等事業・講座

■主催事業	
5/9	第 1 回 自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会
5/11～12	第 1 回 山ガール登山教室
5/31～6/2	第 4 回 浅間大学院生セミナー
6/19	第 2 回 自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会
7/17	第 3 回 自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会
7/27～28	第 2 回 山ガール登山教室
9/2	第 4 回 自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会
9/14～15	橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
10/15	第 5 回 自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会
10/17	第 4 回 環境公開講座「森林から与えられる地球環境と健康」
11/26	第 6 回 自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会
12/16	第 7 回 自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会
2/16	第 8 回 自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会
3/13	第 9 回 自然体験活動のベンチャービジネスを検討する研究会
3/17～18	第 4 回 環境思想シンポジウム
3/27	安藤百福センター専門委員会
■共催事業	
10/5～12/22	公益社団法人日本環境教育フォーラム 「第 14 期 自然学校指導者養成講座」
11/23～24	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構 「第 1 回 ロングトレイルシンポジウム」
■後援事業	
6/25～28	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「自然ガイドのための安全管理技術研修会」
12/17～20	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「自然ガイドのための安全管理技術研修会」
3/11～12	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「積雪期スキー研修会」

2013年度 上級指導者研修会利用状況

期間	主催者及び研修会名称	受講生	講師	スタッフ	備考
4/6～7	公益社団法人日本山岳ガイド協会「ファーストエイドインストラクター養成会」	30	4	2	
5/17	株式会社 オンウィップス「志生塾 長野校」	5	2	0	
5/31～6/2	安藤百福センター「浅間大学院生セミナー」	21	6	3	
6/16～17	株式会社 オンウィップス「志生塾 長野校」	5	2	0	
6/18～19	NPO 法人自然体験活動推進協議会「第1回 CONE トレーナー養成会」	6	3	2	
6/25～28	公益社団法人日本山岳ガイド協会「自然ガイドのための安全管理技術研修会」	18	5	1	
7/9～10	株式会社 オンウィップス「志生塾 長野校」	4	2	0	
9/13	株式会社 オンウィップス「志生塾 長野校」	5	2	0	
9/30～10/1	NPO 法人やまぼうし自然学校「職員研修会」	40	1	8	
10/5～12/22	公益社団法人日本環境教育フォーラム「第14期自然学校指導者養成講座」	4	28	1	正規受講生
		25			一般聴講生
10/10～11	株式会社 オンウィップス「志生塾 長野校」	4	2	0	
10/26～27	公益社団法人日本山岳ガイド協会「ファーストエイド講習会」	34	4	0	
10/31～11/1	株式会社 オンウィップス「志生塾 長野校」	4	2	0	
11/2～3	NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会「RAC トレーナー養成会」	1	2	1	

11/3～4	NPO 法人自然体験活動推進協議 会「第 2 回 CONE トレーナー養 成会」	13	3	2	
11/18	株式会社 オンウィップス 「志生塾 長野校」	3	0	0	
11/26～28	NPO 法人国際自然大学校 「志生塾」	19	3	1	
12/3～4	有限会社ビーネイチャー 「職員研修」	7	1	0	
12/7～10	公益社団法人日本山岳ガイド協 会「ファーストエイド講習会」	32	8	0	
12/12～15	NPO 法人国際自然大学校 「スキー指導者研修」	31	1	23	
12/17～20	公益社団法人日本山岳ガイド協 会「自然ガイドのための安全管 理技術研修会」	20	4	0	
1/10～12	有限会社ビーネイチャー 「総合研鑽会」	26	3	4	
1/23	株式会社 オンウィップス 「志生塾 長野校」	4	2	0	
2/8～11	NPO 法人自然体験活動推進協議 会 「CONE トレーナー認定会」	15	4	2	
2/12～13	株式会社 オンウィップス 「志生塾 長野校」	4	2	0	
2/15～16	公益社団法人日本山岳ガイド協 会「ファーストエイド講習会」	28	1	0	
3/2～3	NPO 法人国際自然大学校 「志生塾 長野校卒塾」	11	2	4	
3/11～12	公益社団法人日本山岳ガイド協 会「積雪期スキー研修会」	8	2	0	
3/18～19	公益社団法人日本山岳ガイド協 会 「ファーストエイド講習会」	12	1	0	

439 名

2013 年度 利用状況

月	日	団 体 名	研 修 会 名
4	1～2	安藤百福センター	第 3 回環境思想シンポジウム
	6～7	公益社団法人日本山岳ガイド協会	ファーストエイドインストラクター養成講座
5	7	小諸市役所	会議
	11～12	安藤百福センター	第 1 回山ガール登山教室
	17	株式会社オンウィップス	志生塾 長野校
	18	日清食品ホールディングス (株)	小諸 100 年会議
	20～22	日清食品ホールディングス (株)	日清食品新入社員研修会 (森林整備研修含む)
	25～26	植村冒険館	植村冒険館アドベンチャー講座
6	5/31～ 6/2	安藤百福センター	第 3 回浅間大学院生セミナー
	14～16	日清食品ホールディングス (株)	自然体験活動指導者 (NEAL リーダー) 養成研修会 百福士事業「あやしいオヤジを正しいオヤジに変える」プロジェクト
	16	NPO 法人 With nature	理事会・総会
	16～17	株式会社オンウィップス	志生塾 長野校
	18～19	NPO 法人自然体験活動推進協議会	第 1 回 CONE トレーナー養成会
	22～23	東京農工大学・麻布大学	合同学生研修会会議
	25～28	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのための安全管理技術研修会
7	6～7	東信レクリエーション協会	インストラクター養成研修会
	9～10	株式会社オンウィップス	志生塾 長野校
	10～12	NPO 法人新現役ネット	NEAL 指導者養成セミナー
	16～18	日清食品ホールディングス (株)	内々定者研修会 (ASE 実習含む)
	18	信州外遊びネットワーク	会議
	24～25	公益社団法人日本環境教育フォーラム	東京シニア自然大学
	27～28	安藤百福センター	第 2 回山ガール登山教室
8	1～3	立教大学大学院	環境教育集中講義
	5～7	明治学院大学自然科学研究会	自然科学研究会夏合宿
	8～9	長野県教育委員会	イングリッシュキャンプ

月	日	団 体 名	研 修 会 名
8	11～13	東京造形大学	小諸の食と自然を体験する会
	21～23	東京農工大学・麻布大学	環境・教育を学ぶ大学生のための研究会
	23～25	大妻女子大学	環境教育実習
	24～26	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構	調査・研究
9	7～9	立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科	特別研究 1・Recf 例会
	10～12	明治学院大学	アジアの自然体験勉強会
	13	株式会社オンウィップス	志生塾 長野校
	14～15	安藤百福センター	橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
	18	霧ヶ峰植物研究会	植生調査研修
	28	八ヶ岳レクリエーション協会	八ヶ岳レクリエーション協会総会
	28～30	信州外あそびネットワーク	第 1 回信州外あそびミーティング
10	9/30～ 10/1	NPO 法人やまぼうし自然学校	職員研修会
	1～2	千葉シニア自然大学	千葉シニア自然大学秋季研修
	4～6	日清食品ホールディングス（株）	自然体験活動指導者（NEAL リーダー）養成研修会 百福士事業「あやしいオヤジを正しいオヤジに変える」プロジェクト
	10/5～ 12/22	公益社団法人 日本環境教育フォーラム	第 14 期自然学校指導者養成講座
	10～11	株式会社オンウィップス	志生塾 長野校
	10～11	大妻女子大学	環境教育合宿
	17	安藤百福センター	第 4 回環境公開講座
	18	長野県農地整備課	長野県ふるさと水と土研究会
	21	霧ヶ峰植物研究会	植生調査研究会
	22	NPO 法人森林ウォーカーズ YuToRi ゆ & り	自然体験ワーク指導者研修
	24～26	千葉大学分子生体機能学研究室	千葉大学園芸学部安藤セミナー合宿
	25～27	公益社団法人日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会

月	日	団 体 名	研 修 会 名
11	10/31 ～11/1	株式会社オンウィップス	志生塾 長野校
	2～3	NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会	RAC トレーナー養成会
	3～4	NPO 法人自然体験活動推進協議会	第 2 回 CONE トレーナー養成会
	8	霧ヶ峰植物研究会	植生調査研究会
	15～17	嬭恋軽井沢自然倶楽部	NEAL リーダー養成会兼フォロー アップ講座
	18	株式会社オンウィップス	志生塾 長野校
	22～24	NPO 法人アウトドアライフデザイン開 発機構	第 1 回ロングトレイルシンポジウ ム
	26～28	NPO 法人国際自然大学校	志生塾
12	3～4	有限会社ビーネイチャー	職員研修会
	6	霧ヶ峰植物研究会	植生調査研究会
	7～10	公益社団法人日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会
	12～15	NPO 法人国際自然大学校	スキー指導者研修
	16	霧ヶ峰植物研究会	植生調査研究会
	17～20	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのための安全管理技術 研修会
1	10～12	有限会社ビーネイチャー	職員研修会
	23	株式会社オンウィップス	志生塾 長野校
	25～26	NPO 法人日本エコツーリズムセンター	エコセン世話人大会議
	27～28	NPO 法人日本ロングトレイル協議会	常任委員会
	28～29	安藤百福センター	ティートンサイエンススクール 視察研修
2	8～11	NPO 法人自然体験活動推進協議会	CONE トレーナー認定会
	12～13	株式会社オンウィップス	志生塾 長野校
	15～16	公益社団法人日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会
3	2～3	NPO 法人国際自然大学校	志生塾 長野校卒塾
	11～12	公益社団法人日本山岳ガイド協会	積雪期スキー研修会
	17～18	安藤百福センター	第 4 回 環境思想シンポジウム
	18～19	公益社団法人日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会
	27	安藤百福センター	専門委員会
	28	NPO 法人日本ロングトレイル協議会	会議
	28～30	東京農工大学	朝岡研究室環境教育合宿

『人と自然 第5号』への投稿論文を募集します

投稿論文規定

1. 投稿の内容

- (1)「人と自然（以下、本誌）」に掲載される内容は、人と自然に関わる原著論文、研究報告、総説、評論、実践報告、資料として完結していること。なお、投稿論文に対しては審査を行う。
- (2)本誌へファーストオーサーとして投稿できる論文数は、原著論文その他すべてを含み1人2編以内に限る。
- (3)本誌の発行回数は原則として年1回とする。投稿は年間を通じて随時受け付け、12月末日までに投稿されたものを編集、審査、製本、発送する。

2. 編集委員会

- (1)本誌の編集その他の責任は、「人と自然 編集委員会」が行う。当委員会は事務局員を含む編集委員若干名によって構成される。
- (2)当委員会は次の活動を行う。
 - ①本誌の編集、製本、発送などに関すること。
 - ②投稿論文の審査員の選考、依頼などに関すること。
 - ③投稿規定などに関すること。
 - ④その他本誌に関すること。

3. 論文の形式

- (1)原著論文は、タイトル、執筆者名とその所属、キーワード、欧文要約、本文のすべてが揃っていることとし、原著論文以外のものは欧文要約を省略することができる。
- (2)製本はA4判、1ページ1段とし、各段は42字×36行とし、1論文につき刷り上がり8頁（図表、写真その他すべてを含む）以内を原則とする。ただし、1頁目はタイトルおよび執筆者名、所属、キーワードで5行ほどのスペースをとるものとする。

4. 投稿の方法

- (1)投稿は、「である」調でのワープロ原稿とする。提出部数は3部（2部は複写可）、その他2部（1部は複写可）とし、Microsoft Word またはその他のワープロソフトで上記製本のフォーマットに則って作成し、電子メールにて『人と自然』編集委員会、info@momofukucenter.jp まで送付すること。締切日は2014年12月31日。
- (2)図表、写真などはそれぞれに必ず通し番号とタイトルを付けること。
- (3)引用の箇所の右肩に(1)、(2)のように該当する文献番号を付け、その順に引用および参考文献リストを原稿の最後に掲載すること。記載の順序は、単行本の場合、著者、書名、頁、発行所、西暦発行年月日の順とし、雑誌および研究誌の場合、著者、題目、雑誌名、巻号、頁、西暦発行年月日とする。

5. その他

- (1)本誌に投稿した論文の別刷りを希望する場合、各執筆者が行うこととする。

あ と が き

「人と自然」第4号は、巻頭鼎談で「若者よ 常識を突き破れ」というテーマで話が弾み、特別インタビューでは「太平洋ひとりぼっち」の堀江健一さんが「挑戦を忘れた日本人へ」と檄をとばしている。全体に元気がない日本および日本人に向けての厳しいエールとなっている◆特集は、第1回ロングトレイル・シンポジウムと自然体験活動指導者の課題。シンポジウムでは、阿部守一・長野県知事にご挨拶いただき、安藤宏基 安藤スポーツ・食文化振興財団理事長には貴重なご意見を賜った。指導者の課題では最近の指導者をめぐる動きをロングトレイル、スキー、NEAL に分けて論じていただいた◆今年初めて、論文投稿があり、農工大の石山雄貴氏の論文が報告として採用された。今後も若い力が伸びていくよう期待したい◆安藤百福センターを中心に新たなロングトレイルが完成し、その紹介と、センターの敷地内に増えつつあるツリーハウスについて特別コーナーを設けた。これまでの自然体験愛好者の枠をさらに大きく広げたいというセンターの強い意思でもある◆第4回環境思想シンポジウムは幅の広い参加者を得て、活発な討議が行われた。環境思想という分かりにくい学問分野だが、このところようやく認識が高まってきた。ロングトレイルに次いで、安藤百福センターからの発信で、世間に大きくアピールできる可能性が高い◆安藤百福センターもいよいよ5年目に突入した。上級指導者養成とともに、新たな愛好者層の開拓、学術分野への発信など日本のアウトドア、自然体験全般に強い影響を与え続けていくために、「人と自然」の編集については、今後とも更なる改良を加え、重厚な雑誌に育てていきたい。◆今号の表紙写真はマナスルです。日本人が初登頂した唯一の8,000m峰です。写真は青空山岳会の酒井善樹さんからご提供いただきました。厚くお礼申し上げます。(S)

人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター紀要
第4号

発行日：2014年7月1日

発行人：安藤 宏基

編集人：岡島 成行

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
〒384-0071 長野県小諸市大久保 1100

Tel : 0267-24-0825

Fax : 0267-24-0918

URL : <http://momofukucenter.jp>

E-Mail : info@momofukucenter.jp